長崎県文化財調査報告書　第55集

長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ

1981

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ

序

このたび，長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳを発刊することになりました。

昭和53年に第Ⅰ集を刊行いたしましてから，毎年小規模調査の記録をまとめて収録してきたわけでありますが，この間にまとめた調査報告は14遺跡に達しております。

今回収録しました内容は，昭和47年に実施しました田崎遺跡・五反田遺跡・山角遺跡の調査報告と，昭和54年に実施しました石鍋製作所遺跡の年代測定の結果に関する追報であります。

地下の埋蔵文化財は，遠い祖先の生き方を示す資料でありますから，私たちは，これを損ねないで次の世代に受けわたす責務があります。これまでも，この原則で文化財保護行政をすすめてまいりましたが，今後ともその保護対策の充実強化を図っていく所存であります。

本書が，文化財の理解と愛護思想の普及に，そして学術研究の資料として役立つことを願うものであります。

昭和56年３月31日　　長崎県教育長　柴田芳男

例　　言

1．本書は，長崎県教育委員会が行った下記遺跡の発掘調査報告書である。

Ⅰ	田崎遺跡	平戸市	昭和46年度調査
Ⅱ	五反田遺跡	川棚町	昭和47年度調査
Ⅲ	山角遺跡	波佐見町	昭和47年度調査
Ⅳ	石鍋製作所遺跡	大瀬戸町	昭和54年度調査

2．本書は，遺跡ごとにそれぞれ分担執筆した。執筆者名は下記のとおりである。

Ⅰ	田崎遺跡 ……	田川　肇
Ⅱ	五反田遺跡 ……	正林　護・宮崎貴夫
Ⅲ	山角遺跡 ……	正林　護
（付）滑石製石鍋の炭素測定値 ……		正林　護・下川達彌

3．本書の編集は，執筆者がその責任において行い，総括編集は，田川肇が担当した。

4．その他詳細は各稿例言を参照されたい。

総　目　次

序
例　言　　Page
Ⅰ　田崎遺跡　　5～102
1．自然的背景---- 11
2．調　査---- 16
3．考　察---- 57
4．付録　九州地方出土の尖頭器集成---- 59

Ⅱ　五反田遺跡　　103～150
1．はじめに----108
2．五反田遺跡の環境と立地----110
3．調　査----112
4．出土遺物----125
5．大村湾沿岸の石棺について----131

Ⅲ　山角遺跡　　151～188
1．はじめに----155
2．山角遺跡の位置と環境----155
3．調　査----157
4．多良山塊の縄文中期遺跡----175
5．滑石と縄文式土器----178

（付）滑石製石鍋の炭素測定値---- 189

Ⅰ　田崎遺跡

――平戸市津吉町所在――

例　　言

1．　本報告書は昭和47年度に実施した田崎遺跡（平戸市津吉町）の発掘調査報告書である。

2．　調査は長崎県文化財課（現文化課）が主体となり，正林護・田川肇が担当し萩原博文氏および平戸市教育委員会の協力を受けた。

3．　本報告書の執筆は田川肇が担当した。

4．　調査中の地形実測・平板実測・写真撮影等は正林・田川が行い萩原がこれを助けた。

5．　遺物の実測・製図および写真撮影は田川が担当した。

6．　本報告書の編集は田川が担当した。

7．　今次調査の出土遺物は長崎県教育庁文化課が保管しているが，昭和42年当時採集された遺物は長崎大学医学部解剖学第二教室に保管してある。

8．　本報告書刊行にあたり，遺物の実測・写真撮影および報告書掲載について心良くご了解くださいました長崎大学医学部解剖学第二教室内藤芳篤教授に衷心より感謝の意を表します。

9．　遺物実測および写真は，特に断ってない場合はすべて実寸で掲載してある。

10．　出土した遺物は長崎県教育庁文化課が保管している。

本 文 目 次

Page

Ⅰ 自然的背景……11～13
1．長崎県の地質……11
2．長崎県の地理・地形……12
3．長崎県の気候および植物相……12
4．立地環境および周辺遺跡……13

Ⅱ 調査……16～56
1．調査に至る経緯……16
2．調査概要……19
a 調査区の設定……19
b 土 層……19
c 遺物の遺存状況……20
3．遺構……28
4．遺物……29
a 土器……29
b 石器……29
① 石鏃……29
② 尖頭器……30
③ 細石刃核……30
④ 細石刃……30
⑤ 彫器……35
⑥ 掻器・削器……35
⑦ 石核……35
⑧ 剝片……44
c 接合資料……44

Ⅲ 考 察……57～58

Ⅳ 付録 九州地方出土の尖頭器集成……59～84

挿 図 目 次

Page

Fig. 1　長崎県地質図……11
Fig. 2　長崎県起伏図（1／25,000地形図）……12
Fig. 3　長崎県平均気温図……12
Fig. 4　田崎遺跡位置図……13
Fig. 5　周辺地形図および周辺遺跡……15
Fig. 6　遺跡周辺地形図……17・18
Fig. 7　土層模式図……19
Fig. 8　第Ⅱ層出土の石器群……20
Fig. 9　第Ⅲ層出土の石器群……21
Fig. 10　石器組成率……21
Fig. 11　分布状況(1)……22
Fig. 12　分布状況(2)……22
Fig. 13　分布状況（石鏃）……23
Fig. 14　分布状況（尖頭器）……23
Fig. 15　分布状況（細石器）……24
Fig. 16　分布状況（彫器）……24
Fig. 17　分布状況（掻器・削器）……25
Fig. 18　分布状況（U-Flakes）……25
Fig. 19　分布状況（石核）……26
Fig. 20　分布状況（原石）……26
Fig. 21　分布状況（剝片）……27
Fig. 22　分布状況（砕片）……27
Fig. 23　分布状況（土器）……28
Fig. 24　出土石器実測図（石鏃）……30
Fig. 25　石鏃分類模式図……31
Fig. 26　出土石器実測図（尖頭器）……33
Fig. 27　出土石器実測図（細石核・細石刃・彫器）……34
Fig. 28　出土石器実測図（掻器・削器）1……36
Fig. 29　出土石器実測図（掻器・削器）2……37
Fig. 30　出土石器実測図（石核）1……38
Fig. 31　出土石器実測図（石核）2……39
Fig. 32　出土石器実測図（剝片）1……40

Page

Fig. 33　出土石器実測図（剝片）2 ----41
Fig. 34　出土石器実測図（剝片）3 ----42
Fig. 35　出土石器実測図（剝片）4 ----43
Fig. 36　接合資料 Dot-Map 1 ----45・46
Fig. 37　接合資料 Dot-Map 2 ----48
Fig. 38　接合資料Ⅰ(a)----49
Fig. 39　接合資料Ⅰ(b)----50
Fig. 40　接合資料Ⅱ----51
Fig. 41　接合資料Ⅲ----52
Fig. 42　接合資料Ⅳ----53
Fig. 43　接合資料Ⅴ----54
Fig. 44　接合資料Ⅵ----55
Fig. 45　接合資料Ⅶ----56
Fig. 46　石鏃部位対比表----57
Fig. 47　尖頭器集成（中山・外輪・橘・豆坂・福江・柿原）----65
Fig. 48　尖頭器集成（日ノ岳）----66
Fig. 49　尖頭器集成（原ノ辻）----67
Fig. 50　尖頭器集成（生石・東ノ原・茶園Ⅰ）----68
Fig. 51　尖頭器集成（西畑Ⅰ）----69
Fig. 52　尖頭器集成（西畑Ⅱ）----70
Fig. 53　尖頭器集成（経ノ峯）----71
Fig. 54　尖頭器集成（下城）----72
Fig. 55　尖頭器集成（下城）----73
Fig. 56　尖頭器集成（下城）----74
Fig. 57　尖頭器集成（下城）----75
Fig. 58　尖頭器集成（下城）----76
Fig. 59　尖頭器集成（岩下）----77
Fig. 60　尖頭器集成（岩下）----78
Fig. 61　尖頭器集成（岩谷口）----79
Fig. 62　尖頭器集成（岩谷口・中野・牟田辻）----80
Fig. 63　尖頭器集成（中後迫・里ノ城）----81
Fig. 64　尖頭器集成（二日市洞穴）---- 82
Fig. 65　尖頭器集成（深原・原）----83

図 版 目 次

Page

調査風景 86
PL. 1－1 遺跡近影 87
PL. 1－2 調査区（B・Cトレンチ） 87
PL. 2－1 土層堆積状況（Bトレンチ・北壁） 88
PL. 2－2 土層堆積状況（Cトレンチ・北壁） 88
PL. 3－1 土層堆積状況（Cトレンチ・東壁） 89
PL. 3－2 ピット群（Bトレンチ） 89
PL. 4－1 遺物出土状況（Bトレンチ） 90
PL. 4－2 遺物出土状況（石鏃・剥片） 90
PL. 4－3 遺物出土状況（細石核） 90
PL. 4－3 遺物出土状況（細石刃） 90
PL. 4－4 遺物出土状況（スクレイパー） 90
PL. 5 出土石器（尖頭器） 91
PL. 6 出土石器（細石刃・細石核・彫器・石鏃） 92
PL. 7 出土石器（掻器・削器） 93
PL. 8 出土石器（石核・剥片） 94
PL. 9 出土石器（剥片） 95
PL. 10 接合資料Ⅰ 96
PL. 11 接合資料Ⅱ 97
PL. 12 接合資料Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ(1) 98
PL. 13 接合資料Ⅳ 99
PL. 14 接合資料Ⅵ・Ⅶ(2) 100
PL. 15 接合資料Ⅵ・Ⅶ(3) 101

表 目 次

Page

Tab. 1 周辺遺跡地名表 15
Tab. 2 石鏃計測表 31
Tab. 3 細石刃計測表 35
Tab. 4 尖頭器集成 60
Tab. 5 尖頭器集成 61
Tab. 6 尖頭器集成 62
Tab. 7 尖頭器集成 63
Tab. 8 尖頭器集成 64

Ⅰ　自然的背景

1．長崎県の地質

長崎県の地史を鎌田（1971）は大略3期に区分している。[註1] すなわち第1期は造山運動に伴う広域変成作用が行われた時期（古生代地向斜時代），第2期は古第三紀より新第三紀前半にかけての炭田生成期（第三紀炭田生成時代），第3期は火山の活動により火山砕屑物が堆積した時期（火山活動時代）とし，各期所産の岩石類をそれぞれ変成岩類・堆積岩類・火山岩類に区別している。

変成岩類の分布は西彼杵半島と野母半島にあり，前者は黒色片岩（絹雲母石墨石英片岩），後者は緑色片岩（緑泥石緑れん石片岩）を主体としており互層を成している。また，西彼杵半島の特徴のひとつとして滑石・蛇紋岩を産し，古くは経筒・石鍋寺[註2]に新しくは装飾用建材に利用されている。第三紀の堆積岩は対馬，五島，北松浦郡，佐世保，諫早，島原半島南部と広範囲な分布を見せる。北松浦郡・佐世保の洞穴・岩陰遺跡[註3]はこれに依っている。火山岩類の中で玄武岩は北松浦郡・壱岐・平戸の一部・宇久島・小値賀島・福江島と概して県北部にその広い分布をもち，標高約300m位の比較的ゆるやかな玄武岩台地を形成している。安山岩を基盤とする地域は主として県中央部，県南部に広く分布を見せる。現在雲仙岳だけが活動している。

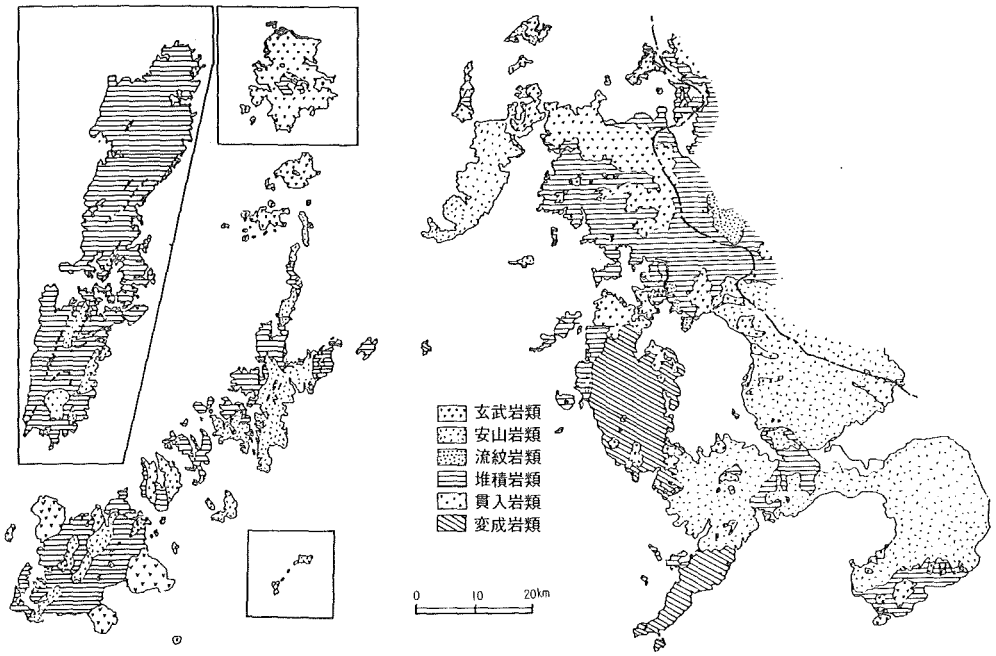


Fig. 1　長崎県地質図

2．長崎県の地理・地形

長崎県は日本の西端に位置する。東経128°06′(鳥島) ～130°23′(島原)，北緯31°58′（男女群島）～34°44′（対馬北部）で，経度幅2°17′，緯度幅2°46′ となりその広がりはほぼ九州本土に匹敵する。[註4] しかし，その90%以上が海で，三方を囲まれ多くの島嶼を有する。複雑な海岸線をもちその総延長は長く約4,000 kmにも達する。[註5] 陸地総面積は4,106.42㎢でその約46%を島嶼で占めている。右図起伏図が示すとおり平坦地に乏しく，標高500m以下の丘陵が圧倒的多数を占め，1,000m級の山地は雲仙山塊と多良山塊にしかみることがない。平野の規模も小さく，諫早・大村・壱岐等数ケ所が比較的大きな平野として挙げることができよう。このような地形的特徴は農耕地に現われ，海岸近くにまでせり出した丘陵部にその活路を見出し，いわゆる段々畑として活用している。とはいえ，県全体の耕地面積は64,070*ha*で[註6] 県土の約16%にしかすぎない。

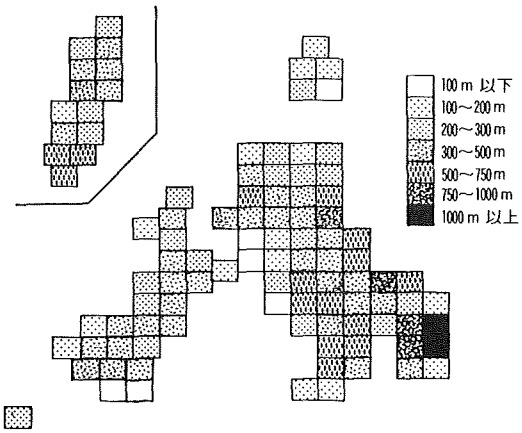


Fig. 2　長崎県起伏図（1／25.000地形図）

3．長崎県の気候および植物相

長崎県は三方を海に囲まれ島嶼が多く入江が交錯する。対馬暖流が西海岸を北上しており，気候は一般的に暖温帯に属し寒暖の差が小さな海洋性を呈する。Fig. 3で見るように年間の平均気温は雲仙岳・多良岳の山地で13°Cの等温線がみられるが，低地では14℃以下になることはない。野母半島南部・五島列島南部・島原半島南部では17℃と暖かい。[註7] これらの等温線は海岸に沿って形成され，対馬暖流の影響が大であることを如実に物語っている。温暖な気候は降水量に影響を及し，植物相に影響を与える。暖地系の植物が多く，南方系植物の分布北限をみることもある。雲仙岳・多良岳には冷温帯系の植物の生育もみられ，大陸系植物は他県に比して多く見られる。

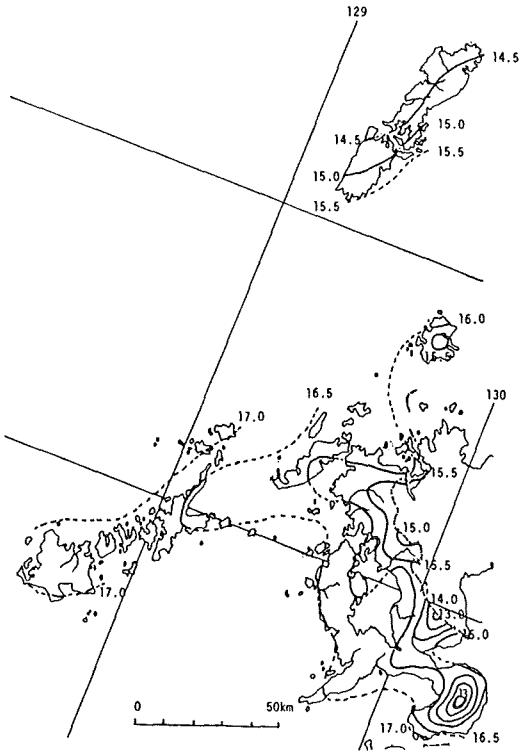


Fig. 3　長崎県平均気温図

4．立地環境および周辺遺跡

平戸島は県内で対馬両島・五島に次いで三番目にランクされる大きな島で，先述したように大略安山岩を基盤とする島である。行政区画の平戸市としての面積は171.23㎢である。[註8] 先年，南竜崎と本土間に平戸大橋が架橋され本土と一体化された。

海岸線は変化に富み，深く入り込んだ良湾を多くもつ。山間部も起伏に富む。安満岳の514.3mを最高峰に，有僧都岳・弦眼岳・屏風岳・志々伎山と350m級の丘陵が北東から南西に続き平戸島の骨格線を形成している。動・植物相が多く国・県指定の天然記念物も多い。平戸瀬戸に浮かぶ周囲約1kmの黒子島は全島が原始林として国の指定を受けている。また，安満岳中腹一帯はニッポンジカが棲息している。県指定天然記念物である。[註9]

入りくんだ海岸に面する丘陵部は格好の集落地であり，多くの遺跡が遺存している。現在確認されている分布を見ると山奥部に少く，そのほとんどが海（湾）に面している。これらの遺跡形成には時期的な差異があるとの指適もある。[註10]

本遺跡は津吉町古田字佐賀里1163，1164，1169，1170に所在する。島内を縦貫する国道383号線が分岐し県道156号線となって前津吉港へ東走する。この地域は島内でも屈指の穀倉地帯で古田川・辻川が北流し肥沃な水田を潤す。周囲の丘陵は水田として開墾され，遺跡は標高約10m位の丘陵の先端部に形成されている。南約50mの微高上に田崎第2遺跡が確認され，ナイフ形石器，台形石器等が採集されている。[註11]

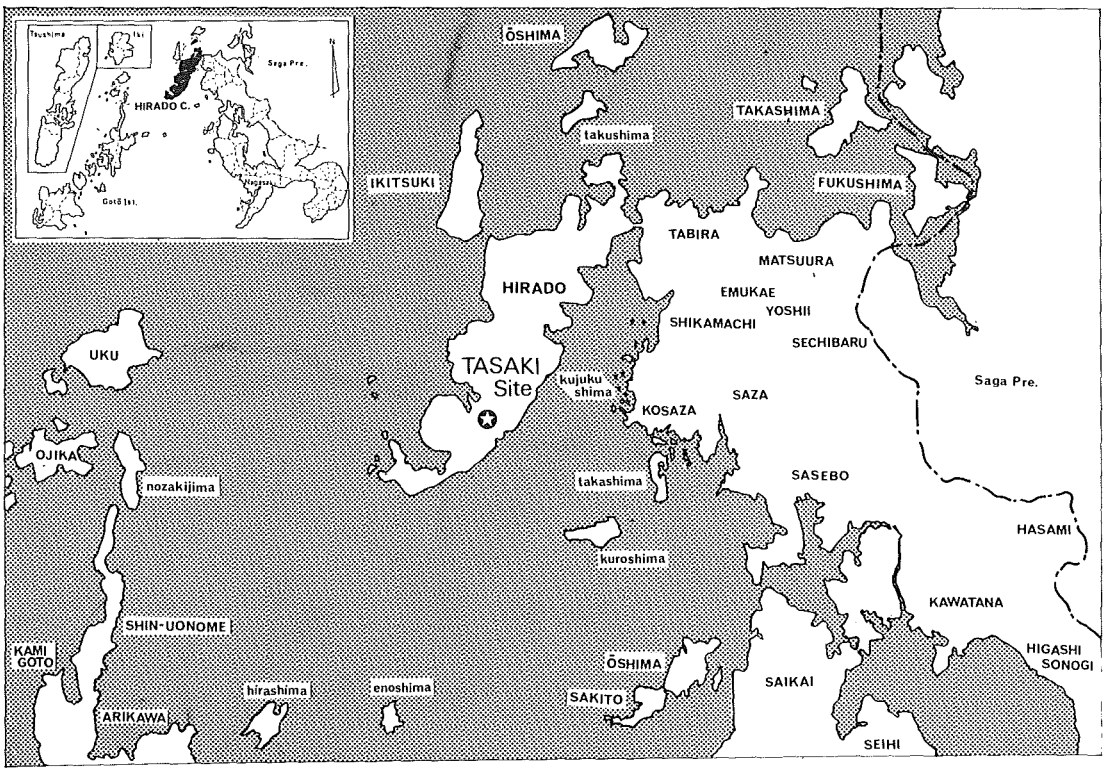


Fig. 4　田崎遺跡位置図

註1　鎌田泰彦（1971）「長崎県の地学」長崎県地学会　P.170～178

2　大瀬戸町教育委員会（1980）「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」大瀬戸町文化財調査報告書第1集

3　福井洞窟，直谷洞穴，泉福寺洞穴，岩下洞穴，下本山岩陰等がある。

4　伊藤秀三（1977）「長崎県の植生」長崎県環境部自然保護課　P. 1

5　長崎県統計協会の1979年10月1日現在の資料による。

6　同　上

7　長崎県気候図説（1960）

8　註5に同じ

9　長崎県教育委員会（1980）「長崎県の文化財」所収。

10　萩原博文（1977）「志々伎小田遺跡」平戸市の文化財9　平戸市教育委員会 P.4

11　川道寛氏の教示による。

参　考　文　献

1　杉原荘介・戸沢充則（1962）「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」　駿台史学　12

2　富桝憲次・戸沢充則（1962・1963）「唐津周辺の細石器Ⅰ～Ⅲ」　考古学手帳　14，16

3　麻生　優（1965）「細石器文化」日本の考古学Ⅰ　河出書房

4　芝本一志・下川達弥（1966）「伊万里湾沿岸における無土器文化」　古代学研究　46号

5　池永寛治（1967）「鹿児島県出水市上場遺跡」　考古学集刊　3－4

6　池永寛治（1968）「熊本県水俣市石石飛分校遺跡」　考古学ジャーナル21

7　杉原荘介・戸沢充則（1971）「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」　考古学集刊4－4。

8　小田静夫（1971）「台形石器について」　物質文化　18

9　橘　昌信（1973）「峠山遺跡」　福岡県文化財調査報告書　51集

10　橘　昌信（1973）「九州における細石器文化」　考古学論叢　1

11　山口譲治（1974）「板付周辺遺跡調査報告書1」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　29集

12　山口譲治（1975）「板付周辺遺跡調査報告書2」　福岡市埋蔵文化財調査報告書　31集

13　橘　昌信（1975）「宮崎県船野遺跡における細石器文化」　考古学論叢　3

14　下川達弥（1975）「長崎県日ノ岳遺跡の石器文化」　物質文化　25

15　下川達弥・久村貞男（1976）「日ノ岳遺跡」　日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物（下）

16　麻生　優・白石浩之（1976）「百花台遺跡」　日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物（下）

17　副島邦弘・山口譲治（1976）「諸岡遺跡」　日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物（下）

18　萩原博文（1976）「中山遺跡」　日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物（下）

19　萩原博文（1977）「長崎県平戸市度島町湯牟田中山遺跡」　平戸市教育委員会

Tab. 1　周辺遺跡地名表

番号	遺跡	種別	所在地
1	敷佐第1遺跡	散布地	平戸市敷佐町
2	敷佐第2遺跡	〃	〃　〃
3	船木古墳群	古墳	〃　船木町
4	若宮遺跡	散布地	〃　下中津良町
5	大志佐遺跡	〃	〃　大志佐町
6	大野遺跡	〃	〃　〃
7	辻第一遺跡	〃	〃　辻町
8	辻第二遺跡	〃	〃　〃
9	辻古墳群	古墳	〃　〃
10	津吉遺跡	墳墓	〃　津吉町
11	田崎遺跡	包蔵地	〃　〃　田崎
12	田崎第2遺跡	〃	〃　〃　〃
13		散布地	〃　前津吉町
14	前津吉山下遺跡	〃	〃　〃
15	神上第1遺跡	〃	〃　神上町
16	神上第2遺跡	〃	〃　田代町
17	大志々伎遺跡A	〃	〃　大志々伎町
18	大志々伎遺跡B	〃	〃　〃
19	大志々伎遺跡C	〃	〃　〃
20	大志々伎山口遺跡	〃	〃　〃　山口
21	大志々伎前田遺跡	〃	〃　〃　前田
22	志々伎小浜遺跡	〃	〃　志々伎町小浜
23	志々伎小学校遺跡	〃	〃　〃　岡
24	恵古川畔遺跡	墳墓	〃　〃　恵古川畔
25	大浜遺跡	散布地	〃　〃
26	志々伎小田遺跡	〃	〃　〃　小田
27	八幡神社遺跡	〃	〃　〃
28	志々伎肥遺跡	〃	〃　〃　肥

Fig. 5　周辺地形図および周辺遺跡

Ⅱ 調 査

1．調査に至る経緯

田崎遺跡はすでにその所在は知られていたとはいえ[註1]，規模・範囲・時期等は不明瞭であった。昭和42年（1967）平戸島先史遺跡一般調査が長崎大学医学部解剖学第二教室によって実施された[註2]。折りしも島内を縦貫する県道（現在の国道383号線）の支線として津吉町古田で分岐して前津吉港へ東走する県道の新設工事が行われており，切断された丘陵部断面に遺物包含層がレンズ状に認められ，サヌカイト製のポイントや黒耀石製の石鏃・石核・剝片等が発見された。特に両面加工されたサヌカイト製のポイントは注目され，遺跡の主体部は道路工事によってそのほとんどが破壊を受けごく狭い範囲しか遺存していないとされながらも，島内における先土器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡として重要視された[註3]。

一方，道路の開通と併行して遺跡およびその周辺区域の水田改良工事や住宅地造成工事等の開発行為が危惧され，遺跡の保護，開発工事前の緊急発掘調査の必要性が生じていた。しかし，5年間は何事もなく過ぎた。

時の住宅建設ブームはこの遺跡にまで及び，昭和47年（1972）県文化課は開発行為に先立って緊急発掘調査を実施することになった。併行して同市根獅子町所在の根獅子遺跡[註4]の緊急発掘調査（昭和47年3月22日～3月29日）も長崎大学医学部解剖学第二教室によって実施された。付記しておく。

○調査期間　昭和47年3月27日～同年4月4日

○調査員　長崎県教育庁文化課　正林　護・田川　肇

○調査協力者　平戸市教育委員会　森本芳憲・山本　宏・萩原博文
平戸市役所　松山幸吉
土地所有者　下川　勇

註1　樋口隆康・釣田正哉（1951）「平戸の先史文化」平戸学術調査報告　P.50所収

註2　長崎大学医学部解剖学第二教室(1967)「平戸島先史遺跡一般調査報告（その1・平戸南部）」

註3　正林　護（1968）「平戸市田崎遺跡の遺物」九州考古学33・34　P.18～20所収

註4　銅鏃を打ち込まれた女性頭蓋骨が出土したことで有名な弥生時代の墳墓遺跡で，文献は註1参照。なお，今次の調査報告は，坂田邦洋（1973）「長崎県根獅子遺跡発掘調査」考古学ジャーナル　No.79

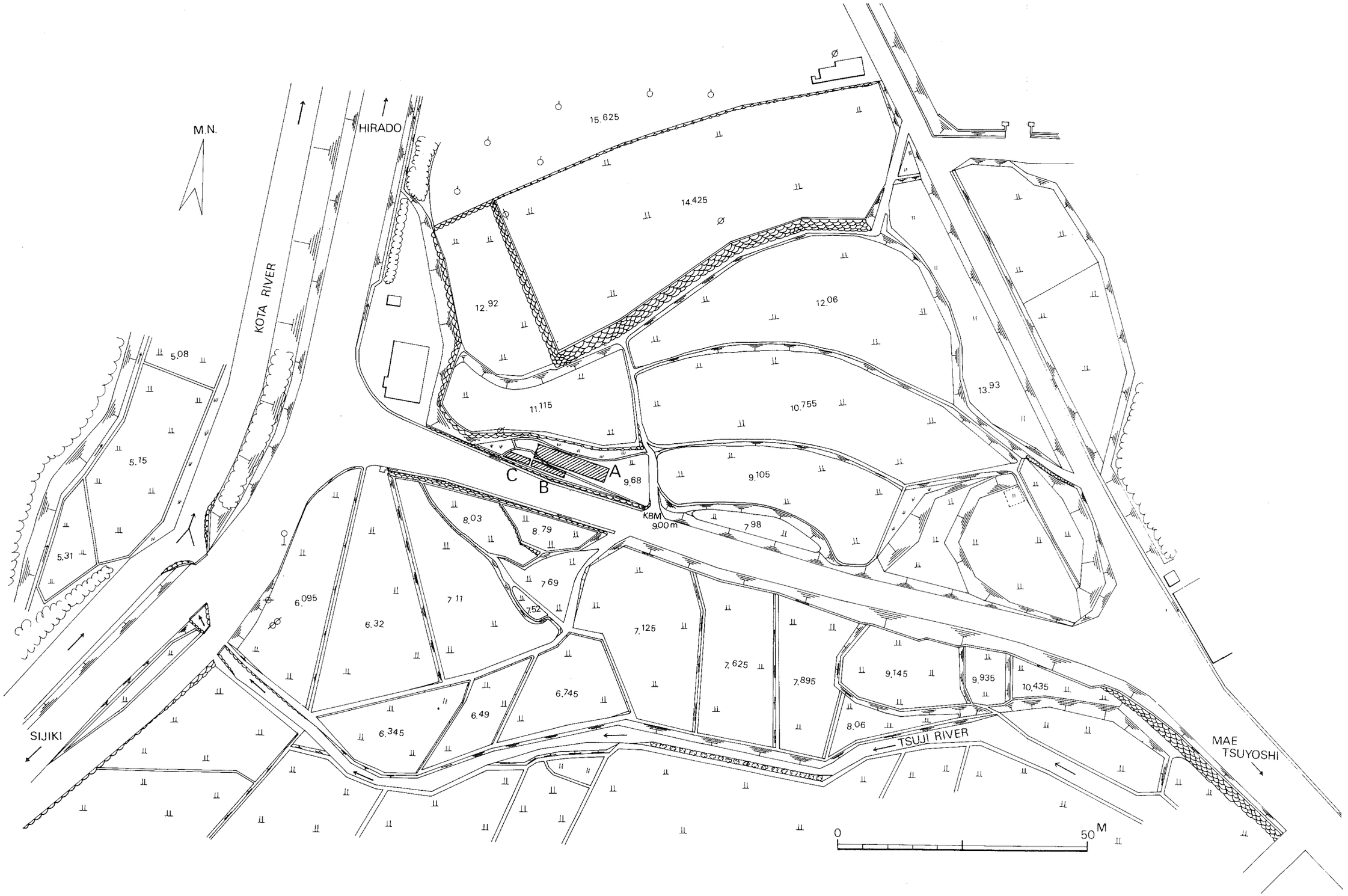


Fig. 6　遺跡周辺地形図

2．調査概要

a　調査区の設定（Fig. 5，PL. 1－2）

先述の如く本遺跡は道路工事によってその主体部はすでに損壊していたが，丘陵部先端部に形成されていたと考えられる。遺存している部分で一番残りが良いと思われる地点に，地形に沿って大略東西に3m×15mの調査区を設定しAトレンチとした。ほとんど遺物が出土せず，調査途中で昭和42年当時に確認されていたレンズ状を呈する包含層である赤褐色粘質土層の北端がAトレンチの南西端で確認されたため，Aトレンチに並行して県道との間に，更に1.5m×7mのトレンチを2本設定し，それぞれB・Cトレンチとした。（Fig. 5，PL. 1－2）

また，石垣の下端に海抜9.00mのK. B. M. を設置し，標高はすべてこれに依った。

b　土　層（Fig. 7，PL. 2－1～3－1）

現在の地形は水田耕作のため段々畑に築造しなおされているが，遺跡は丘陵上にあるため全体的に南に傾斜している。基本的な層序はFig. 7のとおり4層に区分され，第Ⅱ層と第Ⅲ層の2層が文化層である。

第1層　黒色土層　　耕作土である。水田耕作のため厚さも均一化され水平に保たれている。厚さ約20cm。

第Ⅱ層　赤褐色粘質土層　包含層である。粘性は強く堅く良くしまっている。粒土も細い。拳大の礫を含む。厚さ約30cm。

第Ⅲ層　黄褐色粘質土層　この層も包含層である。第Ⅱ層と同様粘性が強く堅く良くしまっている。原さ約20cm。よりレンズ状堆積を呈する。

第Ⅳ層　地　山

これらの包含層は，B・Cトレンチ間のベルト附近を中心にして東西にレンズ状に，また，道路を中心にして南北にレンズ状に堆積している。調査当時すでに石垣が築造されていたため切断面の観察は不可能であったが，正林（1968）によると，道路南端にも約30cmの包含層が確認されているところからみて遺跡は約300m²位の小規模なものであったと推察される。

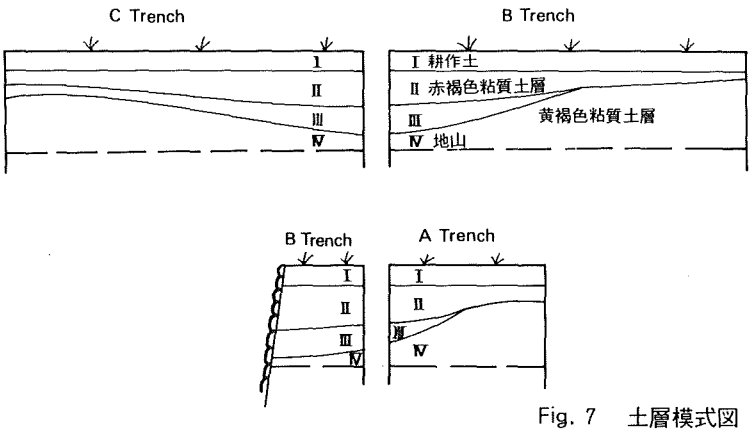


Fig. 7　土層模式図

c　遺物の遺存状況（Fig. 11～23, PL. 4－1）

前節で触れたとおり本遺跡は丘陵の先端部という地形的にかなり狭い限られた範囲に形成されているという特異性を有している。その限られた範囲の中での行動は，遺物の偏在性として顕著に現われている。すなわち，本遺跡では赤褐色粘質土層と黄褐色粘質土層の２層の文化層が確認されているが，それらはレンズ状に堆積しており，包含される遺物のほとんどがここに偏在する。水平分布を見ると両層ともに約2.5m位の円内に，垂直分布は海抜9.00m の附近にありOne-Unitとしてとらえることができよう。

さらに，文化層を個別にみると，第Ⅱ層の赤褐色粘質土層に遺物のほとんどを包含し，第Ⅲ層の黄褐色粘質土層中の大半の遺物は，石器製作のための母岩たり得ない小指の頭位の小さな黒耀石の原石が主で，それらの中に剝片・砕片等が混在するという状況を呈している。これらの原石は人為的な行動の結果と考えるより，自然的な現象としてとらえた方が良さそうである。

この偏在性は本遺跡にのみ見られるものか，あるいは周辺の遺跡群がそうであるのかの確認は今後の課題となろう。

今次の調査で出土した遺物の総数は表土層のものを除いて 1,922 点であり，限られた時間内での調査ということもあり，Dot-Map として記録したものは 232 点にとどまる。そのうち土器

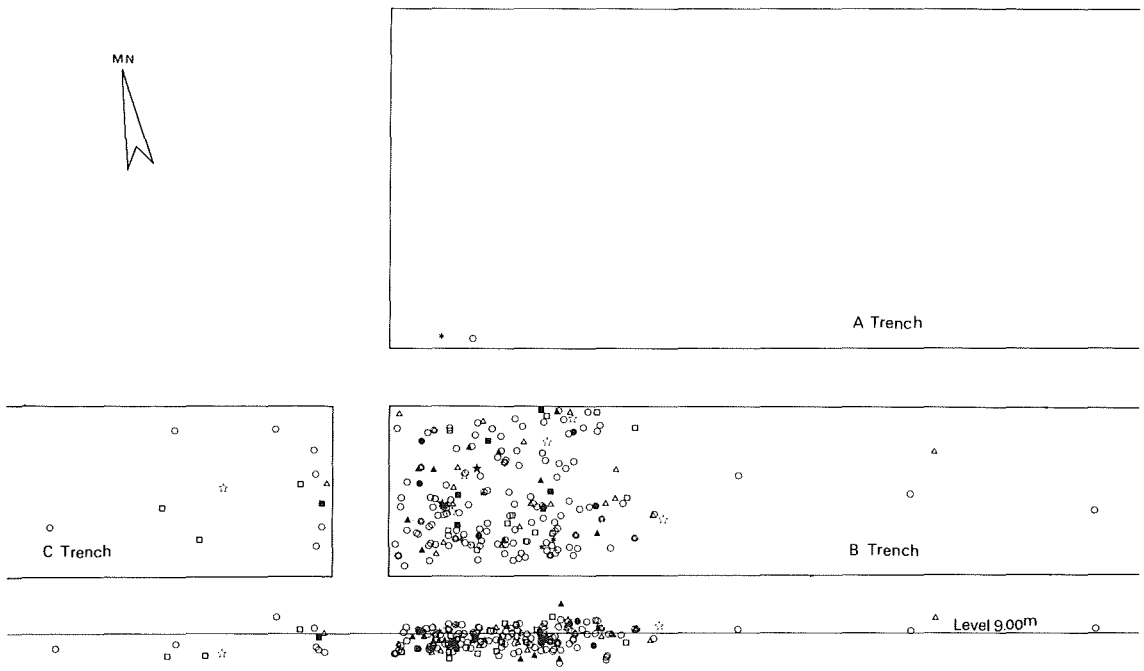


Fig. 8　第Ⅱ層出土の石器群

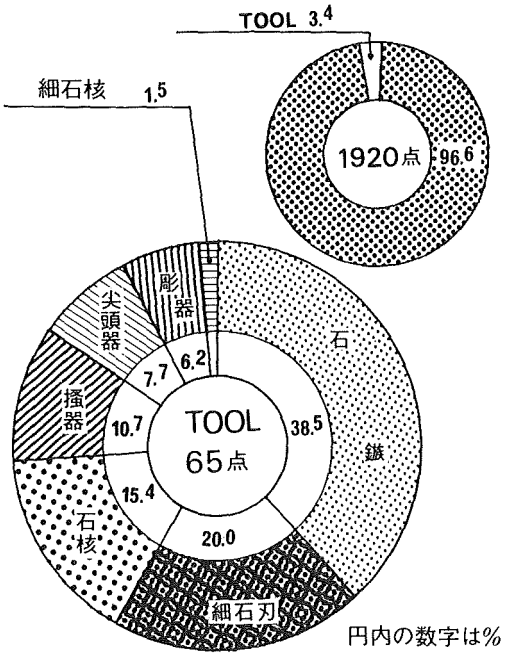


Fig. 10　石器組成率

が細片で2点あり，他は石器類である。石器の製品中最も多い個体数を出土したのは石鏃で25点を数え約39%の高比率を占める。次いで細石刃の13点で20%，石核，掻器と続く。(Fig. 10)

数量的に圧倒的に多いのは砕片で1,574点を数え，遺物総量の82%に達する。利用されている石材は黒耀石が圧倒的に多く約80%を占める。次いで安山岩の約18%で，瑪瑙，水晶が他に存する。瑪瑙は製品化されたものに遇していないが，島内に産するという地域的な背景もあり，特性としてとらえることができるのではないだろうか。

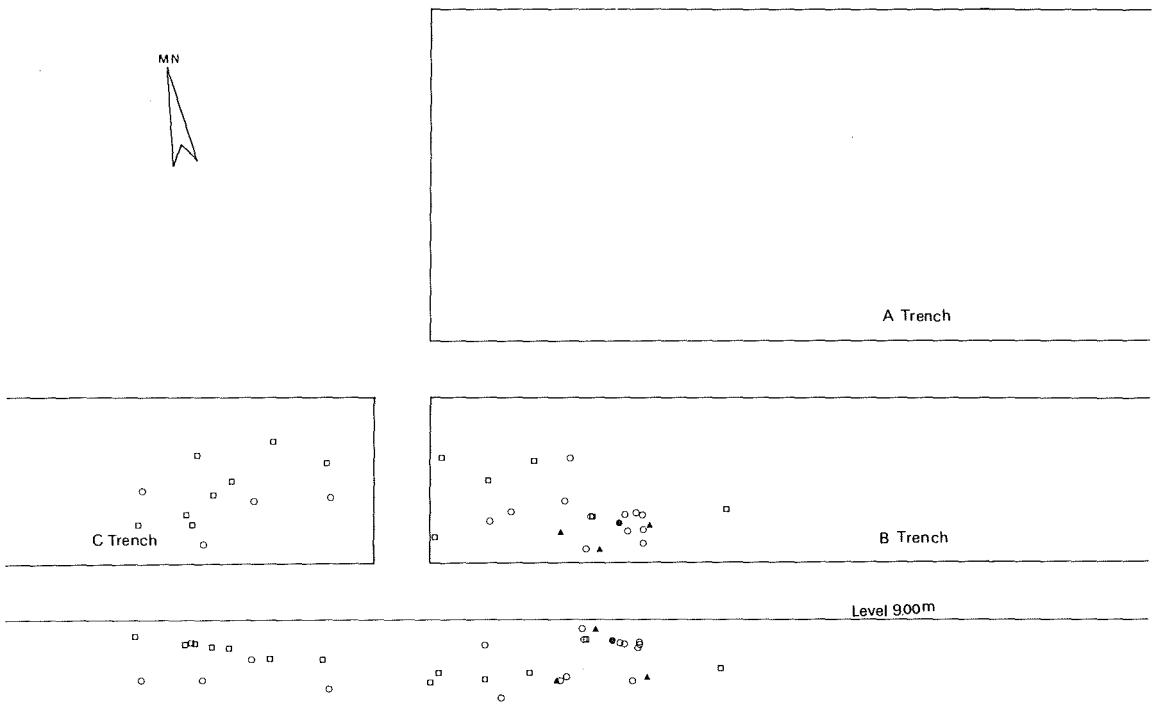


Fig. 9　第Ⅲ層出土の石器群

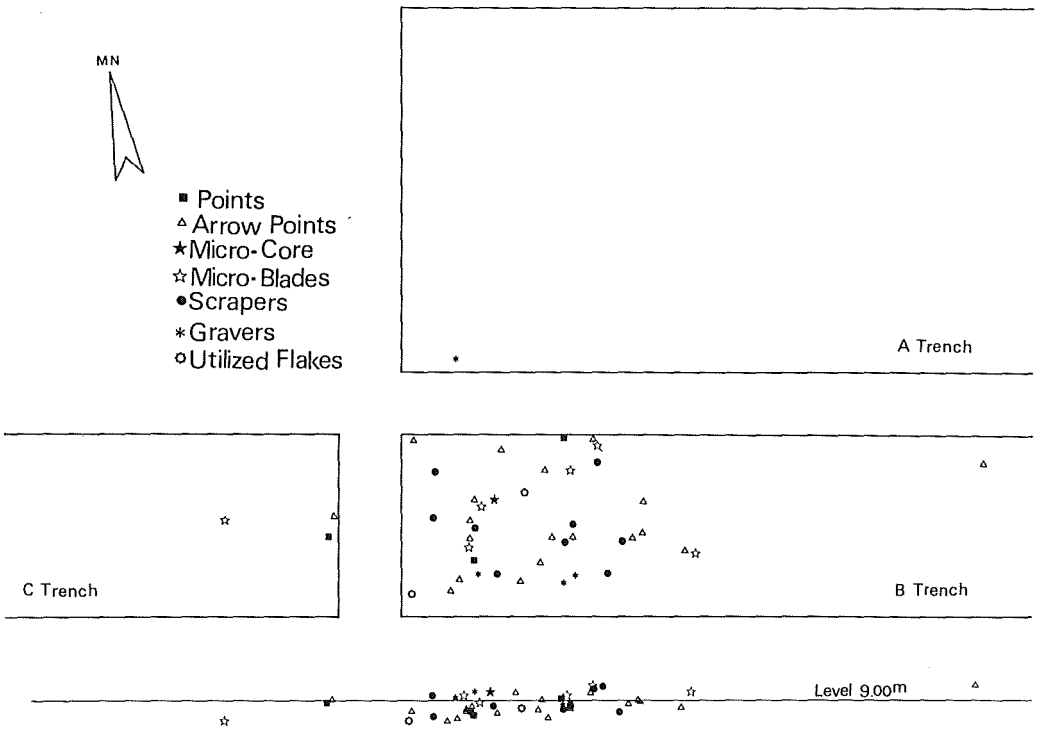


Fig. 11　分布状況(1)

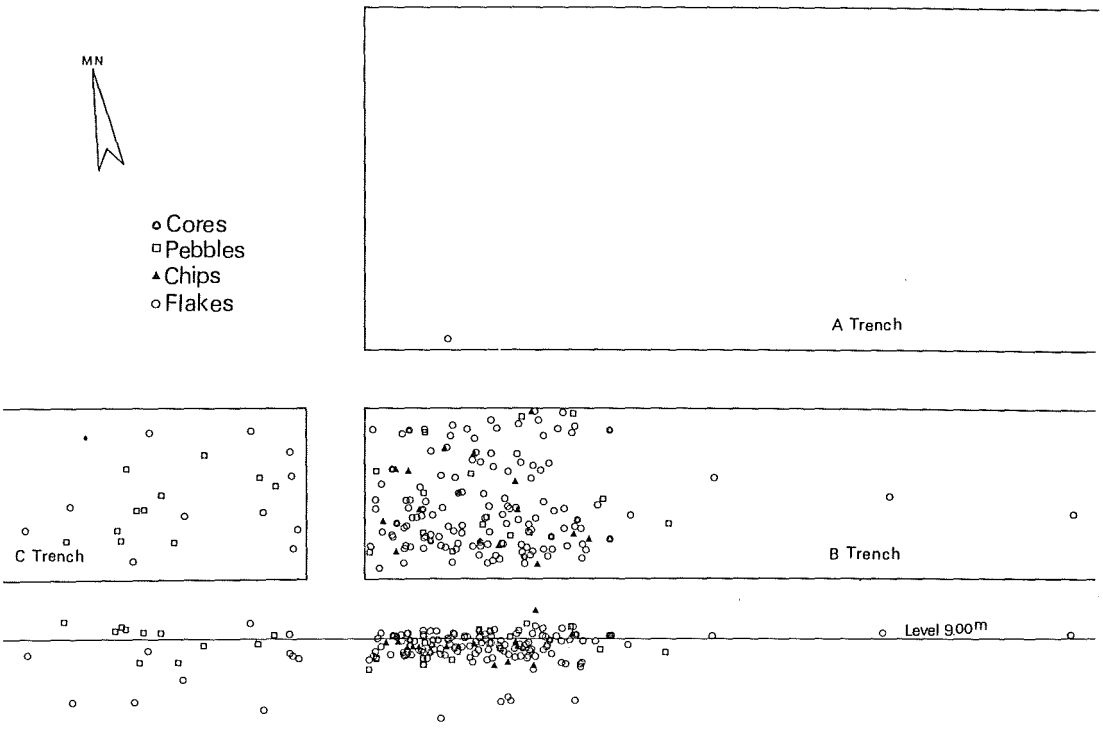


Fig. 12　分布状況(2)

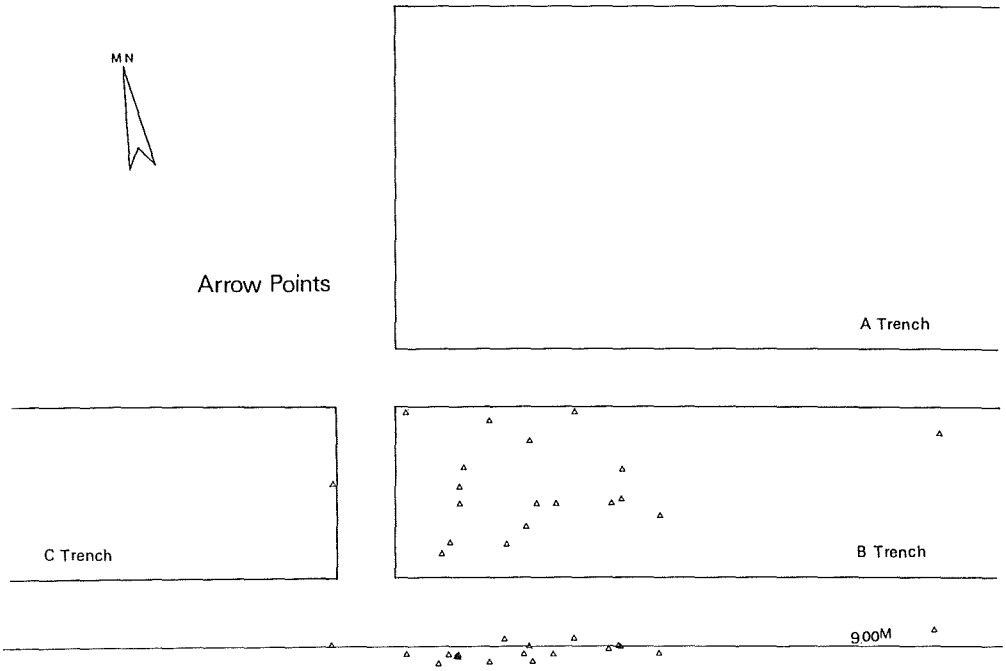


Fig. 13　分布状況（石鏃）

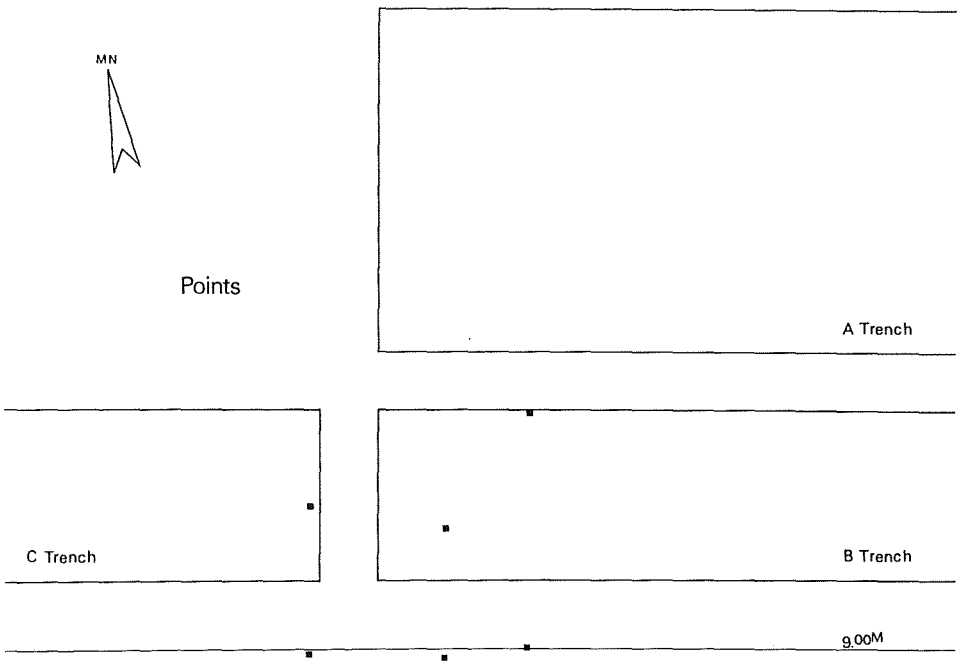


Fig. 14　分布状況（尖頭器）

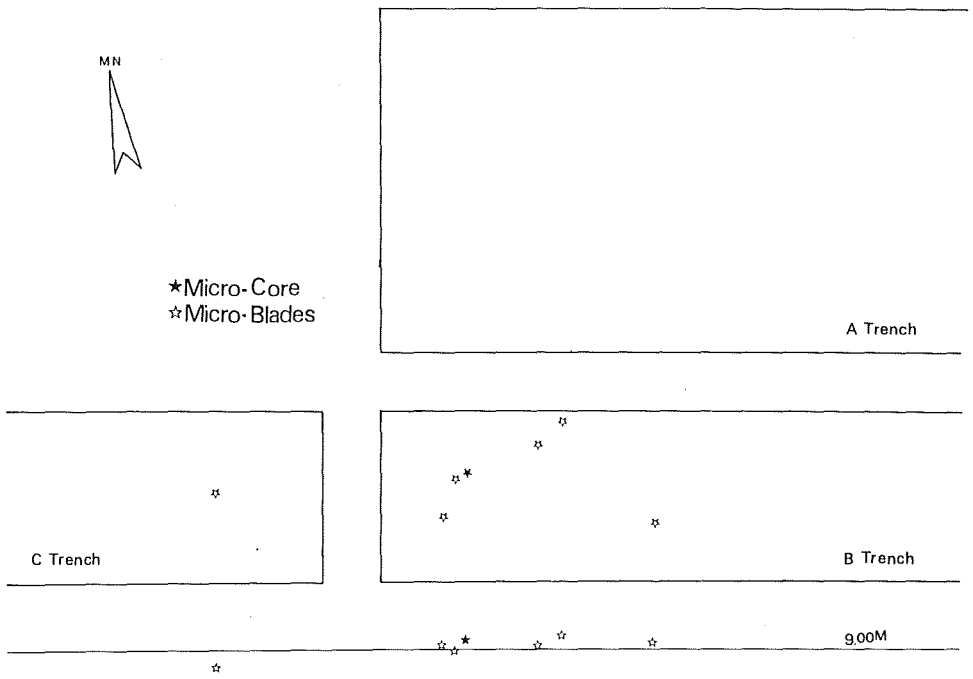


Fig. 15　分布状況（細石器）

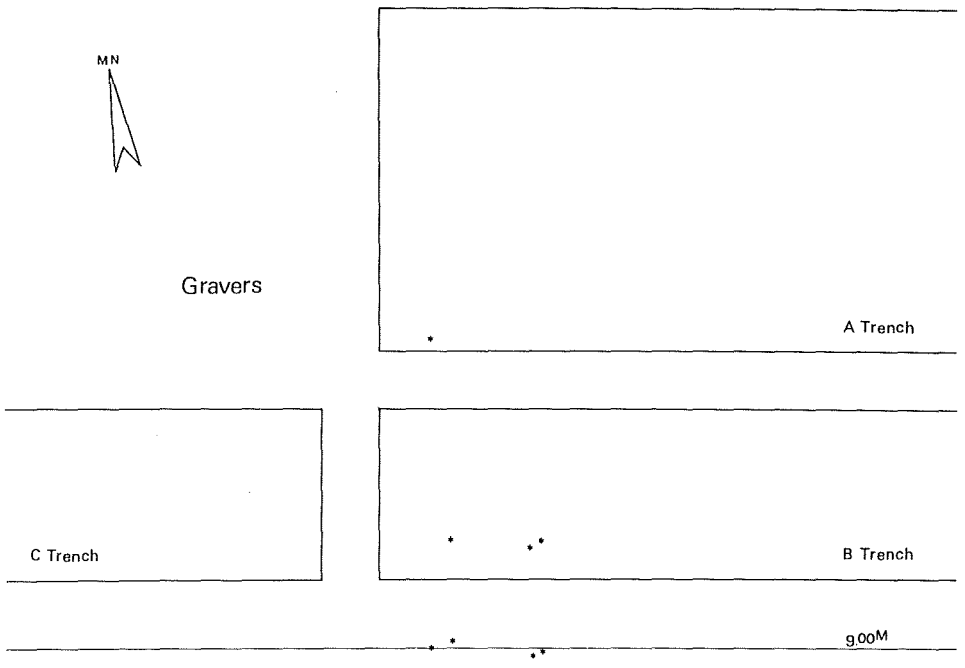


Fig. 16　分布状況（彫器）

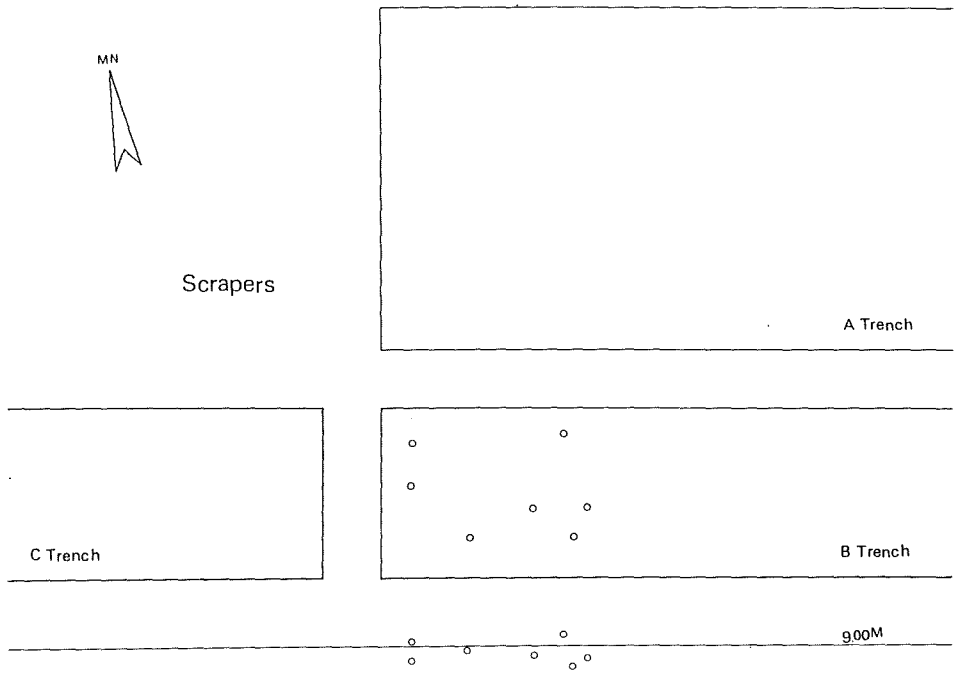


Fig. 17　分布状況（掻器・削器）

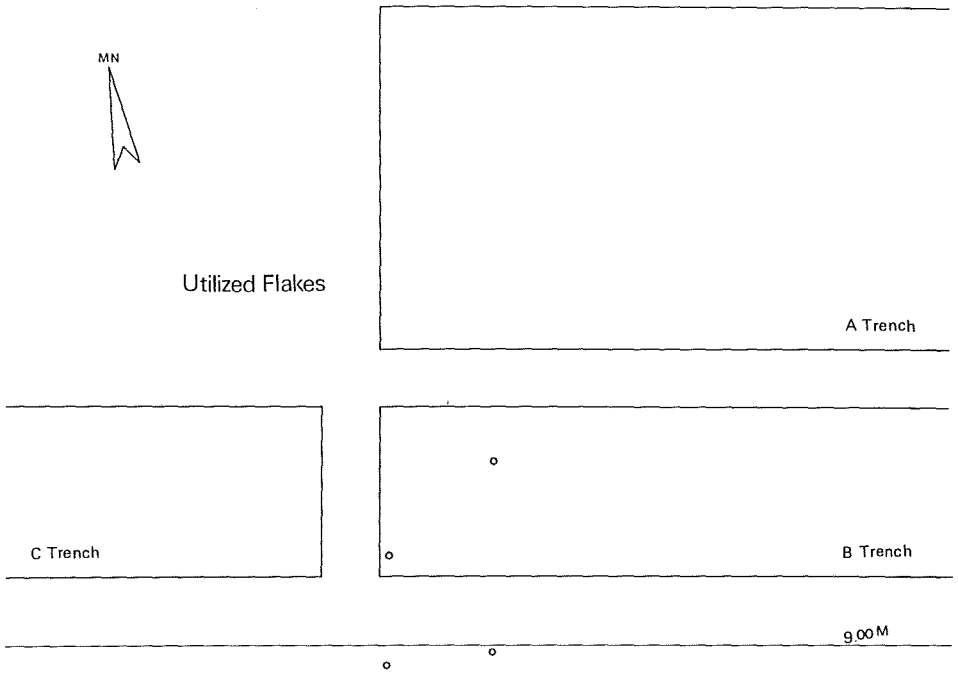


Fig. 18　分布状況（U-Flakes）

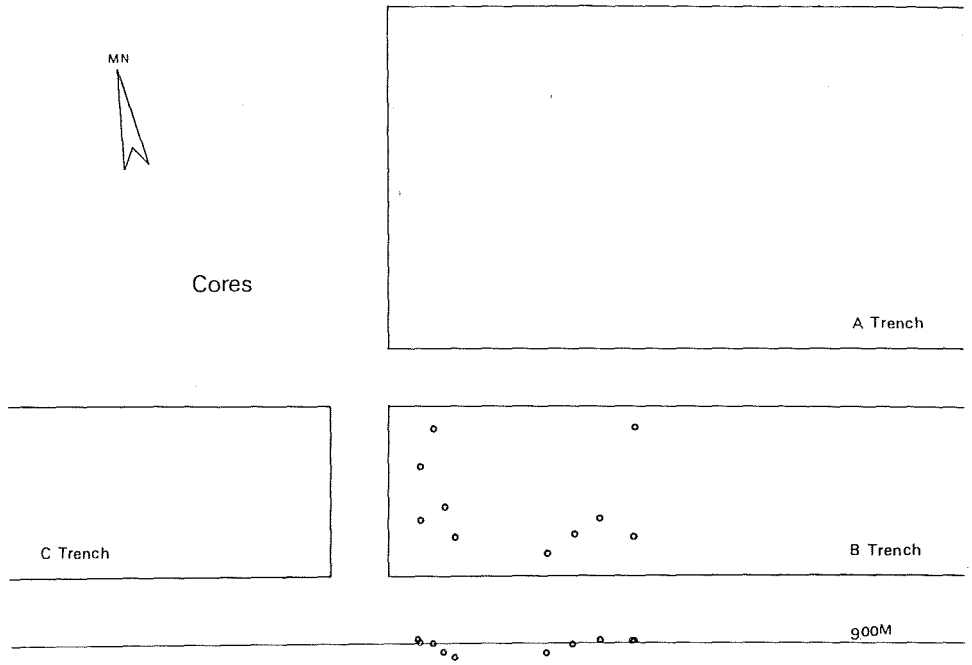


Fig. 19　分布状況（石核）

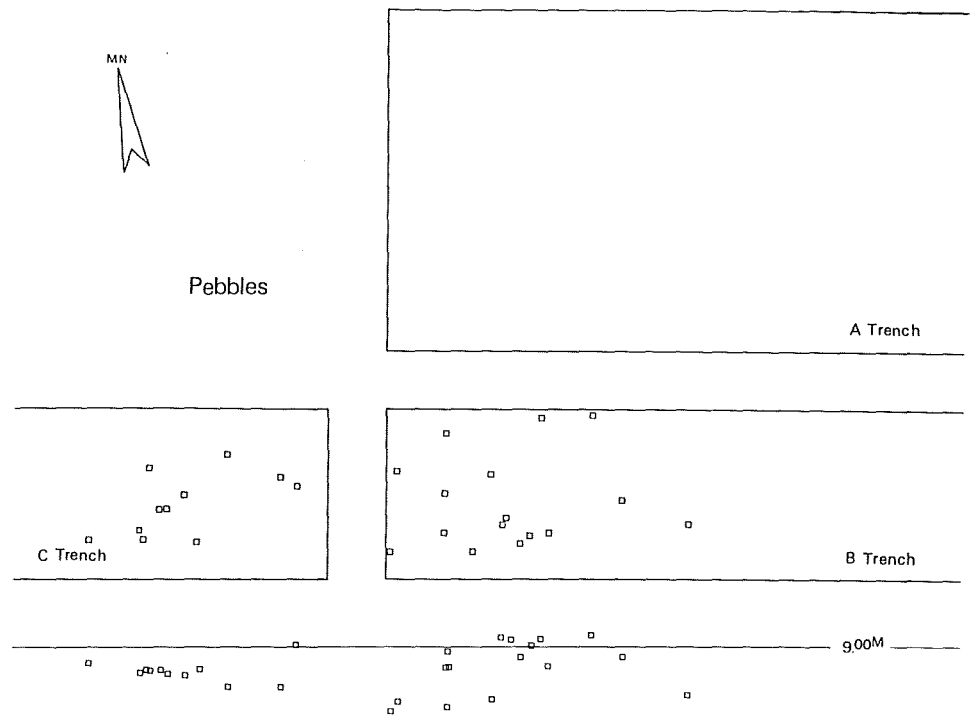


Fig. 20　分布状況（原石）

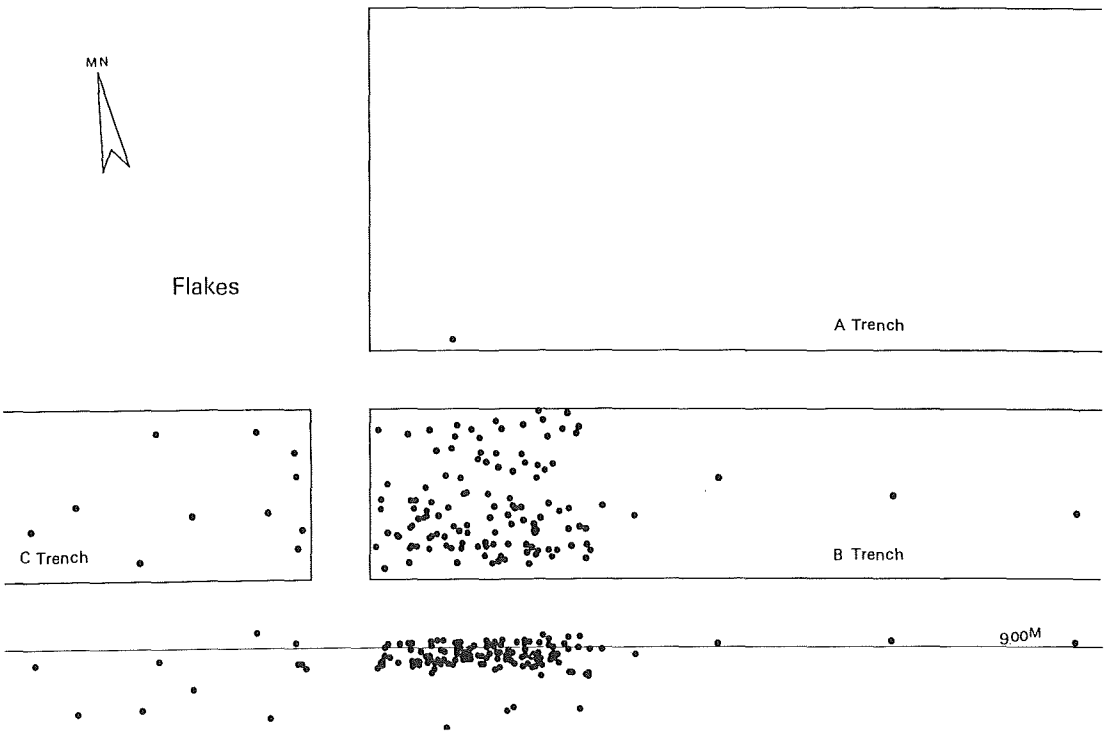


Fig. 21　分布状況（剥片）

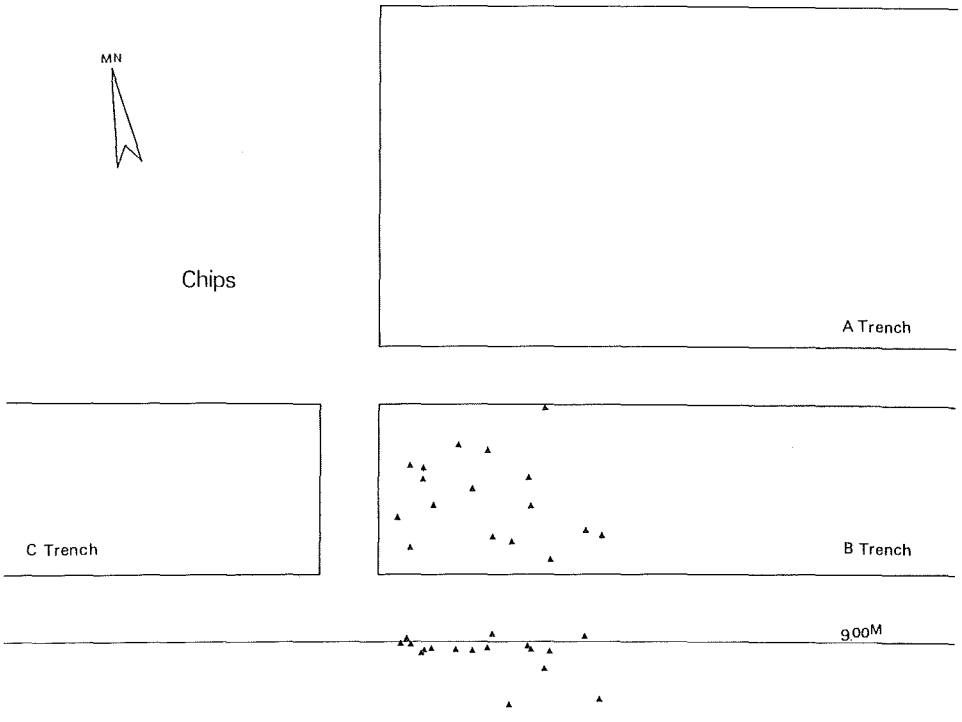


Fig. 22　分布状況（砕片）

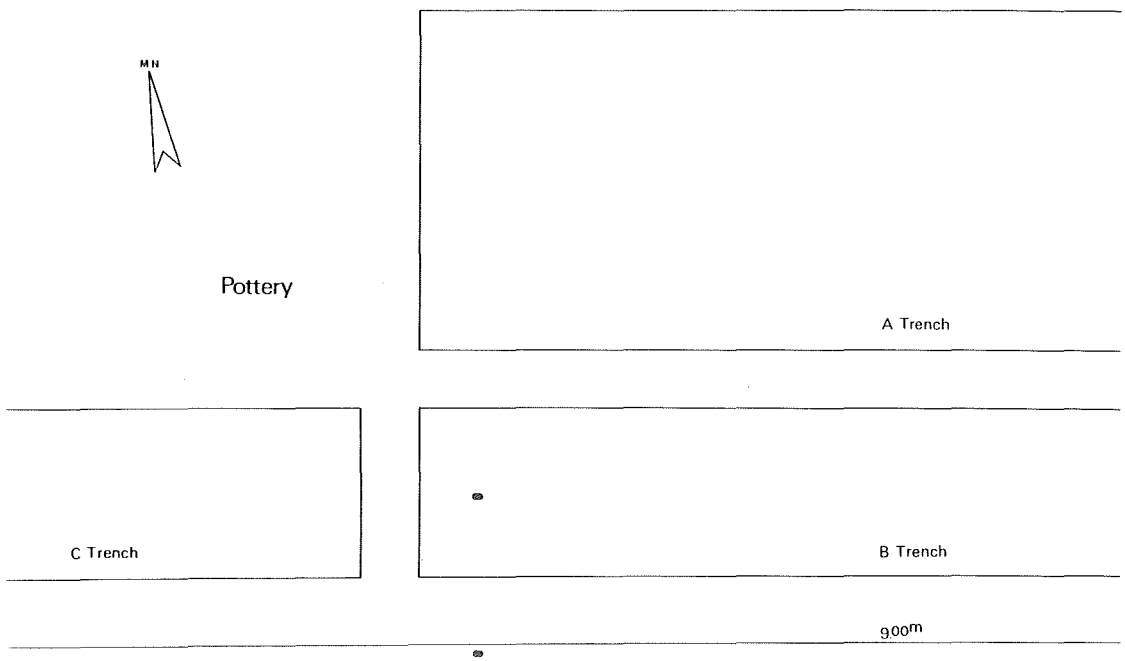


Fig. 23　分布状況（土器）

3．遺　構（PL. 3－2）

遺物量比からみて砕片が非常に多く出土しており，石器製作址検出の可能性を有していたのであるが，結果として遺構の遺存は認められなかった。住居址，その他の遺構についても充分の注意を払ったもののBトレンチで柱穴らしいピット群（PL. 3）を検出した以外は同様の結果を得た。

ピットの平面的形状は直径5～10cm位の円形，あるいは約20cm位の楕円形を呈する。赤褐色粘質土層中に掘り込まれ，その平面的配列，深度，掘り込み角度ともにまちまちで，そこに一定の規則性は認められない。炉址や焼土等も未検出である。これらピット群は丘陵部南端へその広がりを見せる傾向にあるが，道路により切断されているし，調査規模の些少さも相俟ってその全容を知るよしもないが，この時期における彼等の生活の一環として捉えることはできよう。上部構造への波及は次機に譲ることにして，ここでは一応単なるピット群として取り扱っておくことにする。

4．遺　物

a　土　器

2片出土している。いずれも細片であり保存状態が悪く，形態・部位等を論じられる資料たり得ないが肉眼観察可能な限りを記述する。

a　1.5cm×1.0cmの細片である。胎土に細かい石英粒を多く含む。焼成は比較的良好の部類に属すると思われるが，風化が著しく器面は鱗状に剝落して器壁は薄くなっている。現厚4.5㎜を計測する。色調は黒褐色を呈する。紋様・部位ともに不詳。保存状況は極めて悪い。

b　これもa同様細片で風化が著しく保存状況は極めて悪い。1.5cm×1.2cm，器壁の現厚0.5cmを計る。黄褐色の色調で胎土中に細かい石英粒を多く含む。紋様，部位ともに不詳。

b　石　器

①　石鏃（Fig. 24, Tab. 2, PL. 4－2, 6）

欠損品を含めて25個体（接合資料が1例あるので正確には24個体）出土している。出土した石器群の中で量的に一番多い比率を示す（Fig. 10）。そのうちドット・マップに記載してある15個体を図示してある。本遺跡出土石鏃の形態的特徴はすべて無茎で，鋒部角度が鋭い二等辺三角形を呈することである。底辺を1とした場合の高さはすべてが1.21以上と高い比率にある。1.85にも達する高いものもある。これらの石鏃は概して小形三角鏃の範疇に区分され，最小のものは高さ11.5㎜，厚さ2.5㎜で重さは0.1gしかない。

これらの石鏃を形態上から5類に大別してみた。すなわち，Ⅰ類――二等辺三角形の形態で抉りをもたないもの，Ⅱa類――形態はやはり二等辺三角形を呈し抉りをもつもの，Ⅱb類――本来はⅡa類に属すものであるが異形のもの　Ⅱc類――抉りをもち二等辺三角形を呈するが，底辺と高さの比率が近似する（より正三角形に近い形を呈する）もの，Ⅲ類――左右非対称の形態を呈するもの，の5類であるが，その他に先端部のみの出土もあるが，基部主体で選別したため分類からは除外してある。以下，各類を詳細に検討してみよう。

Ⅰ類　4個体の出土をみる。Ta.72以外はすべて小形で，Ta.112は出土した石鏃群の中で最小の数値を示すにもかかわらず入念な調整剝離が施され，底辺部には折断面が一部残っており，素材の利用の仕方がそうであったのか，あるいは折損した先端部を再利用したものであるかは不明である。他の折損資料と比較検討してみると，形態・法量等類似点が多いことに気付く。底辺と高さの比が1：1.85と資料中一番大きい。

Ⅱa類　この資料が数量的に最多で7個体ある。定形2，先端部欠損3，片脚欠損1，先端部および両脚欠損1がその内訳である。底辺と高さの平均比率は1.55で整然とした二等辺三角形でⅠ類と同様鋭い鋒部を作り出している。胴部に直角な力が加えられ折損した資料が多い中で，Ta.88（Fig. 24—12）は鋒部先端から力が加えられ欠損した唯一の資料である。製作過程中か

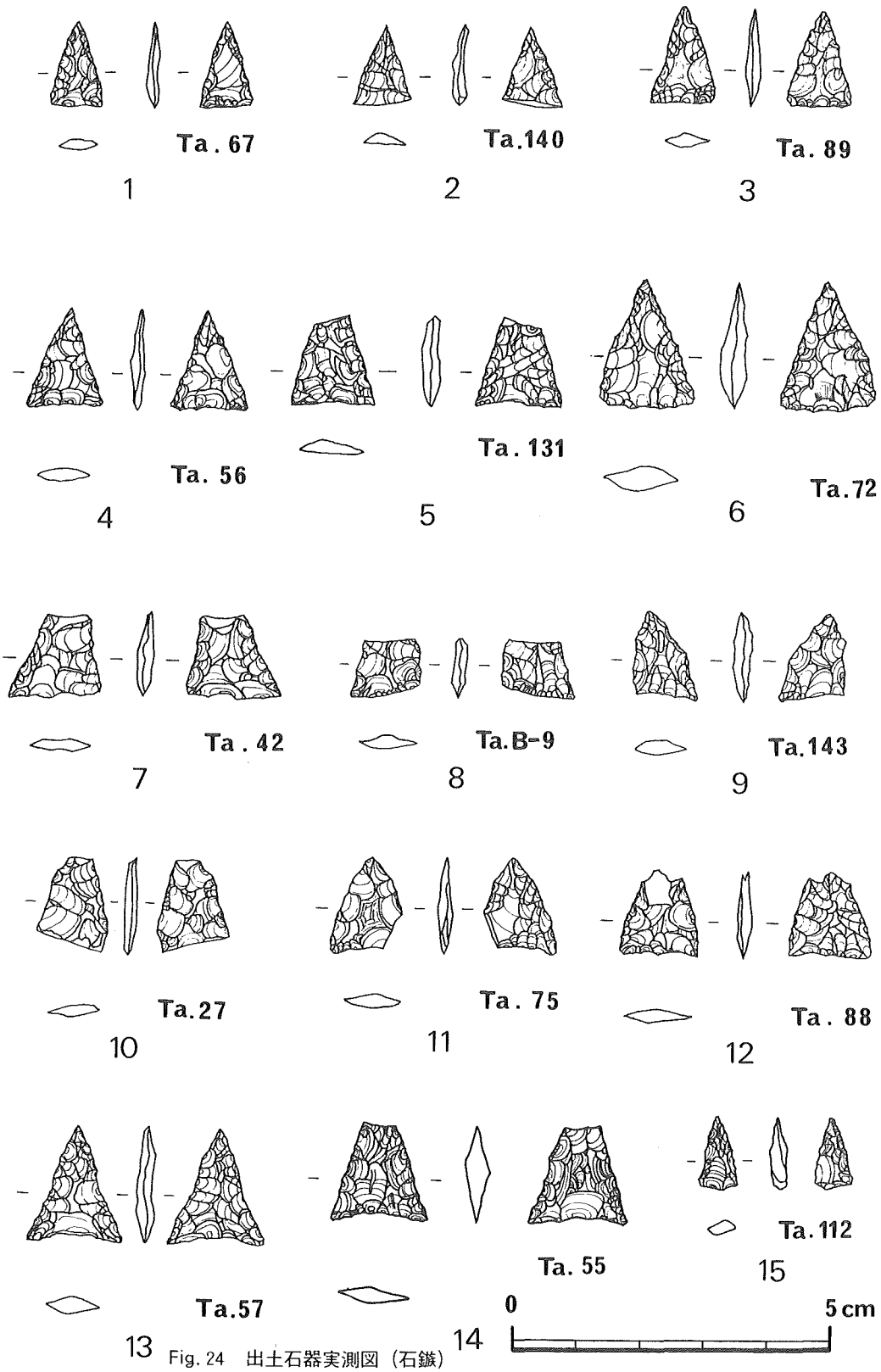


Fig. 24　出土石器実測図（石鏃）

使用後の結果であるのかは判然としない。Ta. 131（Fig. 24—5）は折損部が接合した資料であるが，この資料の折損時期は製作後であり大いに興味をひかれるところである。

Ⅱb類 唯一例である。(Ta. 57, Fig. 24—13) 基本的には二等辺三角形であるが，両エッジ中央部に抉りを入れて成形してある。黒耀石製である。

Ⅱc類 2個体出土している。(Ta. 75, B—5）やはり二等辺三角形を呈するがⅡaよりずんぐりし，より正三角形に近い形をとる。底辺と高さの比率がそれぞれ1:1.15, 1：1.21と小さい。入念な調整剝離を施し丁寧に仕あげてある。

Ⅲ類 左右非対称の形態を呈する。3個体出土しており，全資料とも鋒部が欠損している。そのうちの2個体 (Ta. 42, Ta. B-9, Fig. 24-7, 8) は胴部に直角に折れ，他1個体 (Ta. 143, Fig. 9) は先端部からの加圧により折損している。Ta. B-9は良質の黒耀石を利用している。

なお，先述した接合資料 Ta. 131の鋒部 Ta. B-2は他のチップ類と混同して一括して処理されてしまったため，出土時のデータを記載することができなかった。陳謝。

1. 完形資料

No.	実測図No.	遺物No.	高さ(mm)	底辺(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	比　率	石質	層位	備　考
1	24－15	Ta. 112	11.5	6.2	2.5	0.1	1.85	Ob	Ⅱ	
2		Ta. B-5	12.1	10.0	2.8	0.2	1.21	〃	〃	
3	24－1	Ta. 67	13.5	7.6	2.1	0.2	1.78	〃	〃	
4	24－3	Ta. 89	15.1	10.2	2.5	0.2	1.48	〃	〃	
5	24－4	Ta. 56	15.6	11.5	2.5	0.2	1.36	〃	〃	
6	24－5	Ta. 131	20.4	12.0	2.5	0.4	1.70	〃	〃	
7	24－13	Ta. 57	18.2	15.1	2.5	0.4	1.21	〃	〃	
8	24－6	Ta. 72	20.1	15.3	2.6	0.8	1.31	〃	〃	

2. 先端部欠損資料

9		Ta. B-6	8.3	14.1	2.6	0.3	1.38	〃	〃	
10	24－7	Ta. 42	13.0	14.5	2.6	0.4	1.46	〃	〃	
11	24－8	Ta. B-9	9.1	11.0	2.0	0.2	1.48	〃	〃	
12	24－9	Ta. 143	15.2	9.7	2.8	0.3	1.75	〃	〃	
13	24－14	Ta. 55	15.6	15.1	3.2	0.5	1.46	〃	〃	
14	24－12	Ta. 88	13.3	12.3	2.7	0.4	1.55	〃	〃	

3. 胴部欠損資料

15		Ta. B-1	9.0	6.0	1.8	0.1		〃	〃	
16		Ta. B-2	7.9	5.5	2.0	0.1		〃	〃	Ta. 131と接合
17	24－2	Ta. 140	12.7	9.1	2.4	0.2		〃	〃	
18		Ta. B-3	10.4	7.6	1.8	0.1		〃	〃	
19		Ta. B-4	13.5	8.2	1.8	0.1		〃	〃	主要剝離面を残す

4. 脚部欠損資料

20		Ta. B-7	17.1	10.6	2.2	0.3	1.67	〃	〃	
21	24－11	Ta. 75	15.0	11.7	2.6	0.3	1.28	〃	〃	

5. 先端部及脚部欠損資料

22	24－10	Ta. 27	14.0	11.0	1.8	0.3	1.70	〃	〃	
23		Ta. B-8	8.2	12.1	2.1	0.2	1.52	〃	〃	

		形　態	遺　物　番　号
Ⅰ			67, 72, 89, 112
Ⅱ	a		55, 56, 88, 131 B-6, B-7, B-8
Ⅱ	b		57
Ⅱ	c		75, B-5
Ⅲ			42, 143, B-9

Fig. 25　石鏃分類模式図

② **尖頭器**（Fig. 26, PL. 5）

本遺跡の調査目的の主眼は尖頭器の層位的確認にあったのであるが，実に残念なことながら柳葉形の尖頭器の出土は1例も見ず所期の目的を達することができなかった。

3・4が昭和42年の分布調査の際採集され，現在長崎大学医学部解剖学第二教室に保管されている資料であり，すでに報告もされていることであり詳細はさけるが，2・3その特徴について触れておきたい。4は黒耀石で大形の縦長剝片が利用され，両面に入念な調整剝離を施し柳葉形に仕上げている。断面は凸レンズ状を呈し，やや内弯気味に作出されている。先端部は鋭利に尖っているが摩耗が著しい。基部に自然面（打撃面と考えられる）を残すが，打瘤は除去され原形をとどめない。5はサヌカイト製で調整剝離は4より粗く内弯気味に仕上げられているのは利用素材の影響でもあるのか。

1・2は今次の出土である。両者とも黒耀石で先端部である。1は比較的粗い剝離で断面をレンズ状に薄く作りあげている。2は横剝ぎで入念な細かい調整剝離で打瘤を除去している。エッヂ部にも細かい二次加工が見られる。嘴状にやや弯曲する。

以上の如く本遺跡出土の尖頭器には，大形で形が整った柳葉形のものと小形のものの2種が存在する。

③ **細石刃核**（Fig. 27, PL. 6）

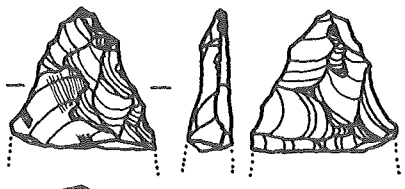
本遺跡から出土した唯一例である。良質の漆黒色の黒耀石を利用し5条のフルーティングを有する。高さ1.7㎝，幅1.7㎝，厚さ1.0㎝の小形である。正面観はV字状をなし，左右側面には比較的荒い調整剝離が残存する。プラットフォームは後部からの一打によりその面を形成しており打面調整はなされていない。本資料は再生資料と考えられ，現在のプラットフォームからのフルーティングはない。また，下端からのフルーティングが1条みられるが，これは調整時に作出されたものであろう。

④ **細石刃**（Fig. 27, PL. 6）

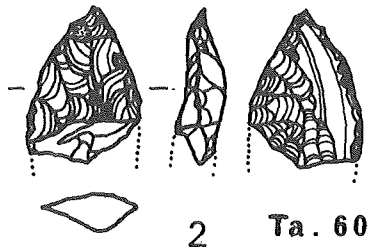
15個体出土している。完形品は1例もなくすべて折損している。いわゆる細石刃文化を代表する石器として形態的に整った細石刃はTa. 148（Fig. 27—7）1例しか見当たらない。他の資料は第1次剝離作業の調整剝片といった方が適切かも知れないが一応細石刃として取り扱う。切断されている部位によってこれらを区分してみると，頭部10個体，中間部4個体，末端部1個体と頭部部分の残存が圧倒的比率を占める。

頭部　要するにバルブを残しているものを頭部として取り扱ったが，これらの中でも打点に近い部分で切断されたものと比較的末端に近い部位で切断されたものの2種類がある。最長で13.8㎜あるが最小のものは5.25㎜しかない。

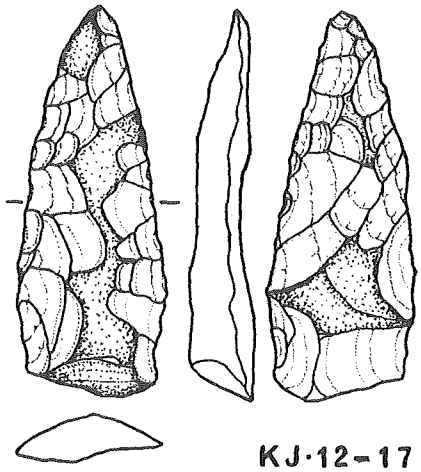
中間部　7.95㎜以上で最長は18.5㎜ある。幅も3.75㎜から6.90㎜とまちまちであり，最小の



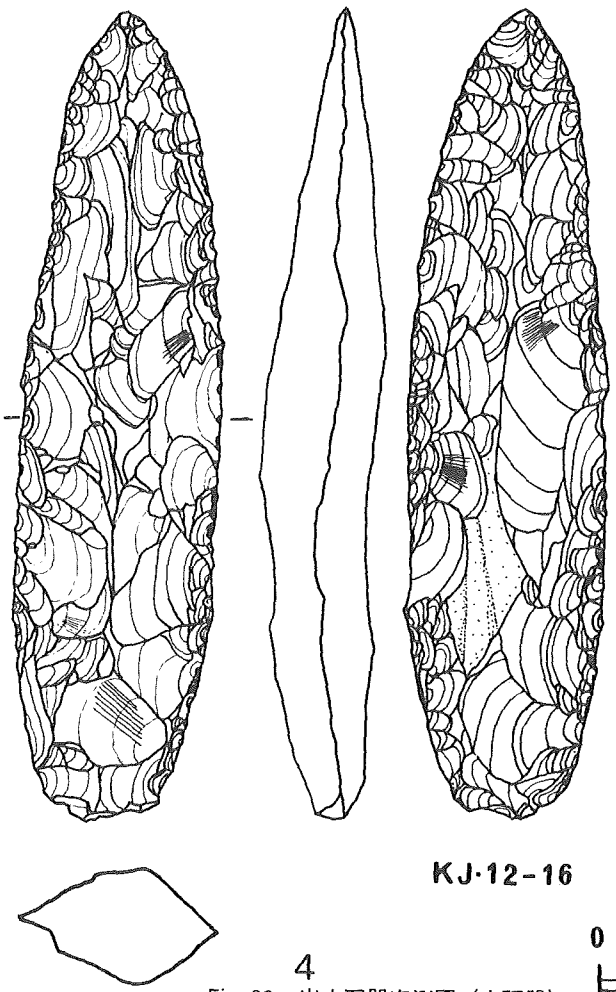
1 Ta . 52



2 Ta . 60



3 KJ·12-17



KJ·12-16

4

0 5cm

Fig. 26 出土石器実測図（尖頭器）

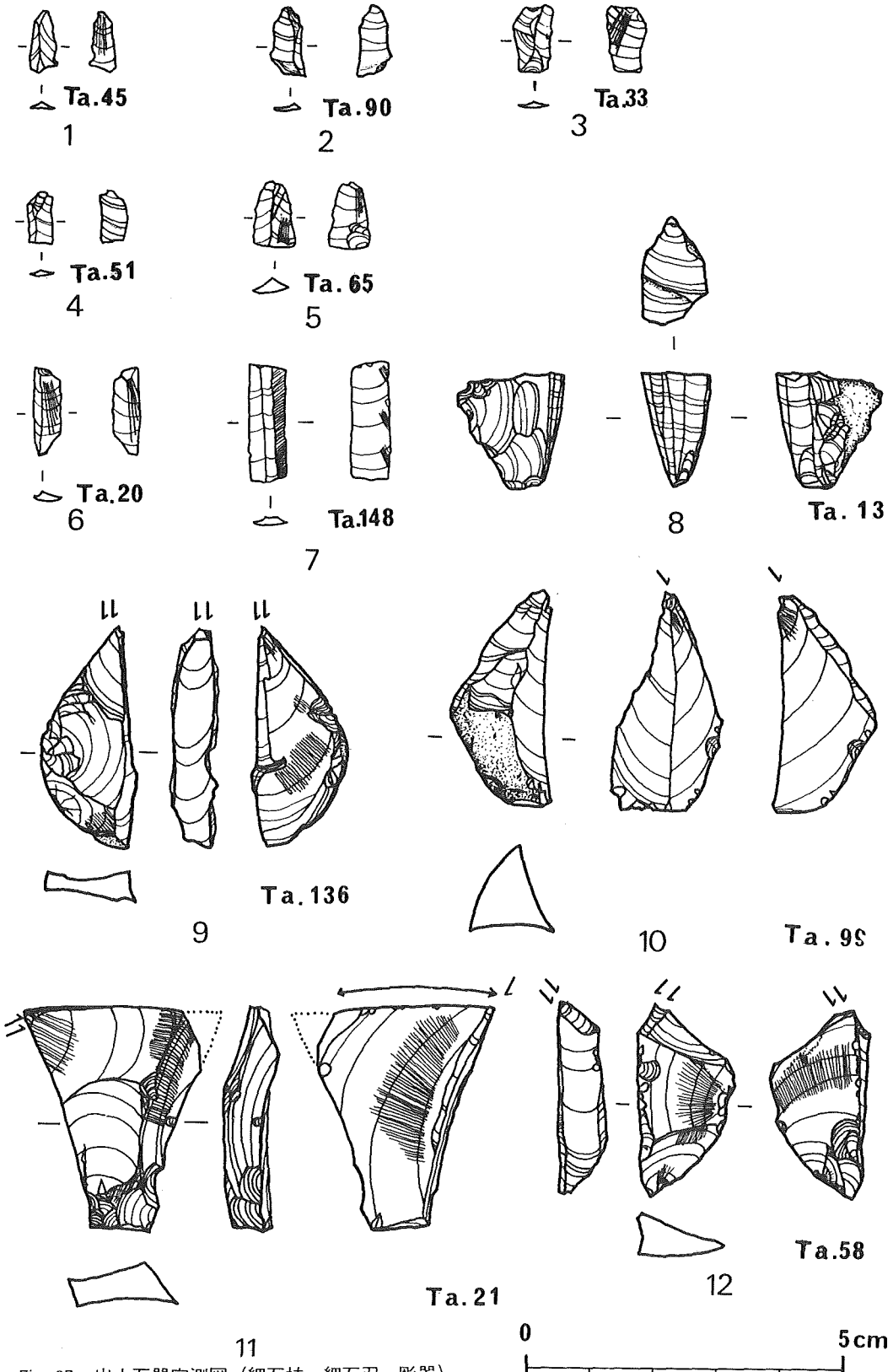


Fig. 27　出土石器実測図（細石核・細石刃・彫器）

ものが細石刃としての機能を果たせるかについては疑問が残る。

末端部　1例あるがその幅からみてあまり大きな細石刃の末端部ではなかろう。長さ6.95㎜，幅3.7㎜を計る。

これらの資料は，長さ・幅・重量ともそれぞれまちまちであるが，その厚さにおいては平均値1.24㎜が示すとおり大略近い数値をもつ共通点がある。

部位	番	遺物番	挿図番	長さ㎜	幅㎜	厚さ㎜	重量mgr	石材	トレンチ	層位	備考
頭部	1	Ta. B-10		5.25	3.85	1.00	13.3	Ob	B	II	
	2	Ta. B-11		7.00	3.85	1.10	20.0	〃	〃	〃	
	3	Ta. 51	Fig27-4	9.40	4.15	1.00	26.7	〃	〃	〃	
	4	Ta. B-12		8.85	4.90	1.20	33.3	〃	〃	〃	
	5	Ta. 90	Fig27-6	10.25	5.00	1.20	40.0	〃	〃	〃	
	6	Ta. B-13		8.25	5.50	1.10	40.0	〃	〃	〃	
	7	Ta. 65	Fig27-5	10.10	6.25	1.85	120.0	〃	〃	〃	
	8	Ta. B-14		12.40	5.60	0.96	100.0	〃	〃	〃	
	9	Ta. C-1		11.25	9.40	1.40	200.0	〃	C	〃	
	10	Ta. 20	Fig27-1	13.80	4.35	1.40	46.7	〃	B	〃	
中間部	11	Ta. 45	Fig27-3	7.95	3.75	1.45	26.7	〃	〃	〃	
	12	Ta. 148	Fig27-7	18.50	5.60	1.10	170.0	〃	〃	〃	
	13	Ta. B-15		12.90	5.00	1.10	33.3	〃	〃	〃	
	14	Ta. 33	Fig27-2	9.95	6.90	1.00	26.7	〃	〃	〃	
末端部	15	Ta. B-16		6.95	3.70	1.70	20.0	〃	〃	〃	

⑤ **彫器**（Fig. 27-9～12, PL. 7）

4例あり1と3が共通点を有する。すなわち，厚さ5㎜くらいの剝片を利用し打面に並行するように一端からフルーティングを行い平坦面を作出する。その後に平坦面の上部に2条の小さなフルーティングを行っている。3は一部に表皮を残し，あまり大きくない円礫からの作出であろう。2も同様に小円礫からの作出である。4は形態的に台形様石器に酷似する。剝片を横位置に使用し，片側縁は切断されている。エッジ部に細かい刃こぼれを観察する。4例とも良質の黒耀石を使用している。

⑥ **掻器・削器**（Fig. 28・29, PL. 7）

合計で8個体出土している。主要剝離面側からの刃部形成が多いが，Ta. 142（Fig. 28-1）は両面とも調整剝離が施されている。Ta. 130（Fig. 29-3）は黒耀石の小円礫を半載し，両側縁に主要剝離面側からかなり急角度に刃部を作出している。打面と反対端は尖っている。Ta. 101他（Fig. 29-4）は比較的大形の剝片を素材とし，横位置で使用している。二等辺三角形の形態をとり，底辺で主要剝離面からかなりの角度をつけて二次加工を行い刃部としている。また，頂点部は両側縁の二次加工により尖っている。この資料は3つに割れており石器接合の唯一例である。灰色の黒耀石を使用している。Ta. 5（Fig. 28-5）の利用石材は黒耀石であるが，出土した石器群中最もひどいローリングを受けており，剝離の稜線が摩耗により丸味を帯びている。周辺から出土の他の石器・剝片等に類例はなく，その原因は不詳である。

⑦ **石核**（Fig. 30・31, PL. 8）

大形石核と小形石核に区別できる。利用石材は圧倒的に黒耀石が多い。Ta. 19は最大のもので6cm×4.5cm×4cmある。上・下面とも平坦剝離で打面の調整を行っているが，フレイキングが

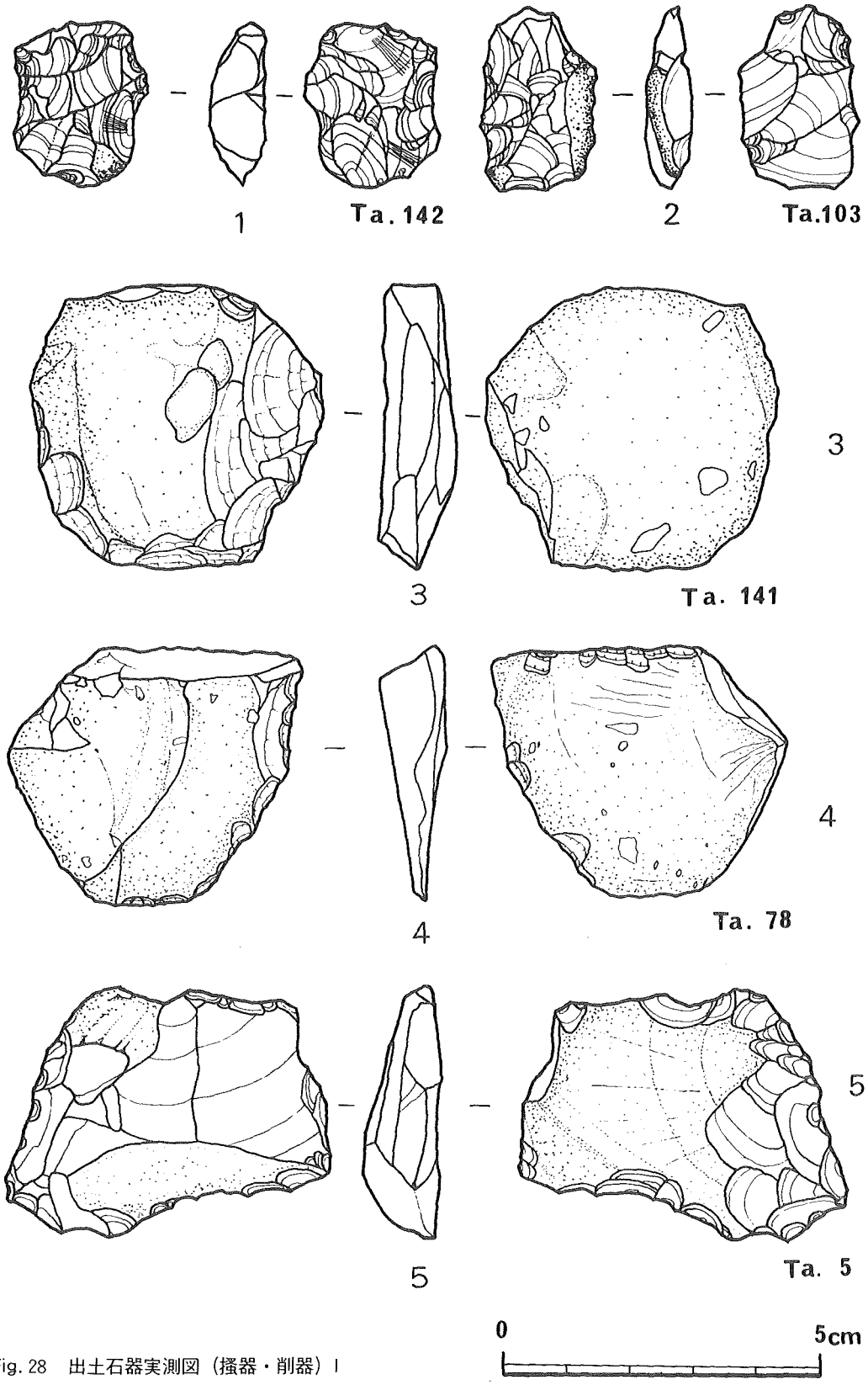


Fig. 28　出土石器実測図（掻器・削器）I

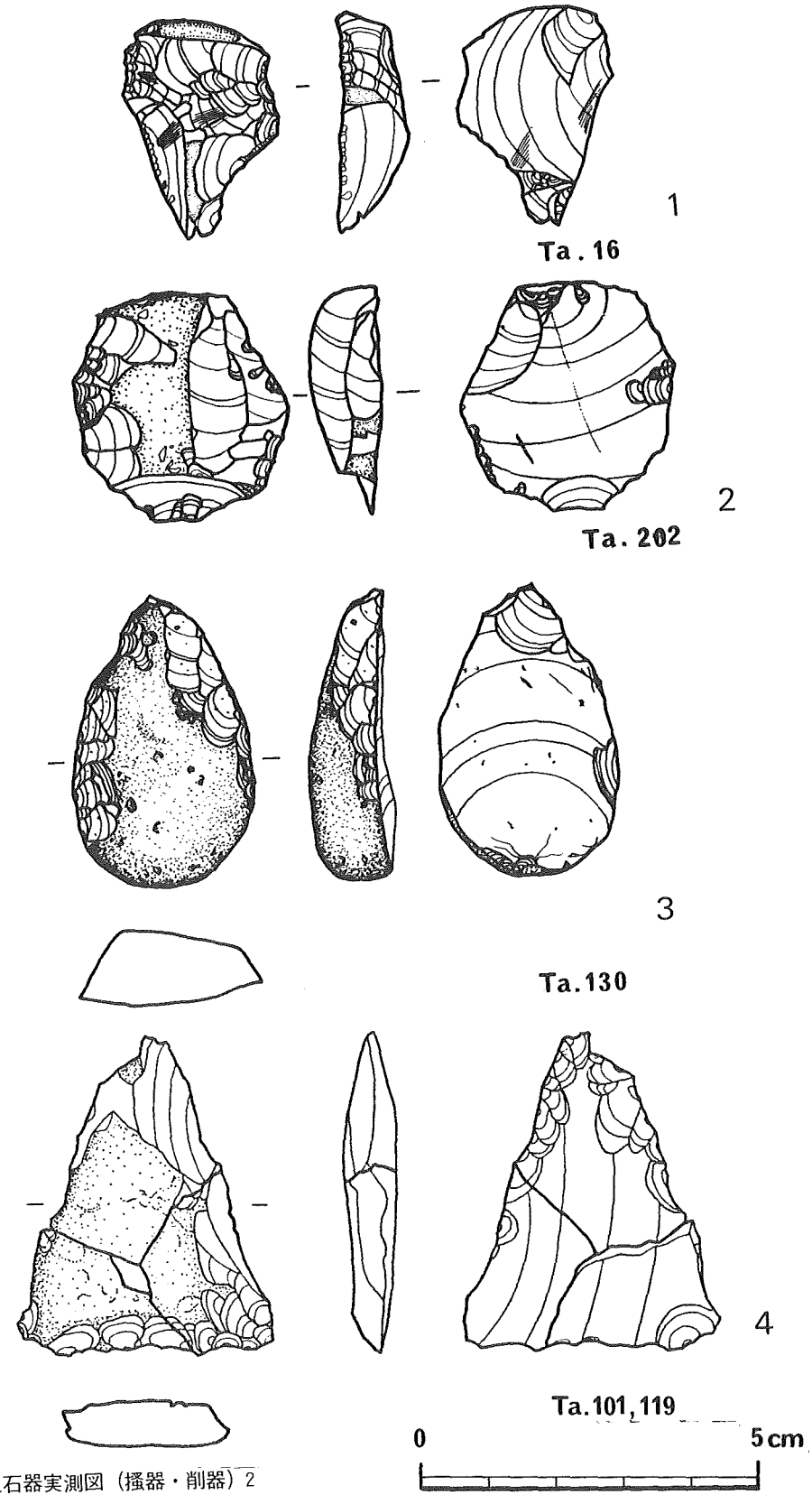
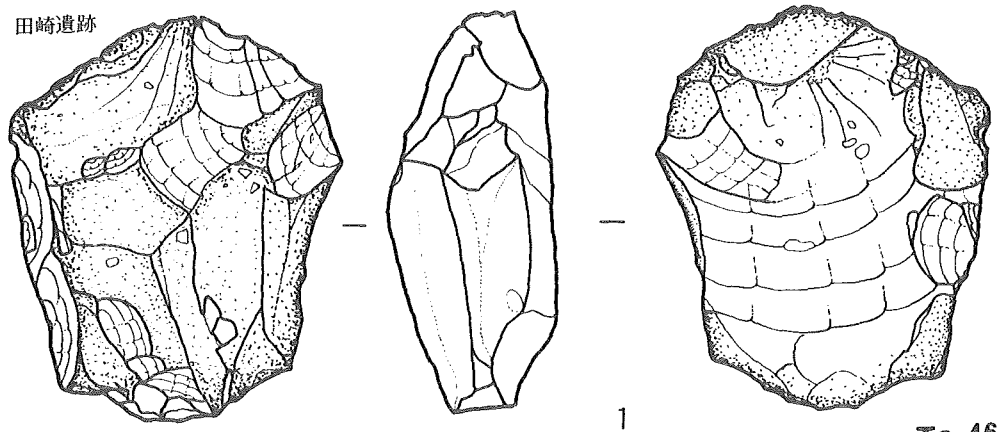
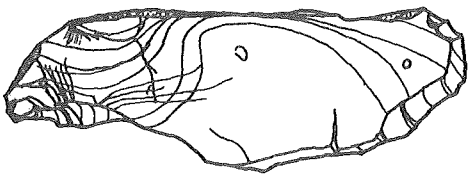


Fig. 29　出土石器実測図（掻器・削器）2



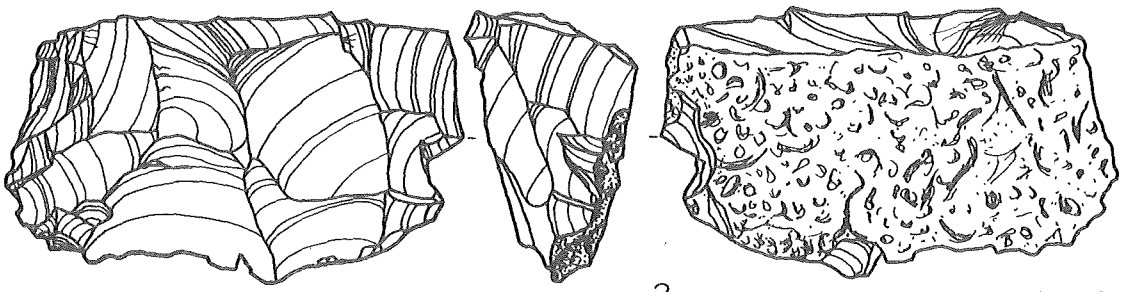
1

Ta.46



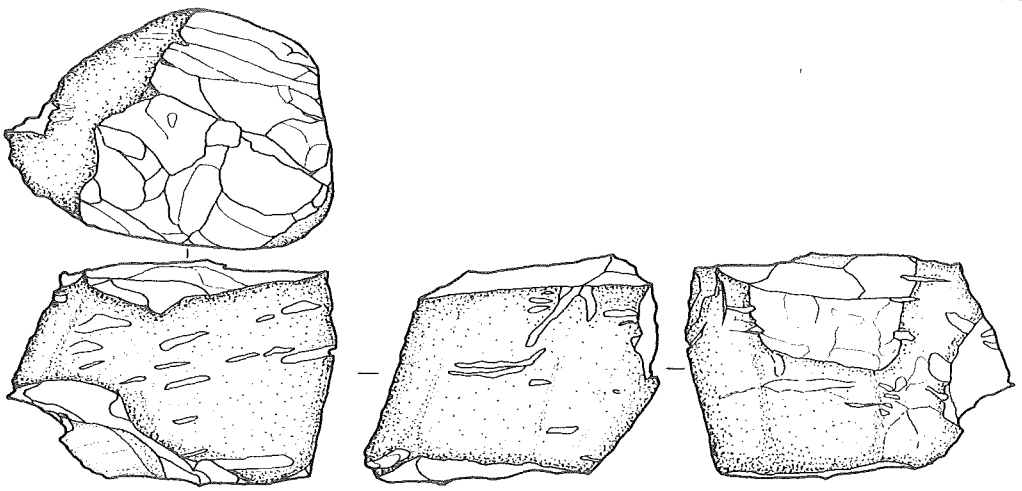
0 5cm

I



2

Ta.1



Ta.19

3

0 5cm

Fig. 30 出土石器実測図（石核）I

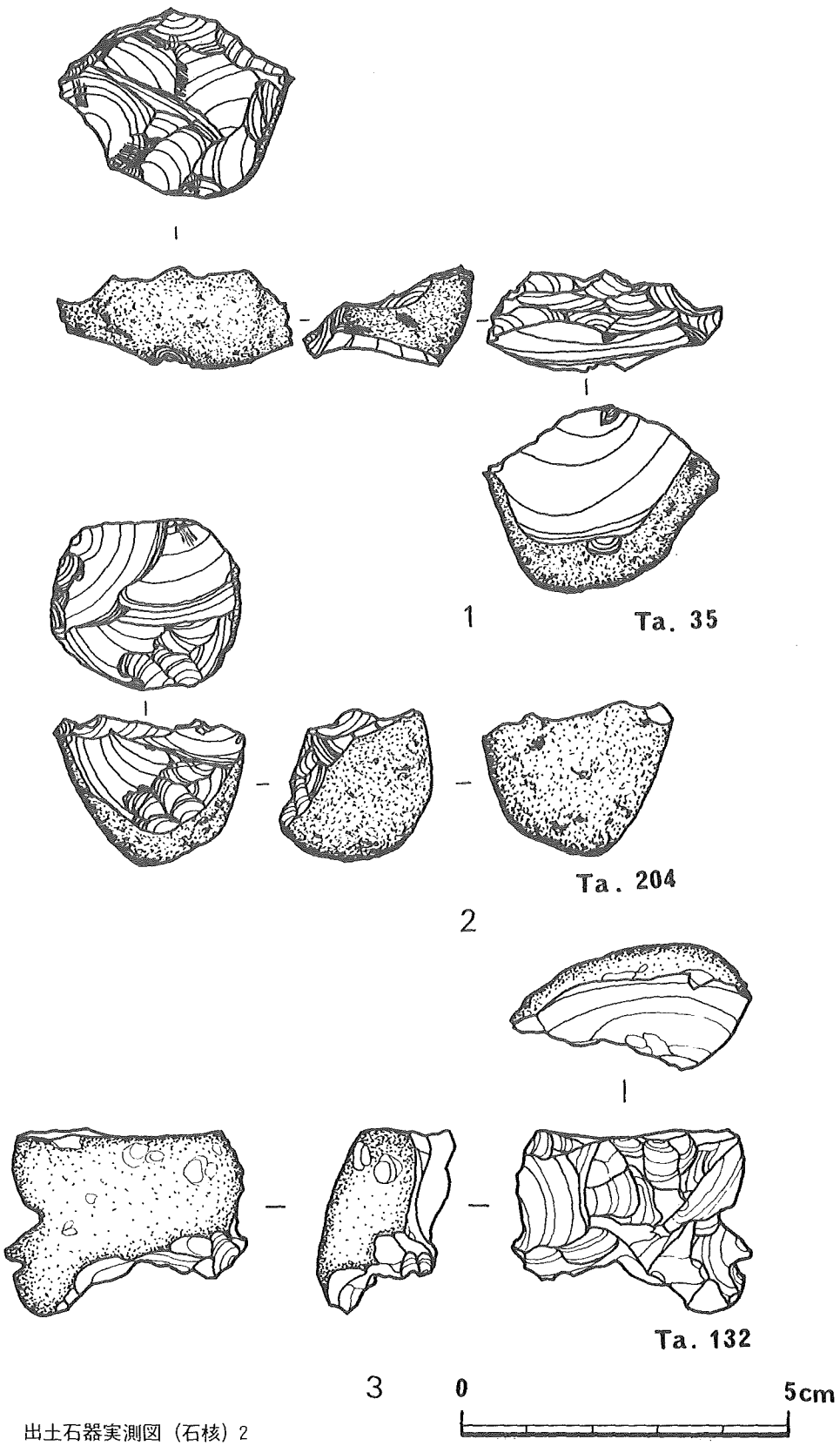


Fig. 31　出土石器実測図（石核）2

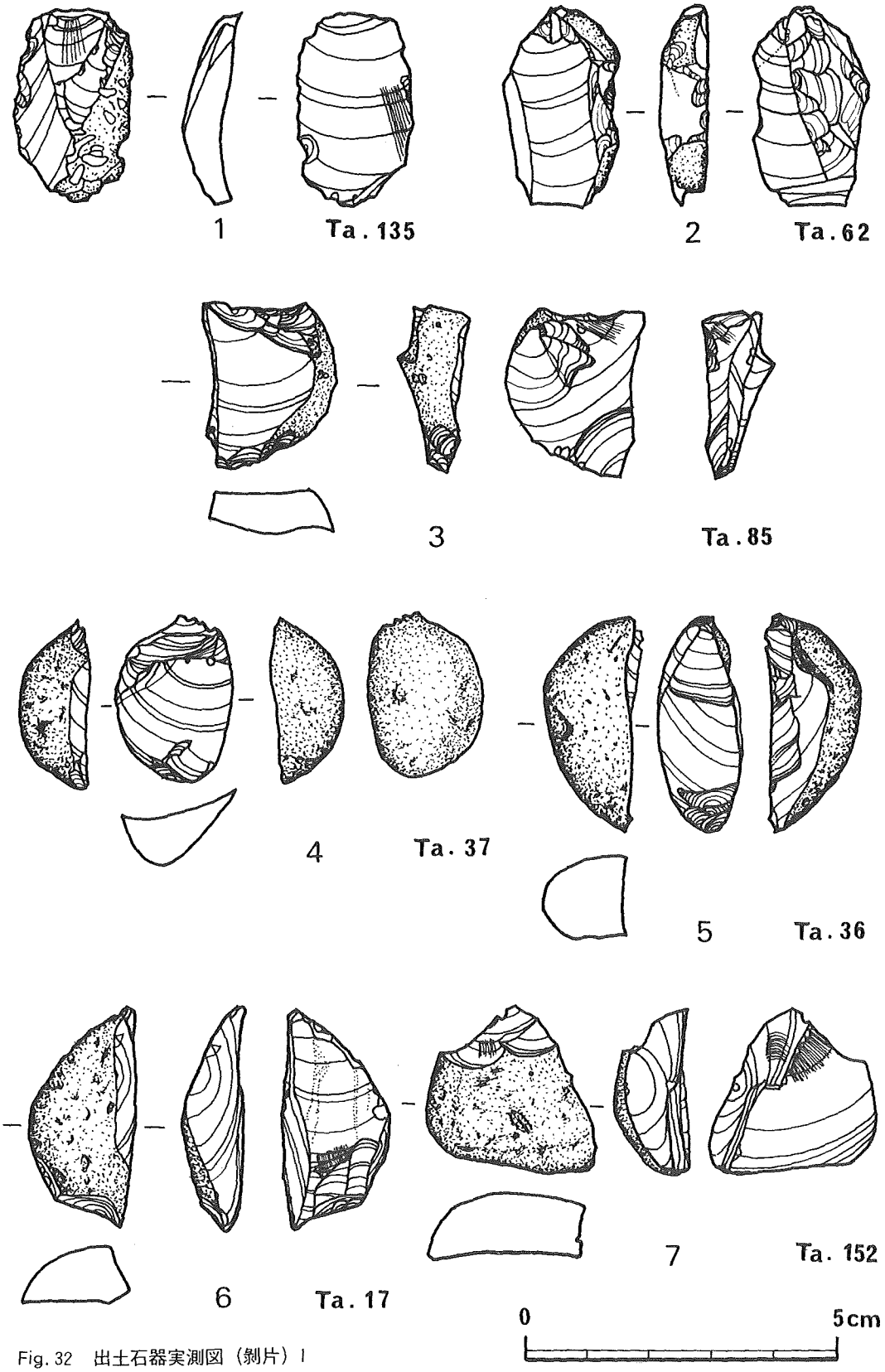


Fig. 32　出土石器実測図（剝片）1

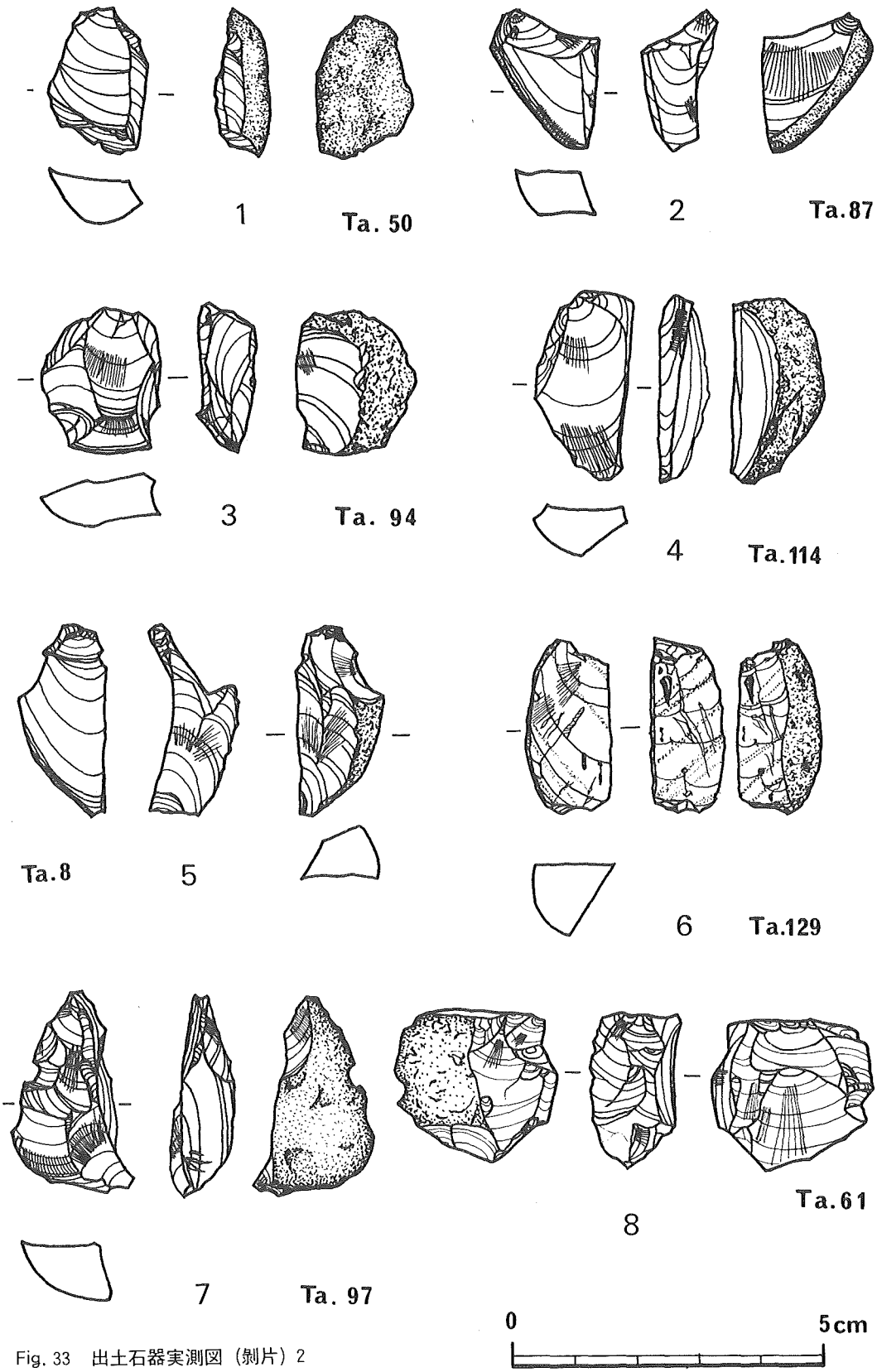
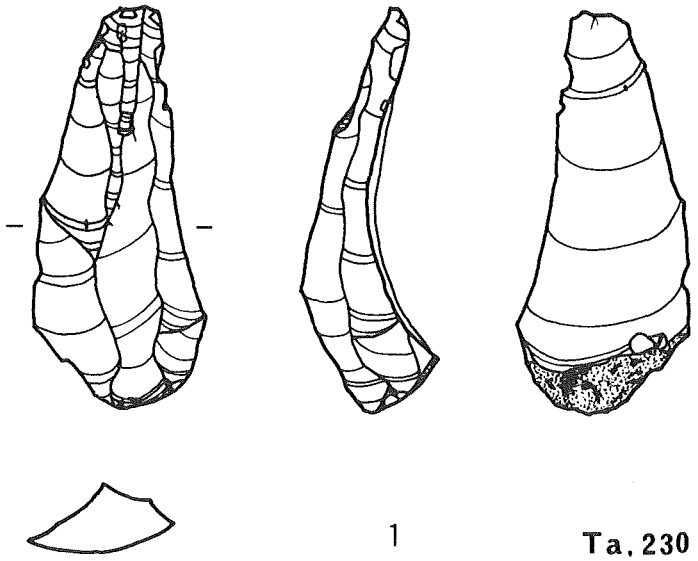


Fig. 33　出土石器実測図（剝片）2



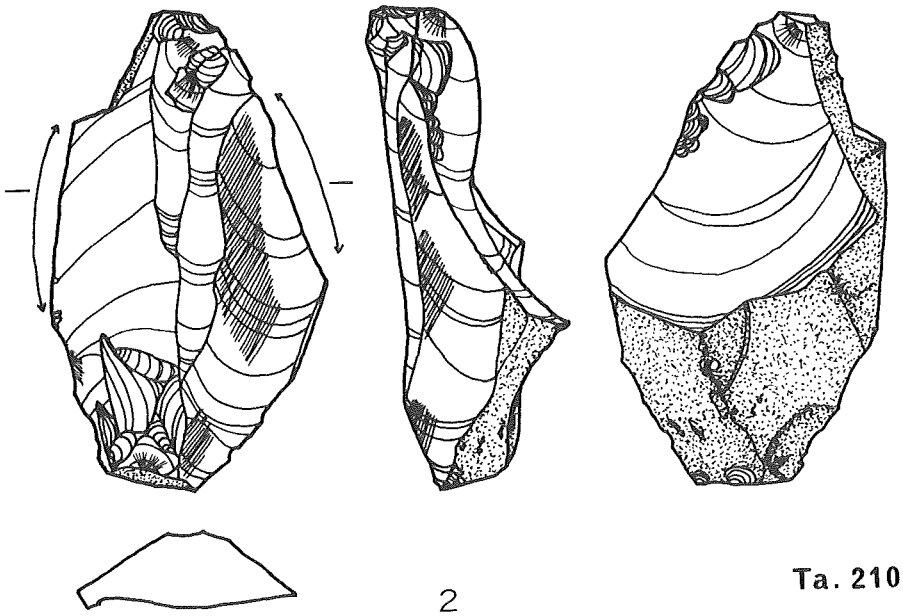


Fig. 34　出土石器実測図（剥片）3

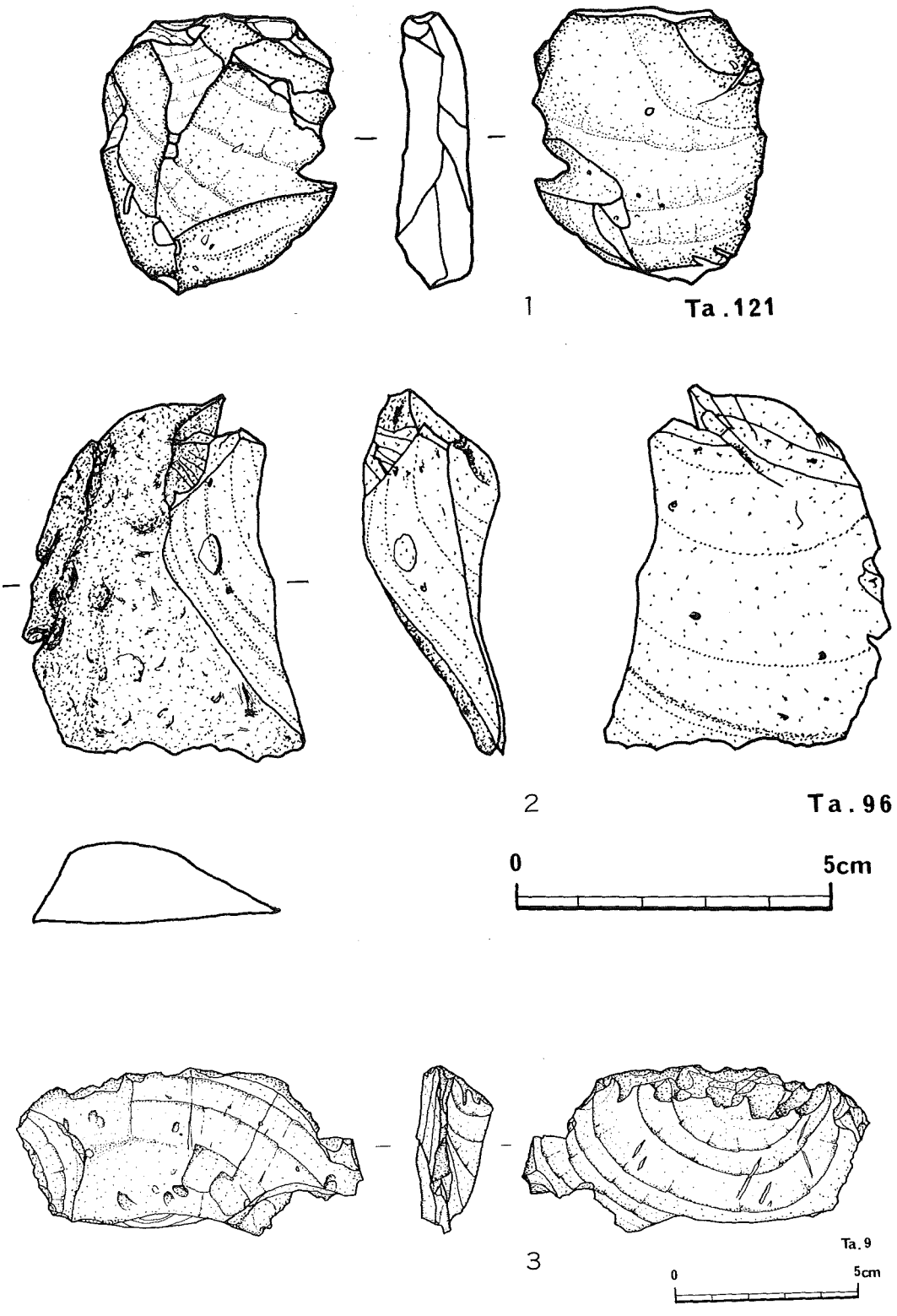


Fig. 35　出土石器実測図（剥片）4

なされておらず未製品と考えられる。Ta. 1はある程度のフレイキング後，逆の方向に背面からの加撃で平坦面をつくり打面を作出した資料である。

小形の石核として明確なものは3例（Fig. 31）あるが，黒耀石の小円礫を母材として利用し粗割りするという共通点をもつ。Ta. 204は黒耀石の小円礫を半載した後，調整剥離を行っている。

⑧ **剥片**（Fig. 32～35, PL. 8・9）

Fig. 32・33は黒燿石小円礫の剥片である。これらは半載品もしくは½載の資料である。これらの一群は原材と供給と相俟って作出される石器が限定されるのではないだろうか。

Ta. 230（Fig. 34-1）は比較的形が整った縦長の剥片で遺存する同一方向からの数条のフルーティングは完成された技術を感じさせる資料である。そういった点では Ta. 210にも同様のことがいえる。この資料は唯一例の黒耀石の大形剥片であり，打面を上・下2方向に持つ。両エッジ部に使用痕とみられる細かい刃こぼれが観察される。その他に安山岩の大形剥片も多量に出土している（Fig. 35）。

c　接合資料（Fig. 38～45, PL. 10～15）

本遺跡から出土した石器数の総数は1,920点あり，そのうち31点が接合例である（Fig. 37）。図中の個体数と合致しないのは資料をとりあげる際，同地点での同時出土は一括して一つの番号にしたためと砕片数は第Ⅱ層として一括したためによる。

Aトレンチに1例あるが他はすべてBトレンチに存し，その平面分布はあたかも粗の状態を呈しているようであるが，前節で述べた偏在性は有している。垂直分布も同様に標高9.00mの位置に集中している。ここに挙げた接合資料の他に，明らかに同一個体同志の資料でありながら資料不足のためかそれとも他の理由によるものか接合しない（できない）資料も数点あり，時機をみて検討したいと考えている。

これらの接合資料は，接合すると11例になる。

A――石核と接合する資料（個々の剥片同志の接合でも最終的に石核に接合する資料も含む）

B――剥片同志の接合で石核を伴わない資料（単なる剥片の折断，目的的剥片の接合を含む）

C――製品化されたものの接合資料（A・Bとは趣を異にし，また他遺跡の接合例のように製品と剥片，あるいは石核との接合という意味合いではなく，製品そのものの破砕による接合を指している。）

の3類に区分でき，その数量はA2例，B6例，C1例となる。個々の資料についての観察概要は下記のとおりである。本来の順序であれば剝ぎ取っていく順に記述せねばならないのであるが，便宜上逆の順序で説明することもありうる。

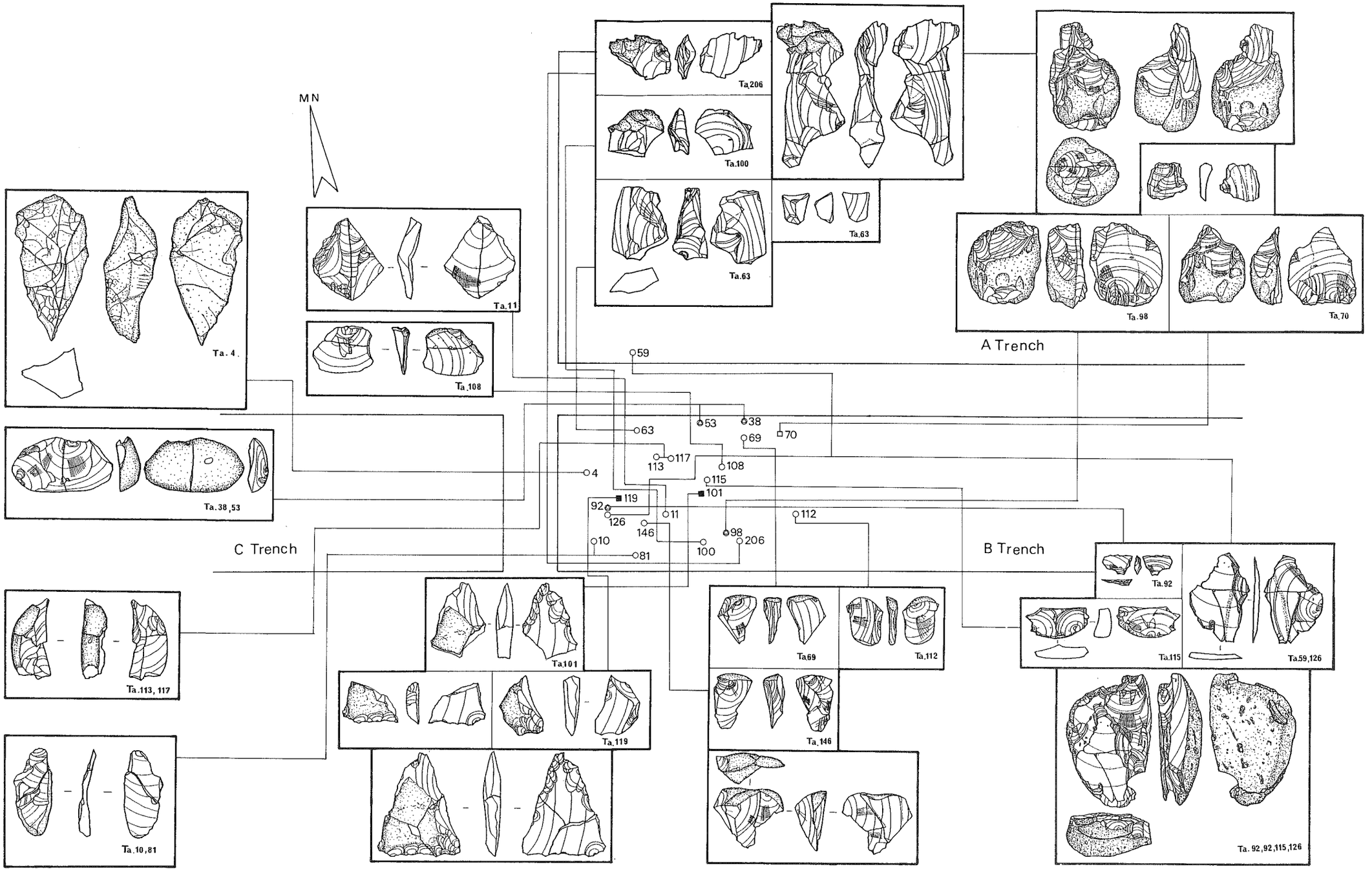


Fig. 36　接合資料Dot-Map I

接合資料Ⅰ（Fig. 38・39, PL. 10）

〔接合構成資料〕石核1（Ta. 92），剥片4（Ta. 59, 126, 126, 115）砕片1（Ta. 92）

〔接合状況〕　本来はひとつの剥片として石核から剥離されており，剥離後折断されたものである。石核がもつ平坦面に直交する打点から剥ぎ取られ横剥ぎ状を呈する。Ta. 115と近似した打点である。砕片は石核とTa. 59に接合するがTa. 115とには少しばかりの間隙がある。石核は拳大の黒耀石の円礫を素材とし，剥片剥離作業は1面においてのみ見られ，その裏面には自然面を残す。円礫を粗割りにして平坦面を作出し，剥片剥離作業工程に入っている。側面観は大剥離による平坦面は見られるが，剥離作業工程部は不詳である。打点は上下2面に少なくとも4ケ所は考えられる。これらの資料の他に数点の同一個体とみられる資料が出土しているが，現在は接合不可能である。

接合資料Ⅱ（Fig. 40, PL. 11）

〔接合構成資料〕素材2（Ta. 70・98），剥片1（Ta. B-17）

〔接合状況〕　鶏卵大の黒耀石の小円礫の一端に剥片剥離作業をもつ。まず適当な面に打面をつくり出し打面の調整を行い剥片剥離作業を行う。次にある程度の作業後，その剥離面を打面として剥片剥離作業を行う。要するに特定の面を打撃面として設定するのではなく，平坦面を打撃面として利用しているのである。3面の打撃面が確認できる。剥片剥離作業面と反対の方向からの打撃により半載しているため素材として取り扱ったが，石核としても良いと思われる。

接合資料Ⅲ（Fig. 41, PL. 12）

〔接合構成資料〕掻器の3分割資料（Ta. 101, 119, B-16）

〔接合状況〕　資料は掻器が3分割されたものが接合した例で，中央部の加撃点部の砕片が一部不足しているがほぼ完形である。いかなる理由により破砕されたかはドット・マップから読み取ることは不可能であるが，製作中の出来ごととは考えられず，使用中の破砕後破棄されたものと解釈する。灰色の黒耀石で第Ⅱ層出土である。

接合資料Ⅳ（Fig. 42, PL. 13）

〔接合構成資料〕剥片3（Ta. 63, 100, 206），砕片1（Ta. 63）

〔接合状況〕　砕片（63）と剥片（63, 100）は本来同一剥片で折断している。Ta. 100とTa. 206は母核の同一打撃面から剥離された剥片で，一部に自然面を有する。比較的大形の母核であろう。

接合資料Ⅴ（Fig. 43, PL. 12）

〔接合構成資料〕剥片3（Ta. 69, 112, 146）

〔接合状況〕黒耀石小円礫を母核とし，打点はTa. 146を中心として左右斜めからで，刺身状に剝離している。3片とも自然面を残す。分布範囲が三角形を呈す状態で，レベルもほぼ同位で出土している。僅か1例のパターンである。

接合資料Ⅵ・Ⅶ（Fig. 44・45, PL. 14・15）

〔接合構成資料〕剝片12（Ta. 10＋81, 113＋117, 38＋53, 108＋B-18, 11＋11, 4＋4）

〔接合状況〕　いずれも折損剝片の接合例である。これらの中で選別して記述することにする。Ta. 38, 53の接合例は黒耀石の小円礫を粗割りした後，2方向からの調整剝離作業を行い，何らかの道具製作を意図していたものと考えられる。裏面に自然面を残す。Ta. 11は調整剝離後側縁に2次加工を施している。掻器の一部とも考えられる。Ta. 4は他の資料と2・3相違点をもつ。まず第1に安山岩をその素材としていること，第2に側縁から急な角度をもって立ちあがり頂点に達する。断面はぶ厚い三角形を呈し一端は尖る。全体的な形態は尖頭状を呈し側縁部の2次加工と相俟って見まがう程である。中央部に加撃され折断している。

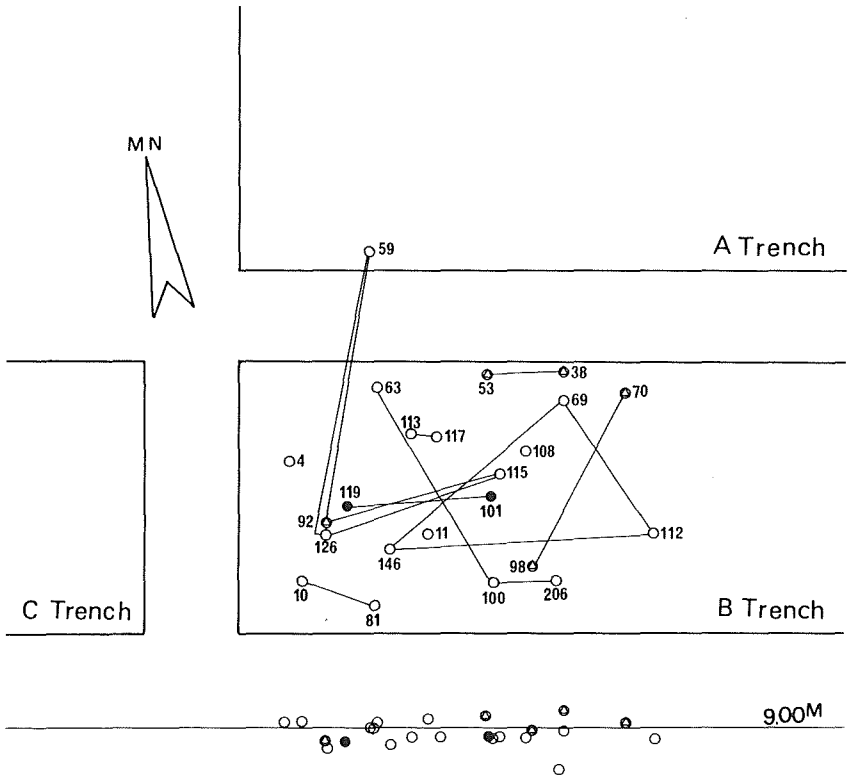
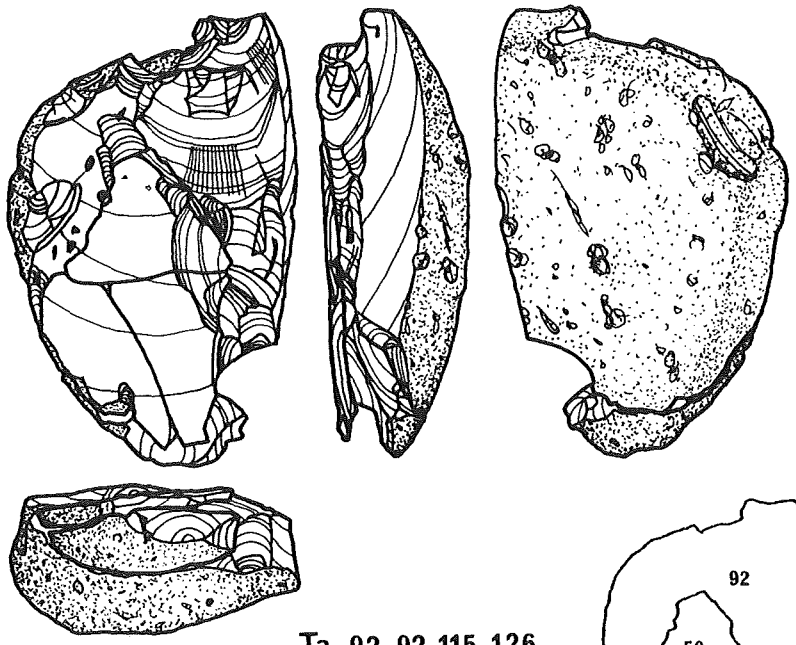
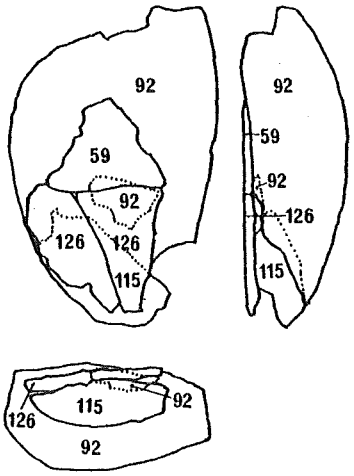


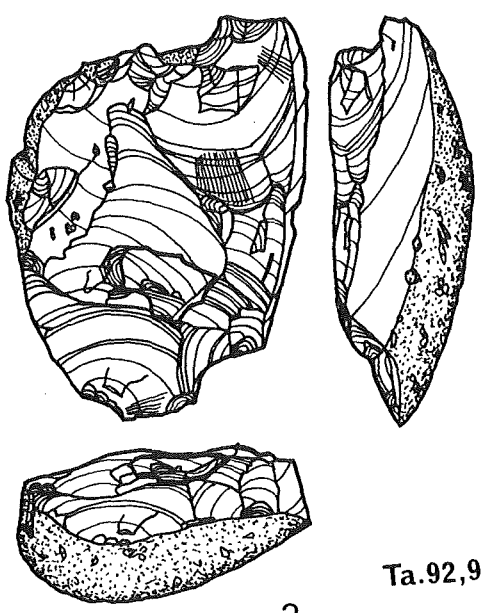
Fig. 37　接合資料Dot-Map 2



Ta. 92, 92,115,126

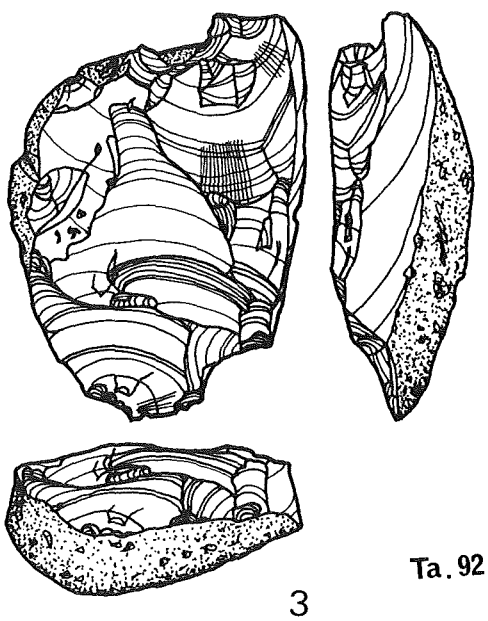
1





Ta.92,92

2



Ta.92

3

0 5cm

Fig. 38 接合資料Ⅰ(a)

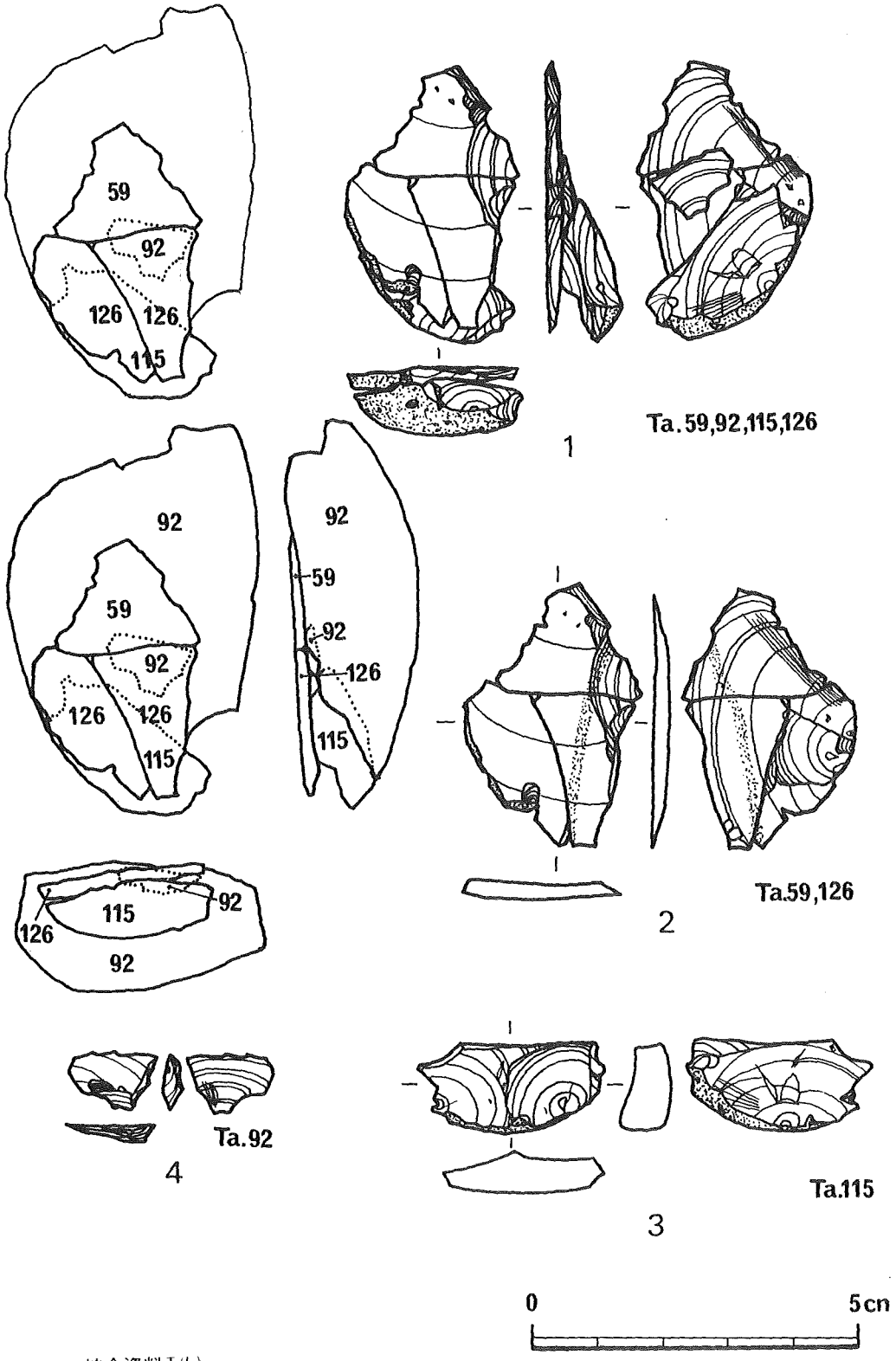


Fig. 39　接合資料Ⅰ(b)

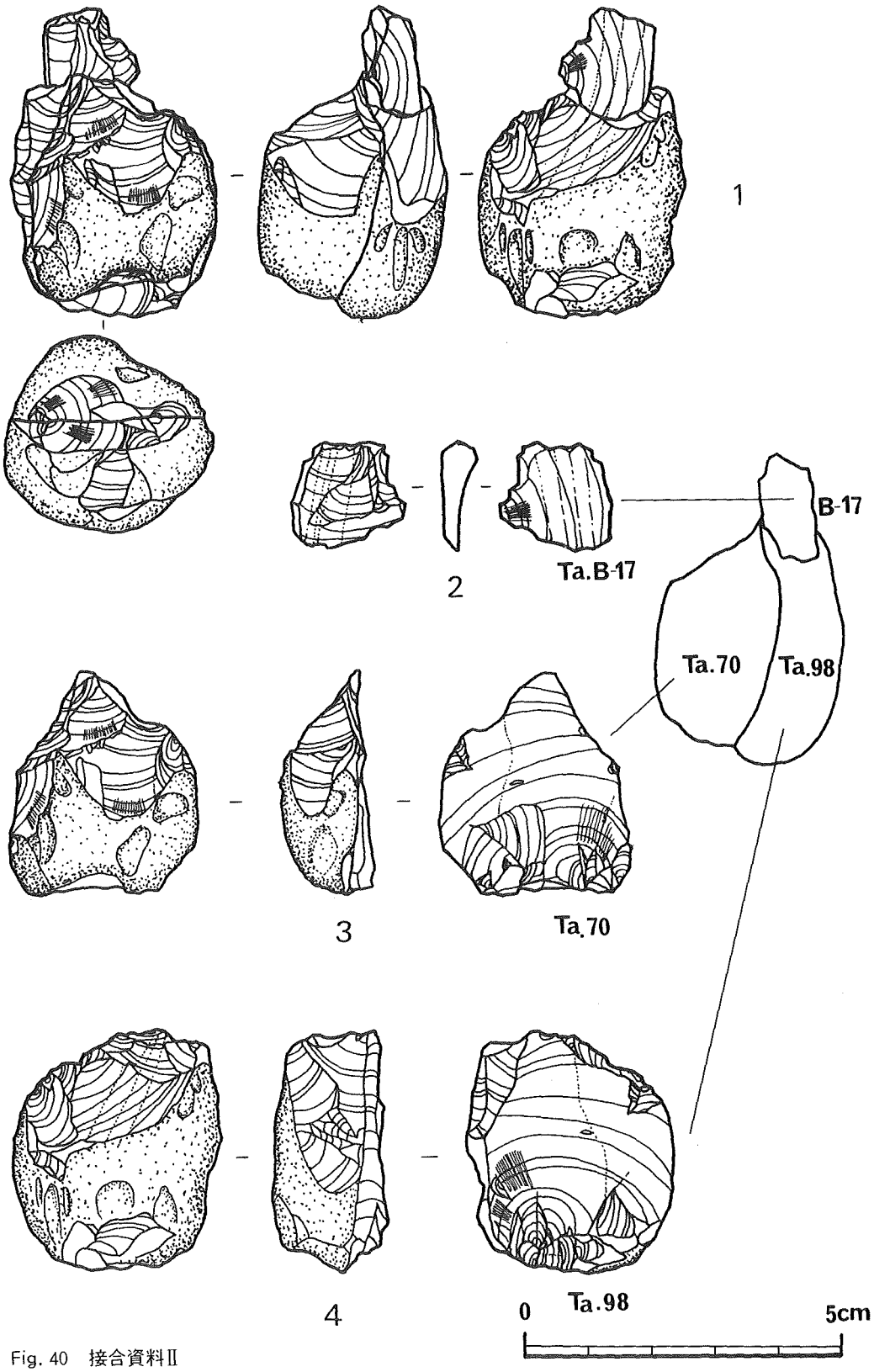


Fig. 40　接合資料Ⅱ

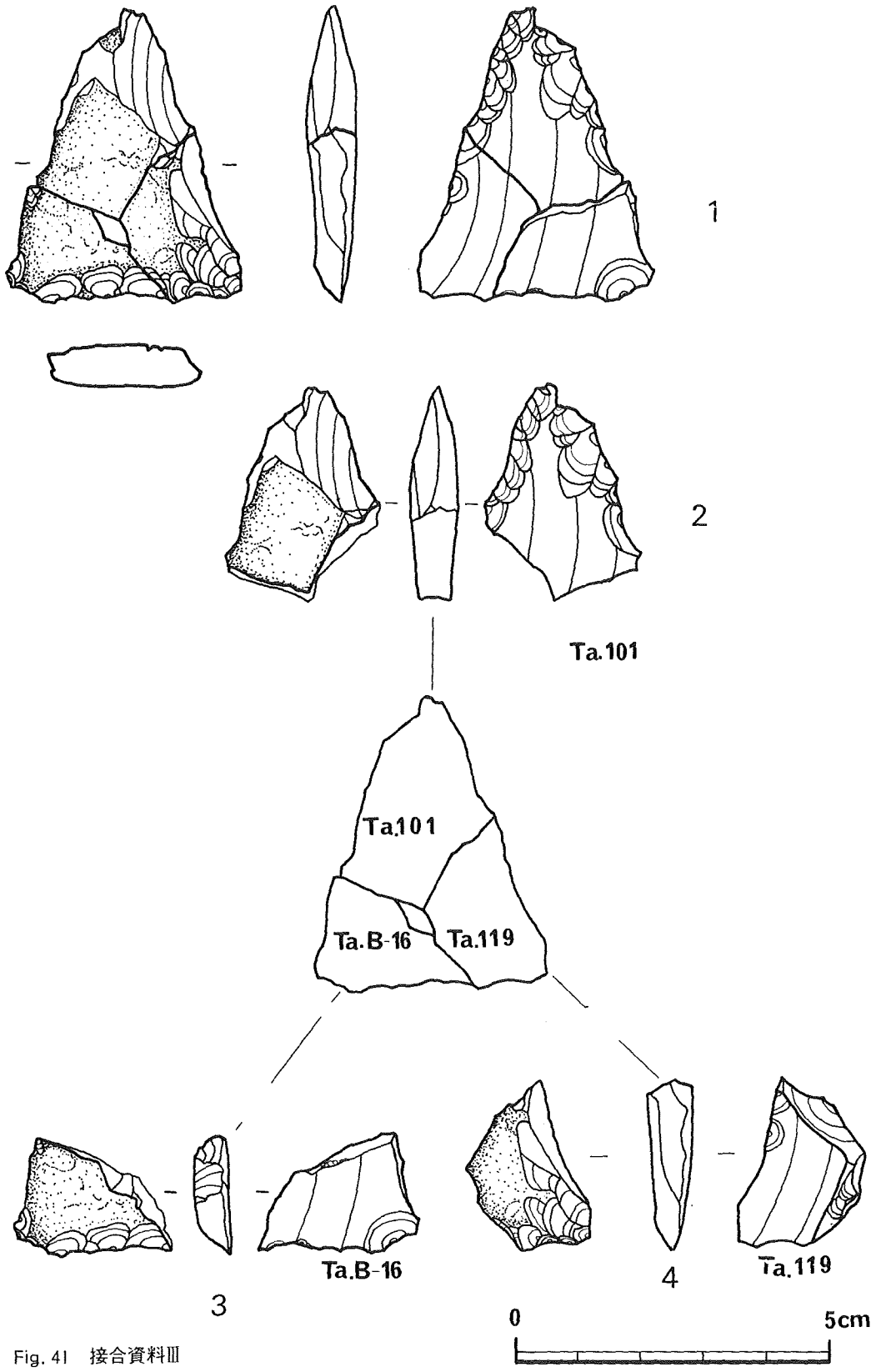


Fig. 41　接合資料Ⅲ

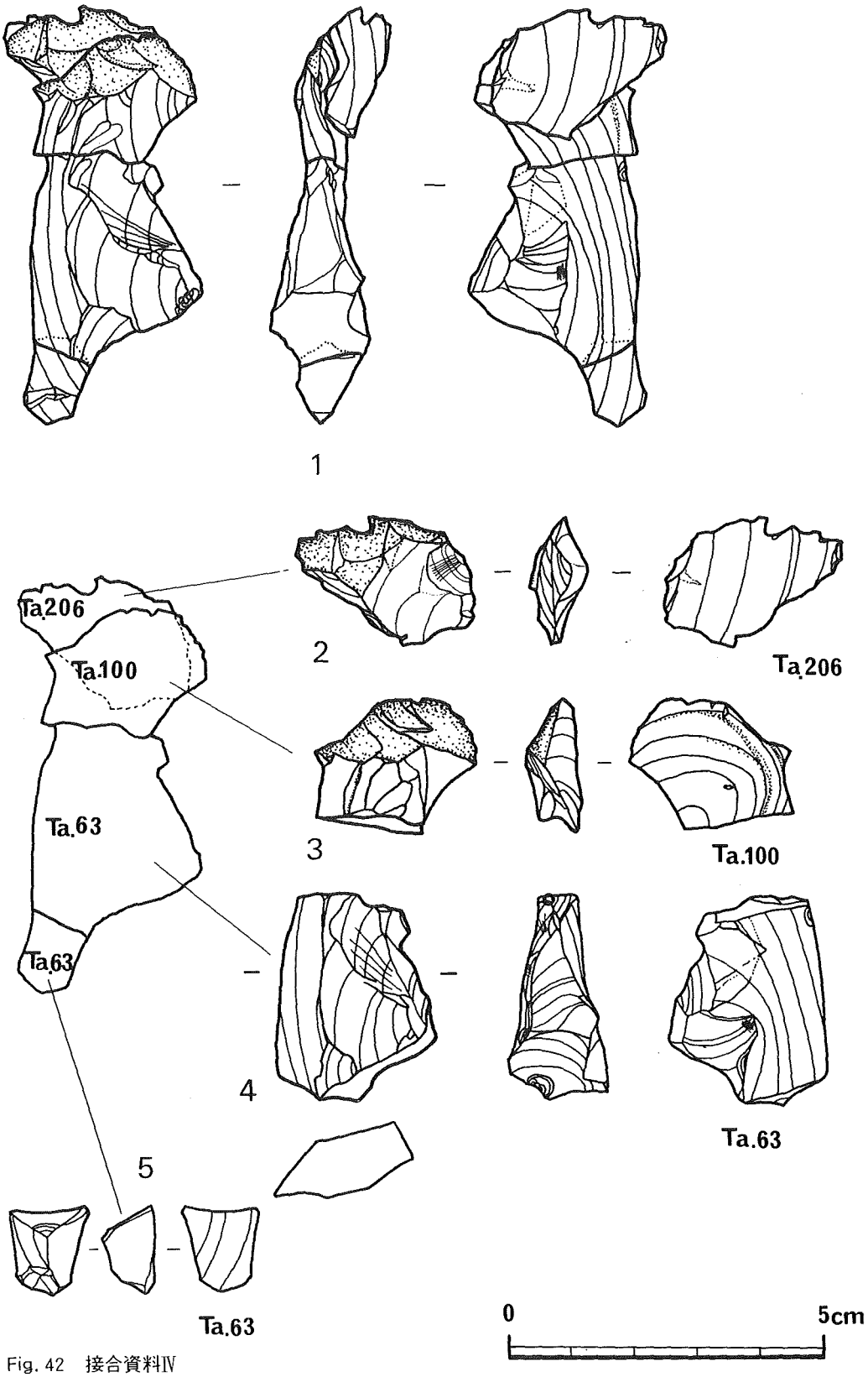
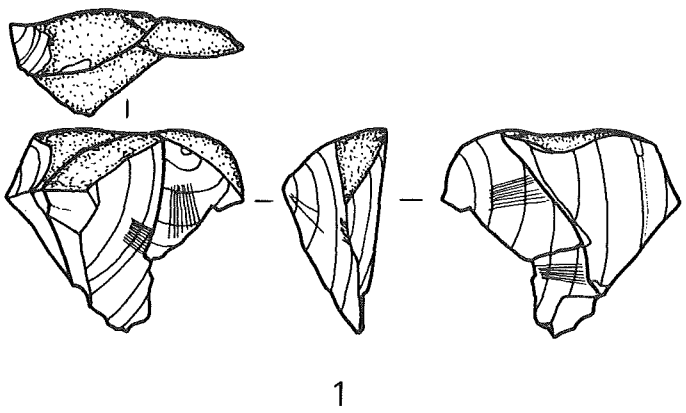
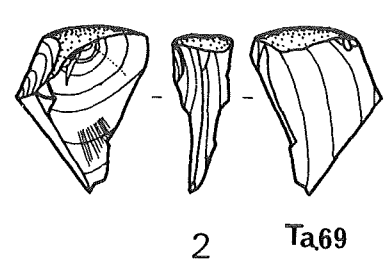


Fig. 42　接合資料Ⅳ

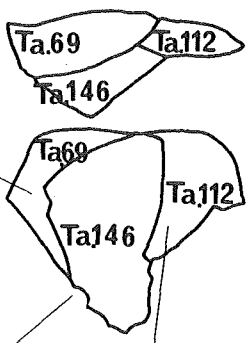


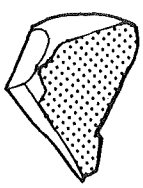
1

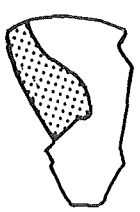


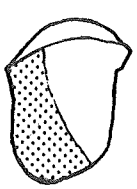
2

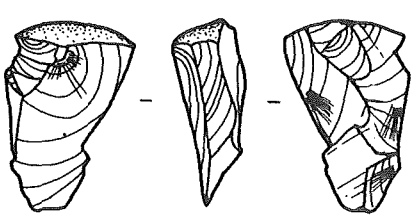
Ta.69





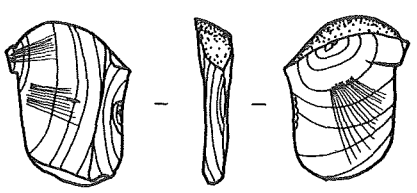






3

Ta.146



4

Ta.112

0 5cm

Fig. 43 接合資料V

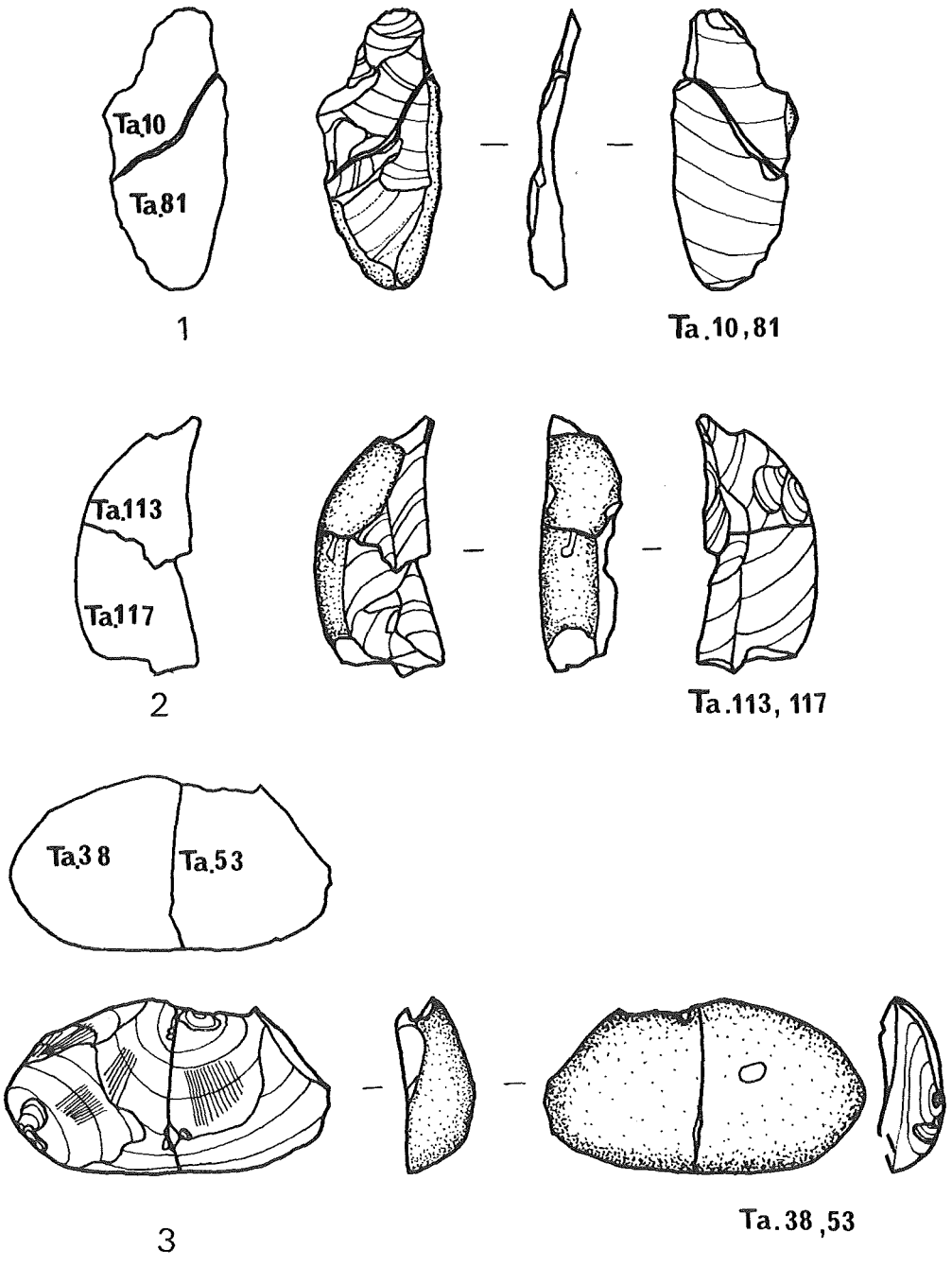

Ta.10
Ta.81
1
Ta.10,81
Ta.113
Ta.117
2
Ta.113, 117
Ta.38
Ta.53
3
Ta.38,53
0
5cm

Fig. 44　接合資料Ⅵ

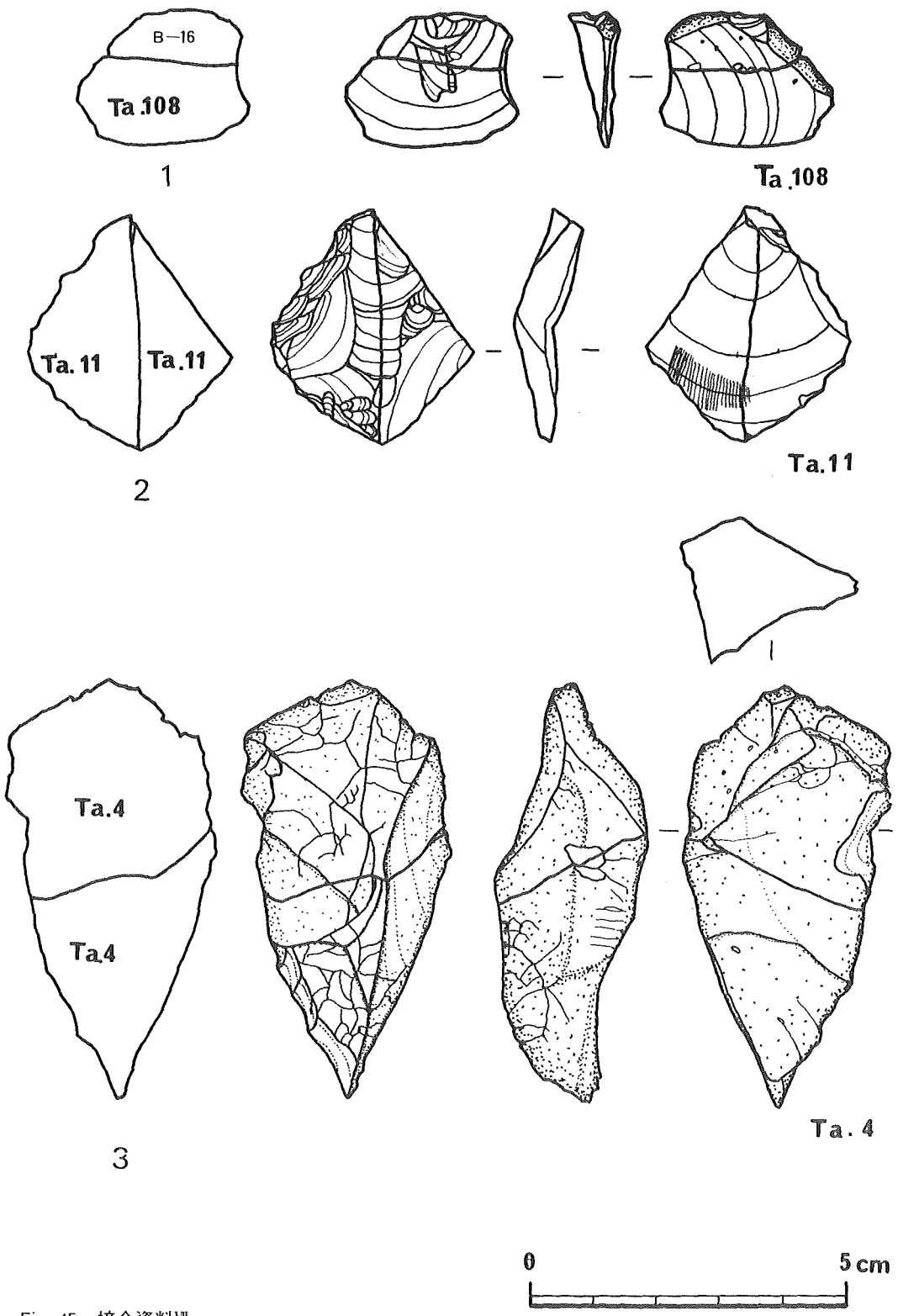


Fig. 45　接合資料Ⅶ

Ⅲ 考 察

田崎遺跡の石器文化

本遺跡の発掘調査は僅かの期間で，しかも狭い範囲の調査面積であったが，そこから得られた資料は多く大変貴重なものであると同時に多くの問題点をも提起している。遺物の大半以上がひとつの包含層から出土しており，単純遺跡として理解できると思われる。細片であるが，土器片２点の出土をみるが今回は石器群に論点をしぼり検討を加えることとしたい。

〔石器の組成〕　尖頭器・細石刃・細石核・彫器・掻器・削器・石鏃・石核・剝片・砕片と多種多様であり，先土器時代終末期の様相を呈している。

〔利用石材〕　黒耀石にその大半以上を依存しており，次いで安山岩の利用度が高く他はない。使用されたかどうかは別にして島内に産する瑪瑙の存在もある。石材供給地としてその地理的背景からして，松浦市星鹿半島，伊万里市腰岳を枚挙できよう。島内にも黒耀石の露頭地があるらしいが未確認である。概して星鹿半島産の黒耀石は小形の円礫で，それを核とする石器群は必然的に小形にならざるを得ない。

〔特徴的な石器〕　種々あるがここでは石鏃をとりあげて検討する。石鏃は最多の出土量を誇り，小形三角鏃に区分され普遍的位置を占めているといえる。定形品だけについて各部位のデータを計測するとFig. 46のとおりとなる。底辺とそれに直交する先端部からの線を高さとし，厚さは器形の中央部の一番厚い部分を計測してある。底辺と高さの比率を求めるとそのいずれもが底辺より高い数値を示す。左右を対称的に作出した背の高い二等辺三角形が多く大きさは区区であるが，グラフに見るとおり高さや底辺に数値のバラつきはあっても，重量と厚さの数値のバラつきはなく，それぞれ一定の数値に集中する傾向を示す。このことはあくまで形態にとらわれることなしに維持されてゆく普遍的な一般性として存続するものであろう。切断された資料が多く，形態的特徴・計測値等近似し，ある者は切断後調整を施し再生したと考えられ単に製作中あるいは使用中に折損し破棄されたとするだけでなく，当初から一定の形状に作出するための一工程とも考えられ興味深い。

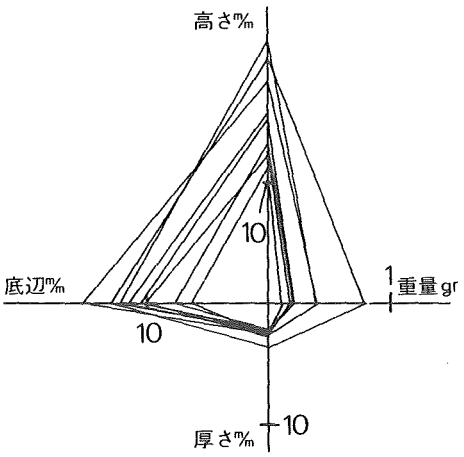


Fig. 46　石鏃部位対比表

〔遺物の偏在性からみた遺跡の性格〕　本遺跡における遺物の遍在性についてはさきに触れたところであるが，再度検討を加え本遺跡性格について考えてみる。

遺物の遺存状況についてはＢトレンチ南西隅に約2.5mくらいの範囲に偏在する。これは包含層がレンズ状に堆積しており，自然地形の凹地に遺物が集中していると同時に，剝片

や砕片の出土量や接合例等をみると１地点において剥片剥離作業が行われたことを示している。その際の製品の有無・多少は決して問題にならない。製品化されたものは製作者の意志によって自由に動き回るからである。剥片剥離作業が行われ，目的的剥片が作出され，さらに完成された道具がつくられた時，残存しているそれらは当然のことながら偏在性を結果として示している。しかるに石器製作址か否かの問題は単に剥片や砕片が多いから少ないかといった区別だだけで良いとは思われない。それらもひとつの目安にはなるだろう。ある程度これら資料が集中偏在することと相俟って，それら資料同士，あるいは他の資料との有機的連繋が必要な条件となろう。すなわち接合という後世の，しかも時間を逆にたどるという行為によってその資料のもつ有機的連繋が復原できる。そういう意味ではひとつのパターンをもって，あるいは石器の組成をもって剥片剥離技術まで検討できる遺跡となりうる可能性をもつ。

最後に，本遺跡の調査から約10年が過ぎようとしている今になってやっと報告の段になりましたが，何分にもその間幾度となく引越しをしたせいで，土層図と遺物が約40点行方不明になってしまいました。加えて，諸事情により遺物偏在区域の畦の部分が未調査として残っております。幸なことに現地はまだ水田のまま保存されておりますので，いつの機会にかより完全に近い形で報告出来ればと考えております。

付録

九州地方出土の尖頭器集成

長崎県

No.	遺跡名	所在地	立地	層位	形態	石材	素材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重量	備考
1	百花台	長崎県南高来郡国見町多比良		4層－第Ⅱ文化層	ポイント状	安山岩	縦長	6.85	2.7	0.9		(肉)台形石器（主体）・小形石刃・削器・石核・コア・スクレイパー・抉入削器・U-Flake
2	福井	〃 北松浦郡吉井町	洞穴	4層	尖頭器	サヌカイト		6.5	4.0	1.65		(肉)細石核・掻器・削器
3	堂崎	〃 西彼杵郡長与町岡	微高舌状の小岬		尖頭器	サヌカイト		9.9	3.4	1.2		(肉)細石核・細石刃・ナイフ形石器・台形様石器・掻器
4	原ノ辻	〃 壱岐郡石田町西触	標高15m微高地	4層－褐色粘土層	剥片尖頭器	黒曜石	横長剥片	4.3	1.7	0.9		
							縦長剥片	4.8	2.6	1.1		第1試掘坑
							横長剥片	(5.6)	1.75	0.85		
				（表採）	尖頭器	玄武岩質	〃	(10.4)	4.5	2.45		
5	中山	〃 平戸市		3～4層	剥片尖頭器		縦長剥片	(9.3)	1.9	1.3		
					〃		〃	8.4	2.9	1.15		
					〃		〃	6.5	2.15	1.1		
					〃		〃	6.1	2.6	0.8		
					〃		〃	(3.3)	2.0	0.6		
					〃		〃	4.2	1.7	0.5		
					〃		〃	4.5	1.6	0.9		
					〃		〃	(6.0)	3.5	1.4		
					〃		〃	6.6	2.1	0.6		
6	日ノ岳	〃 北松浦郡田平町野田免	丘陵鞍部	（表採）	尖頭状	黒曜石	横剥剥片	4.6	2.0	1.0		
						〃	〃	4.2	1.9	1.1		
						〃	〃	4.9	1.8	1.1		
						〃	〃	4.5	1.65	1.2		
						〃	〃	4.5	1.8	0.7		
						〃	〃	4.4	1.6	0.8		
						〃	〃	3.7	2.1	1.1		
						〃	〃	3.7	1.7	0.85		
						〃	〃	4.3	1.8	0.9		
						〃	横長剥片	4.0	2.2	1.0		
						ハリ質安山岩	横剥剥片	4.6	2.2	0.8		
6	日ノ岳	〃 〃 〃 〃		（表採）	尖頭状		横剥剥片	5.3	2.5	0.8		
						黒曜石	〃	4.0	1.5	1.0		翼状
7	金坡	〃 〃 吉井町福井	標高140m急傾斜面	（表採）	尖頭器	サヌカイト	横広剥片	11.2	6.65	1.9		遺跡周辺にサヌカイトの原石露頭－原産地か製作跡 他に不定形剥片・石核
8	刀ノ越	〃 〃 刀ノ越										
9	外輪	〃 福江市大津地区			尖頭器	黒曜石	横剥剥片	4.5	2.1	1.4		
10	豆坂	〃 〃			〃	〃	〃	6.1	2.1	1.4		
11	橋	〃 〃			〃	〃	〃	5.6	1.5	1.1		
12	福江	〃 〃			〃	〃	〃	(4.1)	1.8	1.0		
13	平床B	〃 長崎市牧島町	標高41～50m丘陵くびれ部		尖頭器	安山岩		3.3	2.19	0.9		片側からの調整加工
						黒曜石		3.08	1.65	0.68		先端部は尖っていない
14	峰ノ原	〃 諫早市										写真のみ

佐賀県

1	生石	佐賀県東松浦郡肥前町大浦	標高211m上場台地西南端	2層	粗製有茎尖頭器	黒曜石		4.5	2.9	0.9		左右対称形・(肉)台形が集中
				〃	〃	角閃石安山岩						
				3層	〃	黒曜石・安山岩						
				4層	〃							
				2層	剥片尖頭器		小形の刃器					
				〃	槍先形 〃	サヌカイト	大形横剥片					
2	茶園原西畑	佐賀県多久市多久町	標高30～33m		サヌカイト			22.1	7.05	2.55		他に４００余点
	第Ⅰ地点		山麓裾野		〃			20.4	4.05	1.95		(肉)フレイク・チップ・コア・スクレイパー
					〃			21.3	5.7	1.8		
					〃			19.1	6.3	2.1		
					〃			24.75	5.7	1.8		
					〃			31.8	7.2	2.7		

3	第Ⅰ地点	佐賀県多久市多久町	第Ⅰ地点の東20m		サヌカイト			20.7	3.9	1.65		他に175点
					〃			(18.8)	5.4	1.95		(共)コア・フレイク・チップ・礫
					〃			15.5	5.25	1.65		
					〃							
					〃			(15.3)	3.9	1.2		
					〃			(18.2)	3.6	1.8		
4	茶園原・東ノ原	〃	西畑Ⅱの西120m		サヌカイト			(8.6)	3.6	1.4		他に18点
					〃			(9.8)	2.9	1.2		(共)フレイク・チップ
					〃			8.8	3.3	2.6		
					〃							
5	茶園原・茶園Ⅰ	〃	西畑Ⅰの東南60m		サヌカイト			24.85	5.95	2.3		他に10点
					〃							(共)フレイク・チップ
					〃							
					〃			(11.2)	4.9	1.75		
6	経ノ峯第Ⅰ次調査Ⅰ区	〃 多久市北多久町大字小侍	標高38～41m丘陵		サヌカイト			3.2	2.4	0.8		
					〃			3.8	2.6	0.9		
	経ノ峯第Ⅰ次調査	〃 〃 〃 〃				サヌカイト		4.5	2.5	1.0		
						〃		4.2	2.6	1.15		
	第Ⅰ次調査	〃 〃 〃 〃	標高41～43m丘陵	2層・黄褐色土	尖頭器	サヌカイト		4.9	3.7	1.2		
					〃	〃		6.5	3.9	1.4		
					〃	〃		10.9	4.8	1.9		

熊本県

1	下城Ⅰ	熊本県阿蘇郡小国町大字下城	標高400m丘陵北端	4層	三稜尖頭器	黒曜石	横長	4.0	1.9	1.6	11.37	未製品 (共)ナイフ形石器・彫器・礫
					〃	〃	〃	2.9	1.4	1.1	3.1	
					〃	〃	〃	(4.1)	1.3	1.3	(2.9)	
					〃	〃	〃	4.2	2.5	1.6	12.7	
					〃	〃	縦長	3.3	1.6	1.2	4.07	
					〃	〃	横長	4.4	1.5	1.3	5.89	
					〃	〃	〃	3.3	2.8	1.6	5.91	
					〃	〃	〃	3.9	1.5	2.0	8.63	
					〃	〃	〃	2.4	1.1	1.2	2.50	
2	下城Ⅱ	同上		第1文化層								
						黒曜石		(7.4)	2.3	1.0		主剥離面には両側から押圧剥離
						輝緑凝灰岩		(5.4)	0.7	0.7		〃
						黒曜石						〃 基部は円形
						粘板岩(?)		(5.6)	2.0	1.85		
												未製品か？
						珪質安山岩		(4.8)	1.1	0.8		
						ガラス質安山岩		3.6	0.9	0.6		素材がうすい。背面稜上からの剥離はない
						凝灰岩(?)		(5.0)	1.1	0.9		三面加工
						黒曜石						断面二等辺三角形
						〃		(4.1)	1.8	1.5		
						輝緑凝灰岩						二面加工
						黒曜石		3.7	1.3	0.95		
								3.7	1.3	0.75		
						黒曜石		4.8	2.0	2.0		未製品か？
						〃						
						〃		(4.7)	2.4	1.3		未製品か？
						〃						断面凸レンズ状
						角閃石安山岩	横長剥片					主剥離面を残す
						黒曜石	縦長剥片					打面・打点をそのまま残す。断面菱形
						ガラス質安山岩	〃					
						黒曜石	〃					
												(共)ナイフ形石器・スクレイパー・石錐・石核

大分県

	吹上	大分県日田市吹上町		(表採)	尖頭器			(4.2)	1.9	1.25		(共)ナイフ形石器・台形様石器
					〃			(9.2)	2.6	0.8		
	平野	〃 〃 石井町		(表採)	尖頭器	流紋岩						

福岡県

1	野黒坂	福岡県筑紫野市鉢摺			三稜形							写真のみ
					紡錘形							

長崎県

No.	遺跡名	所在地	立地	層位	形態	石材	素材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
1	岩下	長崎県佐世保市松瀬町岩下	標高200m	5層	押型文 石槍							先端
					〃							〃
					〃							
					〃							先端欠
					〃			8.9	2.5	0.8		
					〃							
					磨製石槍			10.8	2.2	0.9		19号人骨副葬品
					〃			11.8	2.35	0.95		〃
					〃			6.2	1.5	0.5		〃
					〃			8.5	2.0	0.8		〃
					〃							〃
					〃			9.8	1.7	0.5		〃
					尖頭状石器			3.2	3.1	0.7		
					〃			3.2	2.8	0.8		
					〃			3.8	3.0	1.1		
					〃			3.8	2.15	1.0		(共)石錐・つまみ形石器・削器・砥石・磨石
				6層								
				条痕文・疑似爪形文	石槍							先端
					〃							〃
					〃							〃
					〃							〃
					〃							〃
					〃							肩部
					〃							〃
					〃							肩～基部
					〃							〃
					〃							〃
					尖頭状石器			2.35	2.1	0.9		三角形
					〃			2.5	2.4	0.7		〃
					〃							〃
					〃			3.6	2.8	2.1		〃
					〃			4.2	3.25	1.0		〃
2	岩下			6層	尖頭状石器			3.4	2.4	0.85		舌状基部？
					〃			3.25	2.1	0.5		先端部に2次加工あり
					〃			(3.2)	1.5	0.5		〃
					〃			(3.6)	1.9	1.0		
					〃			3.5	2.1	0.6		
					〃			4.5	2.1	0.6		舌状基部をもつ
					〃			3.4	2.7	0.4		一次剥離が大きく残る
												(共)
3	直谷	〃 北松浦郡吉井町	洞穴	3層	尖頭器	サヌカイト						(共)掻器・小石刃
4	泉福寺	〃 佐世保市瀬戸越町	洞穴		石槍	黒曜石		(2.8)	1.5	0.4		両面加工
			(第2)		〃	安山岩		12.7	2.6	1.05		〃 彫器に再加工？
					尖頭状	黒曜石		4.36	2.2	0.9		スクレイパー？
												(共)石匙・拇指状掻器
5	岩谷口	〃 北松浦郡世知原町	第1洞穴		石槍	畑石安山岩	石刃状剥片	12.6	3.2	0.4		先端部の片側のみ調整
					〃	〃		8.2	3.0	0.54		
					〃							先端部
					〃							舌状基部
					〃							〃
					尖頭状							
												(共)石錐・石匙・削器・石斧・つまみ形石器・石核
			第2洞穴	3層	尖頭状	黒曜石						
				4層	〃	畑石安山岩	大形横長					(共)石錐・削器・彫器・つまみ形石器・石核
6	田中	〃 南高来郡深江町		爪形文	石槍							(田)写真のみ

佐賀県

1	白蛇山	佐賀県伊万里市東山代町舘野	標高100m 国見山麓 裾野 岩陰	9層	押型文 尖頭器 貝殻文 刺突文	安山岩		(4.7)	2.5	0.9		片面未調整 (共)石錐・石鏃・スクレーパー

No.	遺跡名	所在地	立地	層位	形態	石材	素材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
2	牟田辻	佐賀県唐津市枝去木矢倉	標高154m	2層下 押型文	尖頭状石器	黒曜石						
			上場台地中央	3層上 〃		〃						両面調整
				〃 条痕文		〃	縦長剝片	6.93	2.96	1.26	18.7	〃
				3層下		サヌカイト	横広剝片	6.55	4.96		23.9	表裏両面に一次剝離面を残す
												共石鏃・スクレイパー・石斧・砥石・磨石・凹石・石核・石刃・敲石
3	盗人岩	〃 西松浦郡西有田町		5層	石槍							

熊本県

1	立神ドトク	熊本県八代郡宮原町大字	標高54～	3層 押型文	尖頭器	チャート	不定形剝片	2.6	1.9	0.6	3.10	両側から調整剝離
		立神	59m台地	4a層	〃	〃		(2.6)	2.3	0.5	(2.8)	〃
					〃	〃		(2.2)	1.9	0.5	(1.82)	〃
												共3層―掻器・削器・石錐・石鏃・石核・ナイフ
												4a層― 〃 細石刃
2	中後迫	〃 菊池郡大津町大字	標高250m	5～6層押型文	尖頭器	黒曜石		2.3	2.0	0.6		スクレーパーとしての機能をもつ
		吉城	丘陵裾部		〃	〃		(2.65)	2.6	1.0		柳葉形
					〃	〃						
					〃	〃						柳葉形
												共石鏃・磨石・石皿・スクレーパー・礫器・環状石斧
3	里ノ城	〃 球磨郡多良木町多	標高176m	厚手無文	尖頭器	硅質頁岩		9.7	3.6	0.75		両面加工
		良木	河成段丘									共細石刃・細石器・小石核・石鏃・削器・敲打器・二次加工剝片・使用痕剝片・彫刻刀様石器・角錐状石器

大分県

1	二日市	大分県玖珠郡九重町		第8文化層・条痕文	槍先形尖頭器	サヌカイト		8.9	2.6	1.0	23.01	共石鏃・楔形石器・スクレイパー・二次加工剝片・敲石
				第9文化層・〃	有舌尖頭器	〃		(7.0)	2.6	0.6	14.24	
					〃	〃		(8.0)	2.7	0.8	20.73	
					〃	頁岩質						舌状基部
					〃	サヌカイト						
					〃	黒曜石						基部
												共石鏃・石錐・斧形石器

福岡県

1	原	福岡県春日市上白水字原	標高34m	3層・無文・								
			台地西端部	押型文	打製石槍	安山岩						
					尖頭状石器	〃	横長剝片	3.51	2.6	0.6	7.6	舌状基部
2	深原	〃 筑紫郡那珂川町大字中原	標高39～41m									
			扇状台地	早期 後半	打製石槍	安山岩		7.2	1.9	0.95		
					〃	〃		(3.8)	2.45	0.9		
					尖頭状石器							
					〃	チャート		(3.75)	2.6	1.1		舌状基部
					〃			(3.0)	2.6	0.9		三角形、定型化
					〃	黒曜石						〃
					〃	安山岩		3.1	2.3	1.0		〃
					〃			3.7	3.0	1.3		〃
					〃	黒曜石		3.65	3.5	0.8		〃
					〃	流紋岩		3.2	2.85	0.7		〃
					〃			3.1	2.85	0.7		〃
					〃			3.35	2.45	1.0		〃
					〃			3.65	3.0	1.15		〃
					〃	安山岩						〃
					〃							〃

参考文献

No.	報告者	報告書	
1	麻生　優・白石浩之	百花台遺跡　－　日本の旧石器文化第３巻	1977
2	鎌木義昌・芹沢長介	長崎県福井岩陰・第一次発掘調査の概要－考古学集刊第３巻第１号	1965
3		堂崎遺跡　－　長崎県文化財調査報告　第10集	1971
4		原ノ辻遺跡(II)長崎県文化財調査報告　第31集	1977
5	下川達弥	「いわゆる剝片尖頭器とよばれている石器について」中山遺跡の研究II	1979
6	中村和正	「日ノ岳遺跡採集の一資料」長崎県の考古学Ⅰ長崎県考古学会	1979
7	福田一志	「長崎県金城遺跡の尖頭状石器」　同　上	1979
8	岡村広法・中谷雅治	長崎県北松浦郡刀ノ越の石器　　古代文化　20－5	1968
9~12	下川達弥	日本最西端の旧石器資料　　考古学ジャーナル167	1979
13	〃	曲崎古墳群調査報告書　長崎市教育委員会	1977
14		諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第１集　図録編	1975
15	麻生　優	岩下洞穴の発掘記録	1968
16	麻生　優・白石浩之	泉福寺洞穴の第６次調査　　考古学ジャーナルNo.116	1975
17	古代学協会 世知原町教育委員会	岩谷口遺跡群の発掘調査	1976
18	百人委員会	島原市の海中干潟遺跡（図録）・百人委員会埋蔵文化財報告第２集	1974
19		白蛇山洞穴遺跡：佐賀県立博物館調査研究書第１集	1974
20		牟田辻・中野遺跡：佐賀県文化財調査報告書第45集	1979
21		立神ドトク遺跡：熊本県文化財調査報告　第35集	1979
22	中後迫遺跡調査団	中後迫遺跡調査報告	1978
23		里ノ城遺跡：熊本県文化財調査報告　第51集	1980
24	橘　昌信	大分県二日市洞穴発掘調査報告書	1980
25		原遺跡：山陽新幹線関係埋蔵文化財調査　第10集	1979
26		深原遺跡：　〃　第８集	
27		生石・森の下遺跡　－　佐賀県文化財調査報告書第43集	1978
28		茶園原遺跡　－　多久市文化財調査報告書　第４集	1979
29	吉留秀敏	第３回九州旧石器文化研究会：研究発表要旨 筑後川上流域の先土器時代遺跡	1980
30		下城遺跡Ⅰ　　熊本県文化財調査報告　第37集	1979
31		下城遺跡II　　〃　　第50集	1980
32		筑紫野市立歴史民俗資料館　展示資料図録Ⅰ	1979

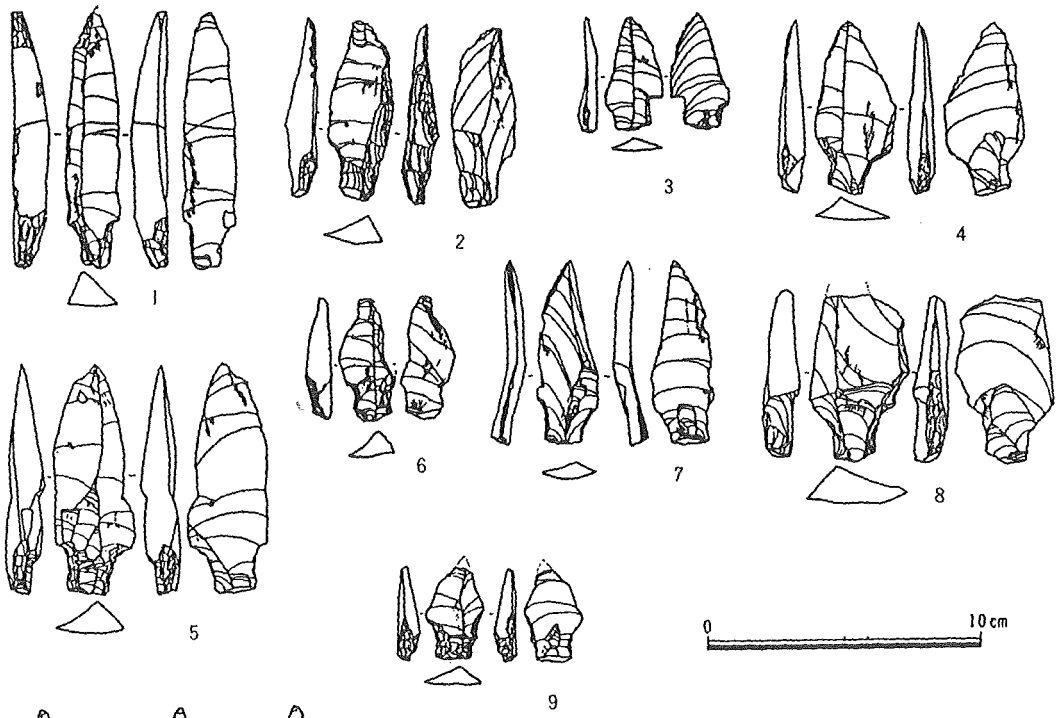
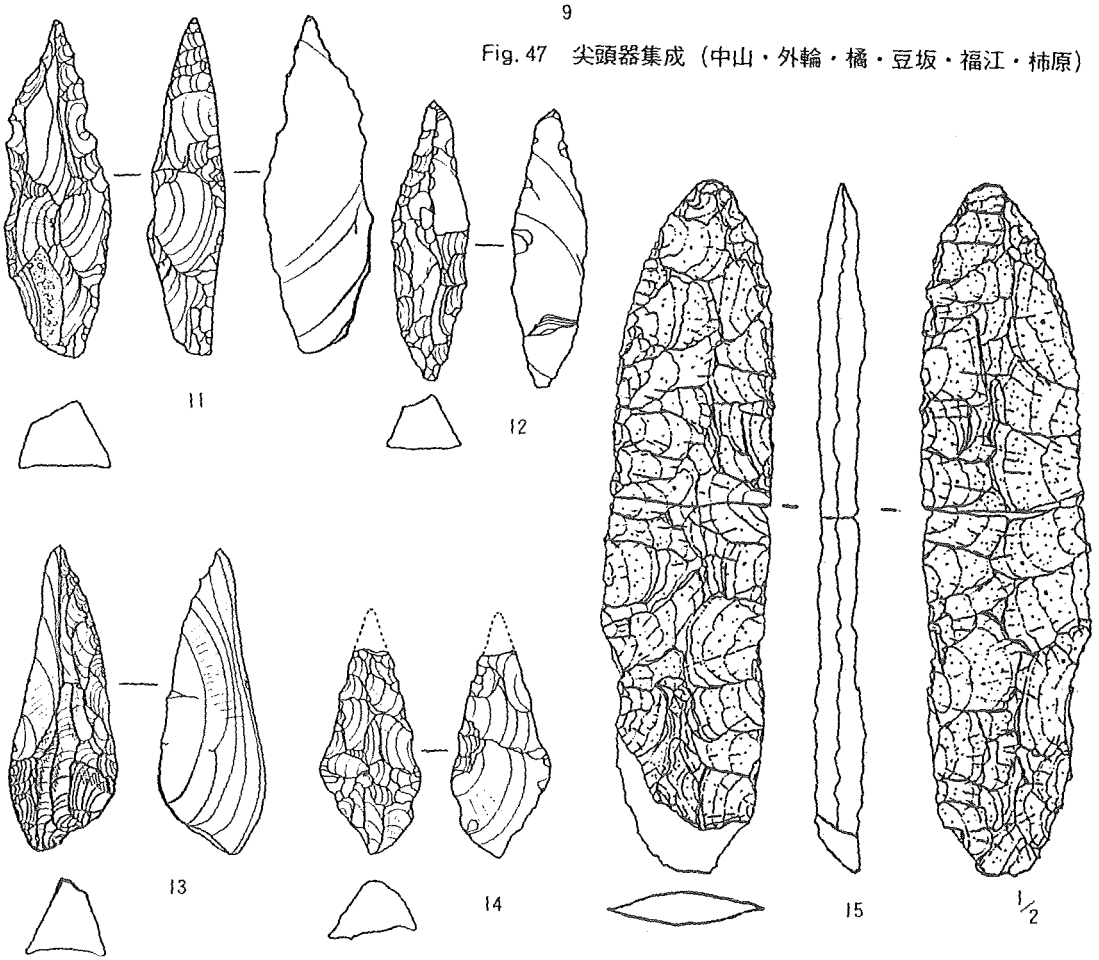


Fig. 47　尖頭器集成（中山・外輪・橘・豆坂・福江・柿原）



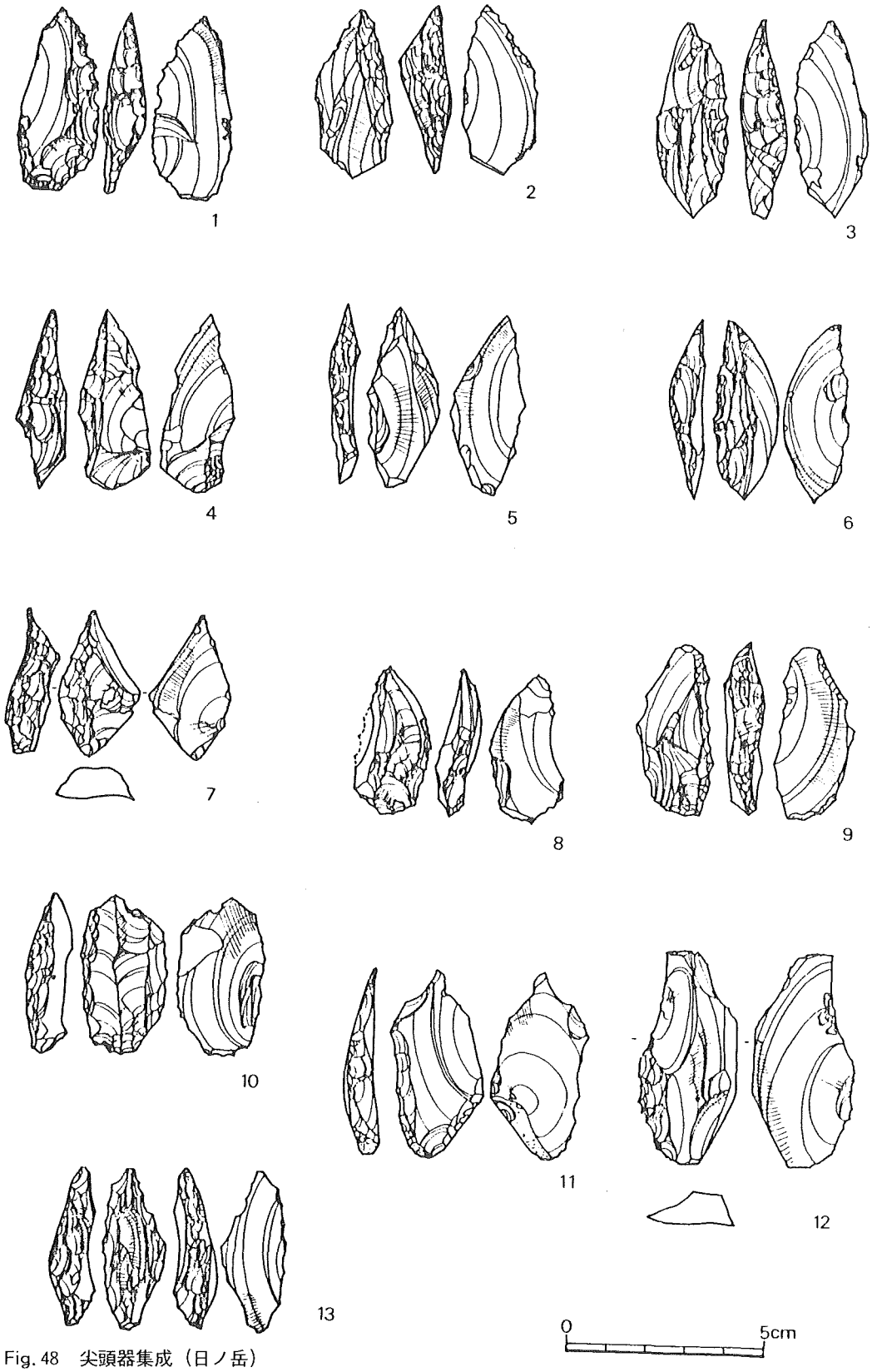


Fig. 48　尖頭器集成（日ノ岳）

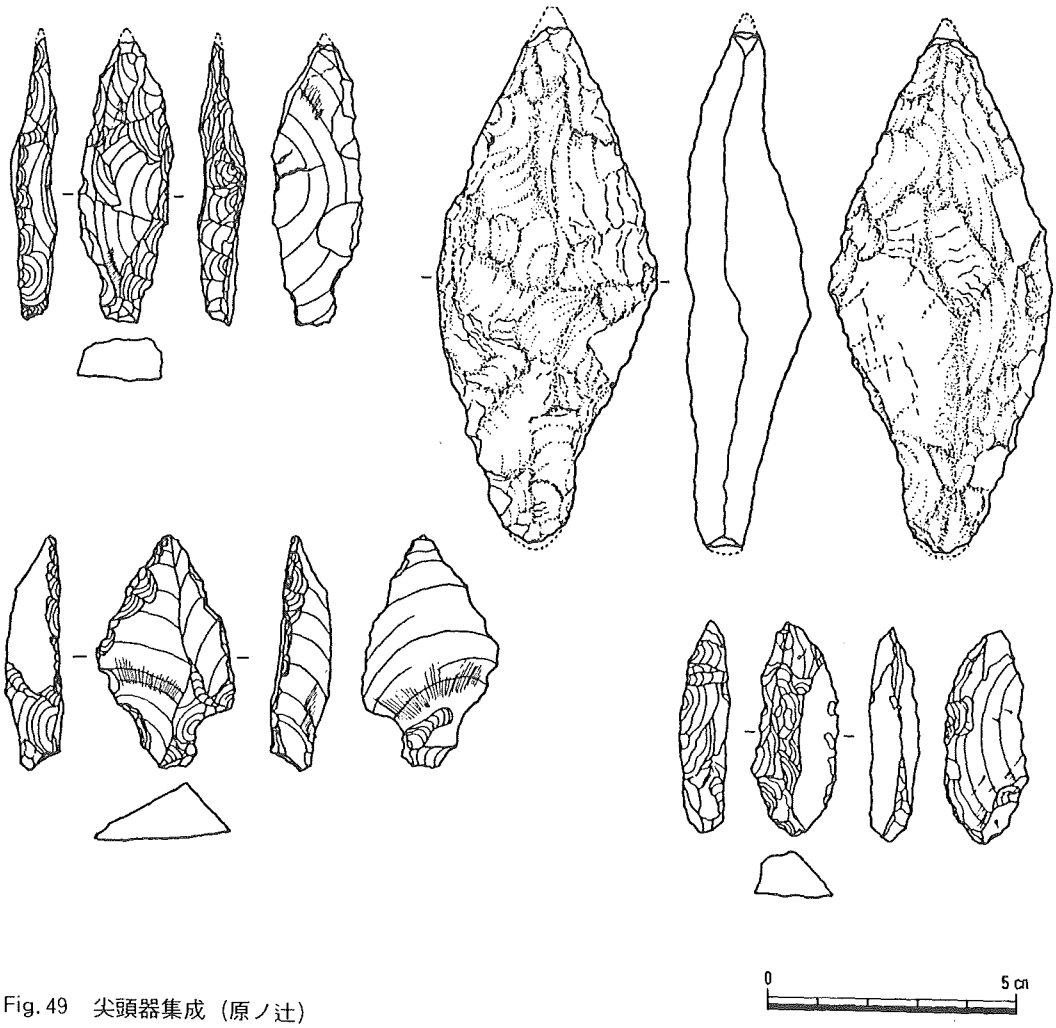


Fig. 49　尖頭器集成（原ノ辻）

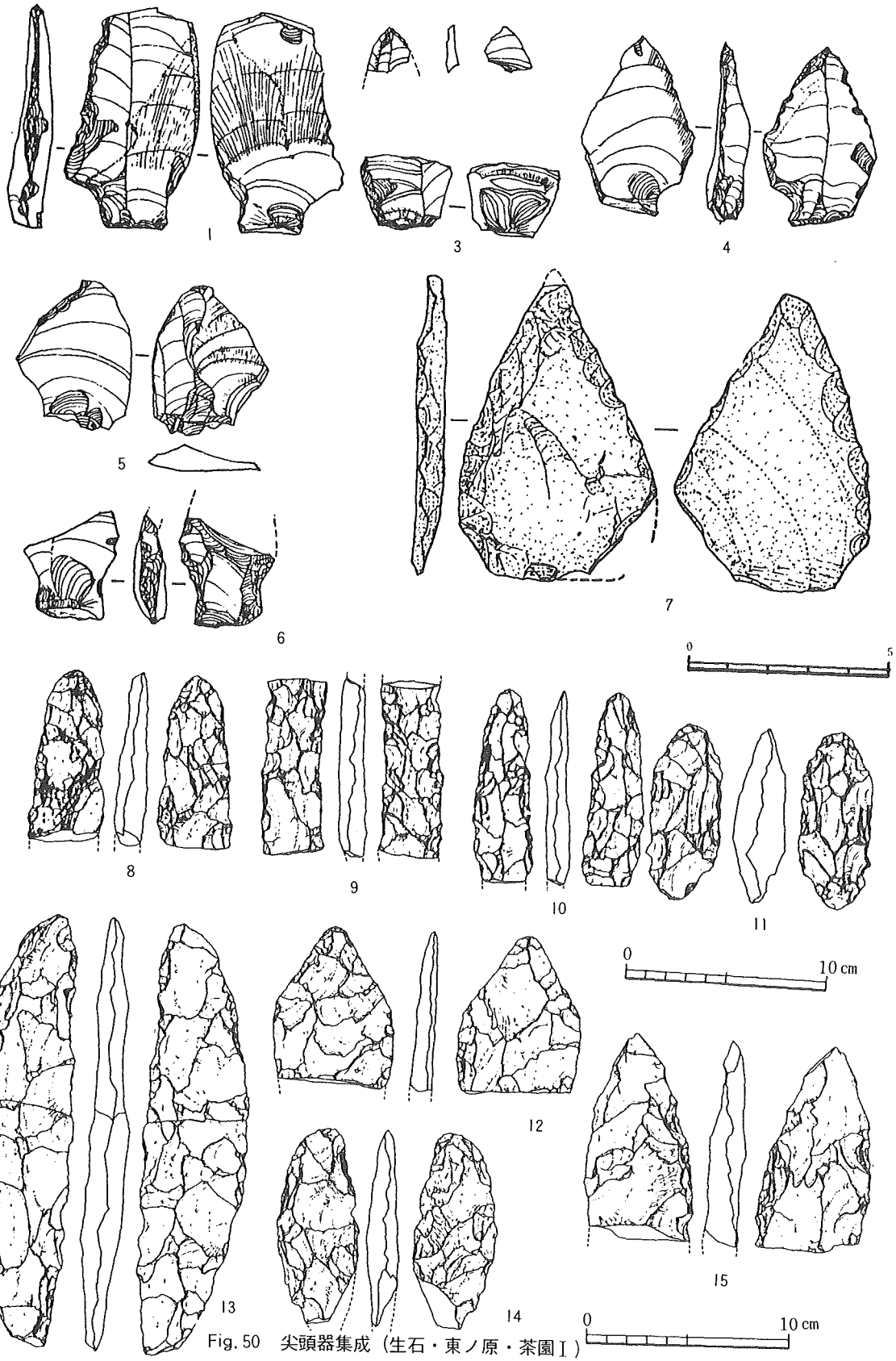


Fig. 50　尖頭器集成（生石・東ノ原・茶園Ⅰ）

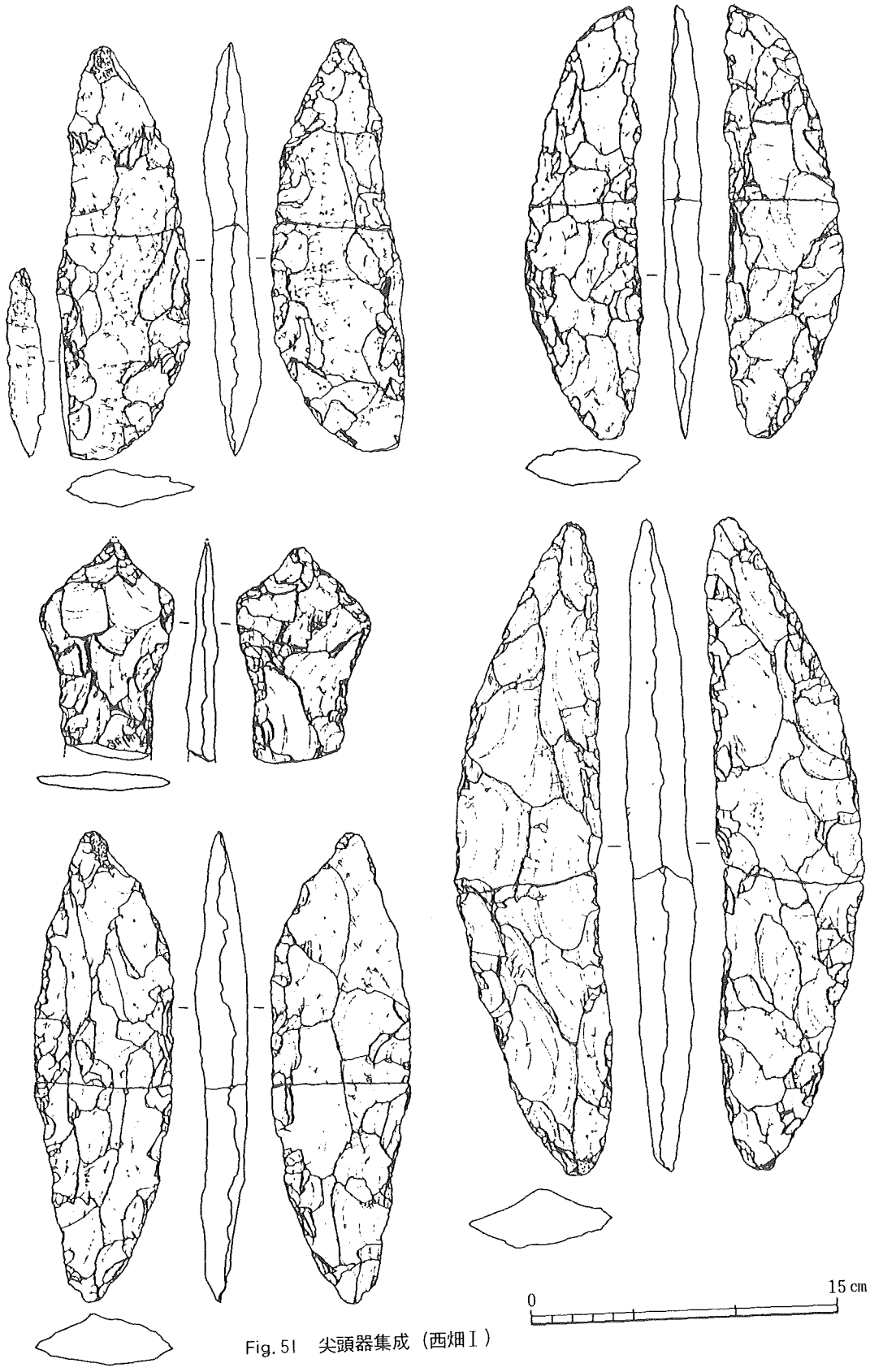


Fig. 51　尖頭器集成（西畑Ⅰ）

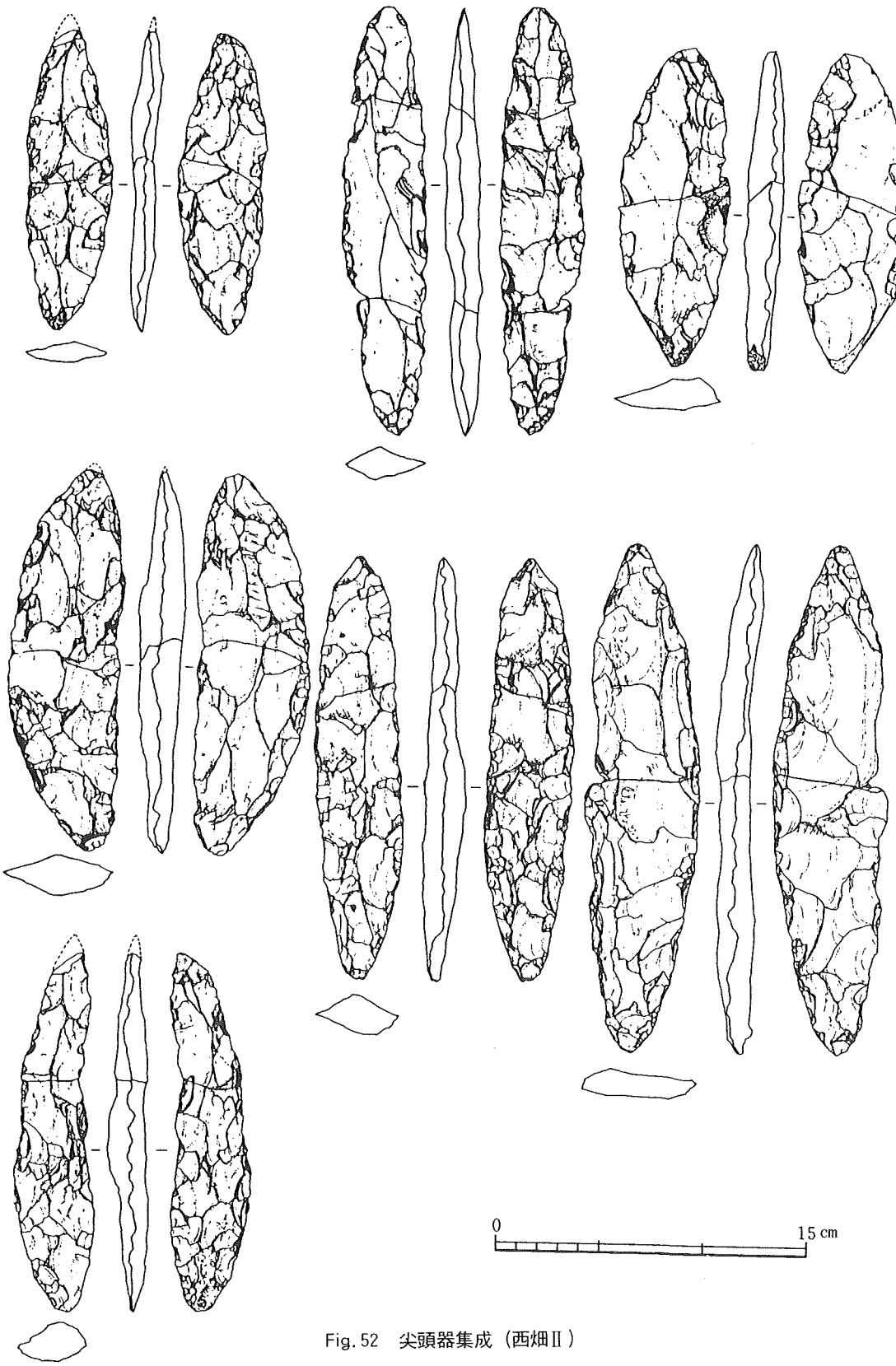
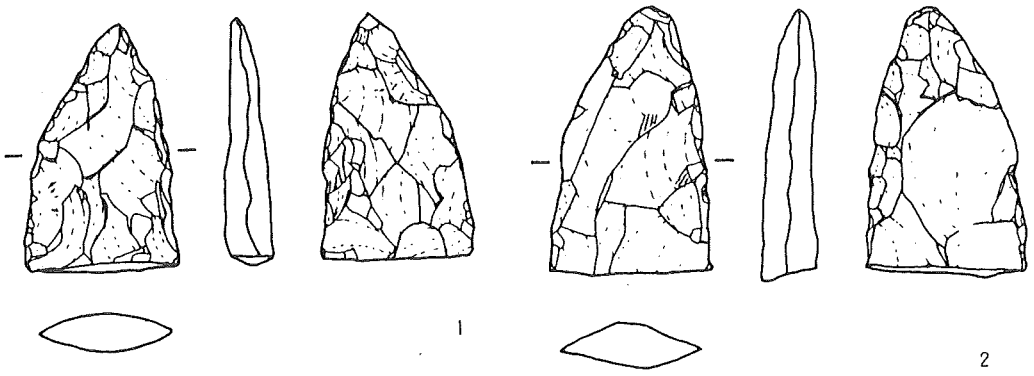
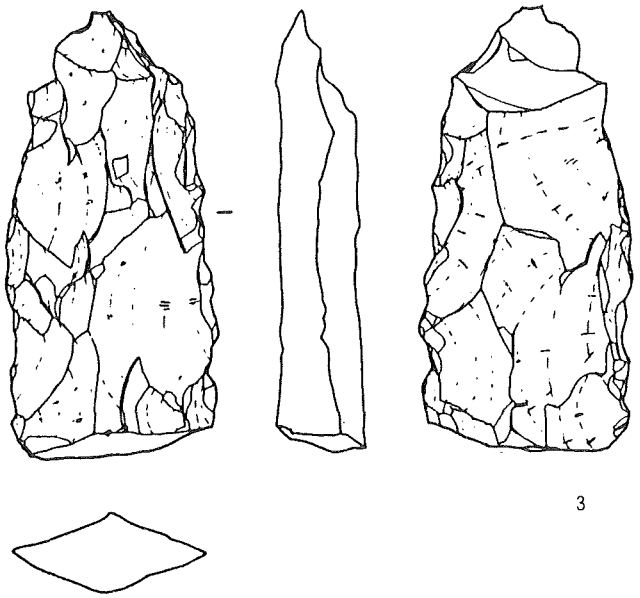
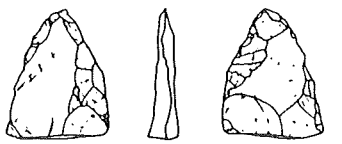


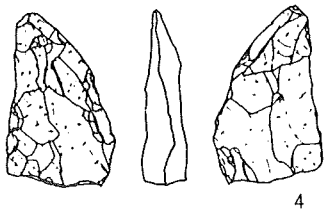
Fig. 52　尖頭器集成（西畑Ⅱ）

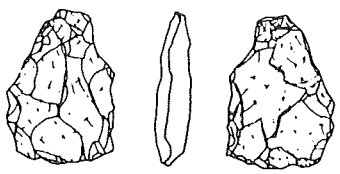


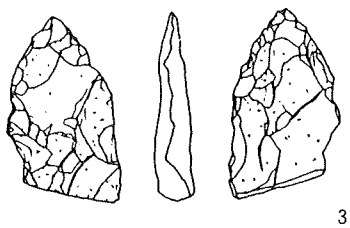


経ノ峯遺跡第２次調査出土遺物実測図









経ノ峯遺跡第II区出土遺物実測図

Fig. 53　尖頭器集成（経ノ峯）

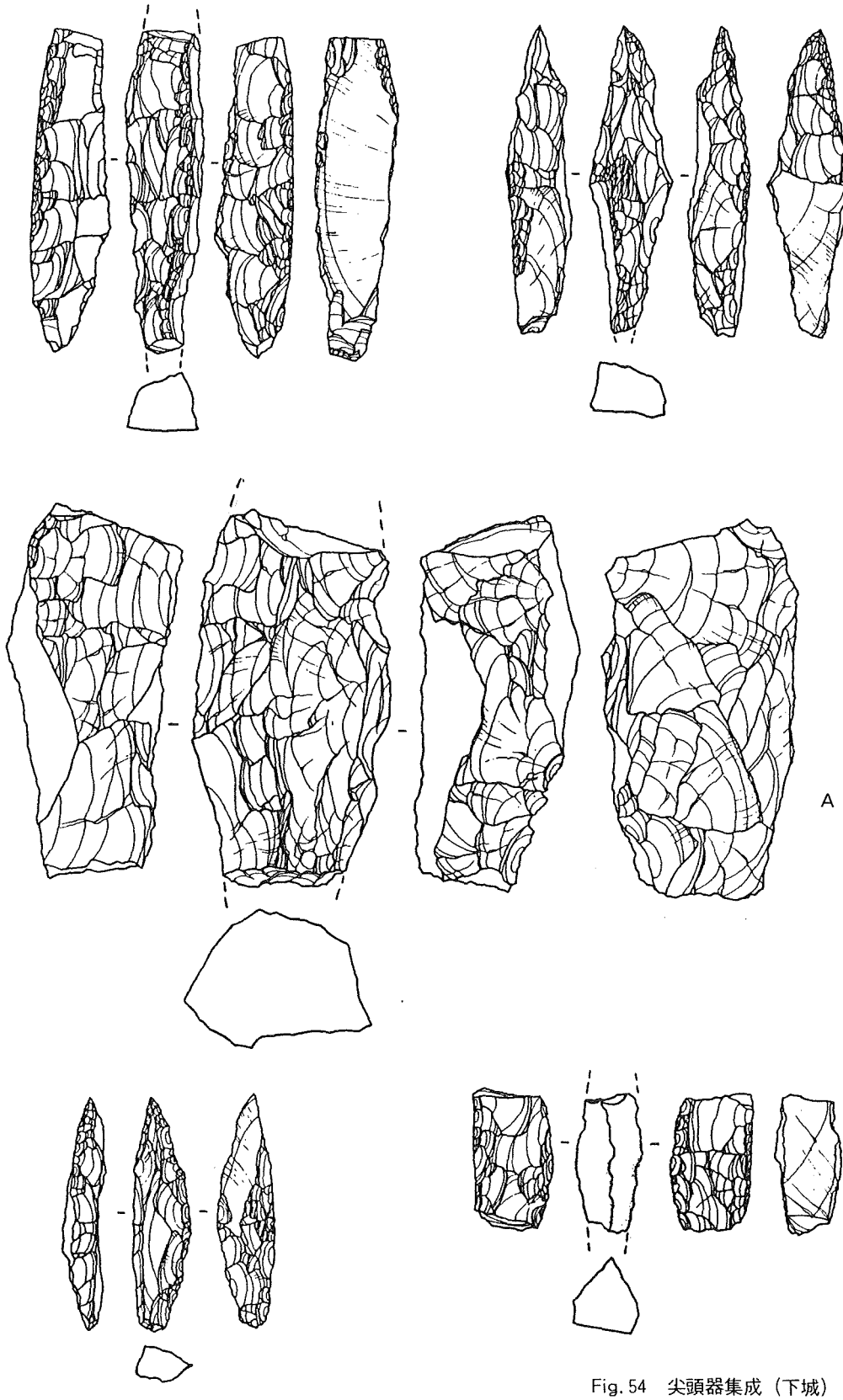


Fig. 54　尖頭器集成（下城）

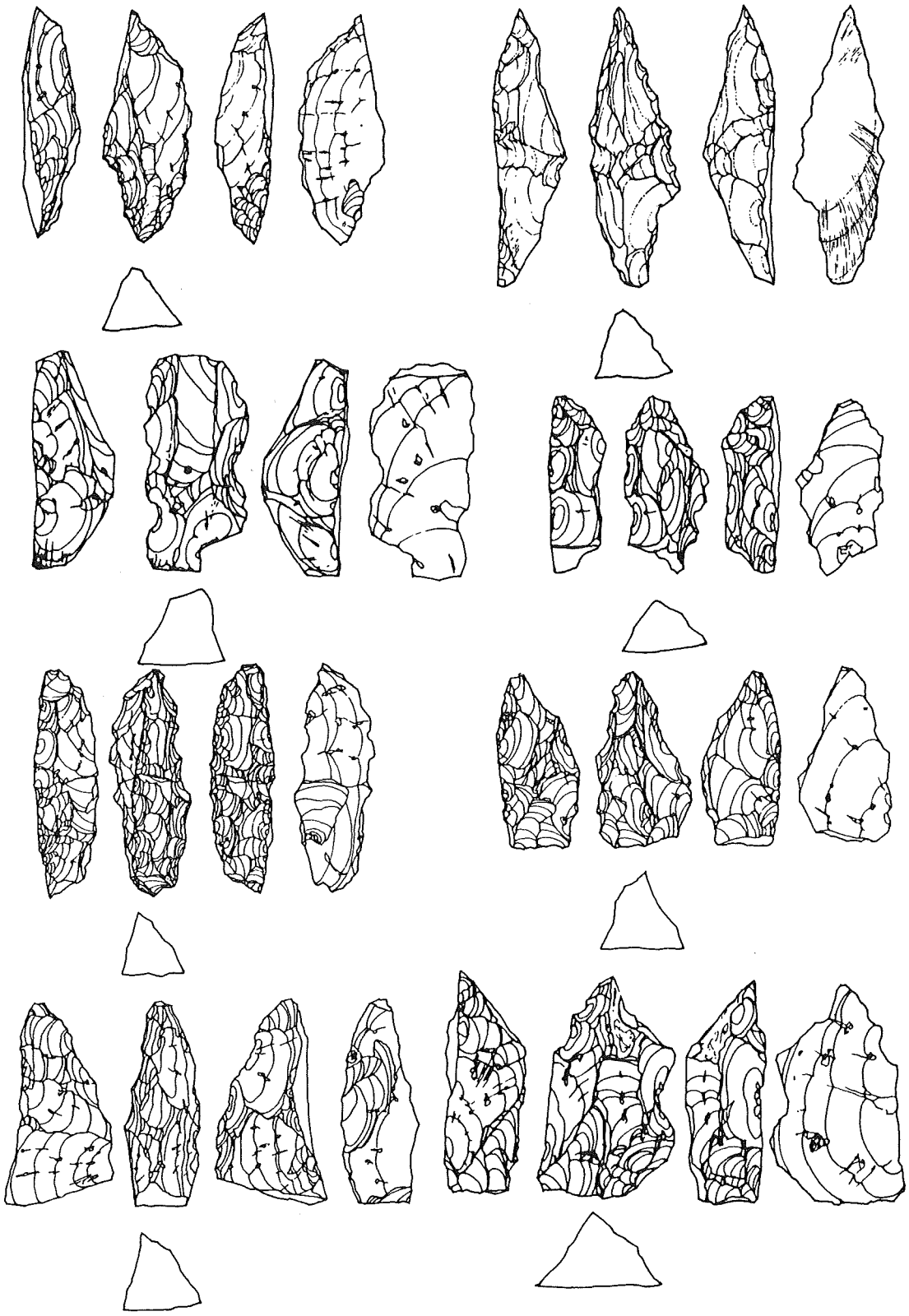
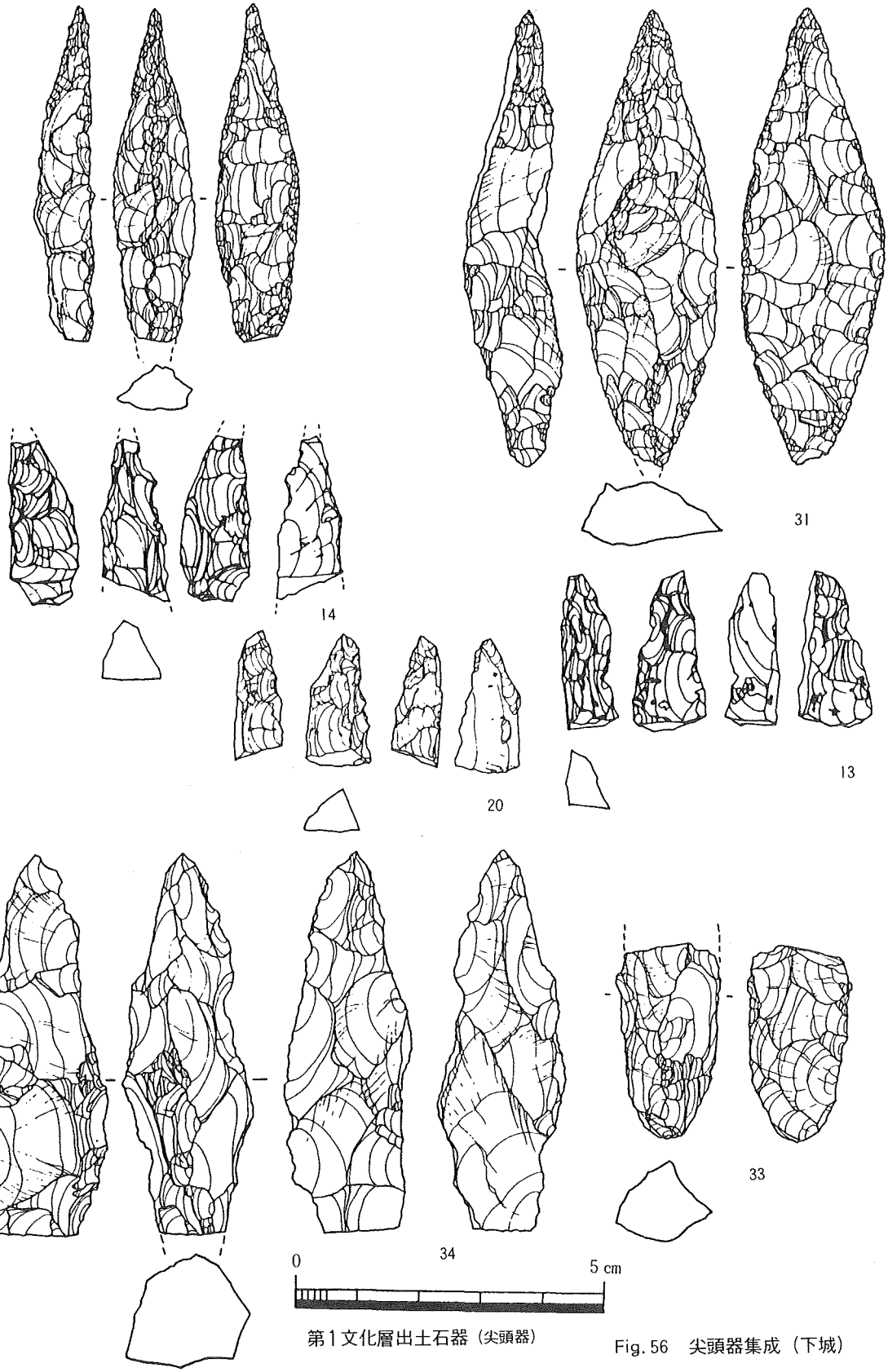


Fig. 55　尖頭器集成（下城）



第1文化層出土石器（尖頭器）

Fig. 56　尖頭器集成（下城）

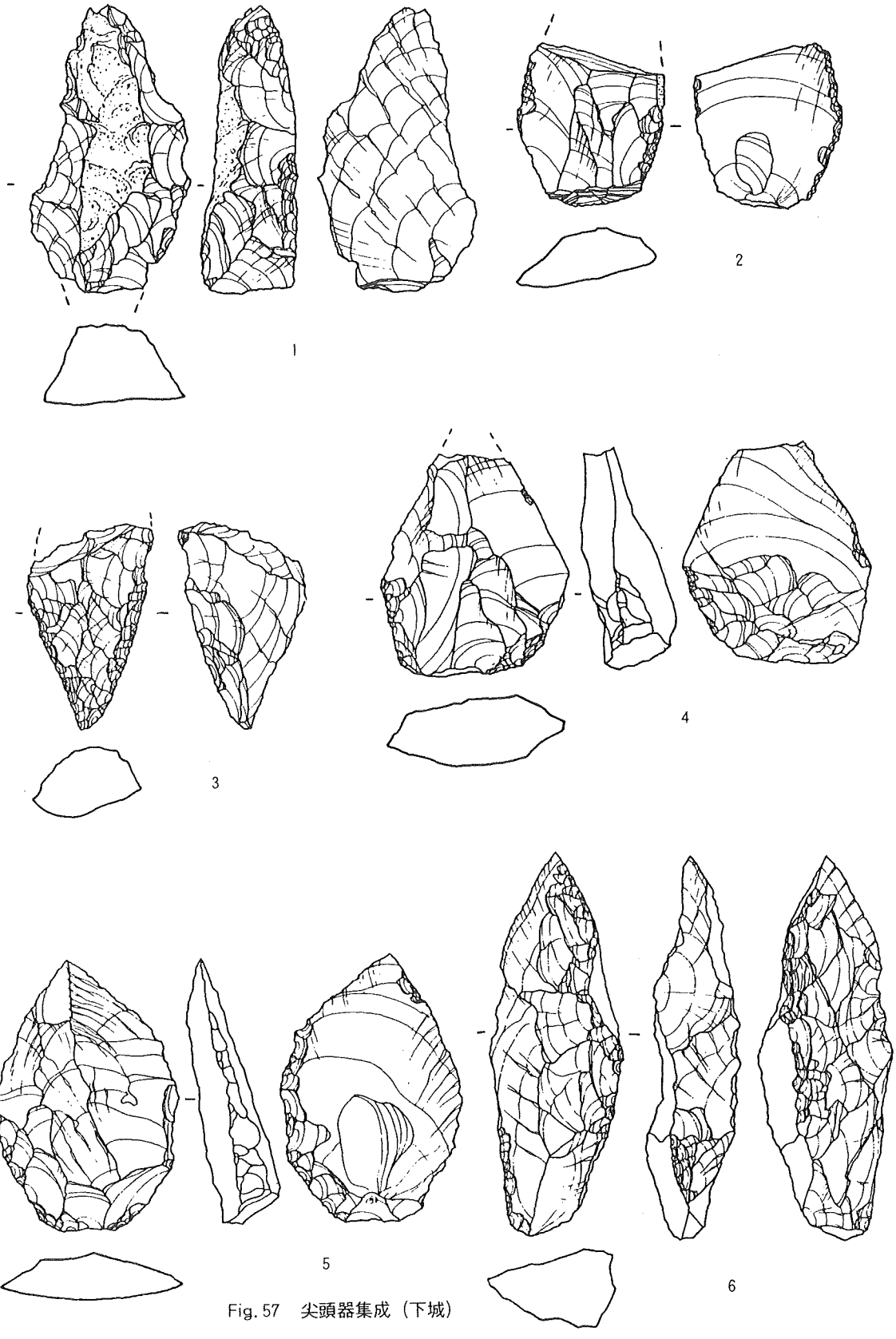


Fig. 57　尖頭器集成（下城）

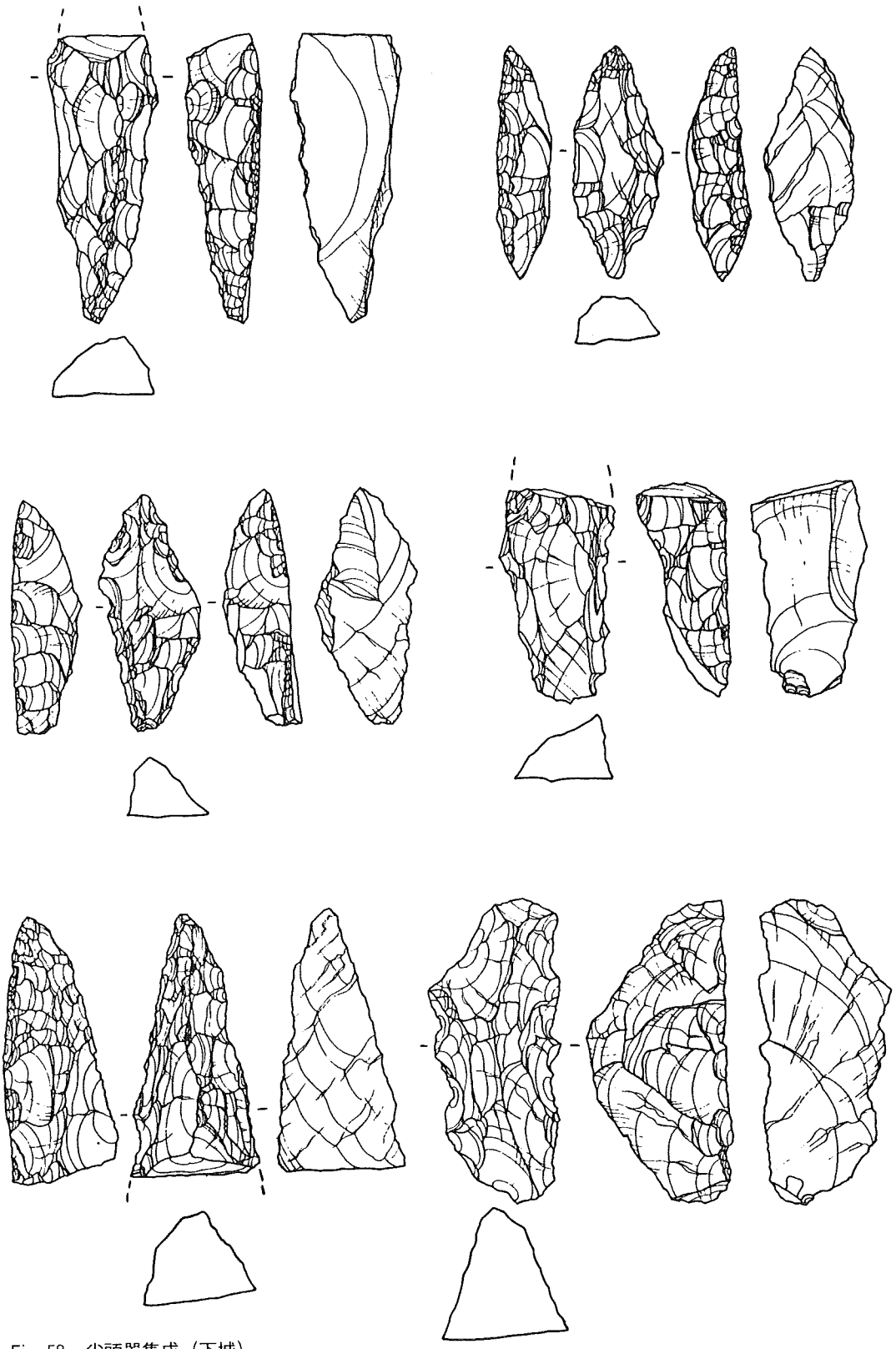


Fig. 58　尖頭器集成（下城）

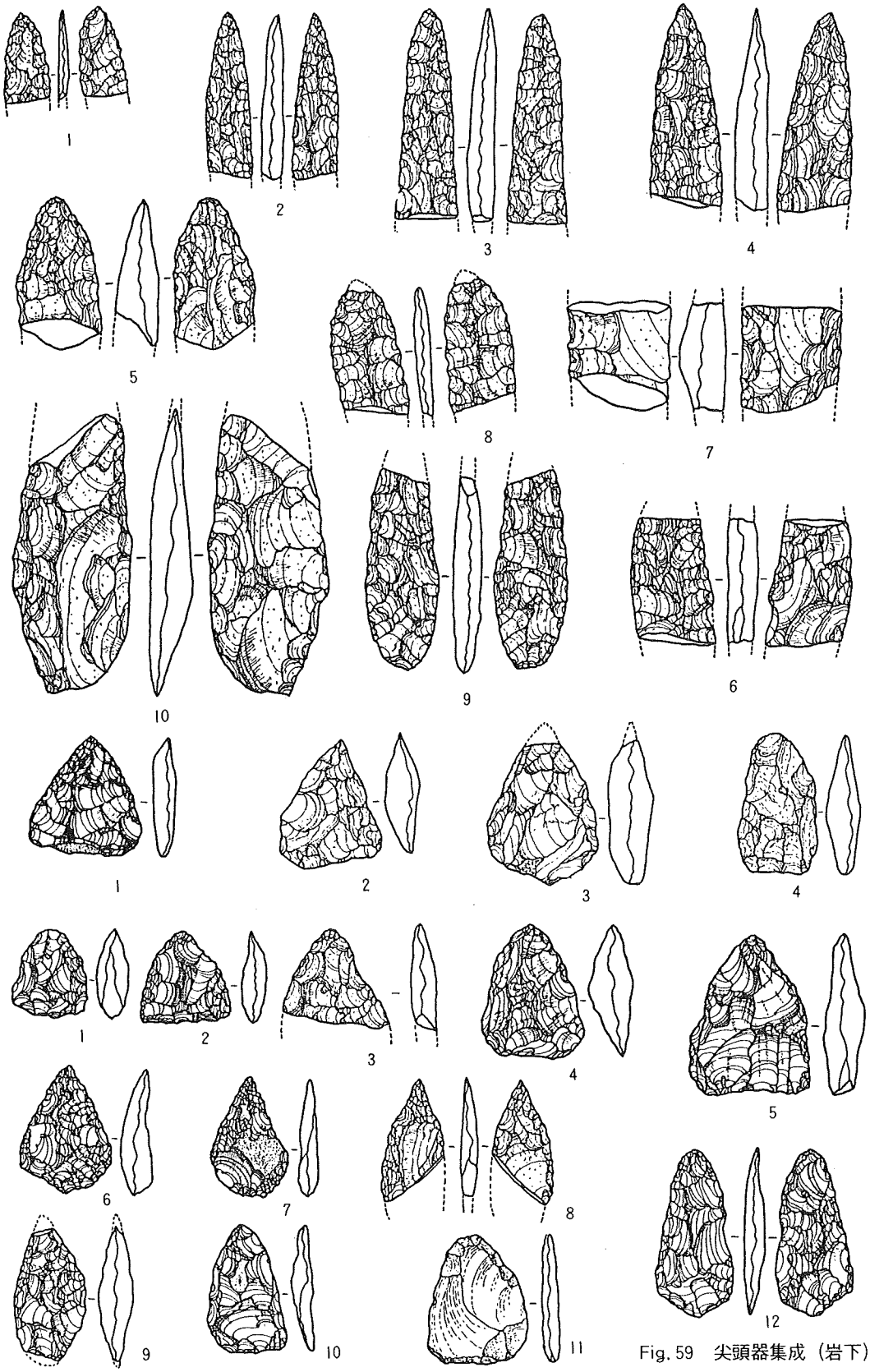


Fig. 59　尖頭器集成（岩下）

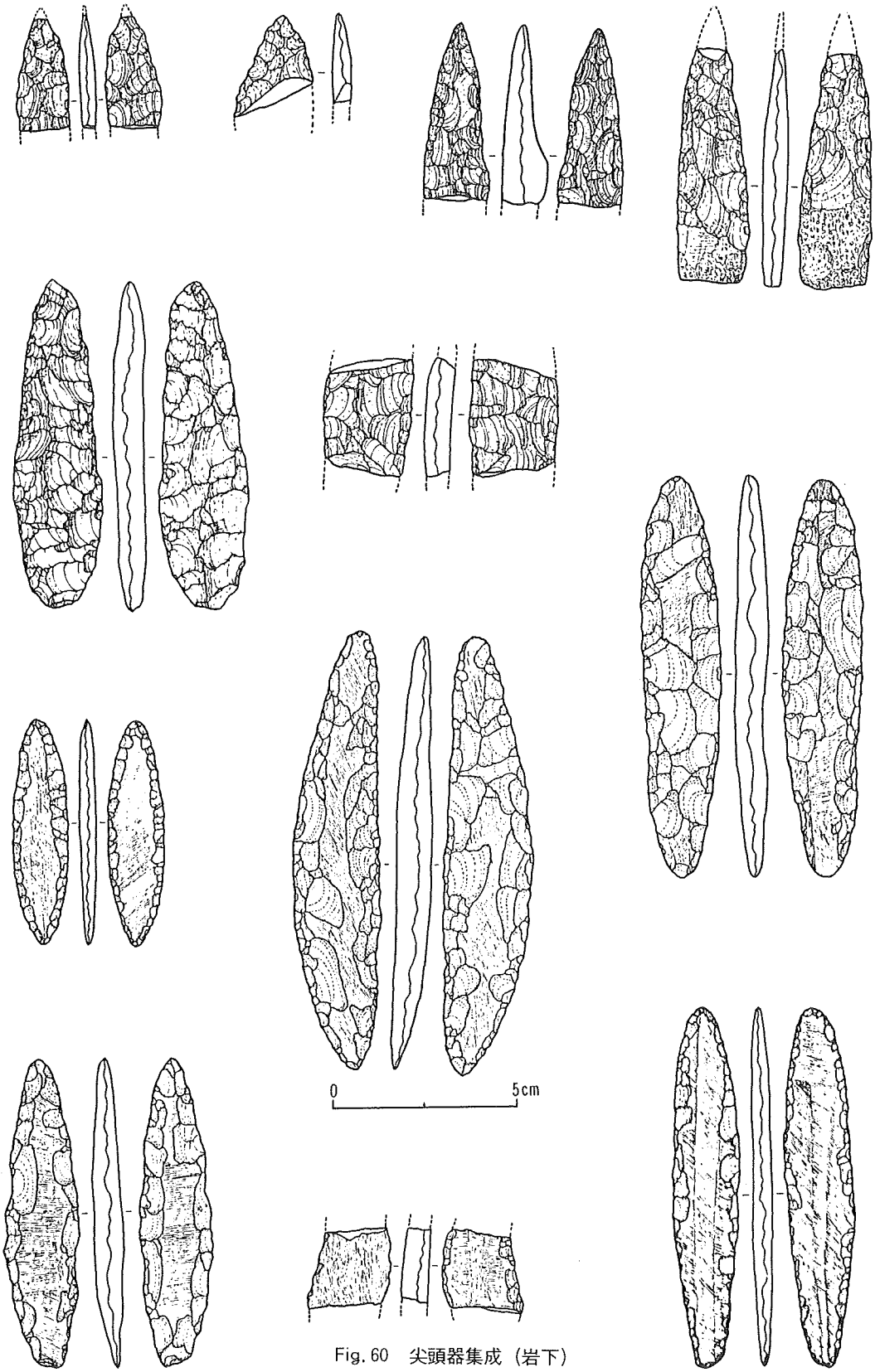


Fig. 60　尖頭器集成（岩下）

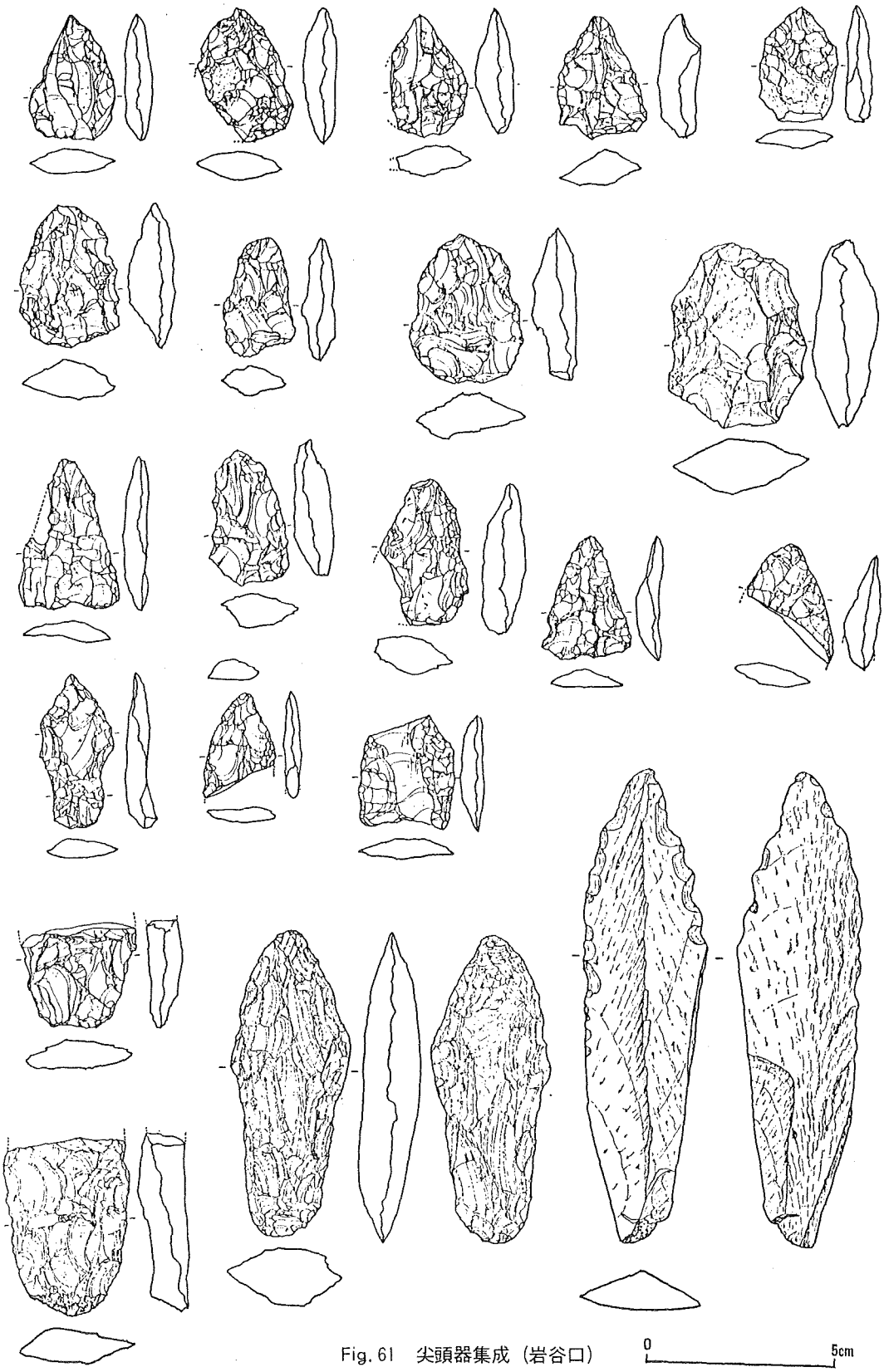


Fig. 61　尖頭器集成（岩谷口）

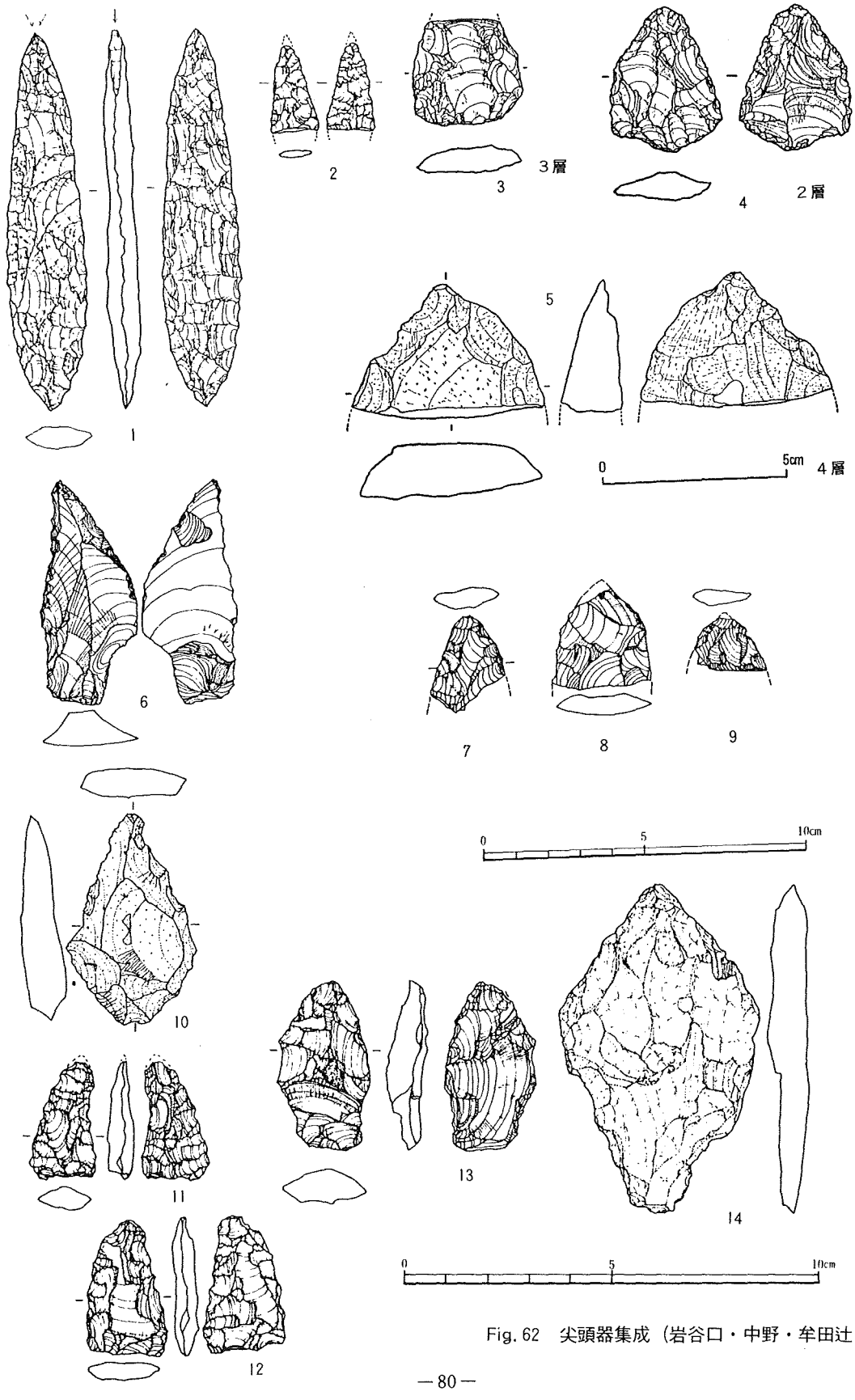


Fig. 62　尖頭器集成（岩谷口・中野・牟田辻）

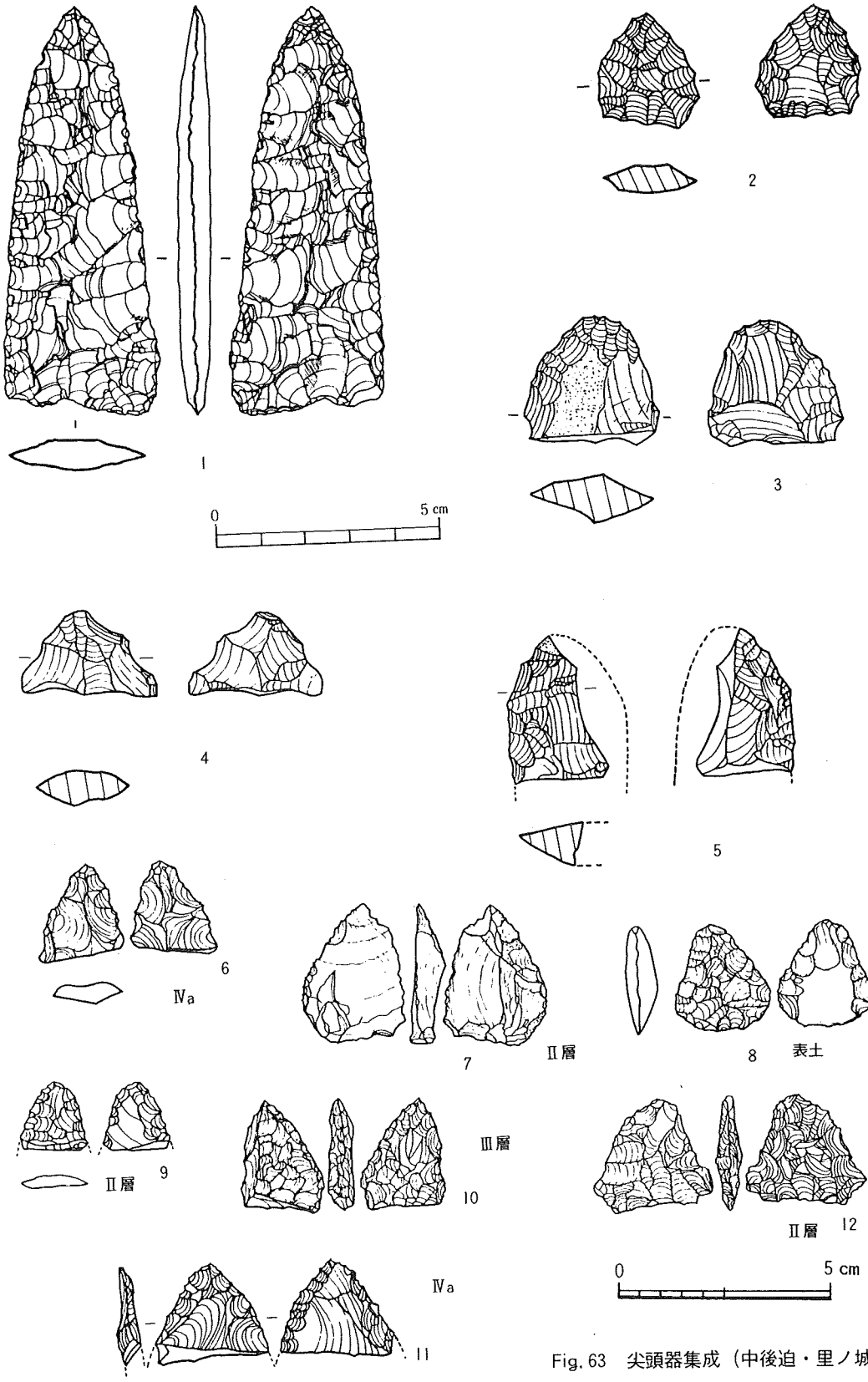
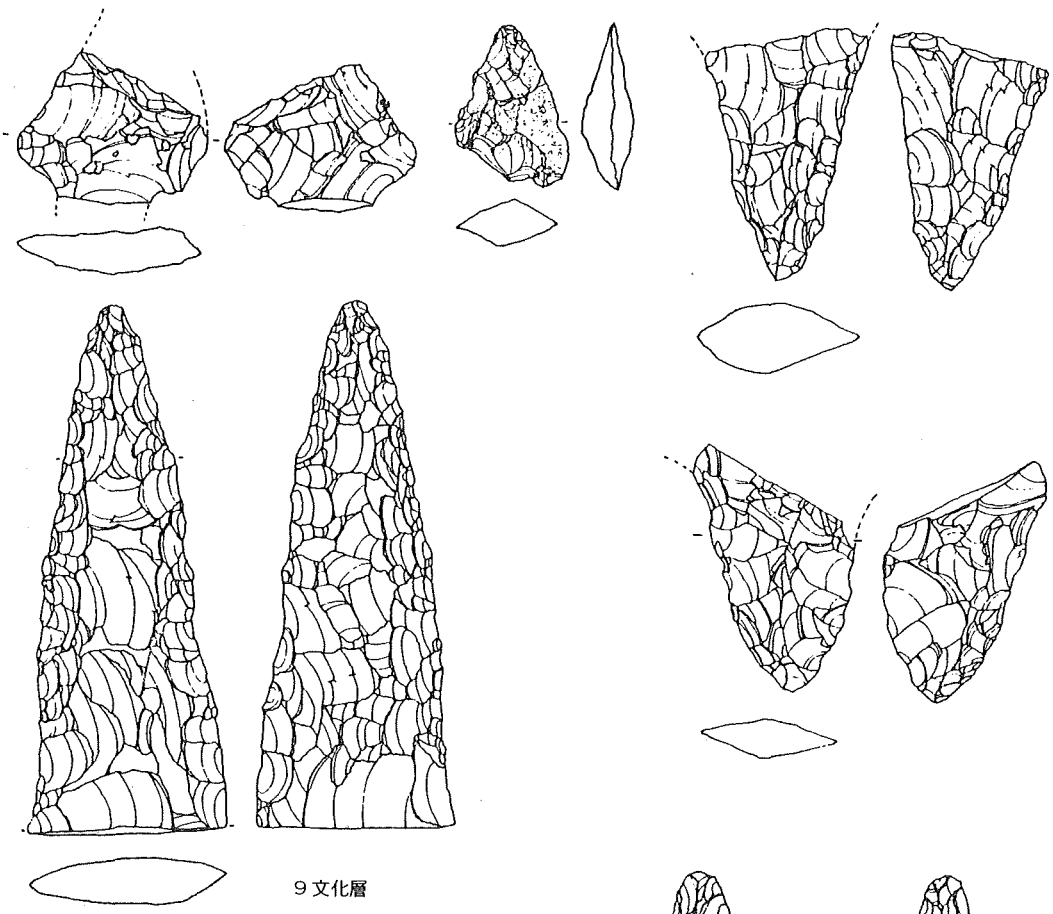
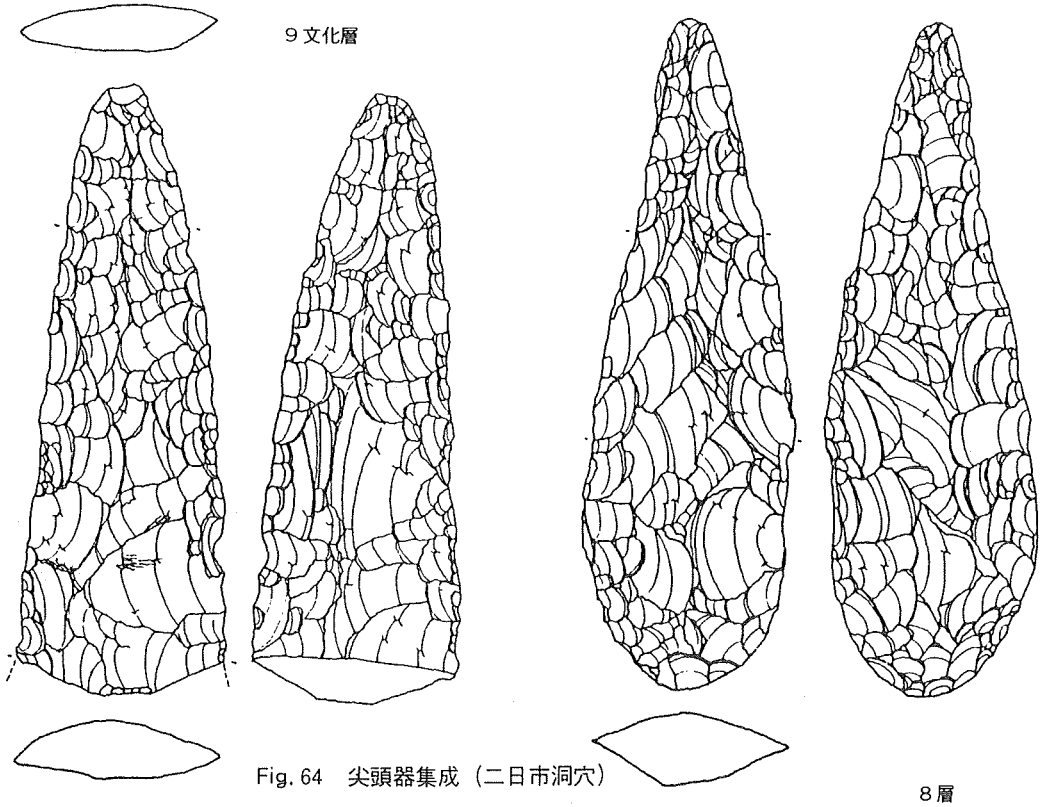


Fig. 63　尖頭器集成（中後迫・里ノ城）



9文化層



8層

Fig. 64　尖頭器集成（二日市洞穴）

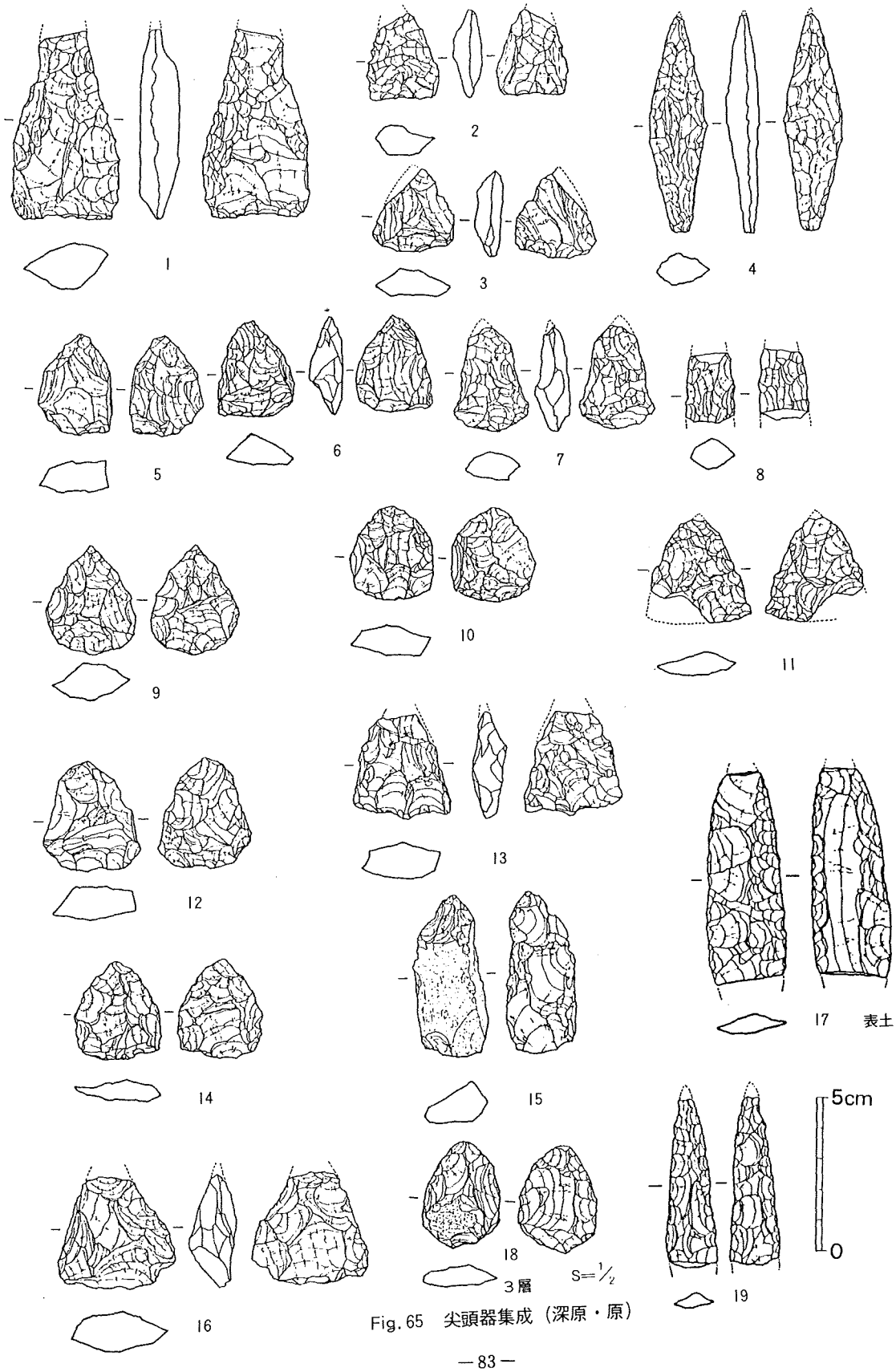
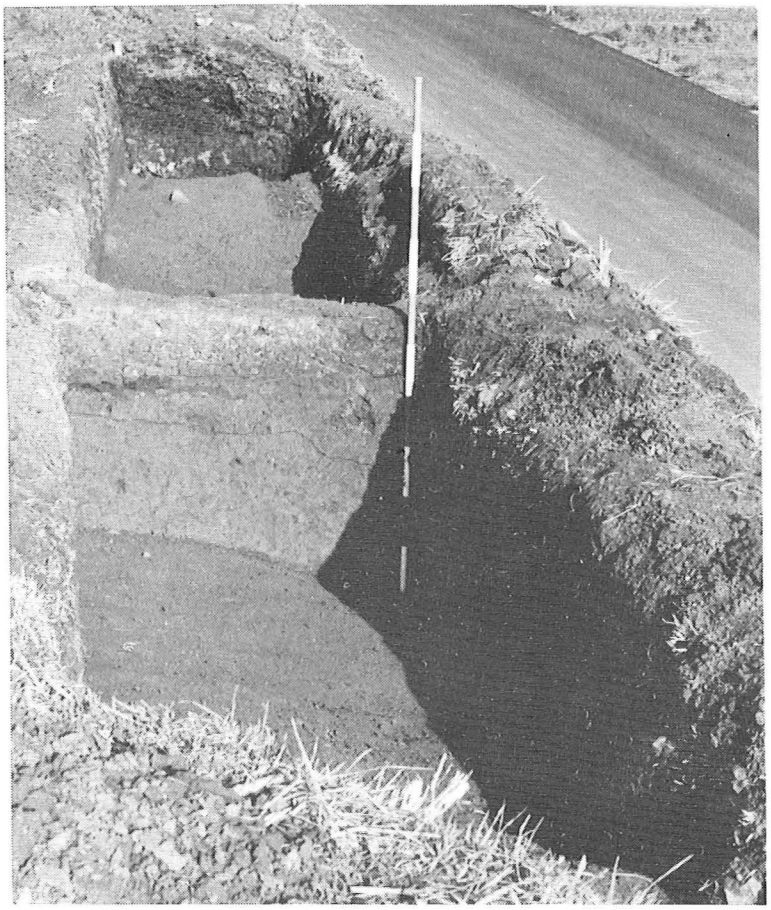


Fig. 65　尖頭器集成（深原・原）

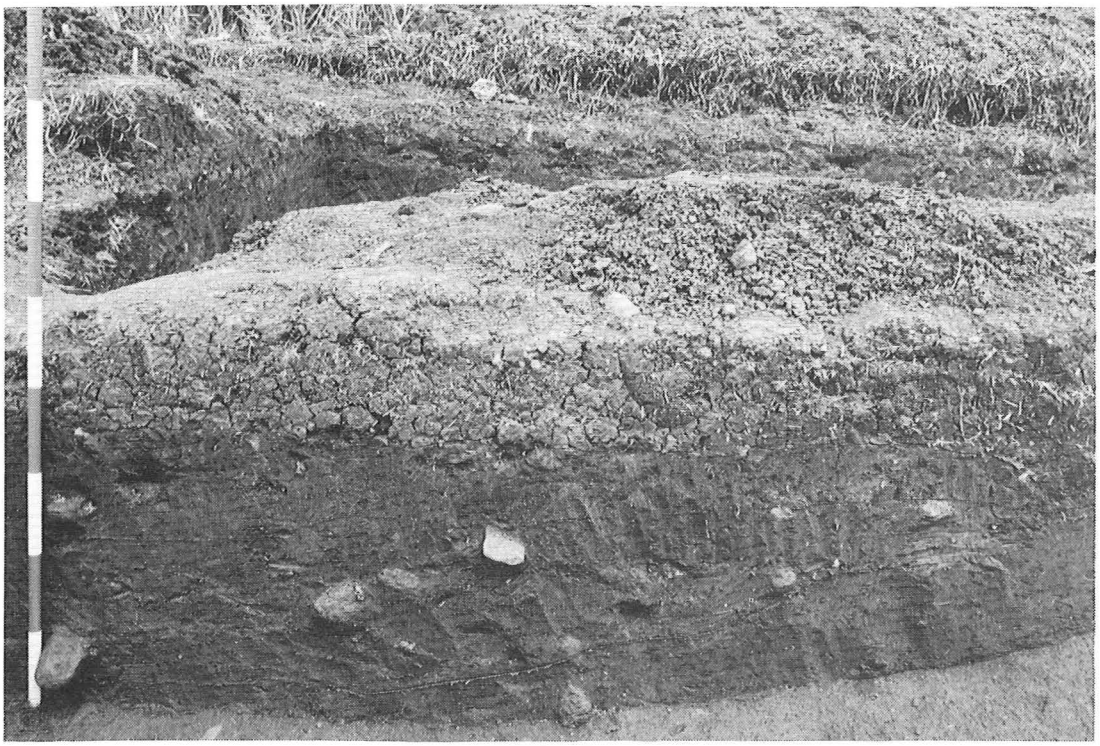
PLATES

調査風景

▲1-1　遺跡近影
（中央の矢印が調査地点）

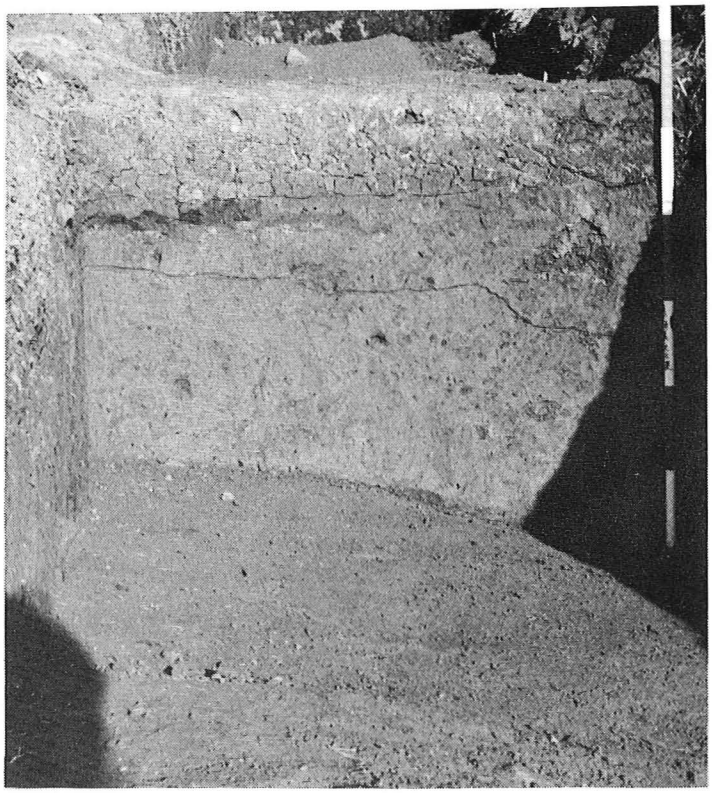


◀1-2　調査区
（B.C トレンチ）



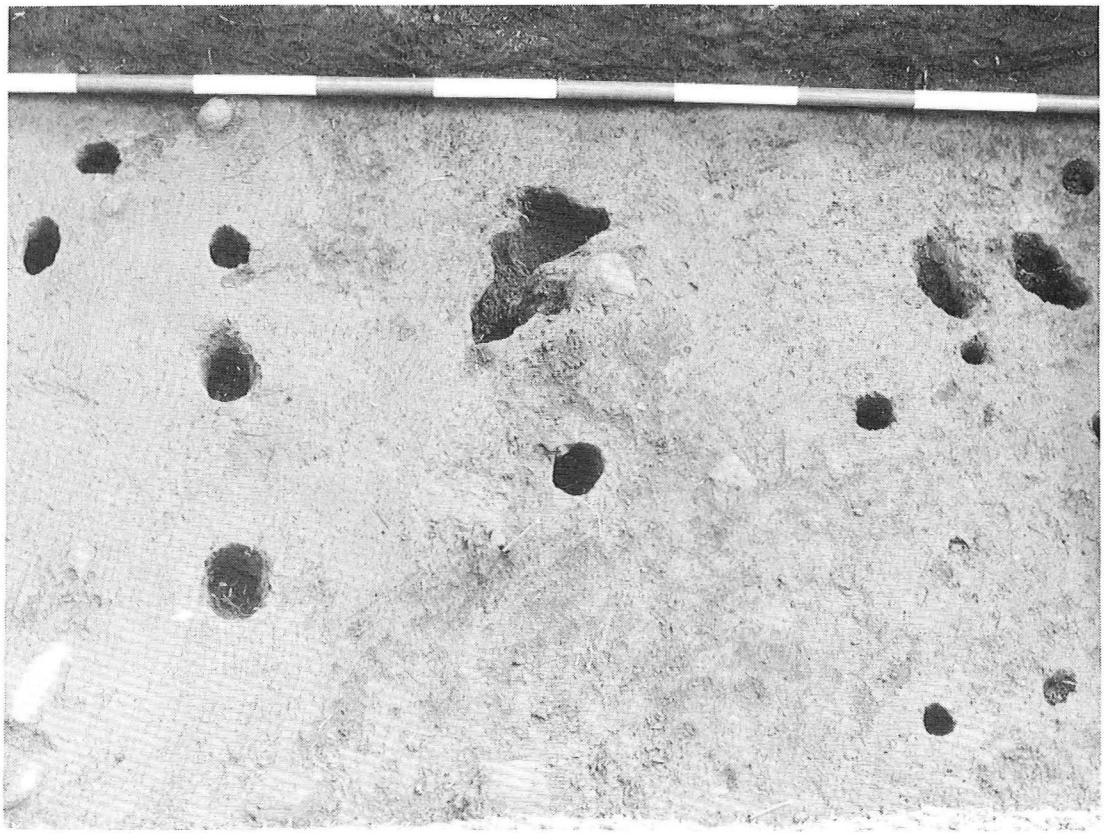
▲2-1 土層堆積状況（Bトレンチ、北壁）

▲2-2 土層堆積状況（Cトレンチ、北壁）



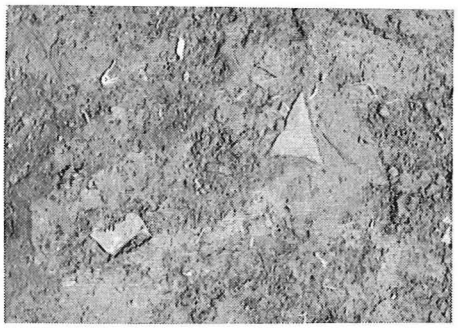
◀3-1 土層堆積状況
(Cトレンチ、東壁)

▼3-2 ピット群 (Bトレンチ)



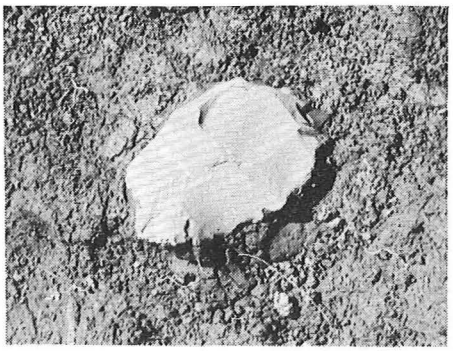
▲4-1 遺物出土状況（Bトレンチ）

▼4-4 石鏃・剥片

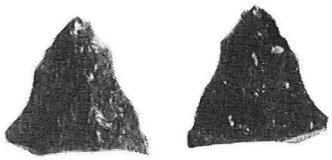


▲4-2 細石刃核

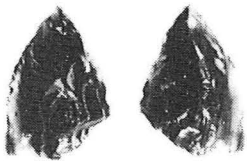
▲4-3 細石刃



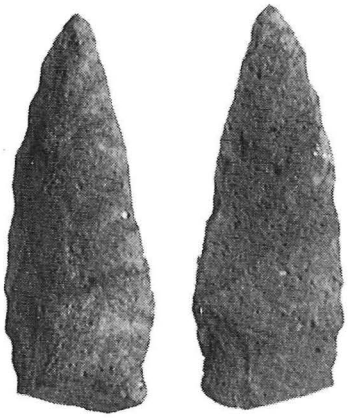
◀4-5 スクレイパー



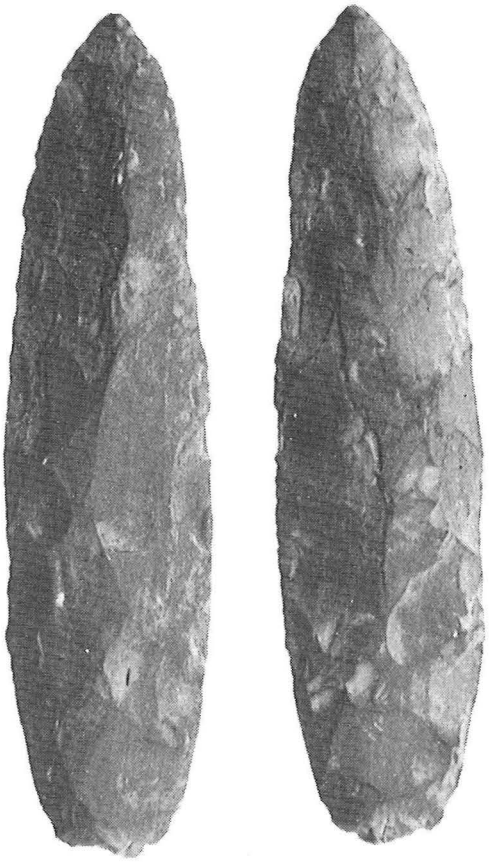
1



2

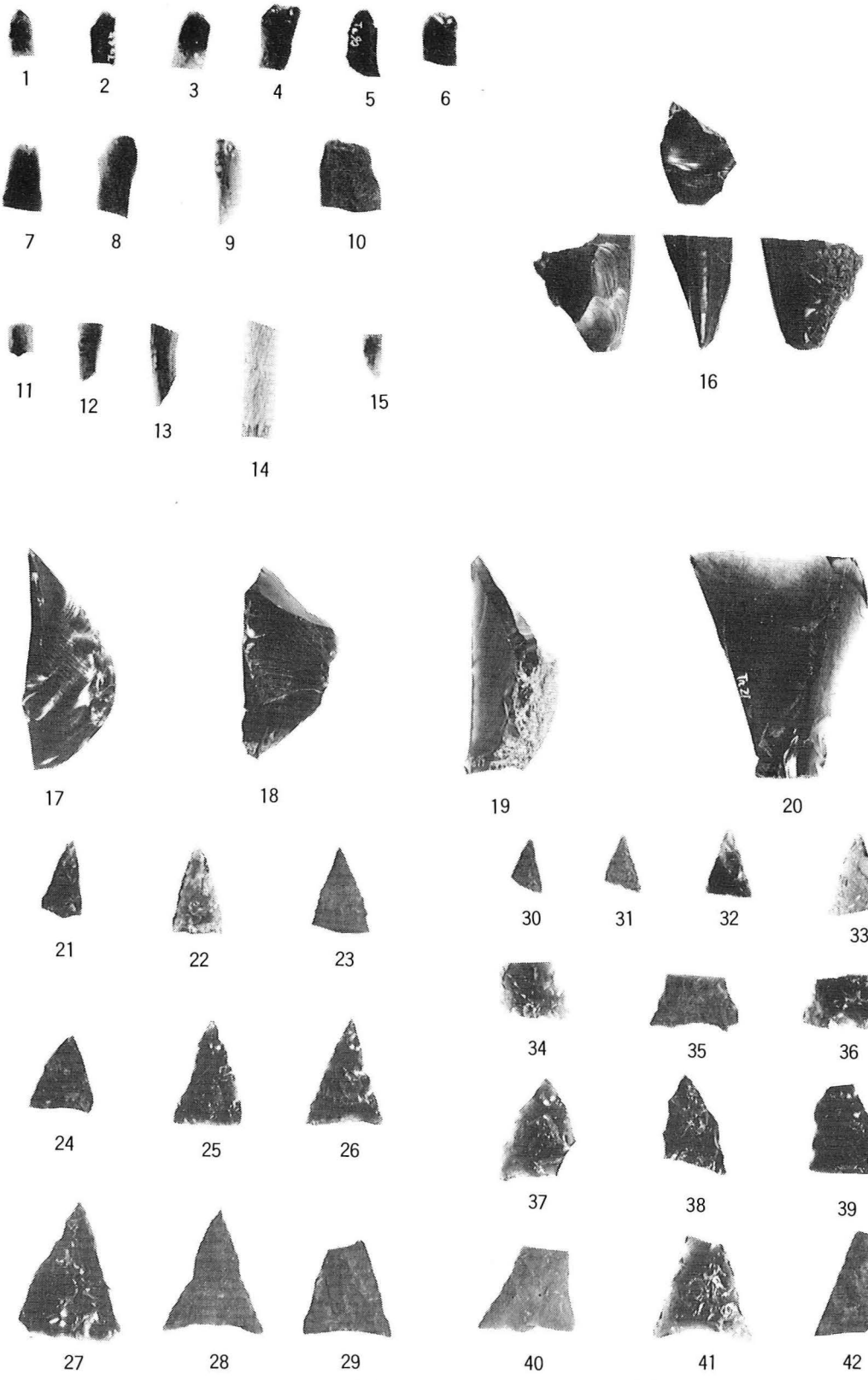


3

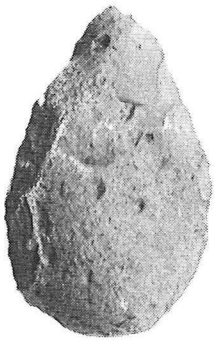


4

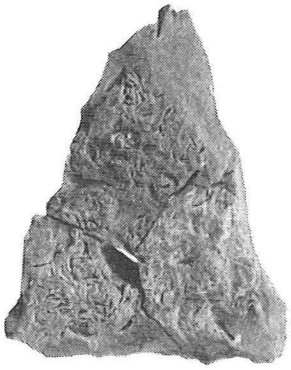
出土石器（尖頭器）



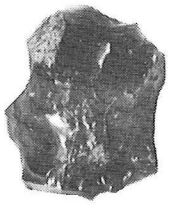
出土石器（細石刃・細石核・彫器・石鏃）



1

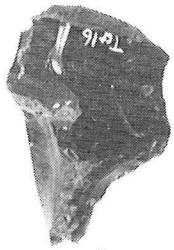


2

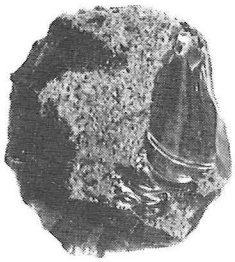


3

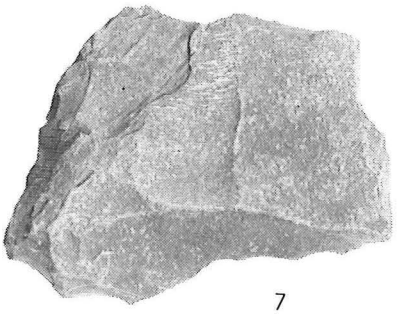
4



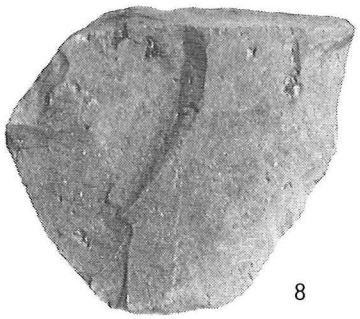
5



6

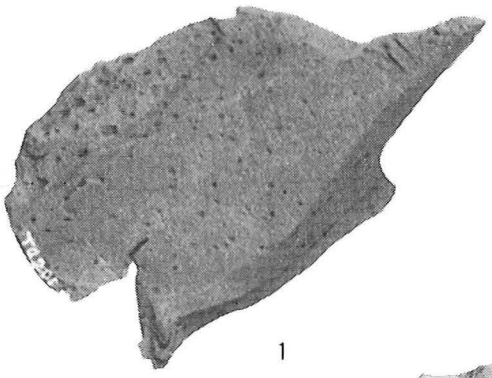


7



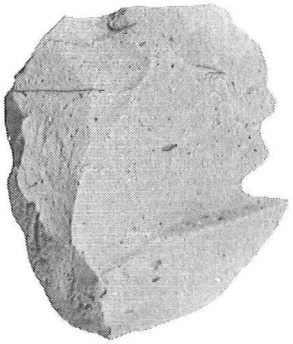
8

出土石器掻器・削器

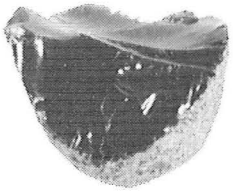


1

2

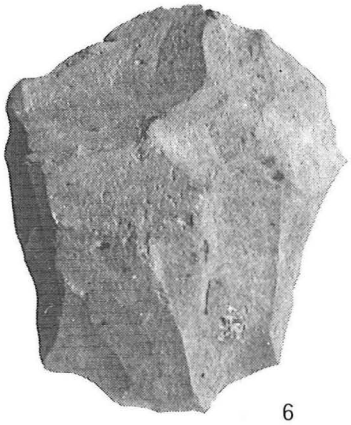


3

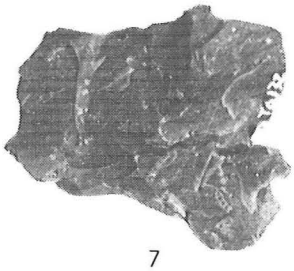


4

5

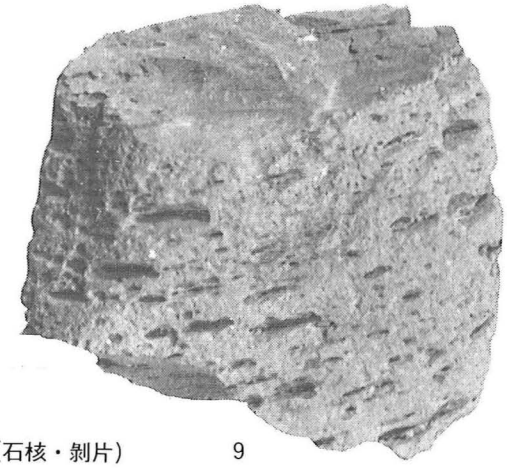


6



7

8

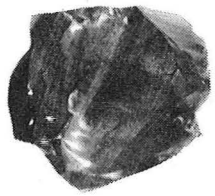


9

出土石器（石核・剝片）

1

2


3

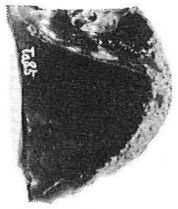
4

5

6

7

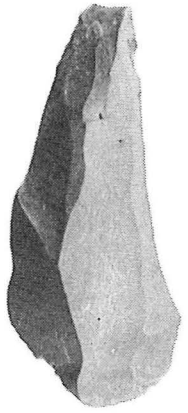
8


9

10

11

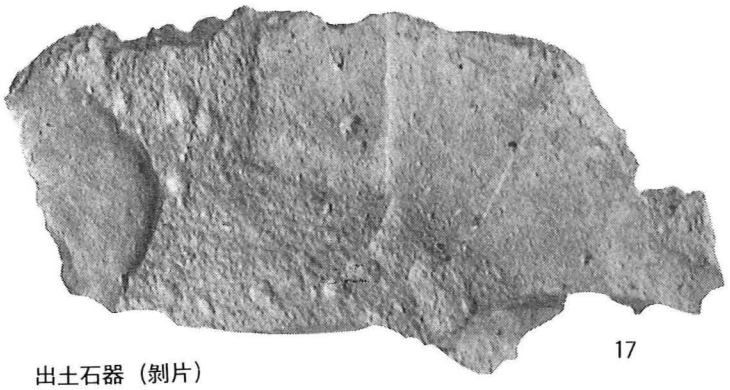
12

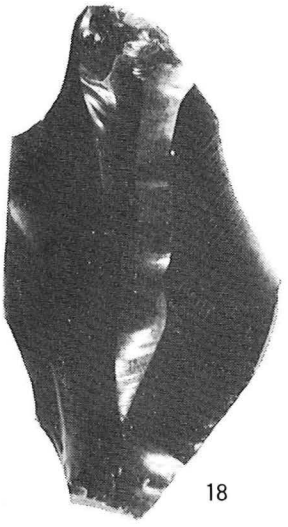

16

13

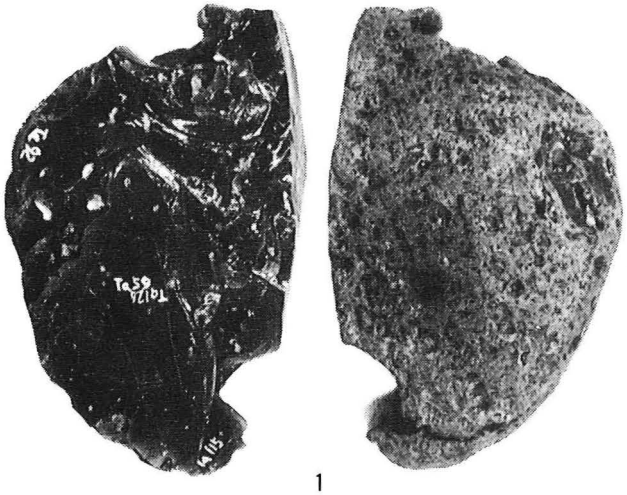
14

15


17


18

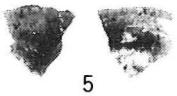
出土石器（剝片）



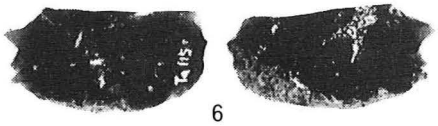
1

2

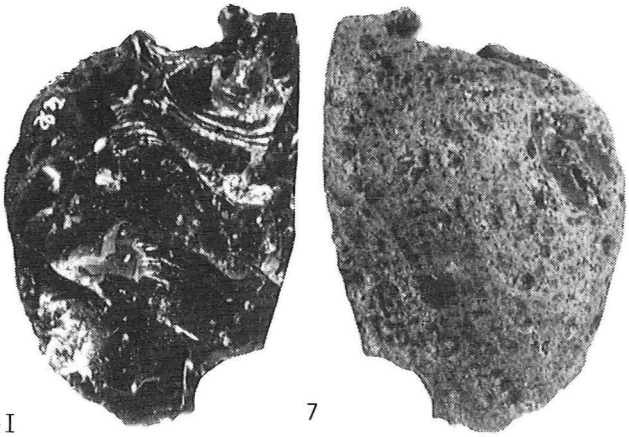
3　4



5

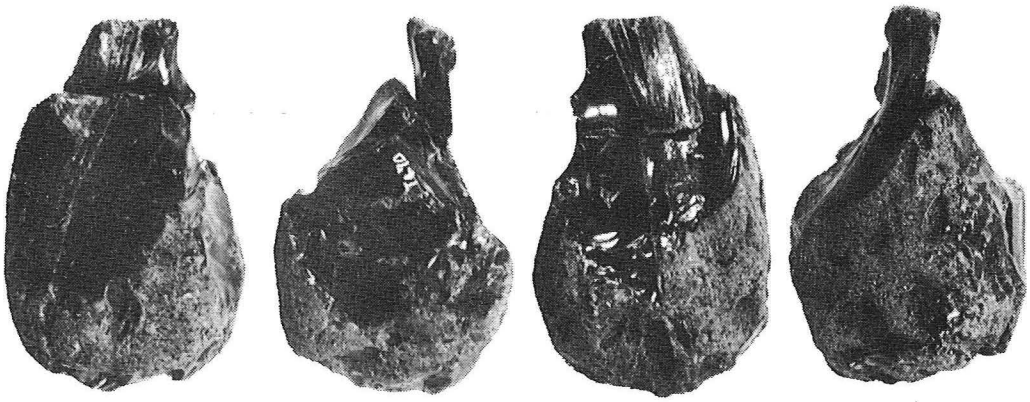


6



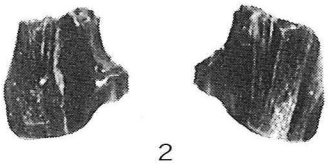
7

接合資料Ⅰ

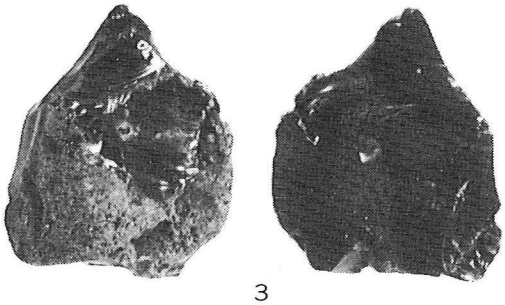


a　b　c　d

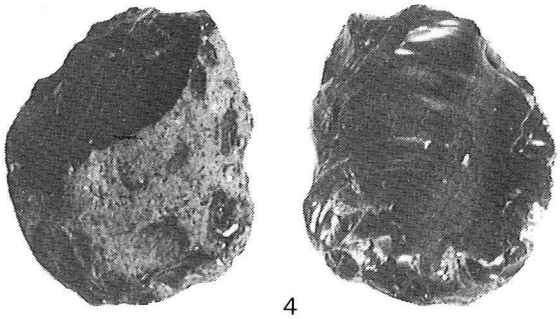
1



2

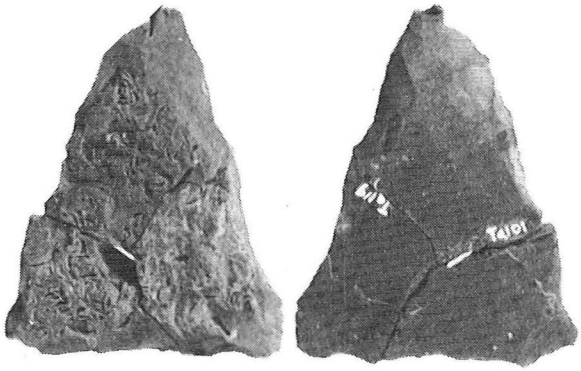


3

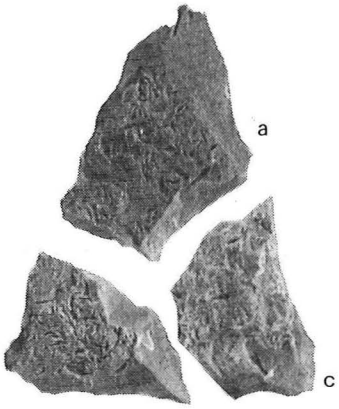


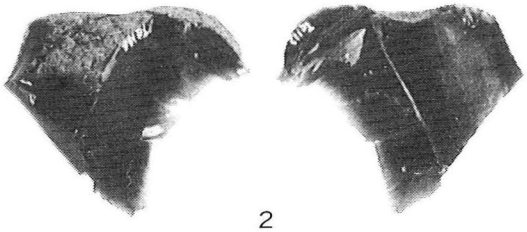
4

接合資料Ⅱ

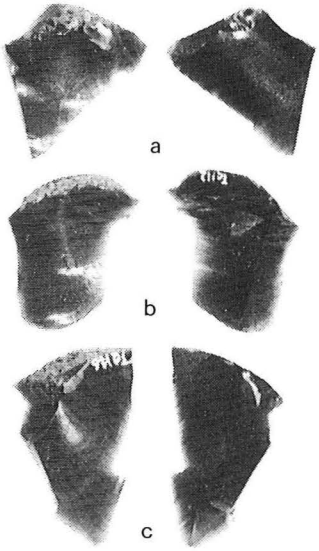


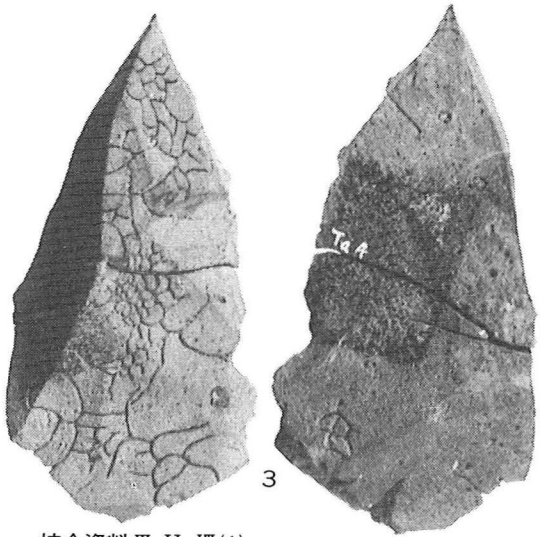
1



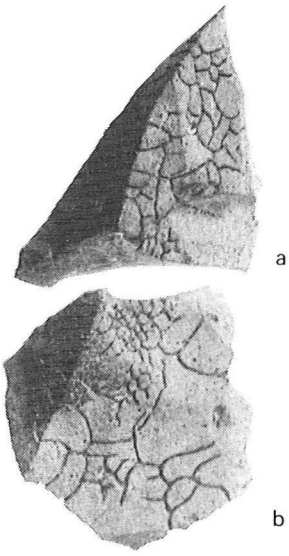


2

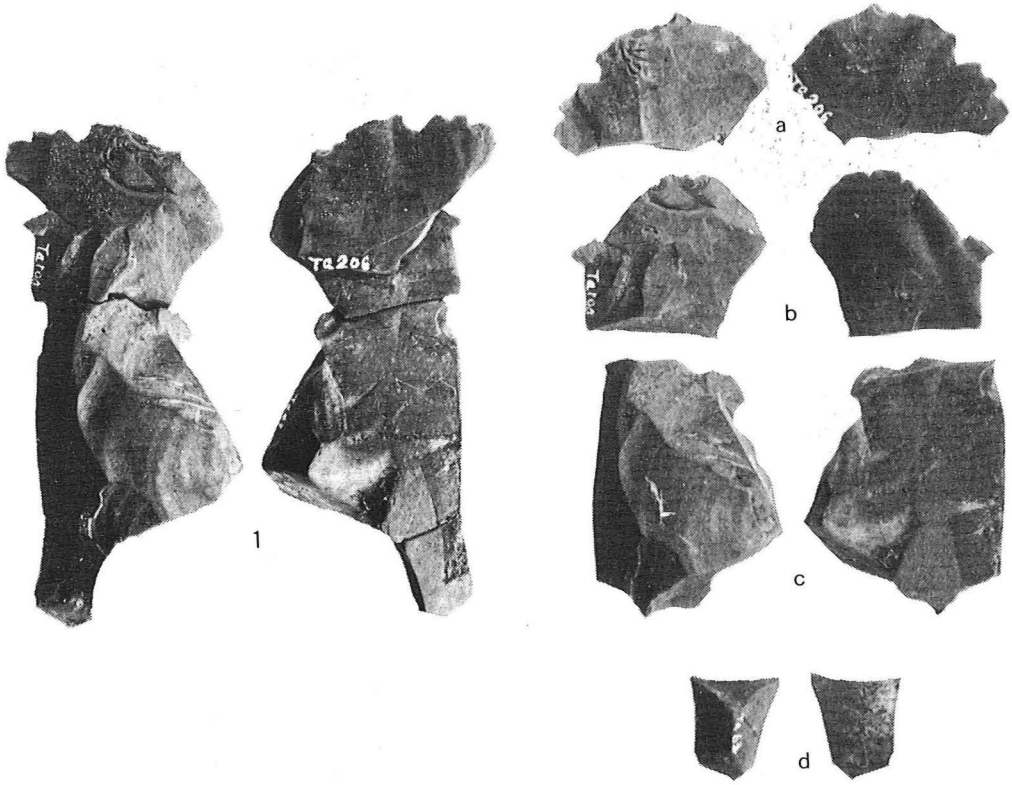


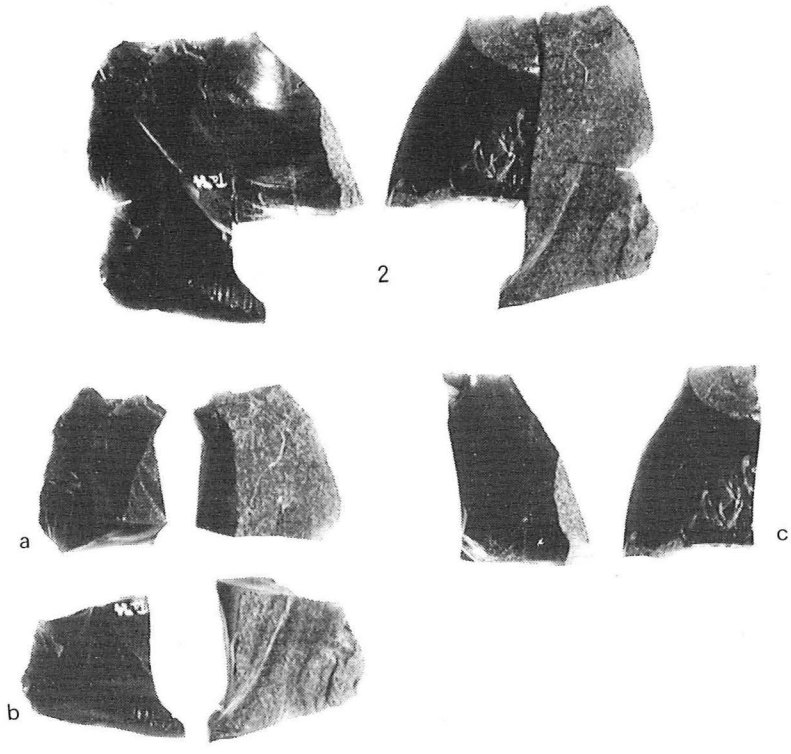


3

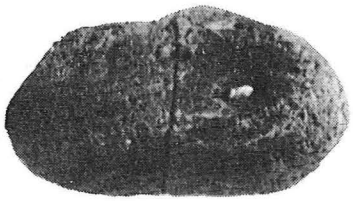


接合資料Ⅲ·Ⅴ·Ⅶ(1)



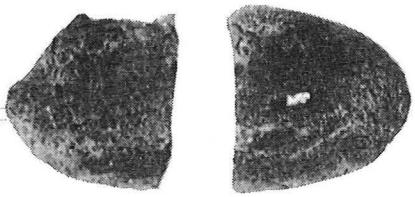


接合資料Ⅳ



a

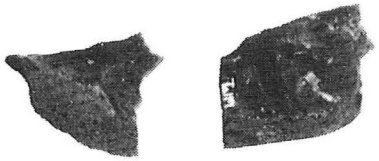
1



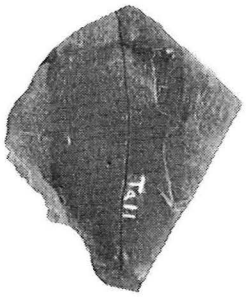
b

a

2

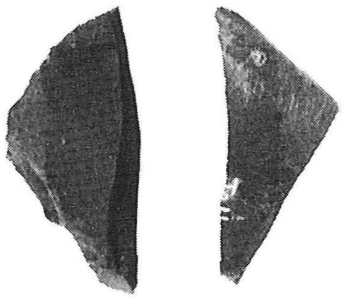


b

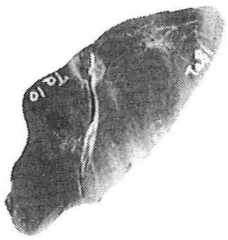


a

3

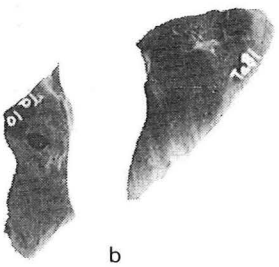


b

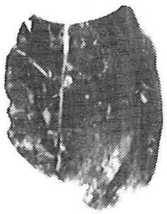


a

4

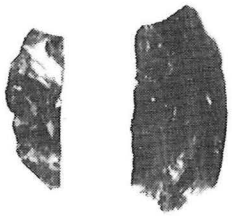


b

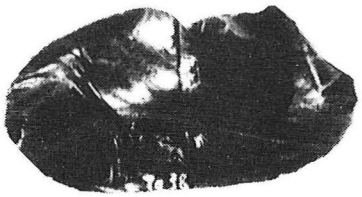


a

5

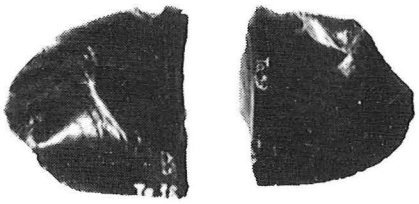


b



c

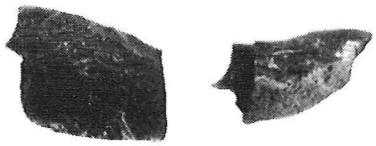
1



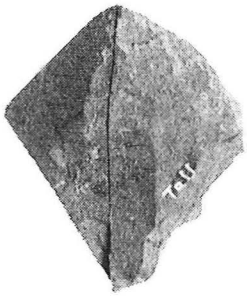
d

c

2

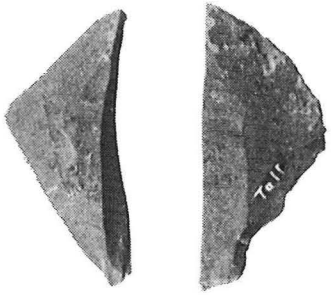


d

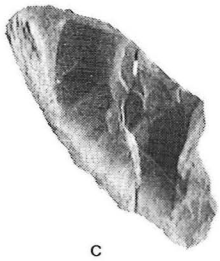


c

3

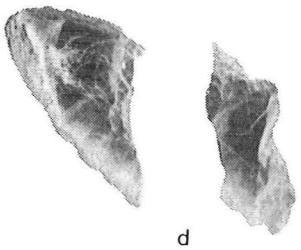


d

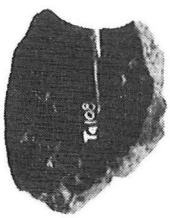


c

4

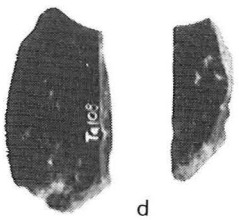


d



c

5



d

接合資料Ⅵ·Ⅶ(3)

Ⅱ　五反田遺跡

——東彼杵郡川棚町所在——

例　　言

1．本書は，昭和47年，川棚川堤防欠壊に伴う同河川堤防復旧工事にさきだって実施した，五反田遺跡の発掘調査に関する報告書である。

2．調査は，県教委主催のもと，県文化課指導主事正林護・同課学芸員補（当時，現在主任文化財保護主事）田川肇が担当して実施した。

3．本書の作成にあたっては，県文化課文化財保護主事宮崎貴夫が遺物の項を担当したが，以外は正林が担当執筆した。

4．本書の編集は正林による。

5．遺物は県文化課に保管中であり，遺構（石棺）の半数については川棚町公民館庭に復原して公開している。

6．本遺跡の調査記録類の内，石棺棺身部の図面及び写真が紛失したため，十全の報告とは成り得なかった。その責は調査担当者にある。向後，それらの発見があれば出来るだけ早期に追補報告を行いたい。寛恕を請う次第である。

本　文　目　次

Page

1．はじめに……108
2．五反田遺跡の環境と立地……110
3．調査……112
　A区の調査……114
　B区の調査……123
4．出土遺物……125
5．大村湾沿岸の石棺について……131

挿　図　目　次

Fig. 1　川棚町位置図……107
Fig. 2　川棚町および周辺地区遺跡分布図……109
Fig. 3　五反田遺跡周辺図……111
Fig. 4　五反田遺跡周辺および調査区図……113
Fig. 5　A区北端部土層図……114
Fig. 6　A区遺構配置図……115
Fig. 7　第1号石棺実測図……116
Fig. 8　第2号石棺実測図……117
Fig. 9　第3号石棺実測図……118
Fig.10　第4号石棺実測図……119
Fig.11　第5号石棺実測図……120
Fig.12　第6号石棺実測図……123
Fig.13　石列遺構実測図……121・122
Fig.14　B－1区土器出土状況図……124
Fig.15　出土土器実測図①……126
Fig.16　出土土器実測図②……127
Fig.17　出土土器実測図③……127
Fig.18　出土土器実測図④……127
Fig.19　大村沿岸および県南における箱式石棺墓所在地……135

表　目　次

Page

Tab. 1　川棚町および周辺遺跡----109
Tab. 2　出土遺物一覧表----129・130
Tab. 3　大村湾沿岸地域および県南部における石棺所在地----136

図　版　目　次

PL. 1　遺跡----141
PL. 2　遺跡----142
PL. 3　遺構 ①----143
PL. 4　遺構 ②----144
PL. 5　遺構 ③----145
PL. 6　遺構 ④----146
PL. 7　遺構 ⑤----147
PL. 8　遺物出土状況----148
PL. 9　遺物----149

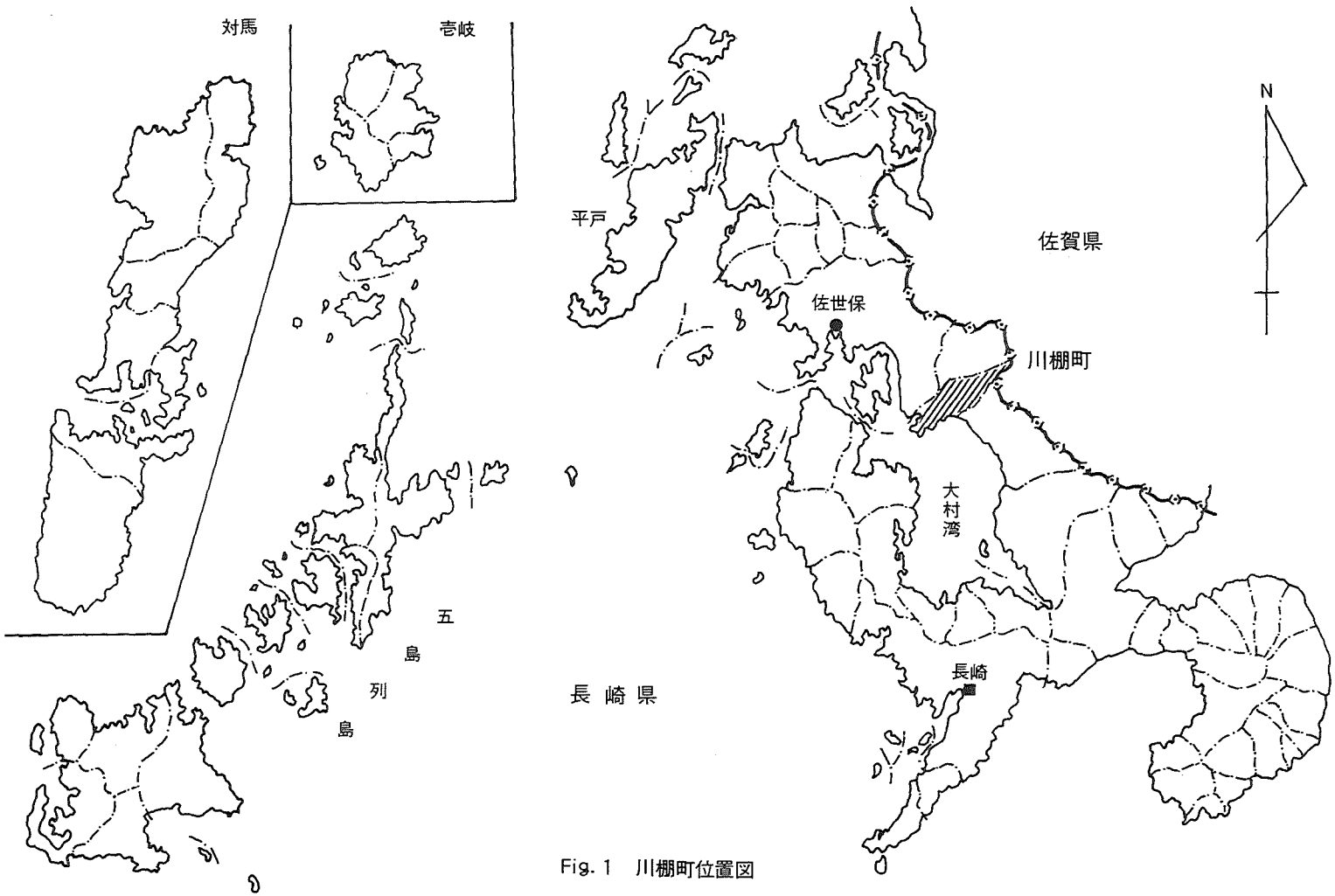


Fig. 1　川棚町位置図

1．はじめに

昭和47年６月の豪雨禍は県下一円を襲い，長崎県央部の佐世保市・東彼杵郡一帯・大村市及び諫早市等における被害は特に激しかった。東彼杵郡波佐見町及び川棚町は，波佐見盆地と川棚川によって結ばれる地域であるが，豪雨は田畑を襲い，河川を氾濫させた。この豪雨によって，川棚川は，その支流である猪乗川の水をもあわせて一大奔流となり，堤防の欠壊を生ぜしめた。本報の調査の原因となった堤防の欠壊も，この豪雨禍によるものであった。

川棚町在住の高校生（当時）山口敏之君は，豪雨禍による堤防欠壊の断面に箱式石棺等を発見し，地元の郷土史家喜々津健寿氏に急報し，同氏より６月28日，県文化課に事態の報告がもたらされた。翌29日，文化課指導主事正林護が，関係機関と連絡のうえ現地へ急行し，事態の把握と前後措置の検討につとめた。

現地は，幅約20ｍにわたって堤防が欠壊しており，欠壊した断面には箱式石棺の小口が２基露出し，一部石材は河床に崩落していた。遺構とは別に，土師質の土器片や滑石製石鍋の破片が発見された。この時点で，すでに応急堤防と排水溝工事が実施されていたが，一帯はすでに川棚地区圃場整備事業と川棚川河川改修事業の計画が実施年に当たっており，当該工事が着手されれば本遺跡の全壊は当然，不可避の事態になるところであった。

石棺墓群の墓域は，堤防東側の水田部にも展開し，石鍋片等の発見により，時期の異る遺跡の存在も予察された。これらの取扱いについての協議をはかるべく，遺跡の包蔵範囲等を確認すべく，７月23日～26日の間，文化課指導主事正林護・学芸員補（当時）田川肇は試掘調査を実施した。その結果，①本遺跡は欠壊した堤防上及び以東に広く展開していること。②仮堤防部は，一部が露出している遺構を除けば，旧状(水田)に復する限りにおいては遺跡は保存されるので必ずしも調査の必要はないこと。③堤防部については記録保存（発掘調査）の必要があるが，台風の時期も目前であり，早急に実施される必要があること。以上の諸点を，県河川砂防課・同耕地課・県北振興局・川棚町長・同町教育委員会に回答し，この線にそって緊急発掘調査が実施されることになった。

調査は昭和47年９月26日～同10月５日までの10日間，　前記２名の調査員と県文化財保護員(現文化財保護指導委員)井手寿謙氏によって実施された。調査の直接関係者は前記のとおりであるが，遺跡の取扱いについては，村木川変流工事（波佐見町）にかかる山角遺跡の調査（本書収録）との関係もあって，県河川砂防課・同耕地課・県北振興局・佐世保教育事務所・川棚町・同町教育委員会の方々には，災害復旧工事との調整について，経費負担を含めて御努力いただいた。本報は，やや旧聞に属する調査報告であるが，これらの方々によって調査が終了し得たことを記して謝意を表したい。

また，遺構群の一部は昭和49年，川棚町公民館敷地の一隅に移築し，公開されていることを付記しておく。

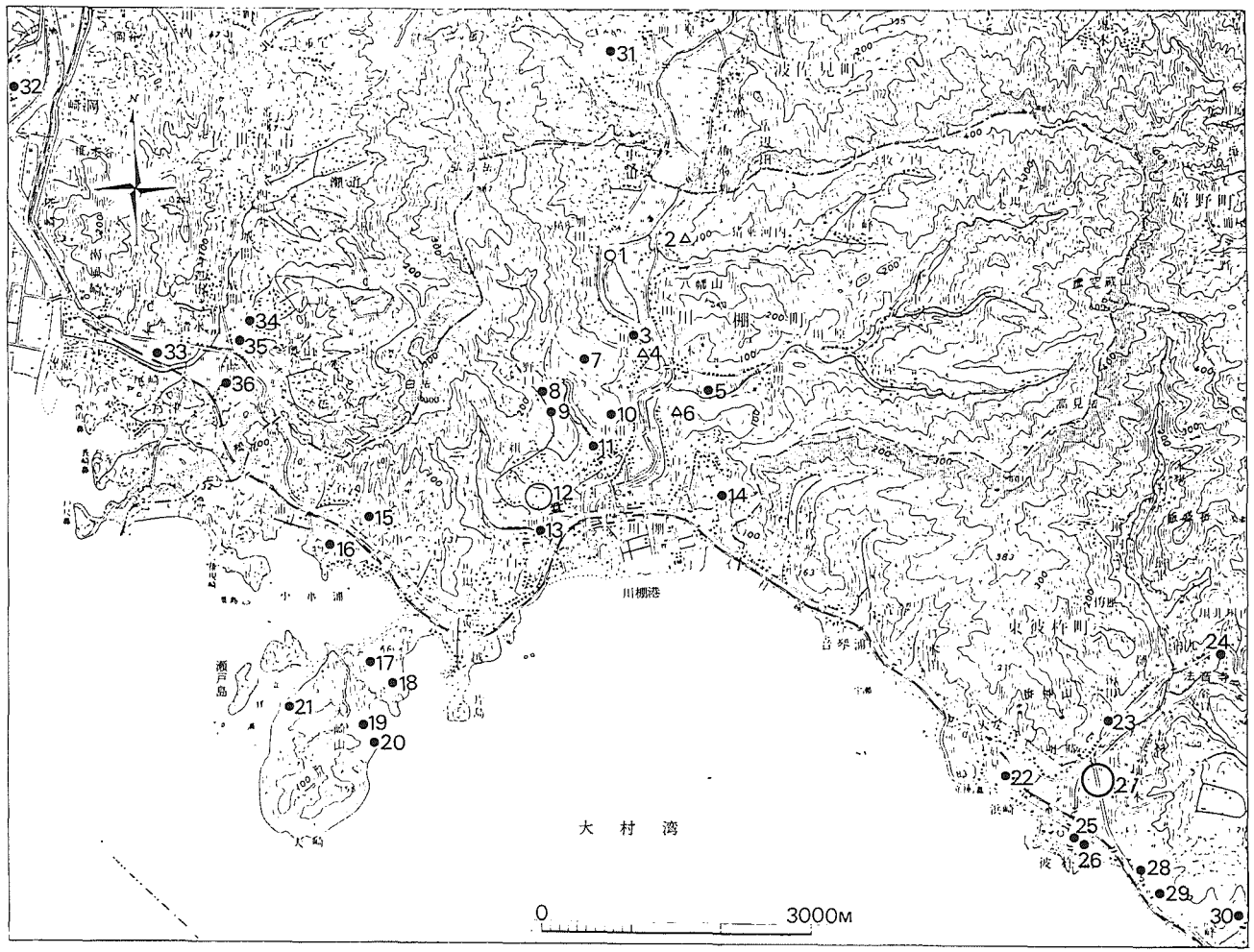


Fig. 2　川棚町および周辺地区遺跡分布図

第1表 川棚町および周辺遺跡

No.	遺跡名	全国遺跡地図番号	所在市町
1	**五反田遺跡**	25—60	川棚町
2	小峰城跡	25—61	〃
3	川良遺跡	25—99	〃
4	河原遺跡	25—98	〃
5	川棚石下遺跡	25—101	〃
6	風南城跡	25—100	〃
7	野口遺跡	25—96	〃
8	野口前遺跡	25—92	〃
9	野口遺跡	25—93	〃
10	平遺跡	25—97	〃
11	川棚中学遺跡	25—95	〃
12	川棚高校遺跡	——	〃
13	千渡古墳	25—94	〃
14	数石遺跡	25—102	〃
15	亀山猫跡A	25— 85	〃
	亀山猫跡B	25— 86	〃
16	西小串窯跡	25—84	〃
17	三越遺跡	25—90	〃
18	川棚大崎遺跡	25—91	〃
19	三河内キャンプ場遺跡	25—88	〃
20	くぐりの岩洞穴	25—89	〃
21	大崎遺跡	25—87	〃
22	彼杵中学校古墳	25—107	東彼杵町
23	三根古墳	25—111	〃
24	川井郷地遺跡	25—123	〃
25	瓢箪塚古墳	25—109	〃
26	ワレ権現塚古墳	25—110	〃
27	彼杵川古墳群	25—108	〃
28	名切遺跡A	25—127	〃
29	名切遺跡B	25—128	〃
30	平遺跡A	25—129	〃
31	銭甕塚古墳	25—59	波佐見町
32	三明島遺跡	25—53	佐世保市
33	天神屋敷遺跡	25—79	〃
34	宇都宮神社遺跡	25—80	〃
35	てっぽ神古墳A	25 81	〃
	てっぽ神古墳B	25 82	〃
36	鬼塚古墳	25—83	〃

2．五反田遺跡の環境と立地

五反田遺跡は長崎県東彼杵郡川棚町上組郷徳島にある。東彼杵郡は，律令制下にあっては，「彼杵郡」とされた大村湾東岸一帯の地であり，現在，佐賀県嬉野町に隣接する波佐見町と川棚町・東彼杵町の3町よりなっている。東隣の波佐見町は陶器（波佐見焼）の町として著名であるが，広い「波佐見盆地」を中心に町が開け，佐世保・嬉野（佐賀県)・有田（佐賀県）・川棚町に通じる街道が盆地の中央に集まり「宿」なる地名が遺存している。

川棚町に至る街道も，ここより分岐して，現在の国道205号線に川棚町内において合している。この街道は，波佐見盆地より南下する波佐見川（川棚川上流）を左右しながら南下している。川棚川は，波佐見盆地から南流して，狭隘な平野を潤しているが，途中猪乗川及び石木川と合流して，町を東西に2分する形で大村湾に注いでいる。川棚町は全体に山地形部分が多く，川棚川流域以外には殆んど平野部がなく，殊に川棚川東部は霊場虚空蔵山（608.5m）の峻険があり，集落の発達を見ない。川棚川西部は，東部ほどではないが，弘法岳（387m）に代表される山々が峻しい。虚空蔵山を中心とする川棚川東部山地は佐賀県との県界をその分水嶺によってなしており，同山地からは前述の猪乗川・石木川が西流している。虚空蔵山一帯は安山岩を基盤としており，石木川流域は石切場として利用されている。

かかる全体地形の中にあって，川棚川流域は唯一の平野部を形成し，水田が営まれているが流域水田地帯の幅は平均1㎞弱で上流に至るほど広幅であり，集落も山裾に狭長な展開を見せている。下流域は上流域に比して狭幅であり，岩立，中組郷一帯では殊に幅が狭く，200m程度である。

町内における遺跡の分布状況も，かかる地形と関連した立地を示しており，川棚川の中・下流域と大村湾に突出する大崎半島一帯に集中している。いちいちの遺跡について述べる紙数を持たぬが，大崎半島には黒耀石原産地があり鶏卵大のペブルを産している。この原石は黒色で光沢があり，大村湾沿岸一帯に相当流布していると考えられ，川棚町内でも野口遺跡（全国遺跡地図長崎25−92)では，地元郷土史家喜々津健寿氏の採集になる石鏃等に利用されており，現在県立川棚高等学校およびその裏手微高地（前掲地図記載なし）でも豊富な剝片や石核が採集されている。川棚町市街区は平坦な沖積地で，一見遺跡の立地条件として好適の感があるが，川棚川の河流によって堆積した円礫層が厚く，遺跡の立地にはむしろ不適である。

本報の五反田遺跡の立地する川棚川流域においても，本書別項で報ずるごとく，下層には礫層があり，狭隘な谷間を奔流する川棚川の影響をほぼ全面に受けていたと考えられる。町の北辺を西流する猪乗川が川棚川に合するあたりは，平野部の幅が町内で最も広く，約1㎞弱を計る。かつてこのあたりは，平野部のほぼ中央を川棚川が走っていたといわれ，江戸時代中期における変流工事によって，現在の流路が開かれたといわれる。変流工事の目的については定か

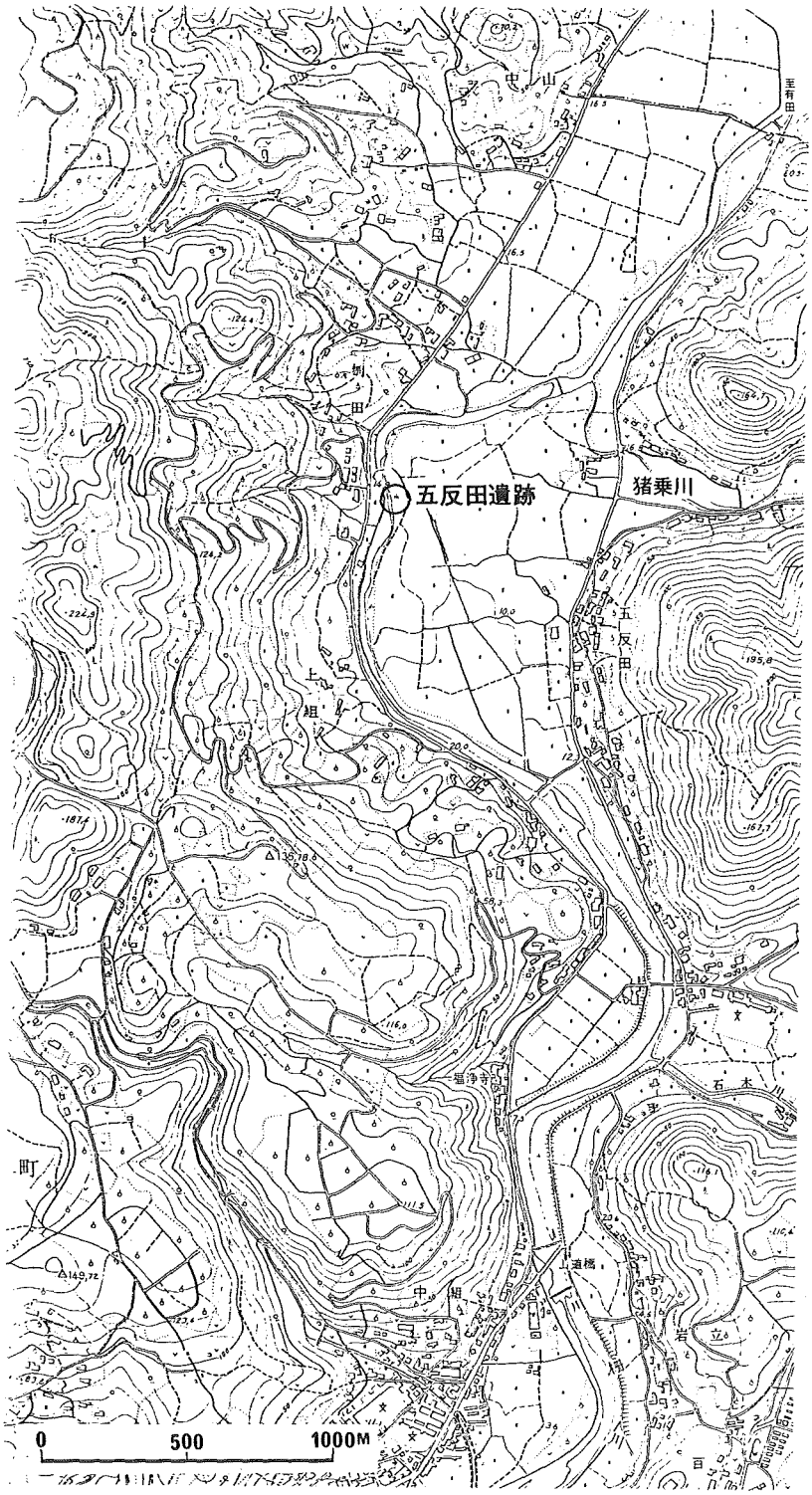


Fig. 3　五反田遺跡周辺図

でないが，猪乗川と川棚川合流地点の水田部を，氾濫から護り，可耕面積を確保する目的のもとに行われたとの口碑があり，「五反田」なる名称もこの変流工事によって確保された水田に因んで付された地名であるともいわれる。

五反田遺跡が立地しているのは，現在の川棚川の東岸であり，かつては，刎田の山裾に連なる舌状の微高地であったといわれ，この微高地を南北に断ち切る形で前述の変流工事が行われた，といわれている。「徳島」なる通称も，この「切断」によって島状にのこされた微高地に因んだものとされており，河床に散乱した石棺材と思われる板状安山岩の磨耗がそのことを示していると考えられ，昭和47年，調査時点で河床から発見された同種石材の角張り方と好対照をなしていたことを報じておく。

遺跡の直接周辺は，西側を現在は川棚川が大きく迂回して流れ，東手一帯は，いわゆる「五反田」の水田地帯である。遺跡の標高は約10ｍで，水田部と大体同レベルであるが，かつては水田部は湿地状態であったといわれており，遺跡よりすれば，水田地帯を望見する景観が展開したものであろう。

3．調　査

調査区は，Ａ・Ｂ区に分けて設定した。Ａ区は，堤防欠壊をおこした川棚川東岸の堤防直下部分に当たり，南北約21m，幅は堤防盛土を除去したレベルで幅3ｍの不整形な平面である。Ｂ区は，7月時点で高圷脚部等が出土したA区南方約40mの河川敷で，レベルよりすれば，遺跡・遺構が整層状態で検出される可能性はうすかったものの，土の状態がＡ区包含層と似た点があったため，念のため設定した調査区であり，第５図に示したごとく，およそ南北に2m×12m範囲を設定し，北からＢ－１～３区なる記号を付した。なお，Ａ区東側に作られた応急仮設堤防と排水溝部分に，調査中，新たに５号・６号の石棺を発見したため，これらについても発掘調査を実施したが，Ａ区に含めて通し番号を遺構に付し，調査区を別に設定しなかった。

Ａ区においては結果的に６基の箱式石棺と石列遺構１基を検出したが，Ｂ区においては若干の土器片を検出したものの，整層状態での遺跡・遺構とは考え難いものがあった。このため本稿では，主としてＡ区の調査について述べることにする。

なお，遺構状態報告にとって不可欠な実測図と写真のうち，棺身部に関するものについて，紛失という重大ミスによって報告できない失態を報告しておく必要がある。県文化課草創期の度重なる事務所移転に伴う紛失と考えられるが，紛失という重大事の釈明にはなり得ないことを承知しつつも，あえて事態の報告をして諸賢の寛恕を得たい。

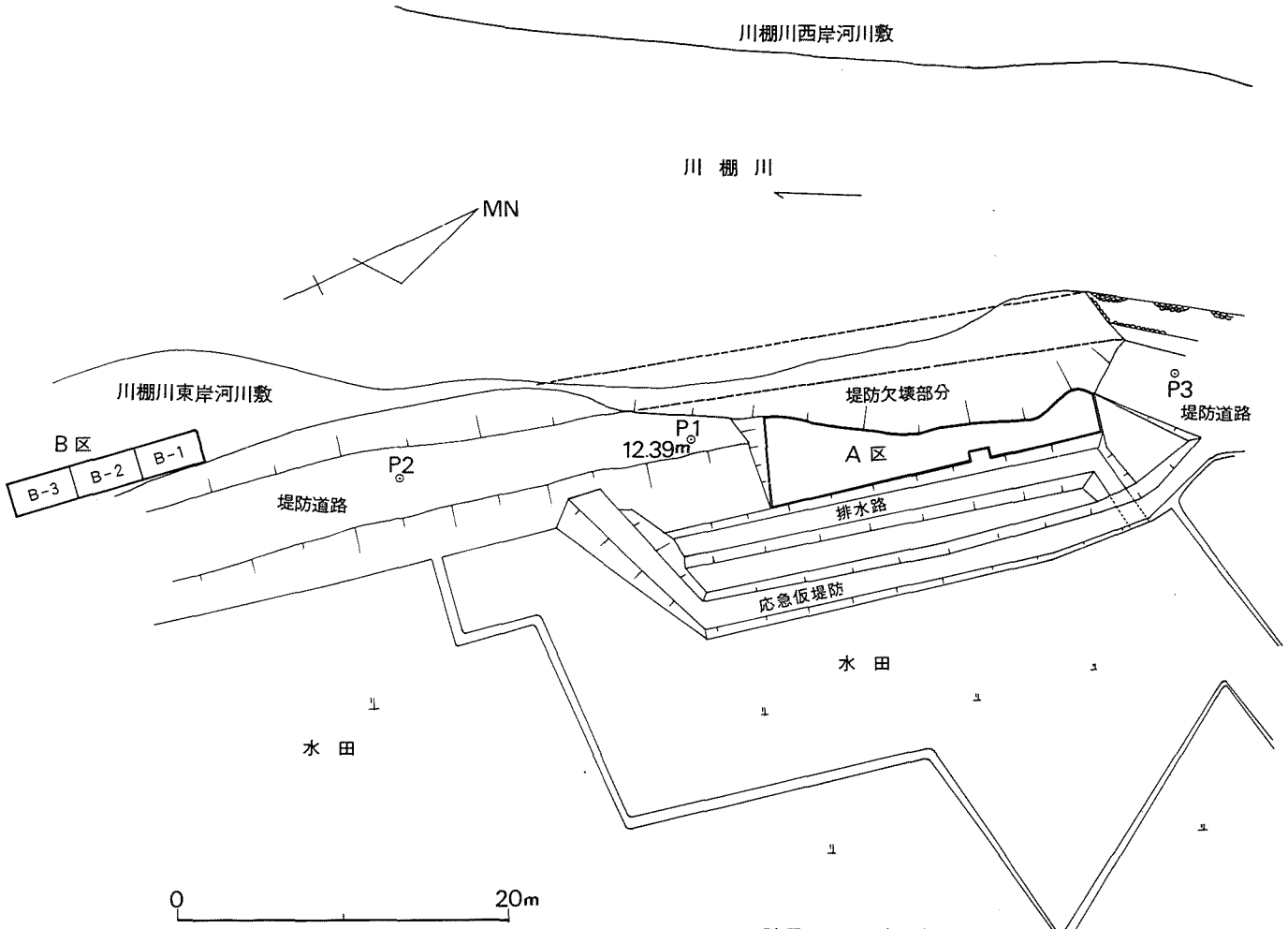


Fig. 4　五反田遺跡周辺および調査区図

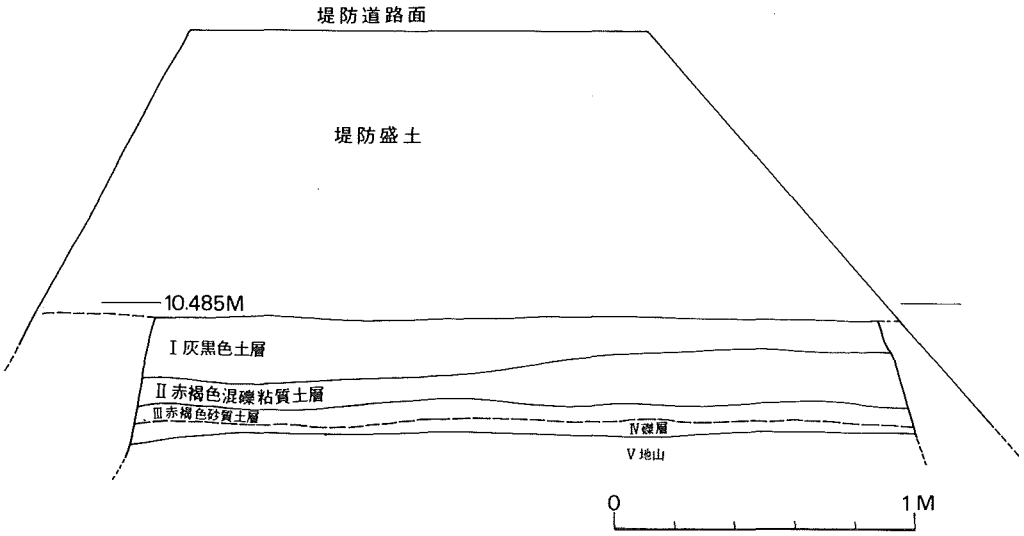


Fig. 5　A区北端部土層図

A区の調査

(1) 土層

第6図に示したごとく，堤防盛土部分が約1mあり，旧地表面は10m強の旧水田面と考えられる灰黒色の土層（第Ⅰ層）と，その盤土と考えられる赤褐色の混礫粘質土層（Ⅱ層）が，合計深度30cm程あり，その下が赤褐色砂質土層（第Ⅲ層）になっている。遺構群はすべて，この第Ⅲ層に包含されている。

(2) 遺構

第Ⅲ層中において，箱式石棺墓6基と，石列遺構1基を検出した。箱式石棺はA区北端から，順次1～6号の番号を付した。各遺構とも完存状態のものはなかったが，ほぼ遺構の規模と構造は窺える状況にあった。完存状態でなかった理由は，堤防盛土の重圧が遺構に与えた影響と堤防の欠壊，排水溝設定によるものである。以下各遺構について述べる。

第1号石棺

A区北端において検出した。長軸をほぼ北東方向にとっている。石棺材は漏れなく角閃安山岩の板状石を用いている。蓋石は同材を3枚程度用いたと考えられるが，土圧のため散乱していて詳細な旧状は知り難い。但し，大村湾沿岸に多い石棺墓遺跡群の概観よりすれば頭位にまず蓋石をのせ，順次重ねていく傾向があるので，頭位は南西と考えられる。また，棺身の幅もこの部位において最も幅広であり，頭位は南西方向とすることができよう。棺身長は1.5mと長く，側壁材6枚，小口材に2枚の板状石を利用している。人骨および副葬品はなく，棺床の敷設物はない。

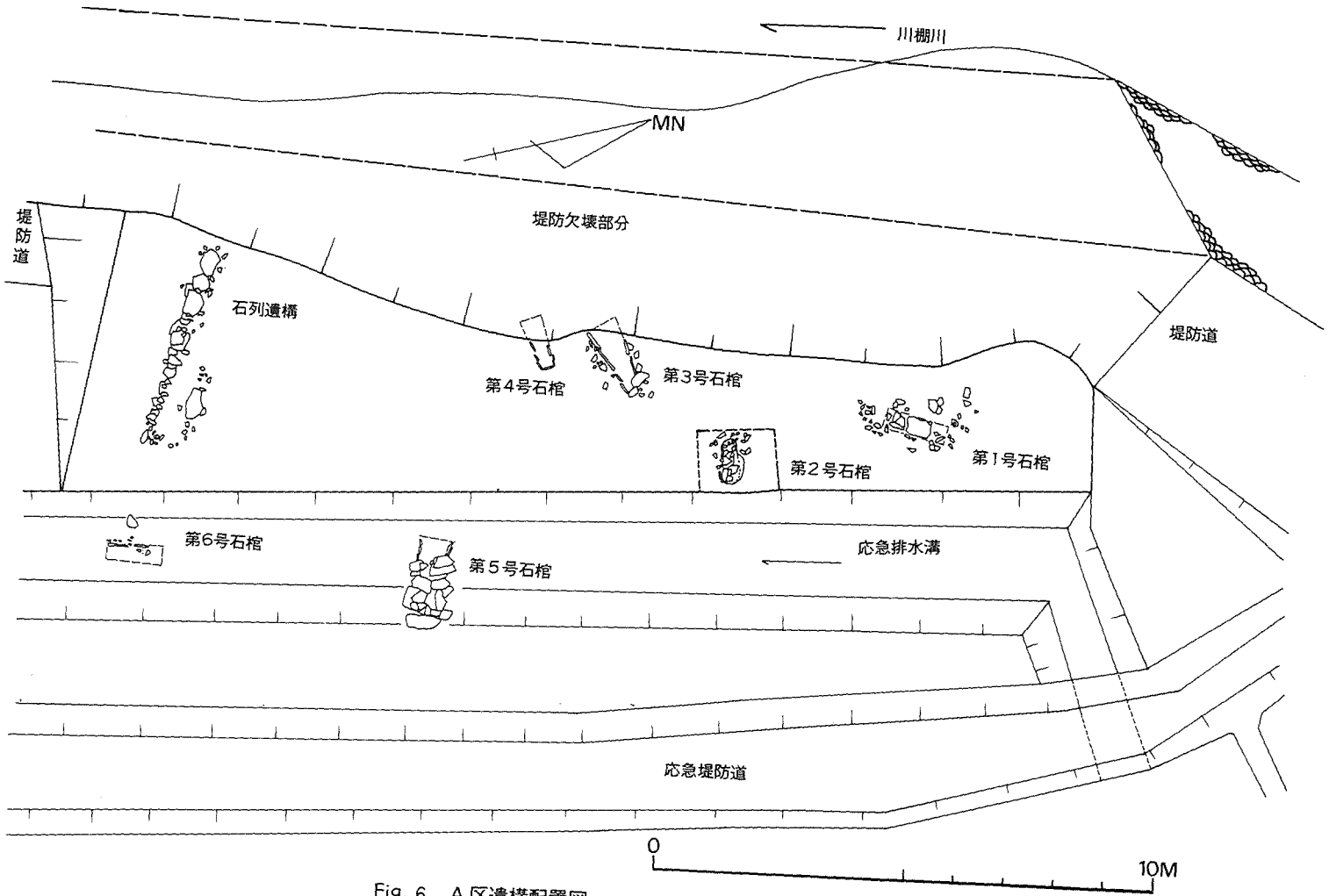


Fig. 6　A区遺構配置図

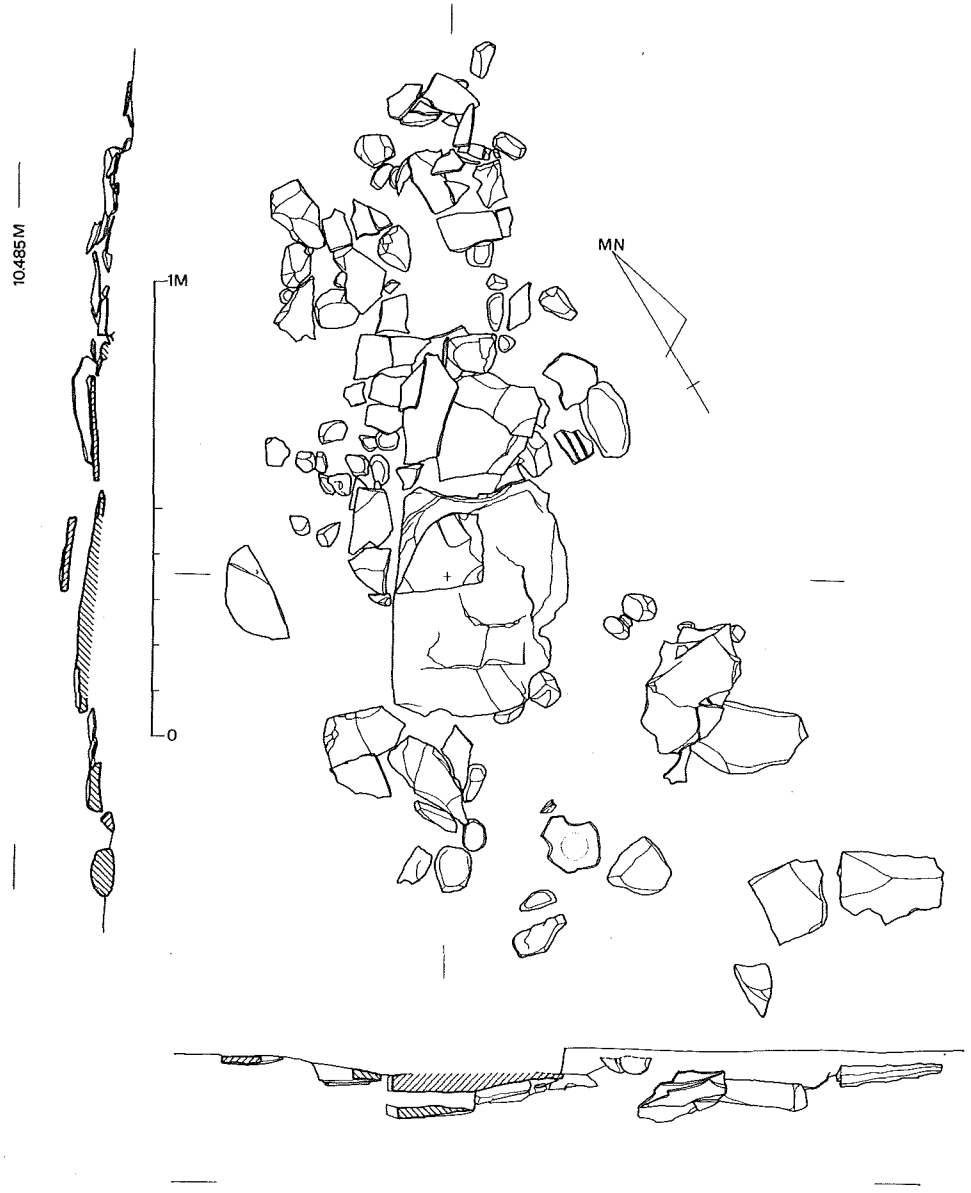


Fig. 7　第1号石棺実測図

第2号棺

A区の堤防道東側の部位で検出した。堤防欠壊後仮設された排水溝に東面しており，長軸はほぼ南北である。南端部は，前述の排水溝工事によって損壊しており，小口材等も失われている。また，土圧のために，棺身の側壁材は殆んど内側に倒れており，そのうえに蓋石材が落ちこんでおり，旧状を殆んどとどめていないが，両側に僅かに側壁材と西側小口材を残している

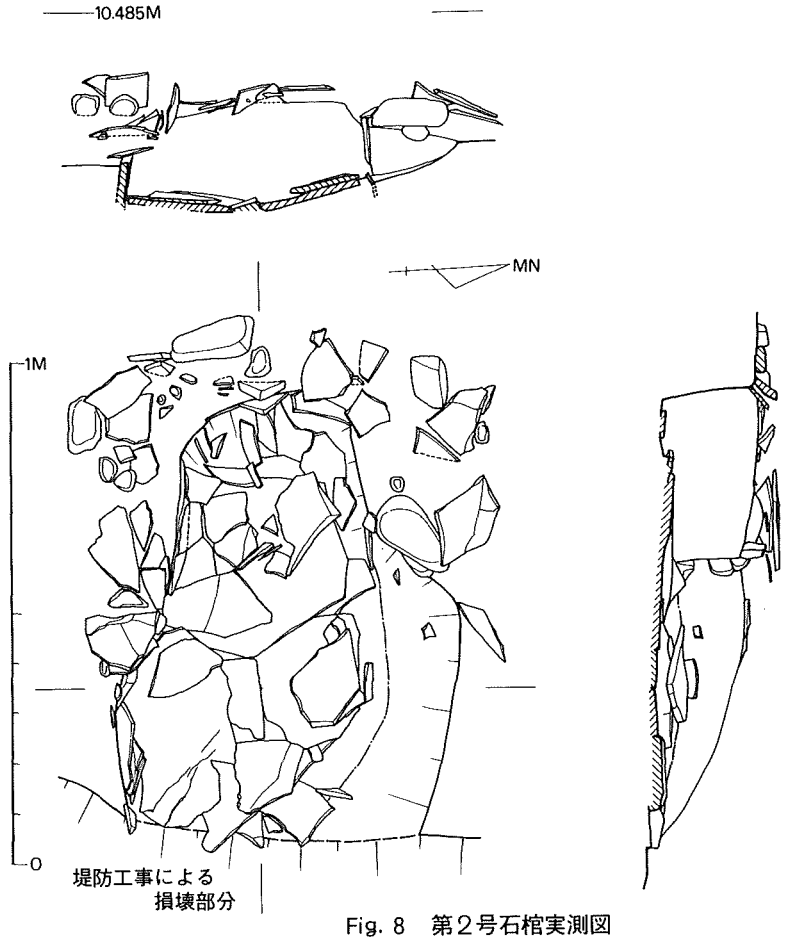


Fig. 8　第2号石棺実測図

ため，大体の旧状を窺い知ることができる。

棺身の両側壁材の間隔は，東部において広く，この点からして，東頭位の埋葬が行われたものと解される。東小口材は欠損しているため，棺身長は知り得ないが，側壁石材間隔との比較を考えれば1.8m程度の棺身長を有したものであろう。土壙は0.5m程度の幅に掘られているが，東半部は排水溝工事によるものであろう損壊が見られる。棺床の敷設施設はなく，副葬品もない。棺の東側と北側に人頭大の礫が各1あるが，特別の意味は認め難い。

第3号石棺

A区のほぼ中央部にあり，堤防欠壊の断面に小口を見せている遺構で，本遺跡発見の端緒となったものである。棺の蓋材はすでに，殆んど失われており，被覆の旧状は知り得ないが，東端小口部に一部遺存した石材があり，板状石材をもって蓋石が置かれていたことは疑いない。棺身の長軸は略東西で，西側小口部は堤防の欠壊によって斜断された状態になっていたが，本

来，両側壁材の状況よりして，長軸上1.8m程度を計る長大な棺身を有したものと解され，伸展葬が行われたものと解される。棺身の内法は西側において最も広幅で0.5m程度のものであったろう。この状態よりして，西頭位の埋葬が行われたものと解される。棺床の敷設物はなく副葬品・人骨の遺存はない。

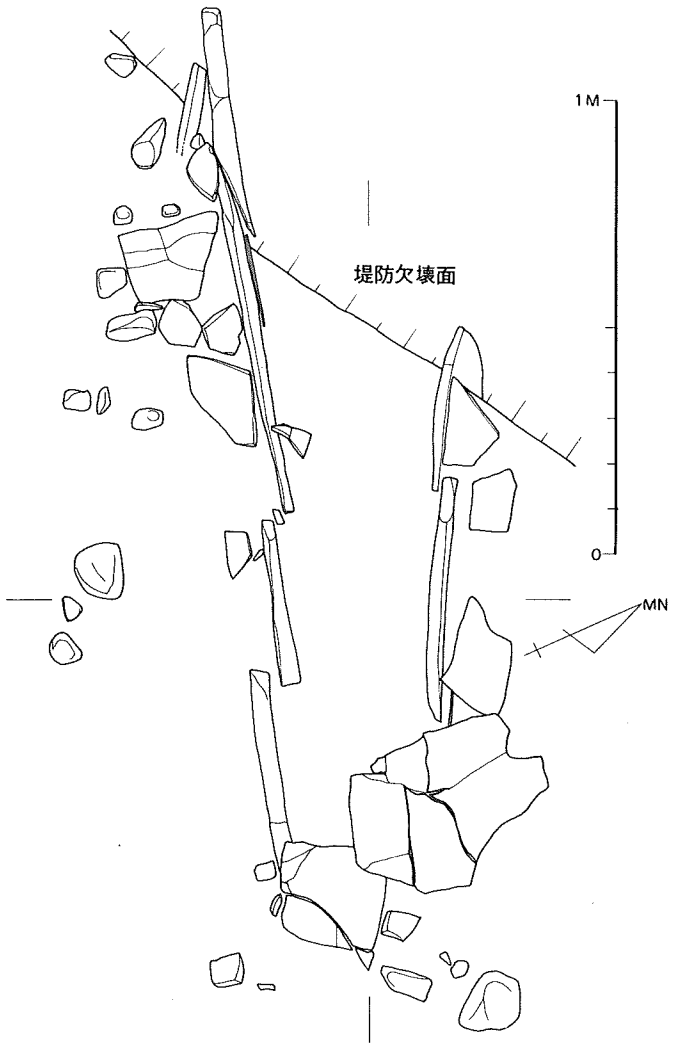


Fig. 9　第３号石棺実測図

第4号石棺

第3号石棺と併行する形でA区中央部において検出された。第3号とともに遺跡発見の緒となった遺構である。発見時，すでに蓋石材は全く失われており，小口材と両側壁材の約半分程度が堤防欠壊によって失われていた。蓋石材が失われたのは，3号同様，後世の開田によるものであろう。旧状の細部は知り難いが，遺存した6枚の棺身材の状況よりして，本来の規模と長軸方向および埋葬頭位は，殆んど第3号と同様であったと解される。ただ，3号に比して，棺身材の配列がバラバラの感じがあり。後世の開田作業による影響を強く受けたものと解される。棺床の敷設物および副葬品は3号同様，全く見られない。

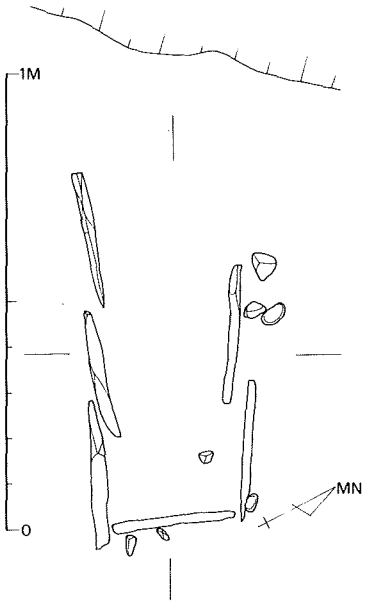


Fig. 10 第4号石棺実測図

第5号石棺

A区南辺の仮設応急堤防の斜面と応急排水溝部分にかけて発見した遺構で，棺材は悉く，後世の人為をうけて折損している。また，西小口部は蓋石・小口材共に失われており，細部は必ずしも旧状は明らかでない。長軸はほぼ東西に近く，棺身の両側壁材は西側において開く形となっており，内法は0.5m程である。蓋石は1m近い広幅ものを多用しており，3号石棺同様の規模をもっている。西側小口部の破損により棺身の長軸内法は不明であるが，全体の状況よりして2m弱の旧状が窺われる。西頭位の伸展葬が行われたことはほぼ窺える形状にある。棺床における石材・小礫等の敷設物はなく，人骨・副葬品ともに遺存しない。

第6号石棺

A区南東端部において検出した遺横である。応急排水溝の流路方向に併行した長軸方向をもち，棺身長軸はほぼ南北である。土壙底の一部が，立てられた3枚の石材の東側において確認されたので，3枚の立石は，西側壁材と解することができる。この状況よりして，本遺構は3・5号に比して小規模の遺構をもったものと考えられ，長軸上において0.8m程度の内法を有したものであろう。但し，頭位については他の遺構と異なり，明瞭でなく，周辺に散乱していた石材の数よりしても，小規模のものであったと解される。棺床施設・副葬品は不明であり，人骨の遺存もない。

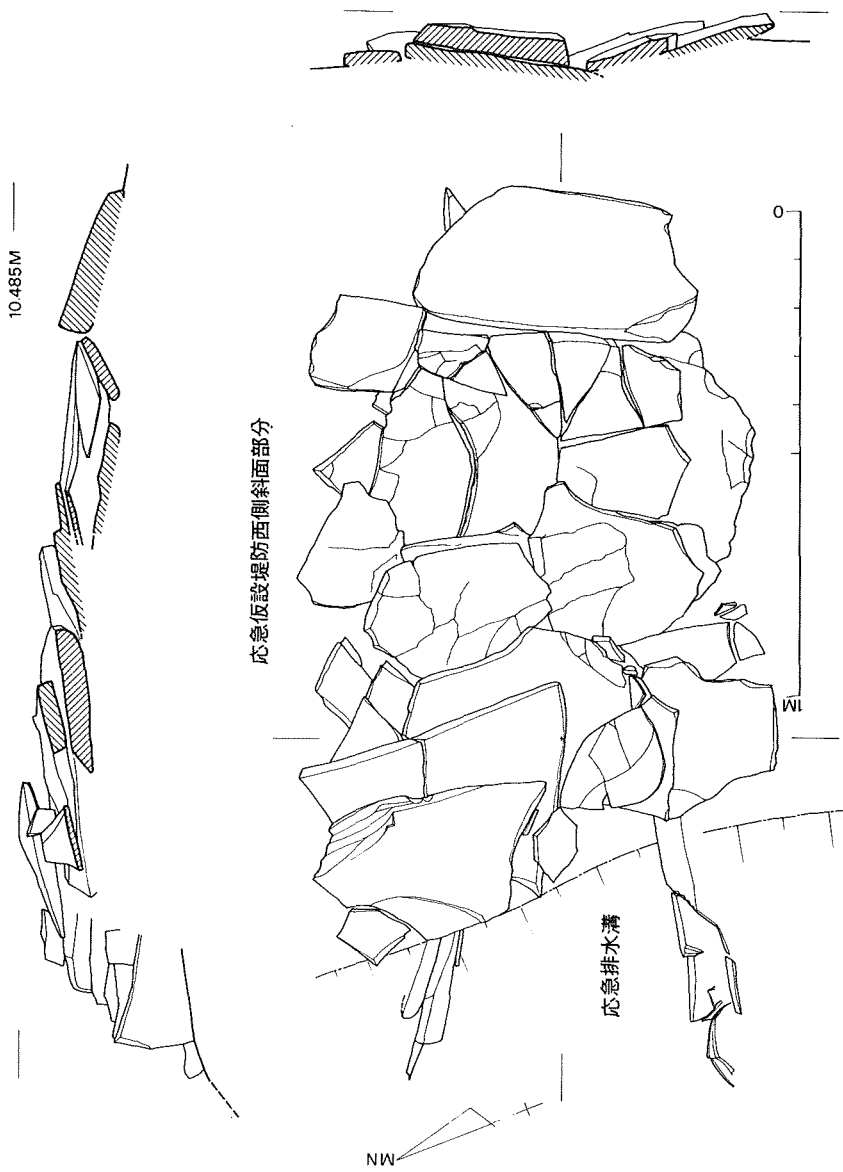


Fig. 11　第5号石棺実測図

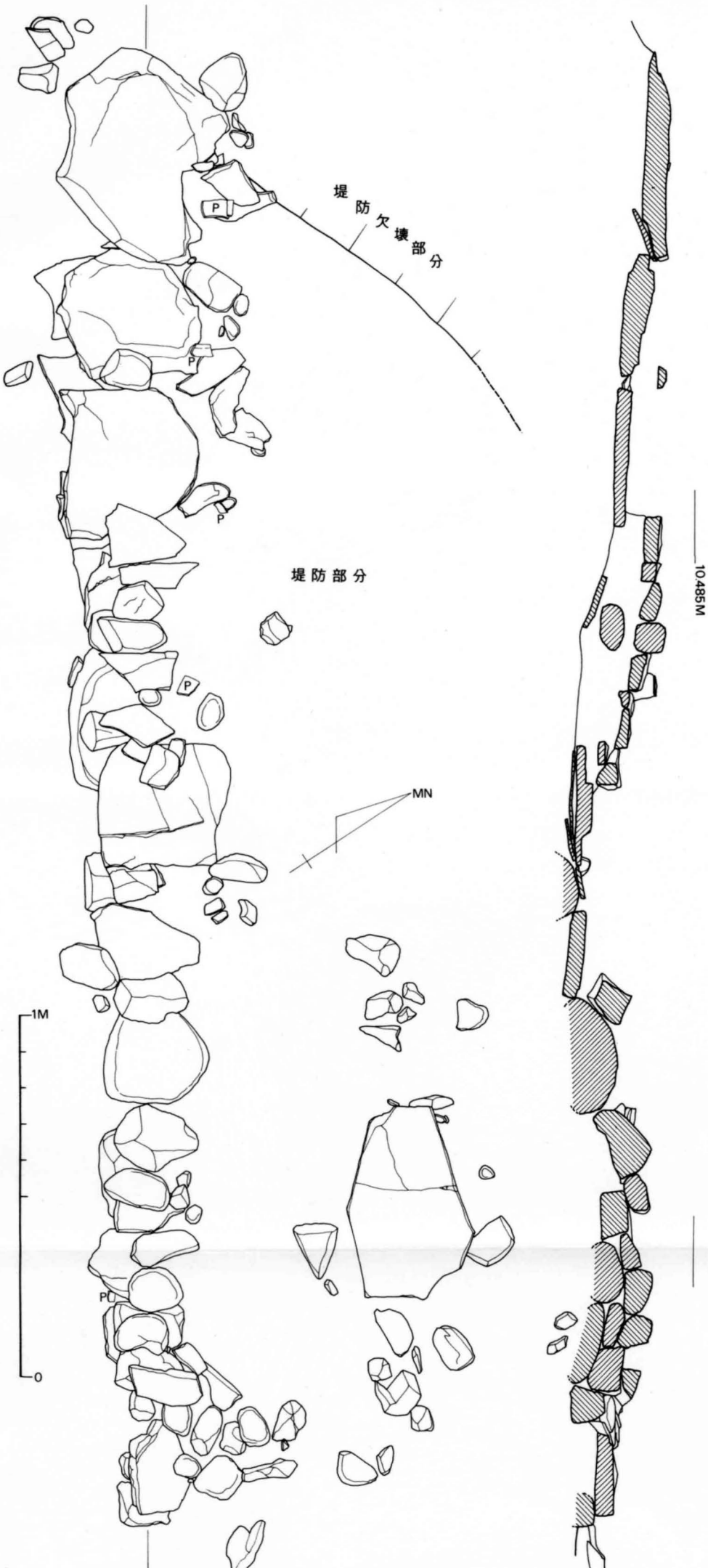


Fig. 13　石列遺構実測図

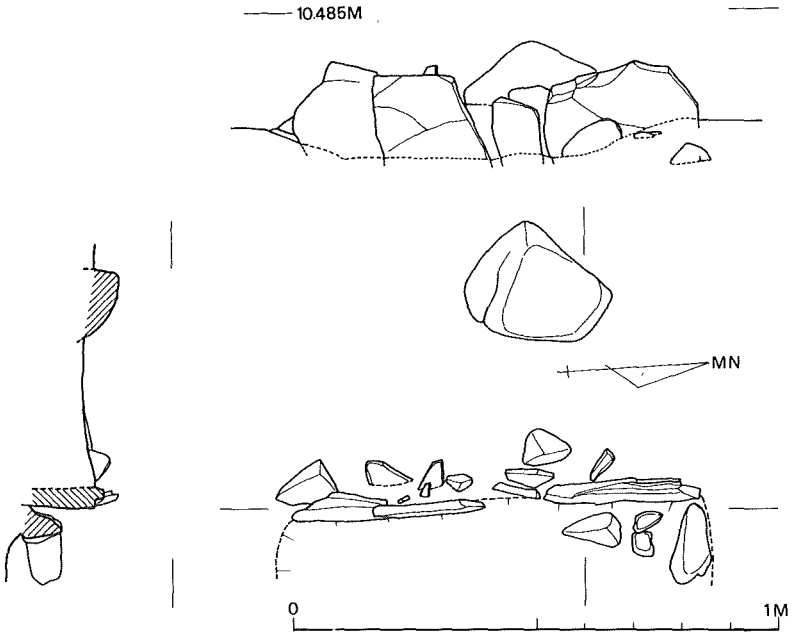


Fig. 12　第６号石棺実測図

石列遺構

Ａ区南端部において検出した性格不明の遺構である。列石方向は，ほぼ東西であり，東端部において釣針状に曲線を描いている感があるが，長短２列の遺構とも考えられる。仮に長い方の石列をａ，短い方をｂ石列とすると，ａ石列は全長5.1m，ｂ石列は1.3mを計る。石材は埋葬遺構と同じ安山岩板状石材と同石質の礫が用いられている。両石列とも西方に至るほど幅広の石材が用いられており，東方に除々に小形化している。また，西方の石材は石棺材同様の板状石が多く，東半分は人頭大前後規模の礫が配列されている。更に，横断面を見ると，ａ列の西半部は板状石を平面に配しており，東半部は礫を重ねた形で構築している。このようなａ石列の状態よりすれば，ｂ石列も，更に現在の石列が西方に長くのびていたことが考えられる。また，ａ石列の西端は，堤防の欠壊とともに失われているので，直線的にのびるものか否かも不明であるが，いずれにしても，ａ石列の南側縁は直線的に整えられ，この線が，何らかの「外がわ」を意識した構築であることは首肯できよう。

Ｂ区の調査

Ａ区南方，約40ｍの河川敷に２m×12mの調査区を設け，３分区をそれぞれ北側からＢ１～３区として設定した。Ａ区に見られた遺構面の赤褐色砂質土層が川砂層の下に認められたが，何らの遺構に接しなかった。遺物の項でのべる高坏の脚部が，第16図に示した状態で出土したが

遺構に関したものではなく，磨耗の状態よりして，A区方面からの流れこみの可能性が強い。

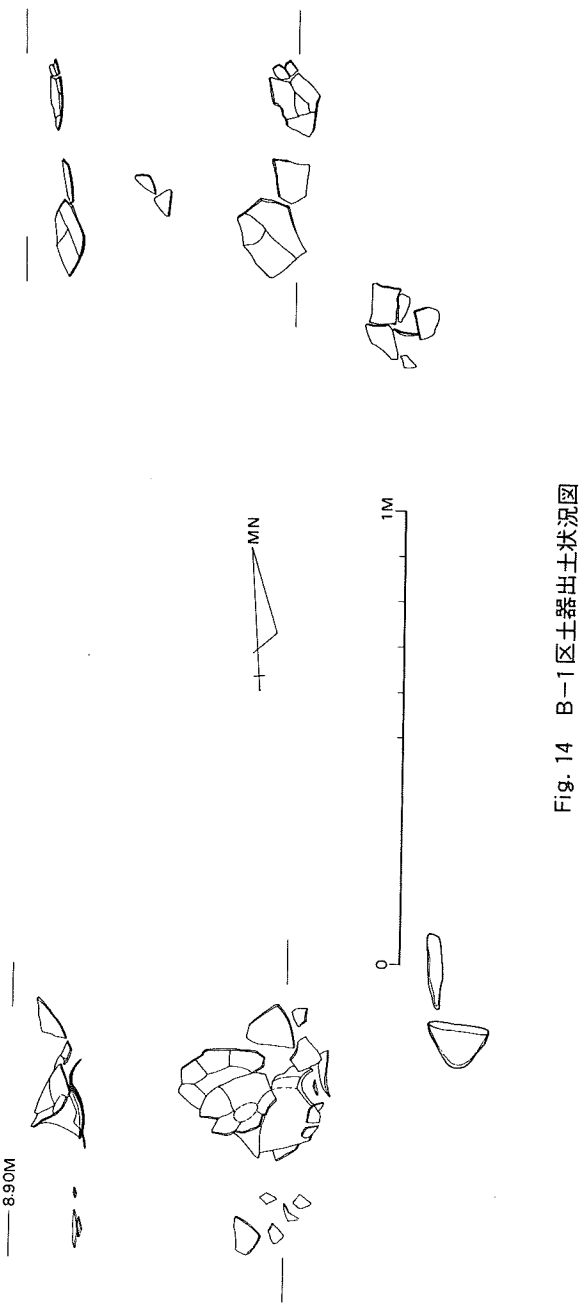


Fig. 14　B−1区土器出土状況図

4．出土遺物（第15～18図・第3表・図版10）

約850点ほどの出土遺物がある。弥生土器に属するものが大半で，土師器・土師質土器が40点ほどみられる。他に滑石製石鍋1点がある。これらのうち実測可能な24個体分を図化した。

(1) 弥生土器

壺（第15図1～6・20，第16図22）　1・3～6は胴部突帯付近の破片で，1・5は頸胴界，3・6は胴上部，4は胴中位にそれぞれ突帯を付したもので，刻目をもつものと無いものがある。いずれも形状から後期に包括されるものであろう。2は底部で，下底面がややあげ底状をなす。後期前半期に属するものか。20は小形壺で土師器に含めるべきかで悩んだ。肝心の底部を失欠するが，口縁部はヨコナデ，体部は平滑なナデ仕上げ，内面は指ナデ仕上げでかすかに細かいハケの痕跡が認められ，ヘラケズリを施していない。弥生終末期から古式土師器に含まれる時期のものか。22は器高約28cmほどの中形壺である。破片としては口縁から底部まで残存するが接合せず復原実測したものである。胴中位にタタキ目痕がかすかに窺え，タタキのあとナデ仕上げしており，内面はナデ仕上げている。底部は胴下端との境がやや不明瞭で丸味をもちはじめようとする段階のもので，終末期に比定される。23の高杯と共伴出土している。

高杯（第15図7・8，第17図23）　23は口縁と脚裾部の一部を欠失する他はほぼ完形だが，口縁は歪み傾いている。口径33.2cmを測る大形品である。杯部は屈曲部に明瞭な段を有し口縁はやや外弯気味にのびる。筒部に縦方向の調整痕が認められるが，器面全体に風化を受けており，これをハケあるいはミガキとみるかは明確でない。円形透し孔は3ケ所施され，2個がまとまりその対に1個が穿たれる。終末期と考えられる。7・8は杯部片である。7は内外面とも細かいハケ調整のあと暗文風のヘラミガキを施している。8は風化のため調整不明瞭。8は屈曲部の段が前二者に較べて不明瞭になりつつあり終末期でも時期的に下がるものであろう。

器台（第15図10～13・16）　長方形透し孔をもつと考えられる器台で，10～13は胴中位部，16は裾部の破片である。10～12には5～7条の篦描沈線文が施され，13はおそらく無文のままで沈線ははいらないものであろう。つくりが前者に較べて粗雑である。16は底径31.5cmほどを測り，あるいは口縁と考えられないこともない。上端は透し孔下端面に当たる。裾部はゆるやかに広がり，末端は肥厚され上方に鋭い稜をもつ。このような器台は未だ県内でも数ケ所の出土しかしられておらず，後期のどの段階まで残るかが興味あるところである。

甕（第15図14・15・19）　15は後期の台付甕底部片で，いわゆる黒髪式の系統を引くものであろう。14は丸底仕の傾向がかなり進行した底部で終末期に属すものである。あるいは壺の可能性もある。内面にも櫛状の粗いハケ痕が残る。19は大形甕の口縁部片で端部外方は横位ハケのあとハケ施文具で刻目を施している。いわゆる西新式系の甕口縁で終末期に属する。

(2) 土師器・土師質土器

高杯（第15図9）　約⅔ほどの杯部片で，屈曲部の稜はあまり明瞭でなく口縁は大きく開く。

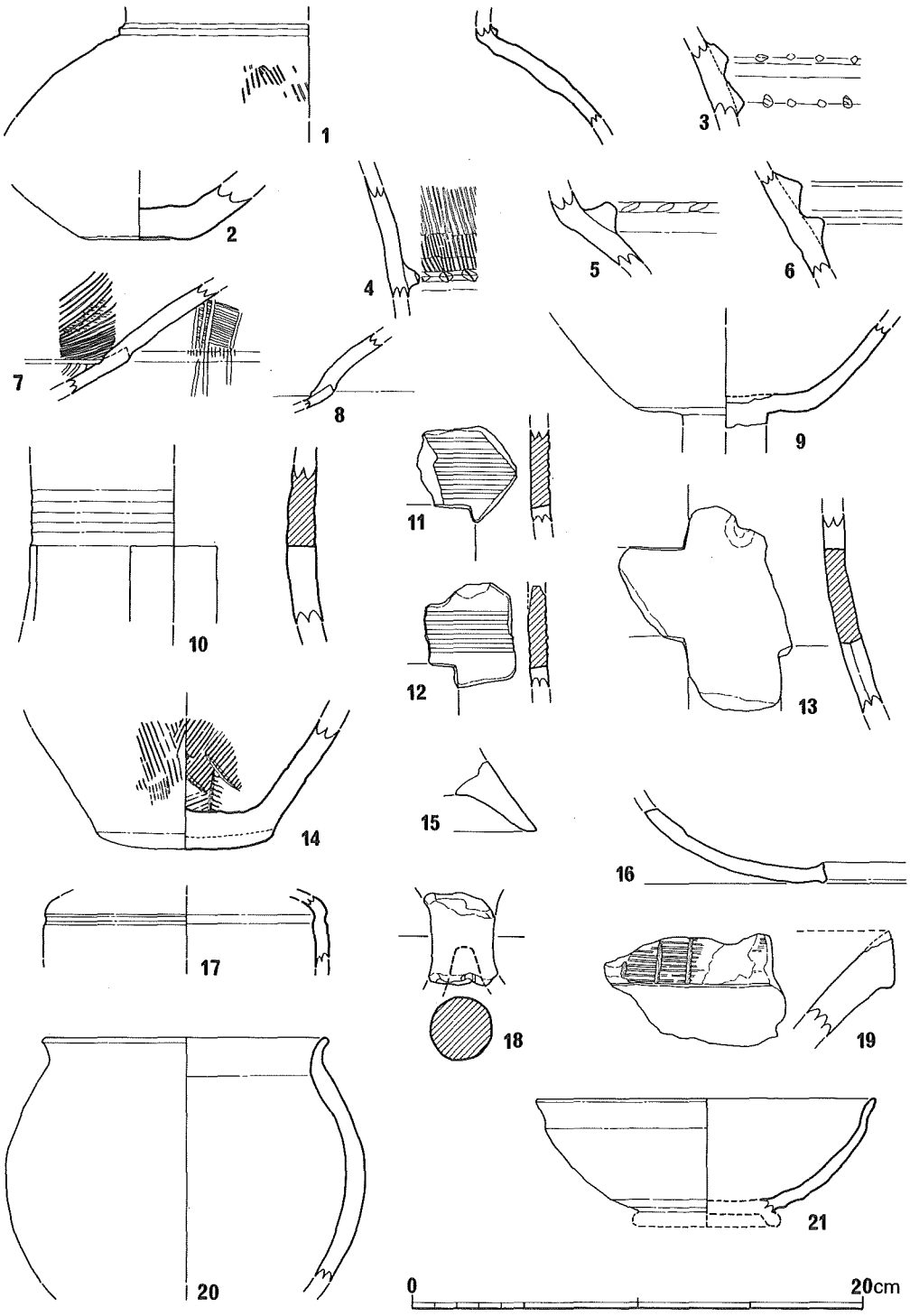


Fig. 15　出土土器実測図①

杯下面は小さめでそのわりに脚部との接合部は大きいようだ。脚部を欠失しているので明確にはいえないが，4世紀後半～5世紀初頭頃のものか。

杯蓋（第15図17）　体部と天井部との境界に沈線を有する須恵器杯蓋の模倣品と思われ，形態的に6世紀中頃のものであろう。

内黒椀（第15図21）　約⅙ほどの体部片で高台部を欠失する。内面は黒色を呈しヘラミガキ痕は風化のためとらえられない。体下端はヘラケズリが施され，口縁はやや強くナデられ体部との境に稜がつき口縁は外弯する。大宰府・五条出土土器の編年研究の成果[註1]から10世紀前半代の年代が考えられる。

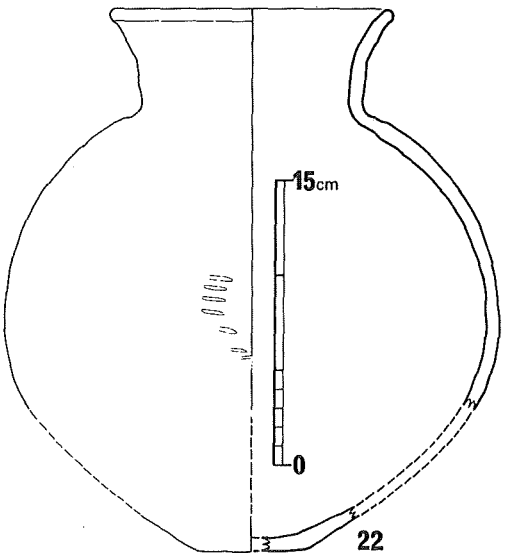


Fig. 16　出土土器実測図②

(3)　土製品（第15図18）

18は高杯のミニチュア品と思われるもので，裾部がはじまる位置に小さな穿孔があった痕跡が認められる。時期的には不詳。

(4)　石製品

石鍋（第18図24）　24は口径47.8cmを測る大形の滑石製石鍋である。大形のわりに口縁はやや短かく，胴部は強くすぼまり浅めの形状が考えら

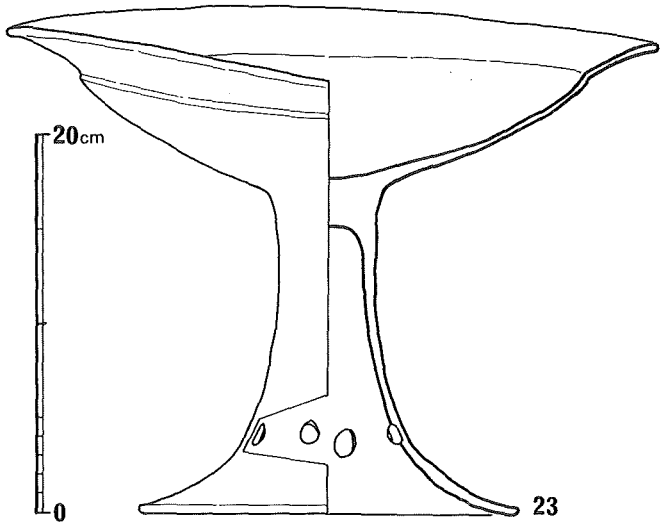


Fig. 17　出土土器実測図③

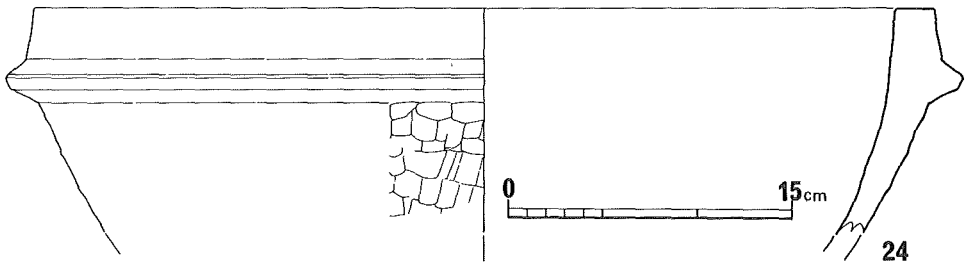


Fig. 18　出土土器実測図④

れる。内面・口縁・鍔は丁寧に仕上げられ，胴部には工具痕が残る。胴中程以下はやや不規則に器面を工具で調整しており，鍔下方の二段目の工具痕は左廻りに調整され，さらに一段目の工具痕が右廻りに調整されている。胴下端はススのため黒ずみがみえる。

(5) 小　括

以上の五反田遺跡の出土遺物は，時期的に弥生時代後期から歴史時代中世期までの長期間にわたる資料である。中心は弥生後期で，図化できなかったなかに明らかに後期初頭頃の甕口縁があり，終末まで脈絡がつながるようだ。資料のなかでは長方形透し孔をもつ器台が興味深い。出土例が数少なく，従来島原半島を中心とした限定的な地域に特殊的に発達した遺物のようにみられていた。出土地は，南高来郡口之津町口之津貝塚[註2]，加津佐町永瀬貝塚[註3]，北有馬町今福遺跡[註4]，布津町木場原遺跡[註5]，島原市三会西川遺跡[註6]，長崎市深堀遺跡[註7]があげられ，ちょうど分布的に東彼杵郡川棚町五反田遺跡が飛んだ格好になった。１点ではあるが黒髪式系の台付甕底片が出土していることは，器台だけでなく島原半島との関連を考えさせる。五反田遺跡では胴部に数条の篦描沈線文をめぐらすものと無いものがあるが，口之津貝塚で出土している隆起帯を有すものは無い。これが地域的なものか，時期的なものかは判断できない。またどのようにして器台が出現し消滅していくのかという時期的・文化内容的な問題も今後の課題であろう。終末期の遺物は県内でまだまとまった資料がないので貴重だ。22壺と23高杯はＢ区で共伴出土しておりセット関係がつかめる資料である。壺はやや丸底化がはじまった段階で，調整はナデ仕上げで，ヘラケズリは施されていない。高杯は橋口達也氏が２類[註8]としたものでも古手になると考えられ，７・８高杯がこれに時期的に続くものと考える。20壺は終末から古式土師器であろう。

土師器は，７高杯が古式土師器に属する。17杯蓋は小田富士雄氏のいうⅢＡ期[註9]の須恵器を模倣したもので６世紀中頃の時期と考えられる。土師質土器として内黒椀がある。形態的に故前川威洋氏の五条Ⅰ－２Ｂ類[註10]に近く，横田賢次郎・森田勉氏の大宰府出土土師器の編年[註11]からも10世紀前半代においてよさそうだ。石鍋は大瀬戸産製品であろう。

当概遺跡石棺群の時期については，弥生後期～古式土師器の段階が推察されよう。

註１．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集２』九州歴史資料館 1976
前川威洋他『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告２・３・６・８集』福岡県教育委員会・1975～78
２．古田正隆・松藤和人・諫見富士郎「口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会 1975
３．註２と同じ。
４．県文化課にて調査中（昭和52年～）
５．註２と同じ。

6．註2と同じ。

7．小田富士雄「弥生土器」『深堀遺跡』 長崎県文化財報告書第5集 長崎県教育委員会 1967

8．橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI』 福岡県教育委員会 1979

9．小田他『八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ』八女市教育委員会 1969～72 1969～72

10．註1と同じ。

11．註1と同じ。

第2表 出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)	特徴・手法	色調・胎土・焼成	地区 出土状況
15-1	壺 胴上半	突帯径 (13.8)	・頚胴界に三角突帯をはりつける ・突帯ヨコナデ，外縦位ハケのあとナデ仕上げ，内ローリング	淡赤茶色，1～4㎜石英粒，細金雲母含，焼成わりと良	B1区 黄色砂層
15-2	壺 底部	底径 (5.5)	・底部と胴部との境は不明瞭，下底はややあげ底気味 ・外ナデあるいはミガキ，内指整形ナデ	淡黄茶色，白色・赤色砂粒など含 焼成やや甘い	A区 赤褐色砂質土 1号棺周辺
15-3	壺 胴上半		・二条のやや丸味をもつ三角突帯，刻目は淡く施される ・ナデ仕上げ	淡灰黄色，白色・赤色砂粒 長石・角閃石，焼成やや甘い	A区 暗褐色砂層
15-4	壺 胴上半		・尖り気味の三角突帯，刻目 ・外 縦位ハケ調整のまま，内 縦位ハケ	淡赤茶色 0.5～3㎜石英粒 焼成わりと良好	A区 黄色混礫層
15-5	壺 胴上半		・丸味をもつ方形状の突帯，刻目は浅い ・外ナデ仕上げ，内風化剝落	淡赤茶色 1～2㎜石英粒・赤色砂粒含 焼成普通	A区 3号棺周辺
15-6	壺 胴上半		・丸味をもつ二条の三角突帯 ・外ナデ仕上げ，内風化剝落	淡灰桃色 1㎜石英粒・赤色砂粒・角閃石含	A区 赤褐色砂質土
15-7	高杯 杯部片		・屈曲部の段が甘くつく，内面は沈線で画される ・ハケのあと暗文風ヘラミガキ仕上げ	淡赤茶色 胎土精良 焼成普通	A区 黒褐色砂質土 2号棺周辺
15-8	高杯 杯部片		・屈曲部の稜は甘い ・器面は風化を受け調整不明瞭	淡赤茶色 わずかに石英粒・雲母を含む 焼成やや甘い	A区 赤褐色砂質土
15-9	高杯 杯部片		・杯下面はわりと小さめで口縁は大きく開く脚接合部は大きい ・風化しているがナデ仕上げか	淡茶褐色 若干石英粒含 焼成普通	A区 黒褐色砂質土 2号棺周辺
15-10	器台 胴中位		・長方形透し孔が4ケ所はいると思われる，沈線は5条だが風化し痕跡的 ・風化しているがナデ仕上げか	淡黄茶色 0.5～3㎜石英粒含 焼成普通	A区 黄色粘質砂層
15～11	器台 胴中位		・7条の篦描沈線文が長方形透し孔上面にはいる ・風化	淡黄茶色 1㎜白・赤色砂粒含 焼成やや甘い	A区 3号棺周辺

番号	器種	法量 (cm)	特徴・手法	色調・胎土・焼成	地区 出土状況
15 - 12	器台 胴中位		・長方形透し孔上面に5条の篦描沈線文がはいる ・外平滑なナデ，内粗い横位ハケ	淡黄茶色 1㎜石英粒・輝石・赤色砂粒含 焼成普通	A区 黄色混礫層
15 - 13	器台 胴中位		・上下に長方形透し孔がみられる，やや粗雑なつくり，沈線は無い ・外 風化 内 ナデ	赤橙色 1㎜石英粒・赤色砂粒含 焼成やや悪い	A区 黒褐色砂質土 2号棺周辺
15 - 14	甕 底部片	底径 (7.9)	・丸底化の進行した底部で壺の可能性もある ・外ハケのあと下端をナデ，内ハケのまま	淡黄茶色 白色砂粒・長石含 焼成やや甘い	B2区 黄色砂層
15 - 15	甕 台付底片		・台付甕底部片 ・著しく風化し器表剝落	淡茶黄色 1㎜以下砂粒 焼成やや甘い	A区 3号棺周辺
15 - 16	器台 底部片	底径 (31.5)	・ゆるやかに広がり裾端部は肥厚され，上方は鋭く突出する。上端は透し孔下端面 ・やや風化しているがナデ仕上げ	淡黄茶色 1㎜石英粒含 焼成やや甘い	A区 赤褐色砂質土
15 - 17	杯蓋	沈線径 (12.3)	・須恵器杯蓋の模倣品と思われる。天井部との境に沈線がはいる ・風化をうけているが，ナデ仕上げか	淡黄茶色 1～2㎜石英・赤色砂粒含 焼成やや甘い	A区 配石附近 Pit内？
15 - 18	土製品	径 (2.8)	・高杯のミニチュア品か，下端に穿孔したと思われるところがある。 ・ナデ仕上げ	淡茶褐色 1㎜石英粒含 焼成普通	A区 赤褐色砂質土 1号棺周辺
15 - 19	大形甕 口縁片		・上端を欠失する口縁片 ・口縁外方，横位ハケのあと同施文具で刻目下はナデ，内斜横位ハケ	黄茶色 1～2㎜石英粒・赤色砂粒含 焼成普通	
15 - 20	小形壺	口径 (12.7) 最大径 (15.9)	・やや厚手のつくり，球状の体部から口縁は小さく外弯する ・口縁ヨコナデ，外平滑ナデ，内ハケのあと指ナデ	外淡茶褐色，内部灰茶色 0.5～1㎜砂粒 焼成やや甘い	B区 H
15 - 21	内黒椀	口径 (15.1)	・高台部を欠失する，口縁はナデによって小さく外弯し，体部との境に稜がはいる ・下端はヘラケズリ，内面の暗文は風化し，不明瞭	明黄茶色，内黒色 小石英粒・雲母含 焼成やや甘い	C区 (調査区外)
16 - 22	壺	口径 (15.0) 最大径 (26.1)	・頸部はややふくらみ気味に直立し口縁は強く開く，胴部は球状，底部はやや丸味をもちはじめようとしている。 ・胴中位にタタキ目痕，全体はナデ仕上げ	淡赤橙色 0.5～3㎜ 石英粒 焼成普通	B区 F (G)
17 - 23	高杯	口径 (33.2) 器高 (約25) 底径 (20.2)	・杯屈曲部には明瞭な段を有し，口縁はやや外弯気味にのびる。裾部はゆるやかに広がり円形孔を3ケ所もつ ・全体的に風化し砂粒がうきでる	淡赤橙色 2～3㎜ 石英粒 焼成普通	B区 F
18 - 24	石鍋	口径 (47.8) 鍔径 (50.5)	・口縁はやや短かめ，胴部は強くすぼまる ・口・鍔・内面は丁寧な仕上げ，胴部に工具痕が残る。	うすく緑味もつ 外下端ススで黒ずむ	撹乱

5．大村湾沿岸の石棺について（結語にかえて）

肥前地方西半は，現在の行政区画からいえば，壱岐・対馬を除いた長崎県ということになり五島対馬等の離島を含めていう。この地方は石棺墓遺跡が多く，総遺跡数88が挙げられている[1]。現在は，例数が増加しており，90遺跡を超えるであろう。その分布状態を見ると，①五島列島，②平戸・佐世保を含めた県北の地区　③大村湾沿岸地域　④橘湾沿岸と島原半島　⑤有明海湾西奥の諫早市・北高来郡　⑥西彼杵半島・長崎半島外洋沿岸とに区分できよう。本県の場合，離島部と本土部外洋沿岸地方を外海（そとめ），大村湾岸地域を内海（うちめ）なる呼称で呼ぶことがあるが，この通称は多分に長崎県の地理・地形上の特色によった呼び分けのようである。前記の区分帯の各遺跡群を外海・内海の呼びわけで区分するとすれば，①・⑥地帯の遺跡群は前者に属し，⑥は後者の呼称に入るといえよう。

大村湾沿岸は，石棺墓遺跡が多く，古墳の内部主体に石棺を構築するものを含めれば20遺跡を超す。その大部分は大村湾の東南部において最も密度高く，諫早市および大村市において集中していることになる。いま，大村湾沿岸における石棺を中心として概観してみよう。文中の遺跡番号は第21図および，第３表のそれに一致する。

大村湾沿岸における石棺墓の初現は，諫早・大村の両市境の高地に位置する風観岳支石墓群の一部遺構に見ることができる[2]。最も古い石棺の構築は，島原半島の原山支石墓群[3]の下部構造に多く見られている。この両遺跡とも200mを超す高地に営まれた墓地であり，石棺の内法は長軸は，0.6m程度のものが多く，正方形に近い平面形をもっているものが多い。また，これらの石棺は深さを十分にとっているところよりして，極端な蹲居姿勢での屈葬が行われたものであろう。風観岳支石墓群の場合，原山に比して明瞭な石棺構造のものが少ないが，いずれにしても，大村湾沿岸地方にみゆる石棺墓の初現が風観岳支石墓の下部構造にあり，我国における石棺の出現期にほぼ一致するといえよう。五島列島の北端，宇久島（町）松原遺跡[4]や，県北の里田原遺跡[5]の支石墓の場合，弥生時代初期のものである可能性もあるが，佐賀・福岡県下の支石墓の例をあわせて，石棺の初現が支石墓の下部遺構として出現することは首肯できよう。

弥生時代における大村湾沿岸の石棺墓は，例数が限られる。化屋（けや）大島遺跡[6]（多良見町16）と白浜石棺群[7]（西彼（せいひ）町４）である。化屋大島遺跡は大村湾奥の小島に立地した前期後半の遺跡であり，支石墓の下部構造を思わせる内法の石棺墓のみの遺跡である。白浜石棺群は中期の石棺墓である。甕棺の例を出せば，鉄戈副葬の合口甕棺を出土した富の原遺跡[8]があり，注目されるところであるが，中期後半以降の石棺墓は現時点では甕棺墓を含めて指摘できない。

後期に入ると，県内全般に遺跡が稀薄になり，福江市一本木遺跡や島原半島今福遺跡[9]（北有馬町），布津木場原遺跡[10]（布津町）等が顕著な事例として挙げられる程度であり，大村湾沿岸では，弥生後期の遺跡を見ることができない。一方，弥生前期・中期の五島列島や外洋沿岸の砂

丘地帯では生活遺跡と墓地が顕著である。[11]

このような弥生時代の状態を要約すれば，先述した「外海」地方に盛行した弥生文化は，むしろ，可耕条件において勝る内海一帯において，稀薄であり，殊に後期においては，空白地帯の感さえ生じさせる実状にあるといえよう。石棺墓また同様である。

古墳時代に入ると様相一変して，大村湾沿岸には石棺墓群が急増してくる。もっとも，発掘調査によって遺跡内容が明白になった例は少ないのであるが，形態上の特徴によって，ある程度石棺墓遺跡について論究可能な状態にあるといえよう。石棺墓遺跡はいずれも，10～20m程度の丘陵末端部に位置し，長大な構造をとるという点で共通してくる。発掘調査を経たものとしては，本明石棺群[12]（諫早市　12）があり，昭和44年の時点までにおいて30基が調査されている。鉄刀・刀子・鉇の出土があり，弥生時代終末ないし，古墳時代前期の遺跡である。長大なものの主軸は2m程度もあり，支石墓の下部構造や，弥生前期のものに比して著しく長大な棺身が目立っている。屈葬から屈肢葬，さらに，伸展葬という遺体埋置法の展開がうかがえる遺構が目立っている。類似の立地・棺身規模等をもつ遺跡は，本明C遺跡（平松神社裏，諫早市12），武部遺跡（大村市　10），小佐古石棺群（同市　9），久津（くづ）石棺群A（同市　6），久津石棺群B（同市　7）等を列挙可能であり，本報の石棺群もこの例として挙げることができる。さらに本県において例数がきわめて稀少な前方後円墳であるひさご塚（東彼杵町）においても主体部に石棺が構築されており，家型・割竹型・舟型石棺は認めることができない。このことは，支石墓以来の箱式石棺の伝統に強く規制されたものと受けとることが可能であると考えられ，同時に，箱式石棺以外の石棺や，埴輪，青銅鏡等の要素も流入していない点よりして，九州西辺の在地的伝統の強い遺存を思わせるものがある。また，装飾古墳の伝統も，有明海の西奥，佐賀県との境界に近い小長井町長戸鬼塚・同町丸尾古墳等の３基にのみ認められるところである。

このように見てくると，境丘をもつ古墳前夜の石棺群遺跡が，いわゆる「古墳」築造までの本地方における墓制を補うことになるのか，という問題が生じるのであるが，現時点では，前述の本明石棺群と本報の五反田遺跡のみの資料をもってしては不大分である。久津石棺群は発掘調査を経ていないが，棺身小口が工事によって崩れたものの，２基分を併せた程度の棺身幅を有していた点が注目されてくる。封土の存否は不確かである。いずれにしても，前述の問題は，本地方における「古墳築造前夜」の墓制のみならず社会構成にかかわる問題であり，系統的な発掘調査の結果を得たいものである。

本報の五反田遺跡Ａ区において，石列遺構が検出され，遺構の項で述べたところであるが，直線に連なる釣針形とも，２列の並行石列とも受けとれる状態であった。石列の一端もしくは両端が工事のため損われており，全体の石列形状は不明であったが，いくつかの疑問点を提示

して，類例資料の報例を期待したい。第１に，石列が，石棺群の南側にのみ配されたものか否かという点である。石棺群の立地した「徳島」は，川棚川変流工事以前は西側山地から張り出した小丘陵であった可能性がある。してみると，丘陵の南北辺は傾斜面をもっていたことになり，Ｂ区の土器を含んだ土層が石棺群を構築した第Ⅲ層（赤褐色砂質土）と同質の土層であることの意味が肯けることになり，Ａ・Ｂ区のレベル差2m強は，そのまま徳島丘陵の傾斜面のレベル差であった可能性が強い。第２に，この点よりすれば，五反田石棺群は徳島の稜線上に位置し，南側緩斜面は30mで2mの傾斜をもっていたことになり，石棺群の南辺を画する意図のもとに石列が配された可能性がある。列石の南側縁の線がそろえられているのは「外側」（南傾斜面）を意識した構築と考えられる。第３に，本遺跡は，調査した石棺６基の主軸線がまちまちである点である。前述した諫早市本明石棺群の場合，20基近い遺構群が主軸線をほぼ東西に向けていたが，これは等高線上に大体添ったものと解され，構築する場合の最も合理的な土壙の掘り方であると考えられる点があった。本遺跡の場合は，その点は不明確であったが，３号と４号はほぼ同じ方向に主軸をとり，２号と４号も同様であるものの，残る１号と６号は主軸方向は同じでありながら位置が離れて構築されている。このことは，３・４号の属する第１グループと２・５号の属する第２グループ，更に１号の属するグループと６号の属するグループの４支群を構成していた可能性はないか，という点である。以上の疑問点を提示して諸方の批判と教示を得たい。

本遺跡において構築された石棺と石列遺構の石材について若干の考察をのべておきたい。

本遺跡の石棺の棺材として使用された石材は角内安山岩と考えられる。この石材は，板状に剝離しやすく，かつ劈解性を有するところから整形調整が比較的容易であり，かなり広汎に，石棺材として利用されている。本遺跡遺構群の石材も悉く同じ材料である。本遺跡の調査にあたって聴取したところによれば，遺跡の東方において川棚川と合流する猪乗川上流に同種石材の産地があるとのことで現地を実査したが確認するに至らなかった。川棚町東辺の虚空蔵山一帯は安山岩地帯であり，産地としての可能性はあるが現時点では確証はない。

大村湾沿岸地方において，角内安山岩以外の石棺材利用例を挙げれば，脇岬（野母崎町21結晶片岩），高浜（同町20同），深堀（長崎19同），出津（外海町22同）があり，大瀬戸町，三和町に露頭がある。他の石棺材は殆んど安山岩板状石であり，知り得る範囲では，大村市久津（a）諫早市湯ノ尾川東岸（b）・森山町山中（c）が挙げられる。風観岳支石墓群（11）のある風観岳山頂（236m）付近にも安山岩露頭があるが，板状の剝離は，前述３地点ほどよくない。

これらの露頭の石材が大村湾岸の諸石棺に運ばれたことを確認するためには鉱物学的な同定を経ねばならないが，一応の予察を述べておこう。風観岳支石墓群の石棺に使用された石材は肉厚でうすい板状の剝離はあまり見られない。肉眼的な観察によれば，風観岳山頂付近の石材が，そのまま用いられていると考えられ，化屋大島遺跡（16）の石材も肉厚粗雑で風観岳の石

材に似ている。諫早市内西辺の本明等の石棺石材は，本明川上流の支流である湯ノ尾川東岸に露頭（ｂ）があり，河川流路上で約６㎞の距離にあり，ここから運ばれた可能性が強い。大村市の武部・小佐古石棺群の石材は湯ノ尾川のそれと肉眼的には識別困難であり，湯ノ尾川の露頭から直距離にして約８㎞の距りではあるが，湯ノ尾狭谷を横断しての搬出を考えるのは無理があろう。むしろ現在の海岸廻りでも８㎞の大村市久津の露頭（ａ）からの搬出を考えることが妥当であろう。久津（ａ）の露頭から大村市及び東彼杵郡各石棺遺跡までの距離を見ると，久津Ａ・Ｂ遺跡（0.3㎞），串ノ島（５㎞），ひさご塚（６㎞），五反田遺跡（15㎞）となる。また，大村湾の西岸（西彼杵半島）の白崎（西彼町３）・白石棺群（同４）までは，海上直距離線上で，海上距離12㎞，陸上距離３㎞を計るが，波と潮流の緩かな大村湾の場合，海上輸送を考慮に入れる必要があろう。

このようにしてみると，五反田遺跡の石材搬入を，久津からと仮定すれば，他遺跡の場合に比して著しく遠距離であり，更に近くに露頭原産地を有したものかもしれない。いずれにしても，立地条件と時期的に近似する石棺遺跡群が多い大村湾岸域を考える場合，石材の原産地と搬入路について，ある程度の予察をもって，石材の同定を得る必要があろうし，大村湾が海路として利用されたことを考慮することは重要な意味があろう。因みに大村湾から諫早地峡を経て野島（島原半島）に至るルートは律令制下において，太宰府との連絡交通の一部とされていたことは明白であり，その前夜においても交通手段として利用されたことは十分考えられることである。

〔参考文献〕

1．井上和夫他 「化屋大島遺跡」 多良見町文化財調査報告第２集 1974 多良見町教育委員会
2．田川肇他「風観岳支石墓群調査報告書」諫早市文化財調査報告書第１集 1976 諫早市教育委員会
3．森貞次郎「島原半島原山遺跡」九州考古学10等の文献がある。
4．小田富士雄「五島列島の弥生文化 総説編」長崎大学医学部人類学考古学研究報告２ 1970
5．長崎県教育委員会「里田原遺跡展（図録）」1975
6．１に同じ。
7．文化庁「全国遺跡地図 長崎」1976
8．昭和55年７月，大村市教育委員会によって調査され，現在報告書作成中
9．昭和55年以来，長崎県教育委員会において調査が続行されており，弥生後期の本県を知るうえで重要な遺構・遺物が検出されている。報文未刊。
10．吉田正隆氏による発掘調査が昭和46年実施された。
11．五島列島のみならず，西彼半島西海岸・長崎半島等の砂丘は，有力な遺跡が多く立地しており，特に縄文後期～弥生中期のすぐれた遺跡がある。多くは，縄文時代の遺制を強く残

しているが，弥生後期の遺跡・遺構はきわめて稀薄である。

12. 昭和44年（1969）県教委・長崎大学の共催により発掘調査が実施された。

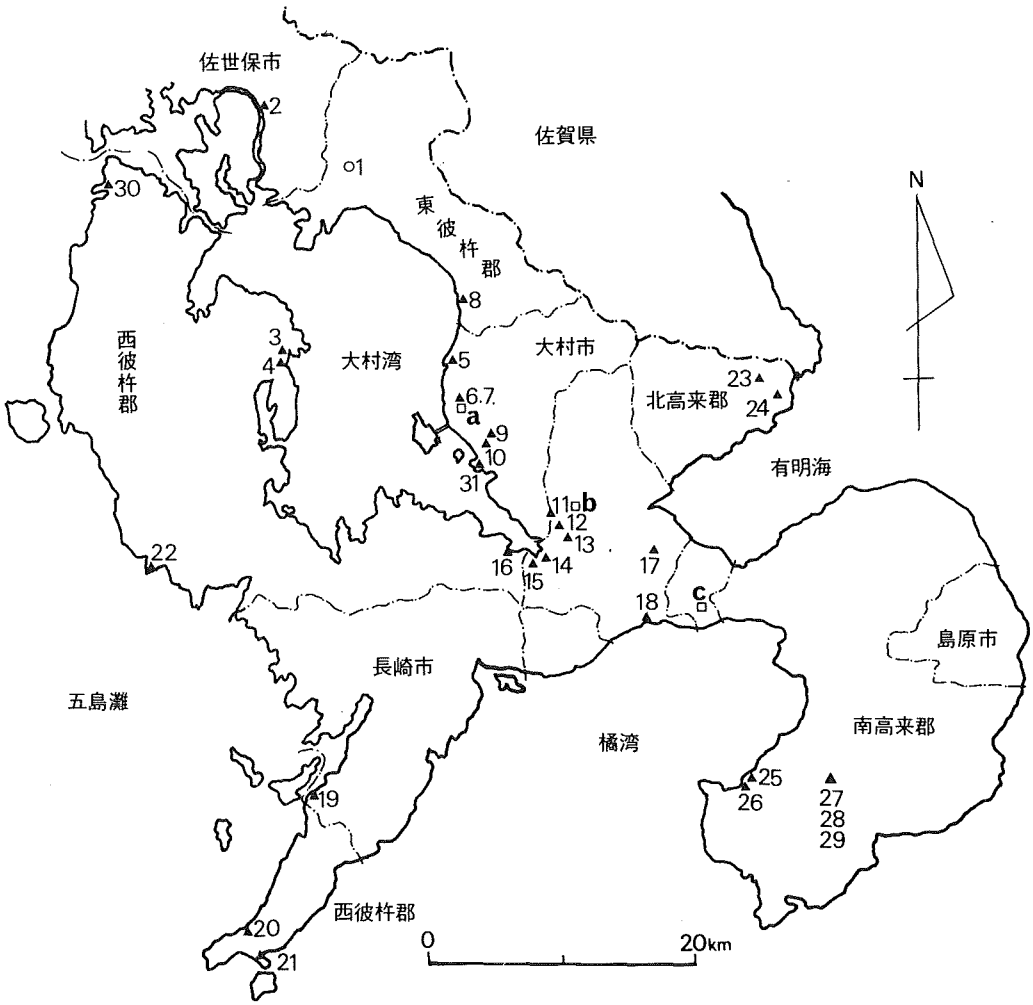


Fig. 19　大村沿岸および県南における箱式石棺墓所在地

第3表　大村湾沿岸地域および県南部における石棺所在地

No.	遺跡名	全国遺跡地図番号	所在地	文献	時代
1	**五反田遺跡**	25—60	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	本報	古墳時代
2	三島山遺跡	25—4	佐世保市広田町三島	1	〃
3	白崎石棺群	27—10	西彼郡西彼町白崎郷イザリ神	2	〃
4	白浜石棺群	27—11	西彼郡西彼町白浜郷	2	弥生時代
5	愈場遺跡		大村市弥勒寺郷22	3	古墳時代
6	久津石棺群A	27—20	大村市二ノ郷久津	4	〃？
7	久津石棺群B	27—20	大村市二ノ郷久津	4	〃？
8	串ノ島古墳	25—115	東彼杵郡東彼杵町里郷串ノ島	5	？
9	小佐古石棺群		大村市武部郷古佐古	6	？
10	武部石棺群	27—82	大村市武部郷古佐古	7	？
11	風観岳支石墓群	28—64	諫早市大渡野町風観岳	8	弥生時代
12	本明遺跡c	28—68	諫早市大渡野町平松平松神社	9	古墳時代
13	諫早小学校石棺群	28—66	諫早市本明町	10	〃
14	貝津横島遺跡	28—71	諫早市貝津町横島駅	11	〃
15	横島遺跡		諫早市貝津町横島	12	〃
16	化屋大島遺跡	29—26	西彼杵郡多良見町化屋	13	弥生時代
17	宮崎館遺跡	30—19	諫早市小野町小野小学校裏	14	〃
18	有喜貝塚	30—30	諫早市長里町六本松	15	〃
19	深堀遺跡	29—61	長崎市深町中屋敷	16	〃？
20	高浜遺跡	32—6	西彼杵郡野母崎町高浜浜添	17	古墳時代
21	脇岬遺跡	32—8	西彼杵郡野母崎町脇岬下揚	18	？
22	出津遺跡	26—31	西彼杵郡外海町黒崎西出津郷	19	弥生時代
23	淀姫神社遺跡	28—11	北高来郡小長井町字井崎名影平	20	〃
24	井崎支石墓群	28—12	北高来郡小長井町字井崎名影平	20	〃
25	西念坊遺跡	30—74	南高来郡南串山町尾登名大坪	21	古墳時代
26	遠目塚遺跡	30—72	南高来郡南串山町尾登名遠目塚	22	〃
27	原山第1支石墓群	30—81	南高来郡北有馬町屋代原山	23	縄文時代
28	原山第2支石墓群	30—82	南高来郡北有馬町大字坂上下名字新田	23	〃
29	原山第3支石墓群	30—83	南高来郡北有馬町大字坂上下名字原ノ尻河	23	〃
30	天久保貝塚	24—10	西彼杵郡西海町天久保字塔尾	24	弥生時代
31	研修所内遺跡		大村市玖島郷県立研修所内		？
a	角内安山岩露頭		大村市二ノ郷久津		
b	〃　〃		諫早市湯尾町		
c	〃　〃		北高来郡森山町		

〔参考文献〕

1．正林護・田川肇「五反田遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ 1981 長崎県教育委員会
2．久村貞男「広田町三島 三島山古墳試掘報告」1971 佐世保市文化科学館
3．高野晋司・松下孝之「憩場遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ 1979 長崎県教育委員会
4．高野晋司「久津石棺群の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ 1979 長崎県教育委員会
5．全国遺跡地図 長崎 1976 文化庁
6．5に同じ
7．5に同じ
8．田川肇他「風観岳支石墓群調査報告書」諫早市文化財調査報告書第1集 1976 諫早市教育委員会
9．5に同じ
10．正林護「本明石棺群の調査」長崎県教育時報124号 1969 長崎県教育委員会
11．正林桃城他 1955 諫早市史第1巻 1955 諫早市教育委員会
12．同11
13．井上和夫他「化屋(けや)大島遺跡」多良見町文化財調査報告書第2集 1974 多良見町教育委員会
14．高野晋司「小野古墳の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ 1978 長崎県教育委員会
15．浜田耕作他「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌41—1・2 1926
16．内藤芳篤他「深堀遺跡」人類学考古学調査報告1 1967 長崎大学医学部解剖学第2教室
17．正林護「長崎半島のれいめい」野母崎町郷土誌 1973
18．17に同じ
19．正林護「外海町の先史・古代」外海町誌 1974
20．正林護「小長井町の先史・古代」小長井町郷土誌 1976
21．古田正隆「島原半島における石棺2例」 1966 長崎県立島原高等学校郷土部
22．宮崎貴夫・正林護「遠目塚遺跡の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ 1978 長崎県教育委員会
23．森貞次郎「島原半島原山遺跡」九州考古学10号他の文献がある。
24．小曽根嘉次郎「古代の遺跡」西海町史概説編 1973 西海町教育委員会

PLATES

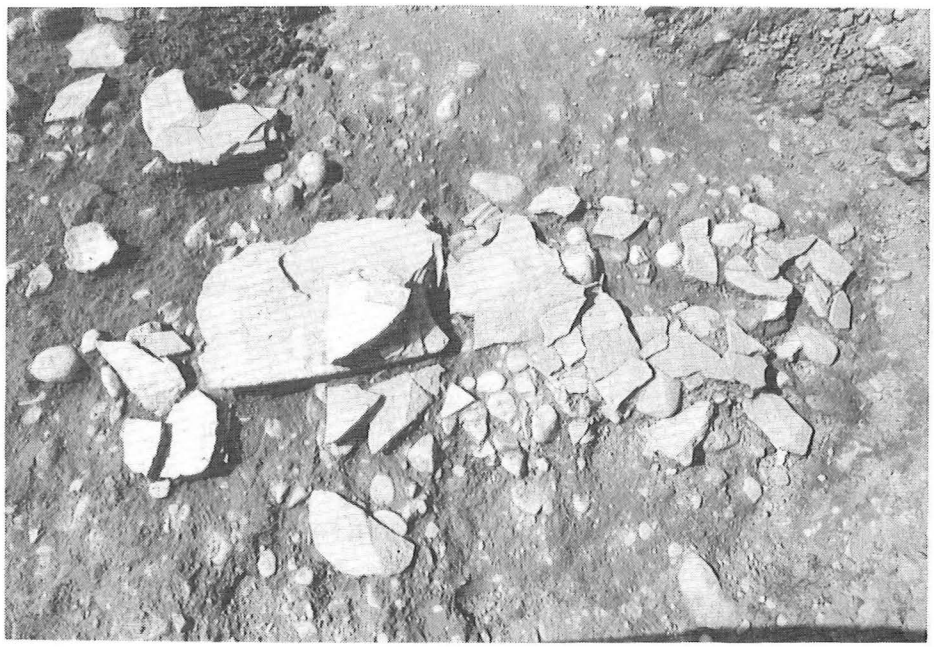
調査地点（左下）より「五反田」を望む

調査風影　川棚川と堤防止上の調査区A

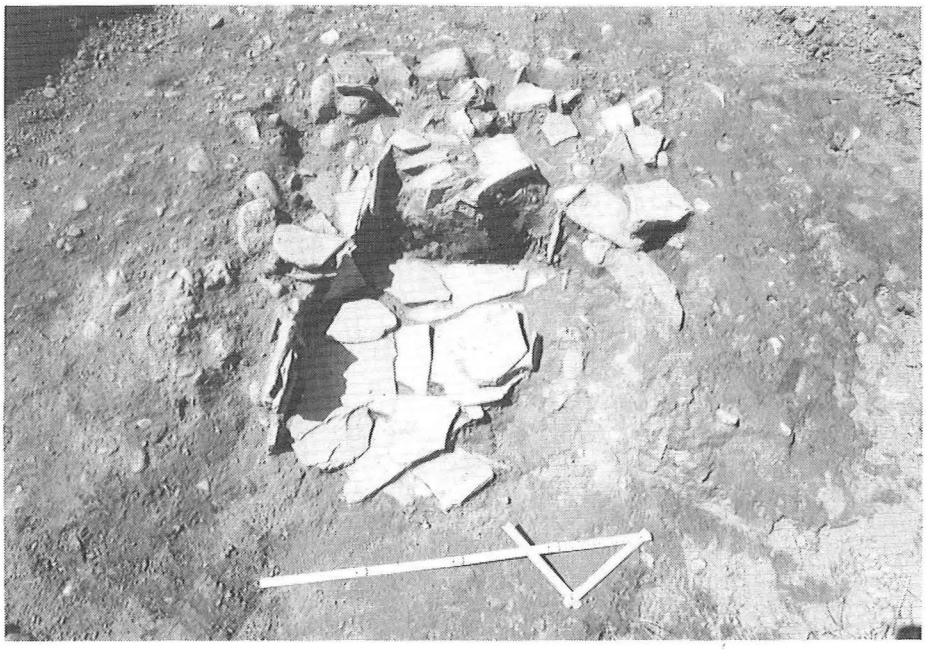
図版2　遺跡

堤防欠壊状況と遺構（南から）

堤防欠壊線と川棚川（東から）

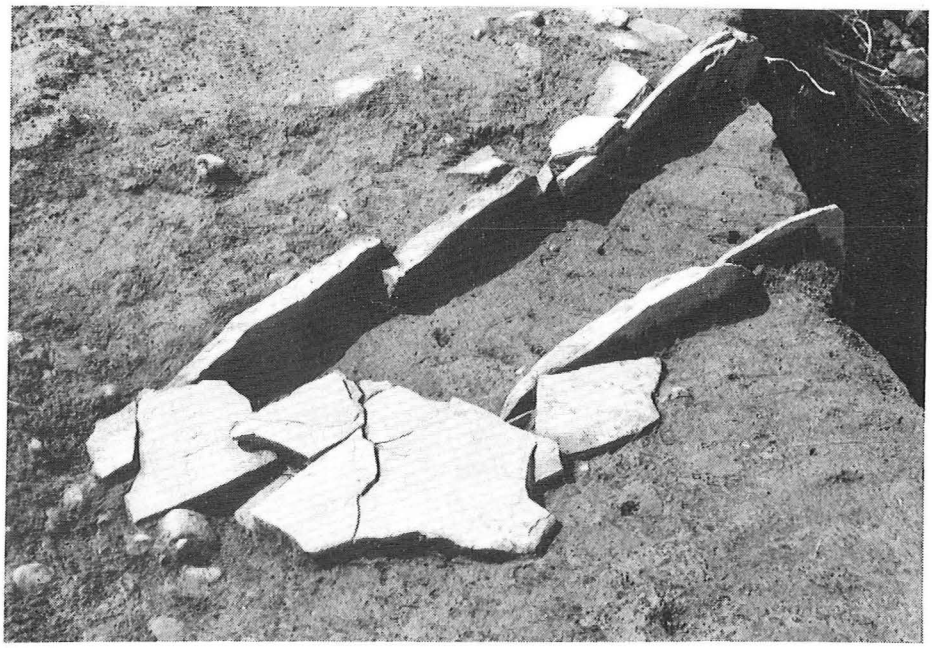


第1号石棺（西から）

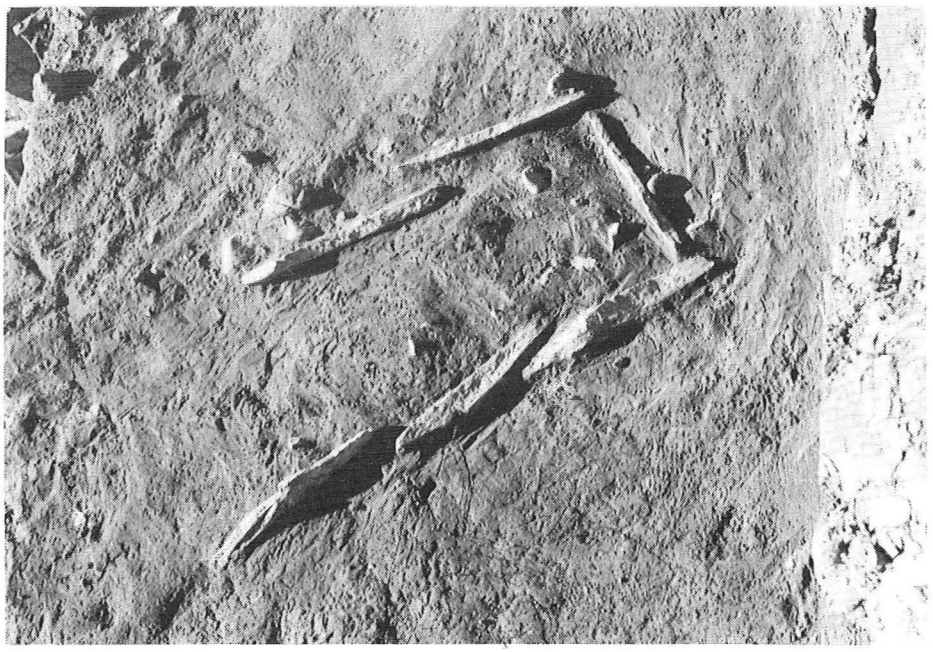


第2号石棺（東から）

図版4　遺構②



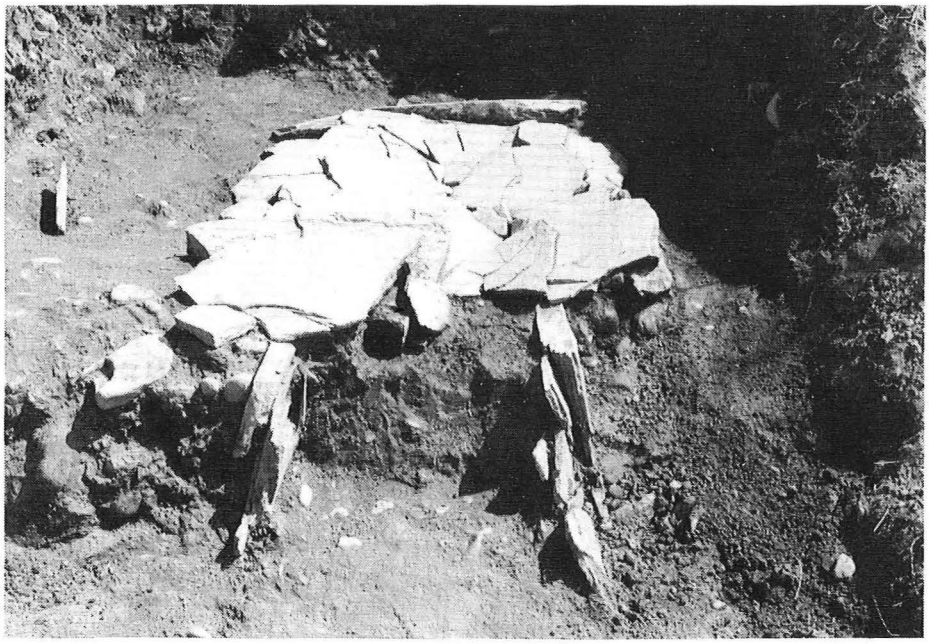
第3号石棺（北から）



第4号石棺（南から）

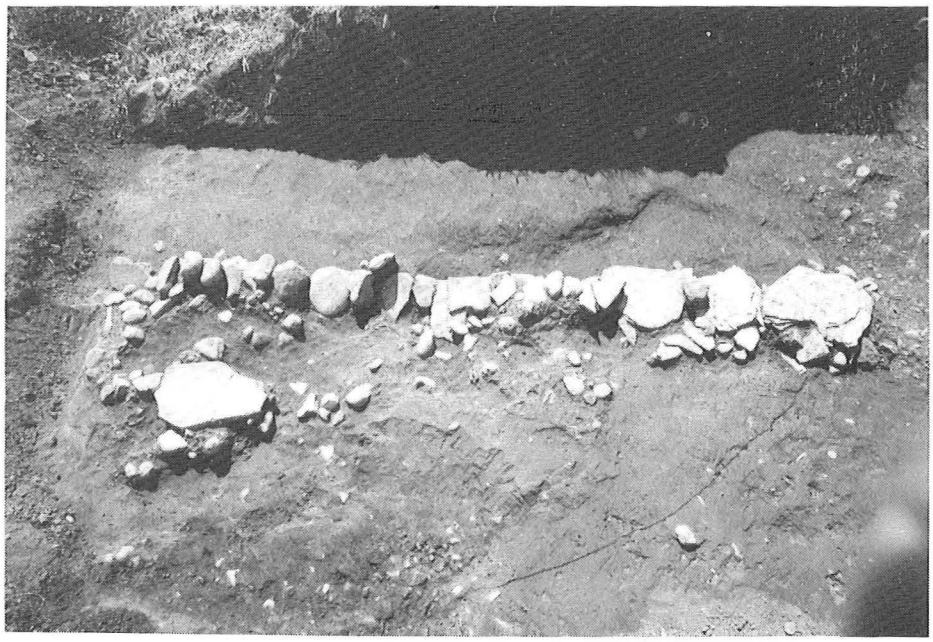
図版5　遺構③

第5号石棺（北から）

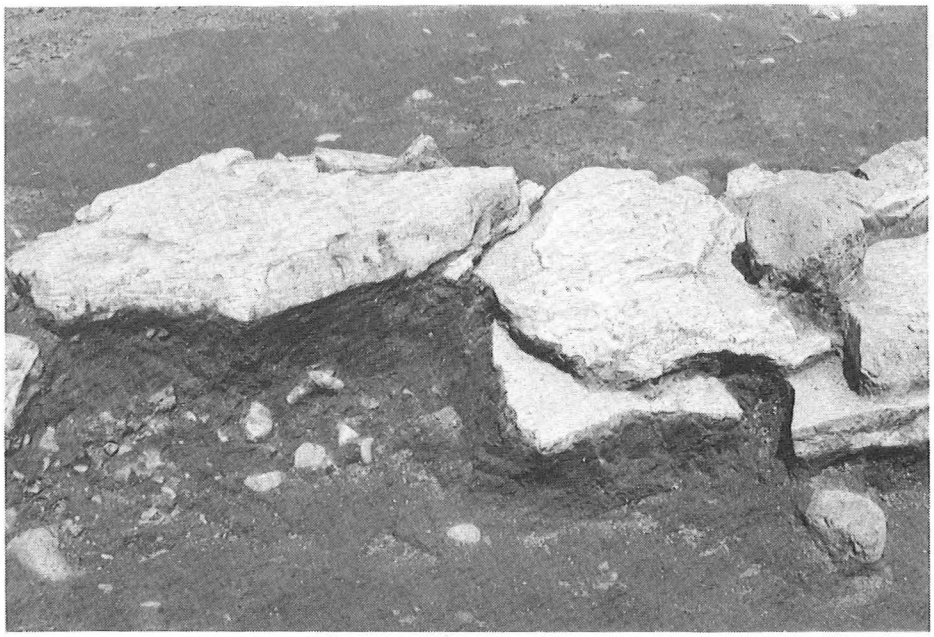


同小口部の状況（西から）

図版6　遺構④



石列遺構（北から）



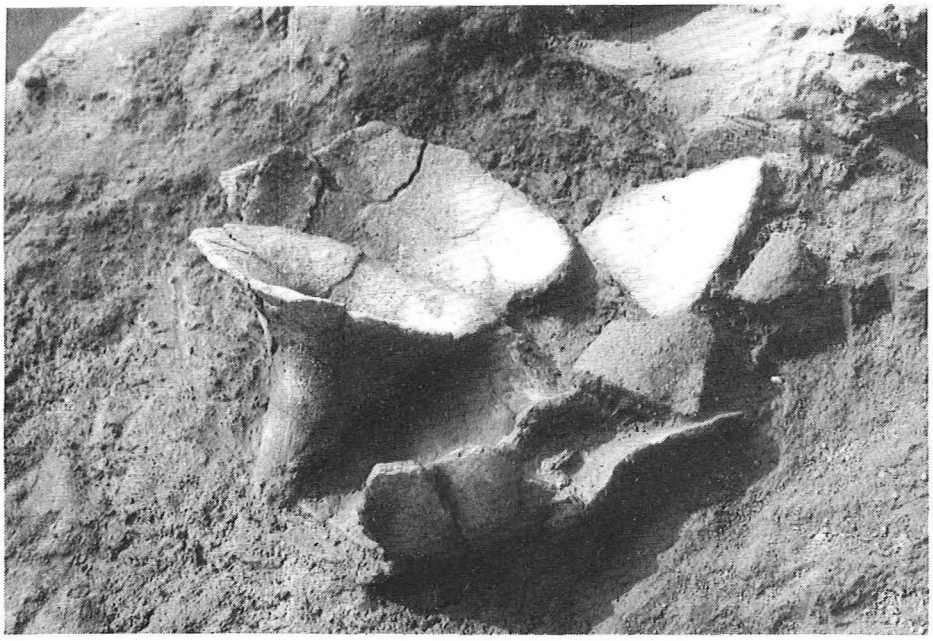
石列遺構西端部（南から）

図版7 遺構⑤

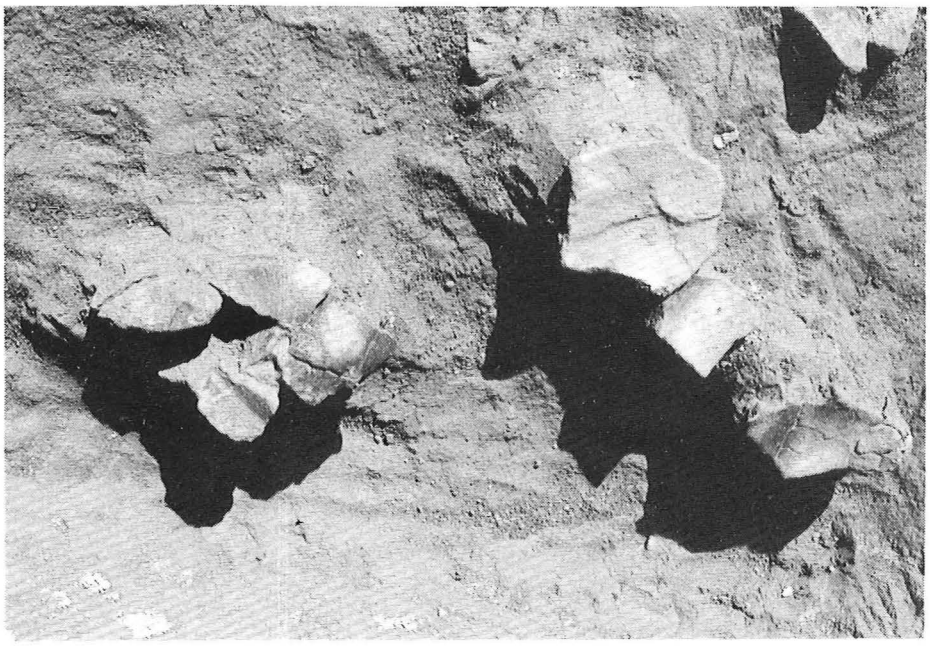
石列遺構中央部

石列遺構東端部

図版8　遺物出土状況



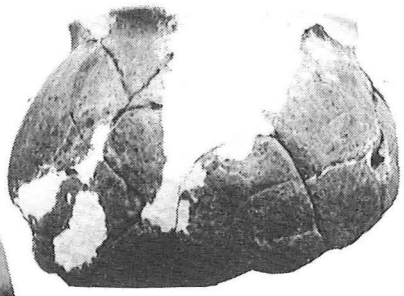
土器出土状況（B−1区）



土器出土状況（B−1区）

図版9 遺物

(胴部径28cm)



(胴部径15.8cm)

(口縁部径34.4cm)

石鍋片

Ⅲ　山角（やまずみ）遺跡

――東彼杵（ひがしそのぎ）郡波佐見町所在――

例　　言

1．本書は，昭和47年，東彼杵(ひがしそのぎ)郡波佐見町内で行われた村木川変流工事にさきだって実施した山角(やまずみ)遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会主催のもとに，県文化課指導主事正林護・学芸員補（当時，現主任文化財保護主事）田川肇が担当し，県文化財保護員（当時，現文化財保護指導委員）井手寿謙氏の参加を得て実施した。

3．本書作成については正林が担当執筆したが，遺物実測等の作業については県文化財保護主事藤田和裕の助勢を受けた。

4．本書の編集は正林による。

5．本書の図面中，遺構については15分の１に縮尺し，遺物については３分の１に縮尺したものを用いた。

6．本遺跡の出土遺物は，現在県文化課が保管しているが，近く，遺跡所在地の波佐見町教育委員会に移管の予定である。

7．本遺跡の調査から10星霜を経たが，調査記録の公刊が遅延したことについて，大方の寛恕を得たい。

本　文　目　次

Page

1．はじめに……155
2．山角遺跡の位置と環境……155
3．調査……157
　土層と遺物の概況……157
　土器……159
　石器……164
4．多良山塊の縄文中期遺跡……175
5．滑石と縄文式土器……178

挿　図　目　次

Fig. 1　波佐見町位置図……154
Fig. 2　山角遺跡位置図……156
Fig. 3　山角遺跡および試掘坑設定状況図……158
Fig. 4　出土土器 ①……160
Fig. 5　出土土器 ②……161
Fig. 6　出土土器 ③……162
Fig. 7　出土土器 ④……163
Fig. 8　出土石器 ①……165
Fig. 9　出土石器 ②……167
Fig. 10　出土石器 ③……169
Fig. 11　出土石器 ④……171
Fig. 12　出土石器 ⑤……172
Fig. 13　出土石器 ⑥……173
Fig. 14　出土石器 ⑦……174
Fig. 15　出土石器 ⑧……175
Fig. 16　県内縄文中期土器出土地分布図……176

表　目　次

Tab. 1　県内縄文中期土器出土地一覧表……177

図 版 目 次

Page

PL. 1 遺跡----180

PL. 2 調査風景・土層----181

PL. 3 出土土器①----182

PL. 4 出土土器②----183

PL. 5 出土土器③----184

PL. 6 剥片石器①----185

PL. 7 剥片石器②----186

PL. 8 剥片石器③----187

PL. 9 剥片石器④----188

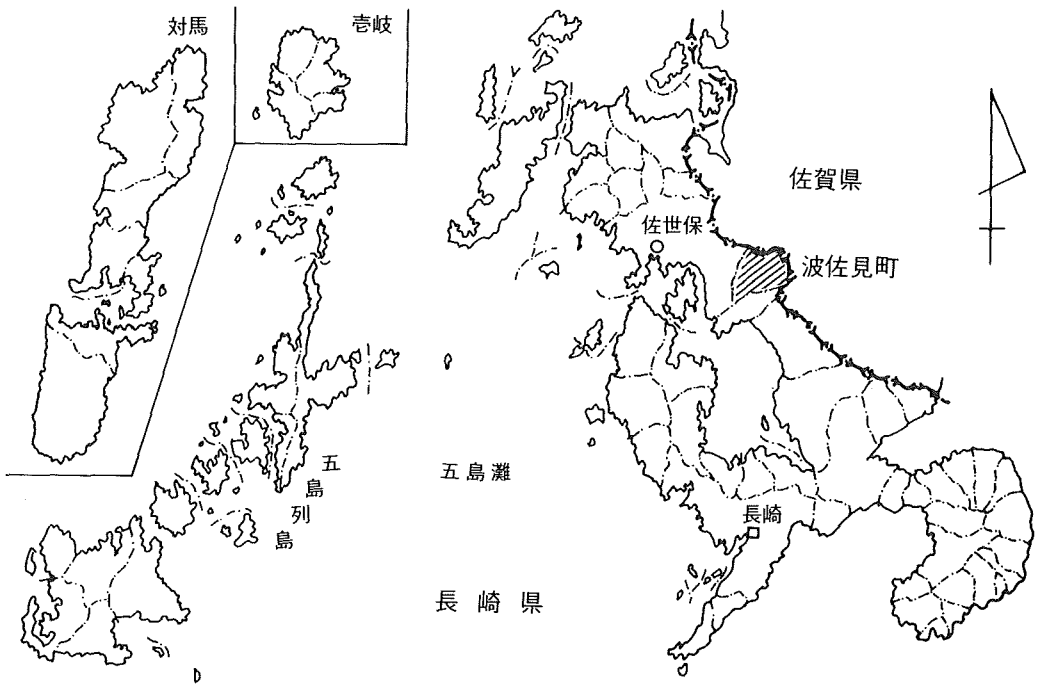


Fig. 1 波佐見町位置図

1．はじめに

村木川は，波佐見町のほぼ中央部を流れる波佐見川の一支流であり，狭長な谷を潤して蛇行している。村木川の蛇行部を直線化して耕地の水害を防ぐ変流工事が圃場事業の一環として昭和47年度に計画されていた。村木川が波佐見川に合流するあたりは最も蛇行著しい部分であり，三角洲状に西側から張り出す平坦地を奔流が梨園を襲っていたといわれる。当該変流工事は，1.5*ha*の梨園の山際を南北に断ち切って，村木川の流路を直線化する計画であった。

一方，この三角洲状に張り出す梨園は，全国遺跡地図長崎（昭和51年文化庁刊）に25—47として記載された山角（やまずみ）遺跡（散布地）があり，従前，縄文時代中期の土器片等が採集されており，いわゆる周知の遺跡包蔵地があった。

県農林部耕地課・同土木部河川砂防課・波佐見町担当課と県文化課は，当該遺跡の取扱いについて協議をもち，第1段階として，遺跡の包蔵状態存否，包蔵範囲等を確認することとした。包蔵状態が確認された場合は，あらためて発掘調査の実施について協議をすることとし，協約書を県関係課間で交換した。

調査は，川棚地区の堤防欠壊場所の補修工事にかかる五反田遺跡の調査（本報所収）に引続いて，昭和47年10月6日～9日の三日間実施した。調査は県文化課指導主事正林護・学芸員補（当時，現主任文化財保護主事）田川肇の担当で実施し，県文化財保護員（当時，現文化財保護指導委員）井手寿謙氏の参加を得た。

2．山角遺跡の位置と環境

山角遺跡は長崎県東彼杵（ひがしそのぎ）郡波佐見町稗木場郷字下春田（はるだ）にある。波佐見町は，大村湾東部地域にあって，本県では数少ない「海岸をもたない町」であり，北辺は佐賀県有田町，東辺は同県武雄市と嬉野町，西辺は佐世保市，南辺は川棚町に接する。

波佐見町のほぼ中央は波佐見盆地であり，町の殻倉地帯で多くは水田が営まれている。この波佐見盆地の中央を東南方向に波佐見川が流れ，川棚川となって南流し，大村湾に注いでいる。波佐見川には，盆地周辺の山地からの支流が多く合流しており，支流の流域には狭長な水田地帯となっている。水源涵養を目的とした溜池群は，これら支流群の谷頭に営まれて水田用水として利用されている。本遺跡調査の発端となった変流工事が計画された村木川も，これら支流群の一つであり，県道嬉野・佐世保線と南北に直交して波佐見川に合流している。合流地点付近は波佐見盆地の中でも最も開けた水田地帯であり，村木川と皿山川と波佐見川の合流地点でもある。

この波佐見盆地は，町の農業の中心地であるとともに，交通の要路でもあり，西方の佐世保市・北方有田町（佐賀県）・東方武雄市（佐賀県）・南方川棚町方面に向う十字路の役目を果た

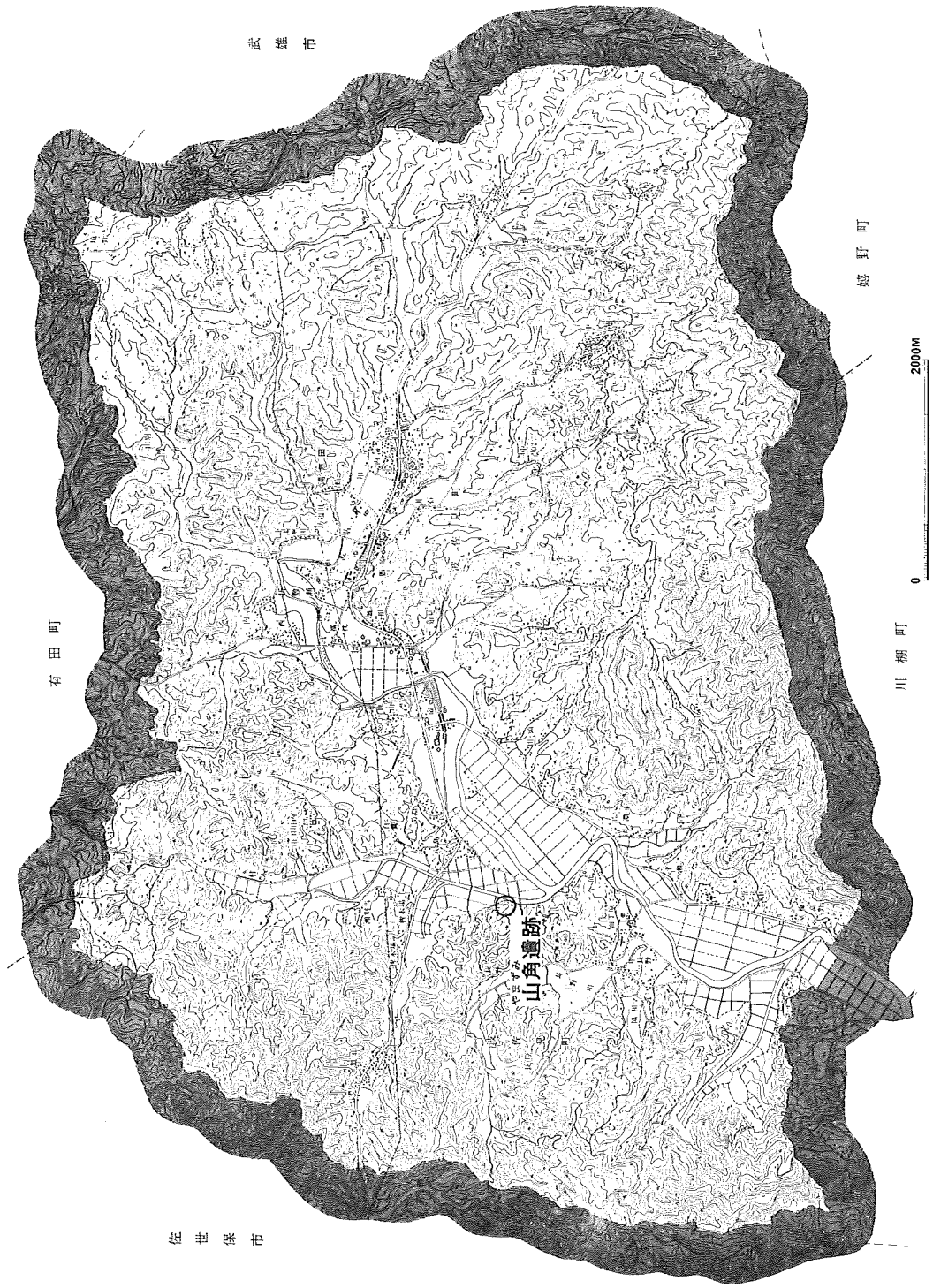


Fig. 2　山角遺跡位置図

しており，これらの街道が集まる地点は「宿場町」が発達して，現在も「宿」なる郷名が遺存している。

一方，山地帯は比較的緩かな北域に対して，南域は虚空蔵山（608m）等の峻険があり，対象的な景観を見せている。虚空蔵山は名称からもわかるように山嶽信仰が古来あって現在でも諸行事が見られる聖域でもある。この南北域の境界付近は湧水多く，かつ粘土層が発達していて「窯業の町」波佐見をして，街道の要所の地の利とともに発達せしめる重要な要素となっている。いま町内で確認されている近世窯跡は18箇所，その中で畑の原窯跡は県指定の史跡である。県立の窯業試験所があり，町内の職業人口も窯業関係者が多く，波佐見町の自然と位置はこのように，人文界にも強く投影している。

山角遺跡がある位置は，波佐見盆地の西辺に当たり，村木川が波佐見川に合する地点のやや北方500mにある。西背後に標高50mの微高地があり，その山裾から村木川西岸に張り出した三角洲状の低平地にある。梨の木畑が広く営まれているが，かつては甘橘も栽培されたという。当該の地は標高20m程の地であり，このあたりで村木川は急角度に折れ山角橋方向へ流れている。

3．調　査

山角遺跡の調査は，河川変流工事部分における包蔵状態の存否，遺跡包蔵範囲の確認に直接の目的があり，包含層と包蔵範囲が確認されれば全面発掘実施について河川事業主体と再協議をするための資料を整えることに間接的目的があった。このため，調査にさきだち，地元の郷土史家や古老の知見を聴取の後，試掘調査を実施した。調査対象面積は1.7 *ha*，試掘坑は各2m×2mとし，表面観察の結果に立って，対象地区をT字形に切る線上に9箇所設定した。試掘坑の記号は第3図のとおりA～Ⅰとした。

土層と遺物の概況

各試掘坑の位置によって土層の深度は若干異なるが層順としては共通していた。最上層は耕作土で黒灰色の弱粘質土で縄文式土器・近世陶磁片・黒耀石片等を含んでいる。第2層は弱粘質の黄色土，第3層は黄色の砂質土，第4層は基本的には3層と同様であるが若干の小礫を含んでいる。第2層と第3層の間に青灰色の砂質土を有する試掘坑があったが性格等については明らかでない。

遺物は第1層下面から第2層にかけてであったが陶磁器片や現代の諸物を含んでおり，整層状態の認められる試掘坑はなかった。本来は，第2層が縄文時代中期の遺物包含層であったこ

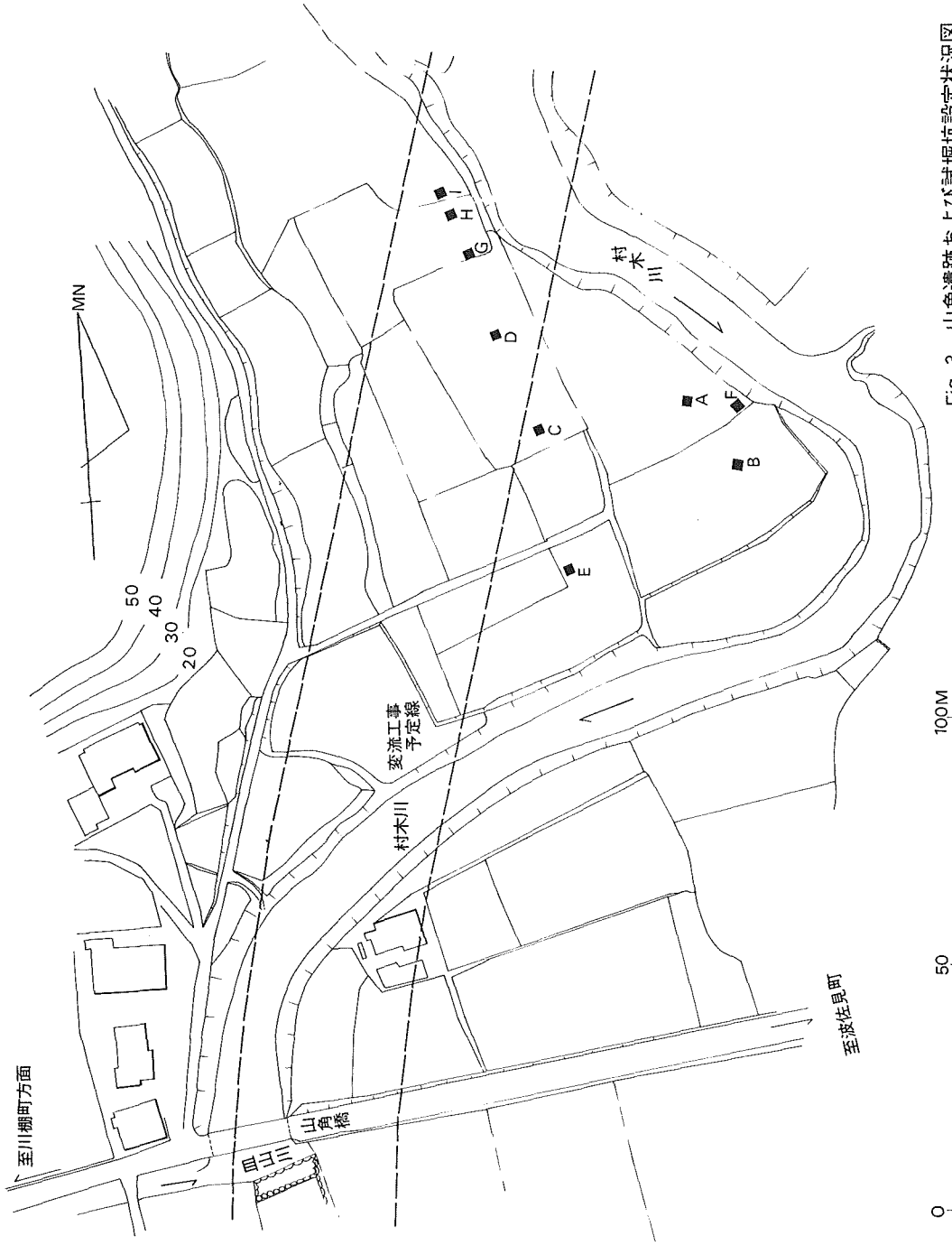


Fig. 3　山角遺跡および試掘坑設定状況図

とは確実であるが，戦前からの果樹栽培によって全面的な攪乱がおこったものと考えられ，出土遺物の磨耗と細片化がこのことを物語っている。各遺物については後述するが，現代の諸物や陶磁器片を除けば，すべて縄文時代中期の阿高式系統の土器片であり，石器石片は同期の所

産として大過ないと考える。

出土した土器片総数は表面採集資料を含めて657点，内訳は試掘坑A112点，F524点，その他の試掘坑21点である。石器石片の総数は331点，内訳は試掘坑A106点，F224点，その他1点である。このことから，遺物総数988点の98%がAおよびF区において得られたことになり，遺跡は第3図の三角洲状の畑地の南端部付近に辺在していたことになる。したがって遺跡は小規模のものであり，村木川の水流と後世の果樹栽培によってかなり損壊を受けたことになる。かかる遺跡の状態から得られた遺物群であるが，以下に内容を述べることにする。

土器

太形凹文土器とその系譜下にある土器のみに限られる。提示した資料総数は49点である。いずれも小片であり，全器形を窺える資料はなく，便宜上口縁部・胴部・底部にわけて述べることにした。口縁部の細分類については太形凹文の種類と組合わせ，土器における施文の部位等によることとし，器形については観察可能の範囲にとどめた。なお，提示した全資料の記号は1～49の通し番号とした。写真図版中の番号もこれと符合させた。細分類に当たっては，縄文中期阿高式土器系の標準的分類が確立されておらず，便宜上，坂の下遺跡[(1)]調査報告書における分類の傾向を参考としたが，かならずしも本稿の分類とは一致していない。

1類としたのは第4図1～3であり，口唇部がゆるく波形を描くが山形等の起伏をもたず，施文は太い凹点のみを口縁下際に限って施す一群である。1は2段の太形凹点列を有し，凹点は縦長楕円形である。施文具は太目のヘラ状のものを用いており，凹点の底にはゆるい稜を残している。2は，1と基本的に同じ文様構成であるが2段の凹点列の下際に凹線1条をもって頸部以下を区切っており，以下はゆるい張り出しの胴部に連なるものであろう。3は，ややうす手のもので一見無文とも見えるが口縁直下に太い凹点を1段配しており，内側には横方向の調整を施している。3点いずれも滑石末の混入著しいが3は黄灰色の胎土で25～27と酷似した胎土である。**2類**としたのは第4図4・5である。凹文施文部は1類同様であるが凹点と凹線を併用している。ゆるくくびれた頸部，ゆるく張りだす胴部をもつ器形であるが底部は不明である。4は，ゆるやかな波状口縁をもつが部分的に高く作られた「波形」の直下に凹点とそれをつなぐ凹線がある。さらに1条の凹線が頸部を横走し，以下は無文で放置されており，胎土に滑石の混入著しい。5は，4とほぼ同様の器形であるが，頸部の凹線は4に比して弱く滑石の混入は4ほどではない。**3類**（第4図6・7）は口縁下際に直線ないし曲線の凹文を描くもので，施文具の幅はやや狭く，ヘラ状のものである。肉厚の器壁は胎土に多量の滑石を含んでいる。6は殆んど直立する口縁部であり，7は口縁に近い頸部から胴部辺である。**4類**（第4図8～10）は口縁下際に斜の凹線を連続させている。やや細目のヘラ状施文具を用いており，やや萎縮した感じをあたえる。いずれも肉厚で，胎土に多量の滑石末を含んでいる。8・10はやや外反する口縁部である。**5類**（第4図11・12）は基本的には4類に入るが凹線がより萎縮

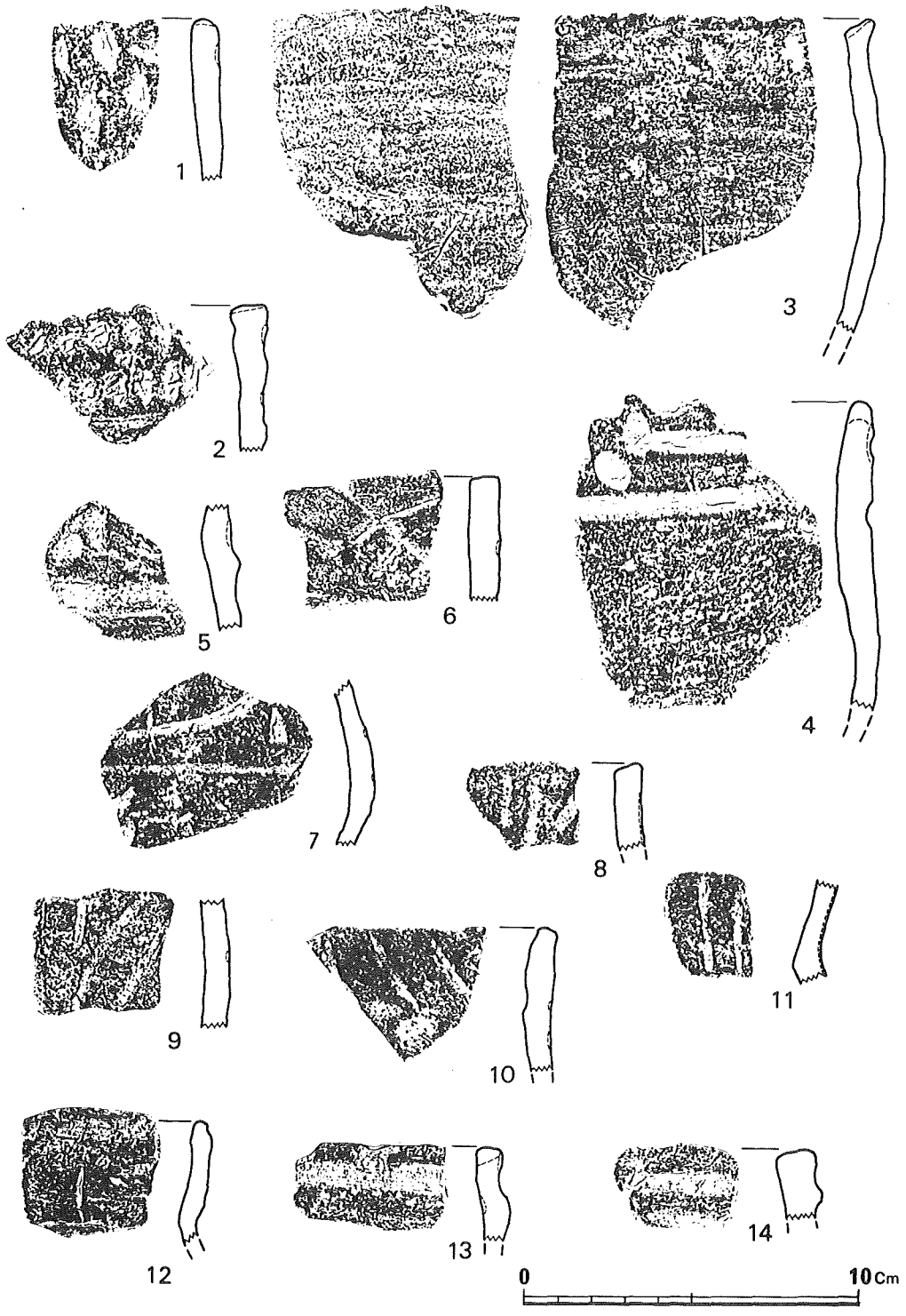


Fig. 4　出土土器①

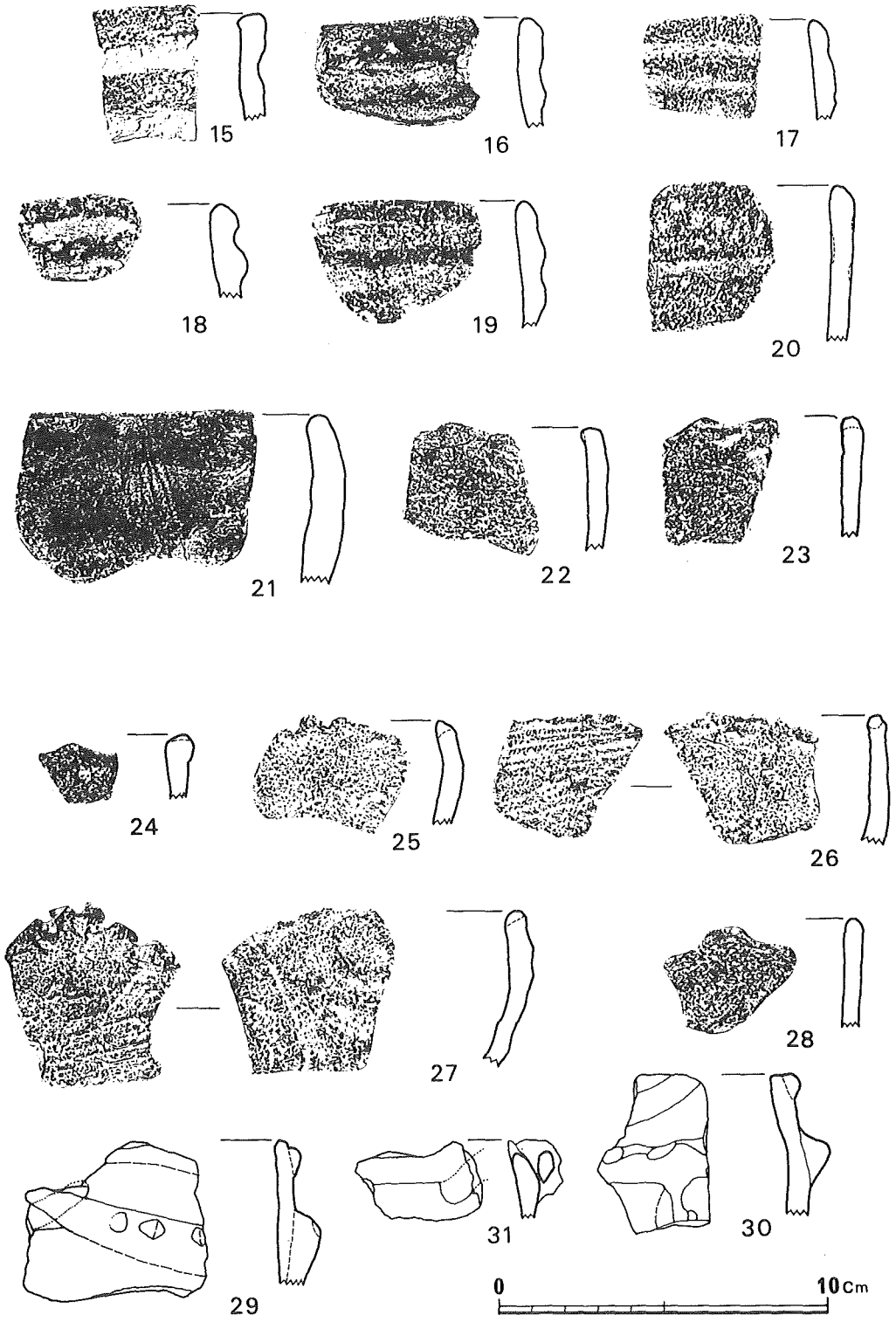


Fig. 5　出土土器②

した感じのもので直立または横走する凹線は不揃いでかつ脆弱な感じをもたせる。11・12ともに頸部から，やや強目に張り出す胴部を推測させる。滑石の混入は共に微量である。**6類**（第4図13・14，第5図15～20）は口縁部が平縁で，下際に1～2条の太い凹線をめぐらしており，本遺跡の資料では7類とともに最も多い。口縁断面形を見ると，殆んど直立するもの(17・20)と僅かに外反するもの（13・16～18）がある。施文は凹い鈍端なものが使用されている。17・20はいずれもややうす手であるが，他は肉厚で胎土に多量の滑石を含んでいる。**7類**（第5図21～28），無文のもので，ややうす手の口縁部をもつものを一括した。25～28は，うす手で黄灰色の胎土に滑石を多量に含み，ゆるい山形口縁のなかに小さな波形を描いており，内面には横方向の調整痕を残している。24・28はいずれも小規模な山形をもっている。**8類**（第5図29～31）は，厚い粘土帯ないし粘土紐をもって頸部に重厚な粘土帯を断面三角形にして貼付し，口縁部に複雑な文様を粘土紐によって描いている一群である。29は口縁部と頸部に太い粘土帯をめぐらし，口縁部のそれは丸みをおびて一端を完結させ，頸部の粘土帯は末端を完結させて，X字状に交錯させている。30は29と同一個体と考えられる。31は口縁部貼付の粘土紐を口縁のゆるい波形部でひきはなし，一見把手状に左右から結びつけている。器形としては，頸のくびれは弱く，胴部の張り出しも強くないようであるが，他類に比して器壁がうすく口縁部の装飾性が著しく，滑石の混入は微弱である。もはや阿高系の特色である凹文の伝統をはなれている感がある。32は断面形半丸の凸帯を口線下に1条めぐらせたものであるが，ゆるい山形口縁を描くようであり，**9類**（第6図）として分けた。滑石の混入はない。

胴部として提示したのは第6図33～37である。33・34は，第4類口縁部の一部とも考えられ

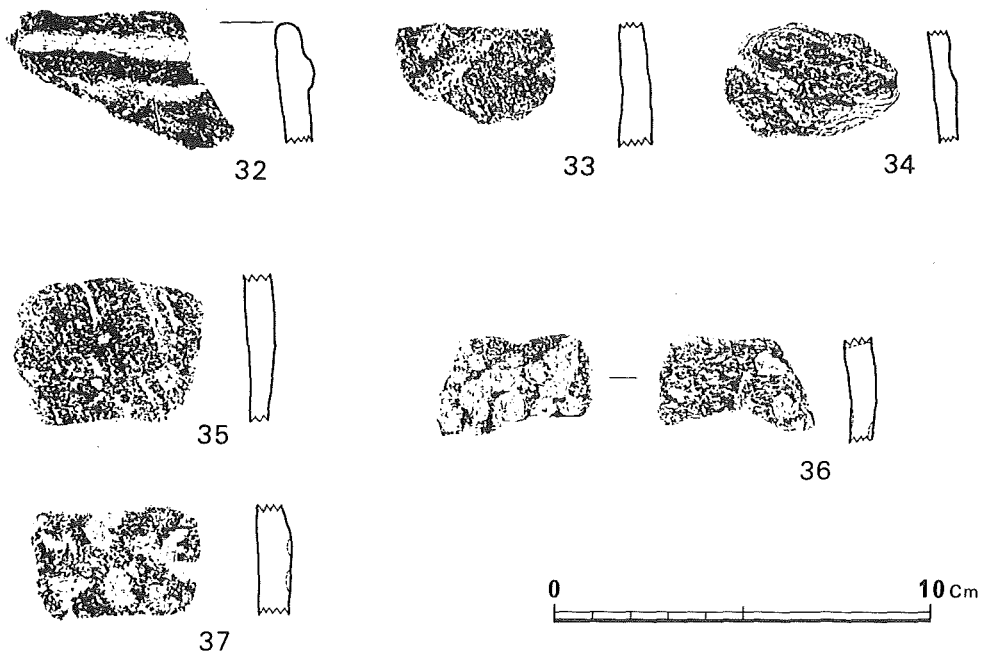


Fig. 6　出土土器③

るもので斜の凹線を見せている。35も同類と考えられるが，凹線がより萎縮している。36・37は棒状の施文具を器壁に直角にして施文した感じがあるが，不規則であり，整一性がない。37は，海獣の背柱骨を押しつけたような特殊な圧痕を見せており，棒状ないしヘラ状の施文具によるものとは考え難い特殊な胴部である。36以外はいずれも滑石の混入が著しい。

底部として得た資料は12点（第7図38～49）である。底部が丸底気味の立上りを見せるもの—1類（48）・底部から強く外反して立上るもの—2a類（38・42～45）・底部から外傾して直線的に立上るもの—2b類（39～41，46・47）がある。底部2類はいずれも僅かに上げ底気味

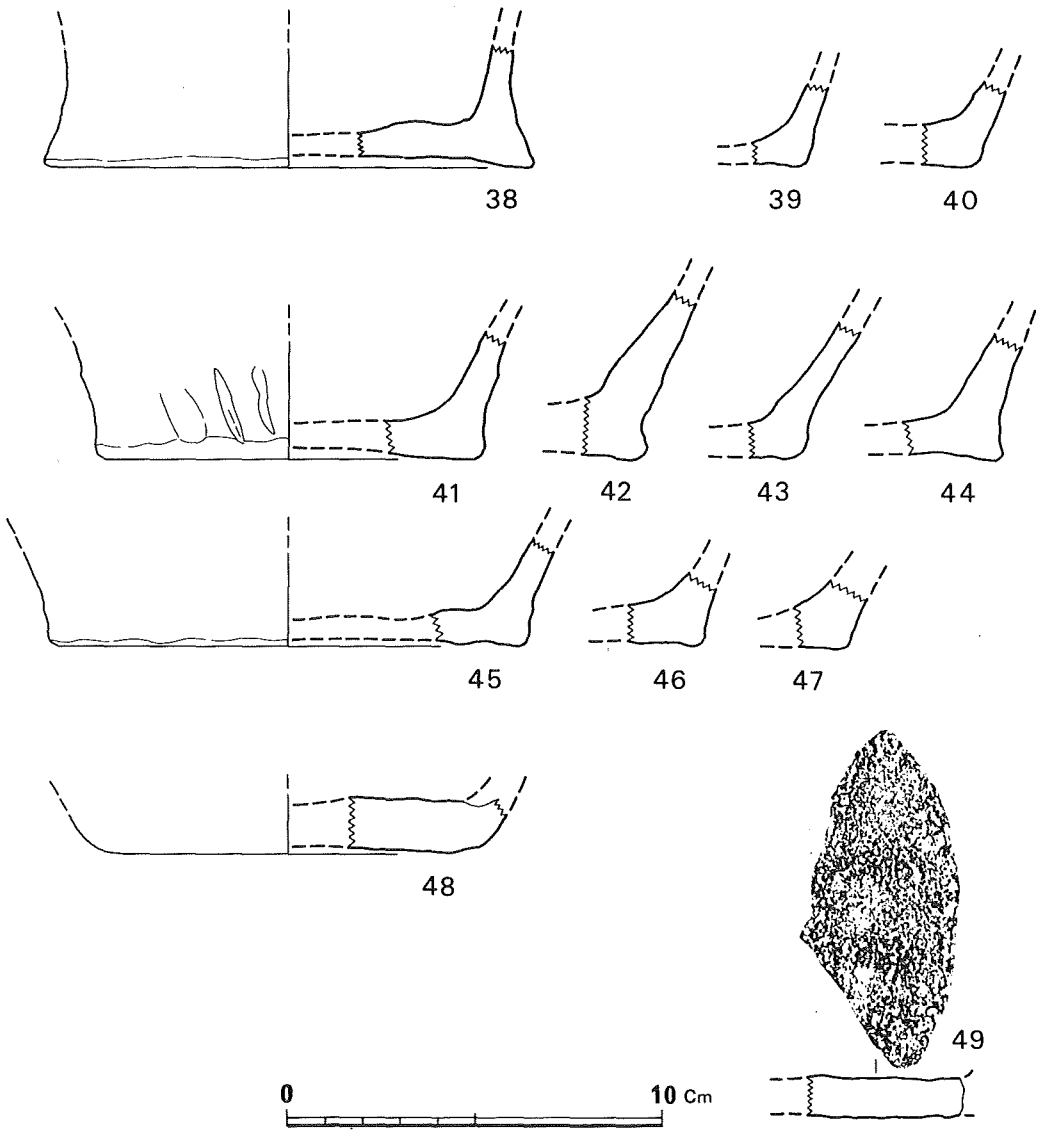


Fig. 7　出土土器④

になっているが，２ｂ類はその点が微弱である。41以外に底部に施文したものはなく，底面にも特に施文はないが49には指頭による整形の痕跡がある。

以上，山角遺跡出土の土器群と概観したが，①胎土には滑石を混入したものが多く，縄文中期土器の特色の１点は首肯できる。②太形凹文の施文部は口縁部下際に限られるものが多く，胴部施文は殆んど見られない。底部においてまた同様である。③凹文には鈍端な棒状ないしヘラ状のものもあるが，細く浅い凹文を施すものがかなりあり，萎縮した感じのものも多い。口縁部に粘土紐を貼付した装飾性の強いものもある。④器形全容を知り得るものがないが頚部のくびれはゆるく，胴の張り出しもゆるやかな深鉢形と口縁部が直立する碗形が多い。以上の点が指摘される。

山角遺跡の中期土器群は，全体としてはいわゆる太形凹文を特長とする阿高式土器の系譜の中で把握できるが，全体として施文に規則性が乏しく，施文部も口縁下際に限られ，かつ萎縮した感じのものが多く，太い棒状施文具や指頭による雄大な文様構成に乏しい。施文具として太い棒状具と認められるのは，１・４・13・16・18・19であり，胴部施文を推測させるのは７のみで，底部施文が見られるのは41のみである。胴部や底部にまで雄大な凹文を有するものは多良山塊では山茶花遺跡[1]（第15図13）があり渦巻状の凹文や横位の「わらび」形と凹点凹線を組むものもある。多良山塊ではないが，宇久町長崎鼻遺跡[2]（第15図２）も同様で，貝塚の中からは，先行形態とされる並木式土器も検出されている。山角遺跡の土器群中３・４類としたヘラ施文の土器は，中期土器では新しい方に属すると考えられ南福寺式土器[3]の影響を考える必要があろう。８類とした粘土細ないし粘土紐を貼付した一群も同様であろう。第８類とした無文の一群は，出土例を大多武池遺跡[4]（第15図14）に認めることができる。総じて本遺跡の土器は縄文中期土器の中では新しく，有明海や八代海沿岸地方の影響をうけたものと解されよう。

石器

山角遺跡で得た石器資料は総数331点，本報に提示した石器資料の内数は58点である。58点の内訳を使用材質よりみれば，黒燿石製50点，安山岩質素材８点であり，黒燿石の比率約84％，安山岩質素材16％である。総数331点についてもほぼ同じ比率である。石器の種類別に58点を見ると，石鏃13点（黒燿石13点，安山岩製０），掻器10点（５，５），ブレイド19点（19，０），使用痕のあるブレイド10点（10，０），石核４点（３，１）であり，安山岩製の良好な縦剝ぎの剝片２を提示している。黒燿石の使用率が著しく高く，両石材が同等の使用率を示すのは掻器のみであり，比較的大形の石器を作る場合，九州地方で得られる黒燿石の原石が大形の石器製作にたえる規模のものが少ないことを示している。

石器群について略述してみよう。**石鏃**13点はすべて黒燿石製である。剝片鏃は５点（第８図１～５），本遺跡で多量に得られた縦長の剝片を素材として製作され，裏面は母核からの剝離面を広く残し，基部の抉入加工と先端を尖らす加工が見られる。表面また同様である。このため，

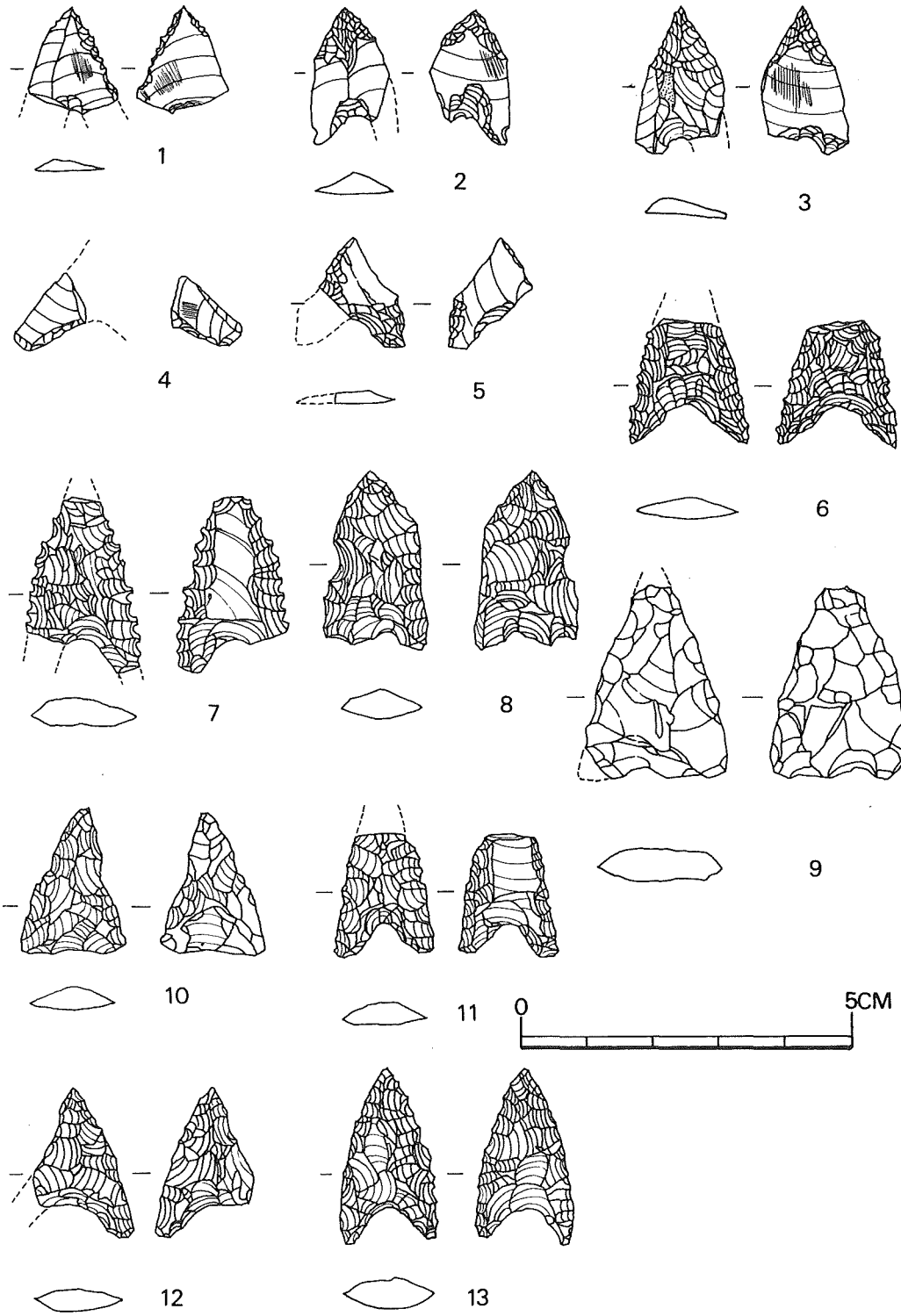


Fig. 8　出土石器①

全体としての形が，将棋の駒の下辺に抉りを入れた形状をしている。全長20㎜程度と小形のものが多く，黒色の光沢ある石材を使用している。鋸歯状鏃２点（第８図６・７），基部の抉入加工深く，全打製。いずれも微細な二次加工を全面に施し，両側縁に鋸歯状の加工がある。２点とも欠損部があるが全長30㎜程度で剝片鏃よりやや大形である。第８図８～13は全打製鏃であるが，８は乳黒色半透明の黒燿石を用い，先端部がやや駒形に近い。９は，本稿石鏃中最大のもので，現存長27㎜，基部の抉入はなく二等辺三角形である。磨耗著しく加工の状態はわかりにくい。10は９と形状ほぼ同様であるが，全長22㎜とやや小形である。11～13は，基部抉入が深く，形状は整一である。全長24㎜程度で，本稿石鏃の中では中程度の規模である。**ブレイド**（第９図14～32）19点は，規模の大小はあるが，縦長の整一な剝離技術をうかがわせる一群であり，すべて黒色の良質の素材が使用されている。すべて，表面に１～２系の稜を残し，裏面は母核からの剝離痕をそのまま残している。打撃面は調整されているものが殆んどであるが，一部に自然面を残すもの（15・18・20・22・24・29）があり，母核から早期に剝離されたことを示している。資料の中には，剝離されたままのものがあり（15・18・23・24・26・28・29），全長は30㎜を境にして大小２様があり，７点についていえば15（27㎜），18（47㎜），21（49㎜），23（46㎜），24（30㎜），26（40㎜），28（20㎜），29（36㎜）を計り，40㎜をこす長大なものが多く，折損した資料についても，原状は長大な剝片であったことをうかがわせるものが圧倒的多数を示している。後述する使用痕のある剝片についても，ほぼ同様のことがいえる。剝片鏃は，この長大な縦長の剝片から得たものである。**使用痕のある剝片**10点（第10図33～42）は，ブレイドの両側もしくは片側に刃こぼれの観察される資料群で，前掲の長大な資料群を使用している。両側に使用痕の認められるのは５点（34・35・36・39・40）と，片側使用例とが数半ばしている。**掻器**は総数10点，黒燿石製５点（第11図43～47），安山岩製５点（第14図48～53）と，数半ばしている。黒燿石製は，幅広の剝片を利用したもの（43・45・47）と縦長のブレイドを利用したもの（44・46）とがある。いずれも剝片の片側に局部的な二次加工を施している。**黒燿石製石核**は３点（第13図48～50）である。48は黒色の角礫状原石を用い，打撃面の調整を行った後，剝離を行っており，打撃面とほぼ直角に加撃されている。４枚の剝片を剝取ったあとがあり，本稿で前述した縦長のブレイドを剝離している。上面より見れば，剝離も最終段階に近い資料といえよう。49は角礫状の黒色原礫から，幅の広い剝片を剝離している。打撃面は調整を行わず，自然面にそのまま加撃している。例数が３点に限られるので速断は避ける必要があるが，提示した資料に関する限り，縦長の剝片を作る石核は打撃面を調整し，幅広の剝片を作る石核（49・50）は，自然面に直接加撃していることになる。前者の場合は前述した縦長のブレイドの多数例によって，後者の場合43・45・47の資料（掻器）の打撃面により観察すれば，少例の石核ながら，２様の石核があることが首肯できよう。

安山岩製石器は８点，内訳は掻器５点（第14図51～55），**縦剝ぎの剝片**２点（第14図56・57）石核１点（58）である。**掻器**５点は，いずれも大形の剝片の１辺に二次加工を施しているが，

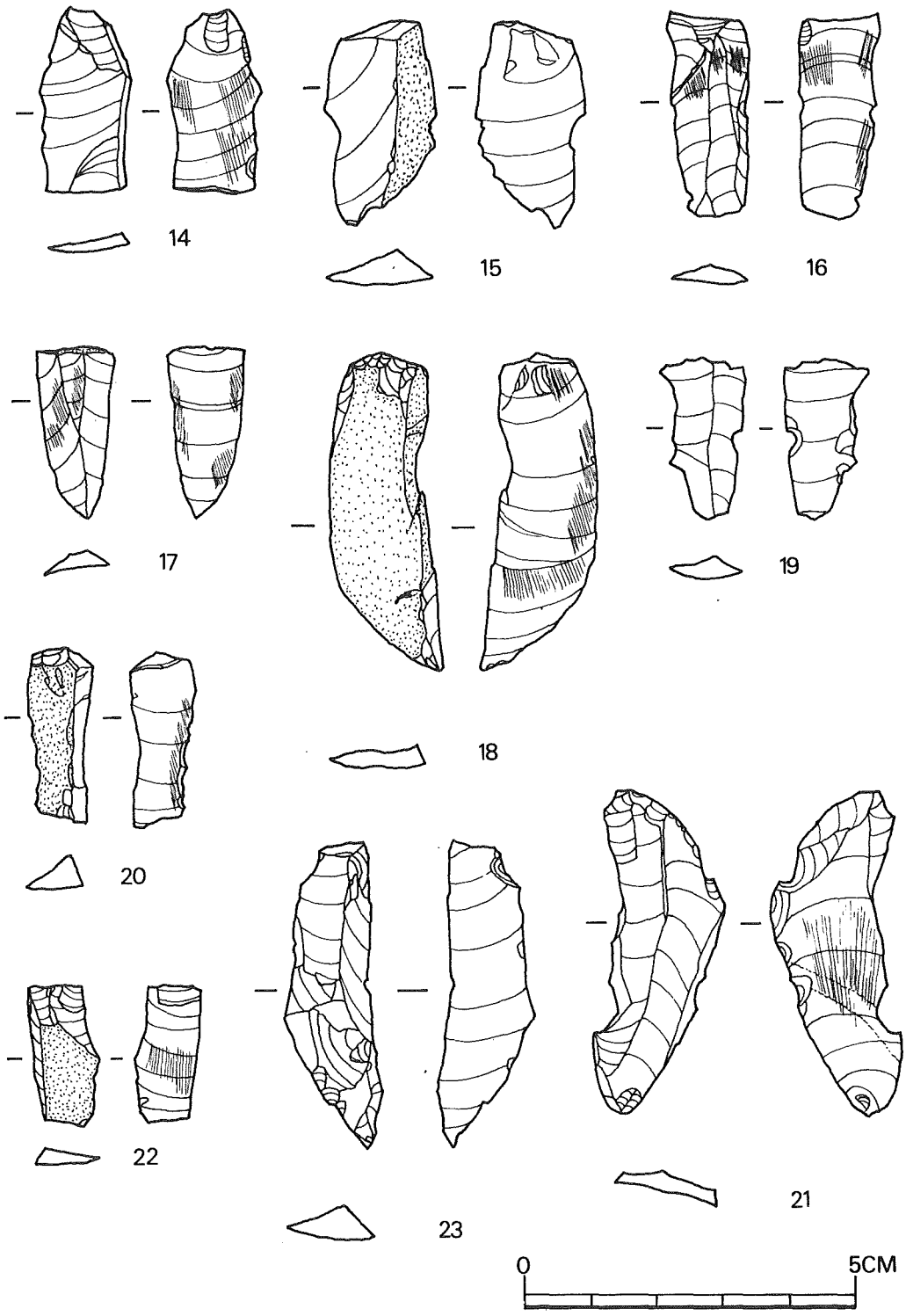


Fig. 9　出土石器②

整一な剝片を利用したものではない。本遺跡の安山岩剝片としては，56・57に見る縦剝ぎの剝片があるが，52はこの種剝片の片側に微細な二次加工を施している。二次別工の精緻なものは53であり，両面からの加工が施されている。56・57は縦剝ぎの剝片で整一な形状を見せる。いずれも自然面を残した石核から剝離されており，打撃面と剝離面のなす角度はいずれも 105° 程度である。この剝片を石器に利用したのが前述の52である。58は安山岩製**石核**であるが，全面にわたって剝離が行われ，56・57等の剝片と直接に結びつく資料ではない。

山角遺跡の石器を概観してみて気づくことがあった。①石鏃の中で全打製鏃の内，鋸歯状の側縁をもつもの（第8図6・7）があり，従前指摘されていた有明沿岸地域に共通する傾向が見られること。但し，前掲の長崎鼻遺跡[5]（中期）や五島列島諸遺跡やつぐめのはな遺跡[6]（第15図22）等に見られるサイドブレイド状の石鋸や巨大な鋸歯状鏃が見られないこと。②縦長の剝片が石核を伴ってまとまった量の出土があり，幅広の剝片も石核を伴っており，前者の石核と後者の石核は打面調整の有無によって明瞭に区分されること。③石錘や尖頭部をもつ礫器群が認められないこと。④磨製石器を伴っていないこと。以上の点である。

石鋸と称される鋸歯状加工のある剝片石器は西北九州，殊に五島列島など外洋沿岸部の縄文中～後期遺跡に見られているが，こと鋸歯状の鏃の場合は山地形に立地する遺跡においても認めることができる。鋸歯鏃以外のものは逆に言って沿岸部に限局されることがほぼ確実である。このことは，鋸歯状剝片石器の技術は，縄文中期から後・晩期にかけて西北九州に盛行したことが首肯されるとともに，沿岸部で使用されるものと，内陸部ないし山地形で使用される鋸歯状剝片石器とが，使用目的によって区分されていた可能性が指摘されるものといえよう。沿岸遺跡で見られるサイドブレイド状の石鋸ないし，二等辺三角形の長辺に鋸歯状加工を施す剝片石器，あるいは，前掲つぐめのはな遺跡の安山岩製巨大鋸歯状鏃は，沿岸部での漁撈に強くかかわるものといえようが，内陸部や山地形での使用にも十分な機能を果たすものと考えられる。向後，山地形に立地する遺跡において鋸歯状鏃以外の石鋸が検出される可能性なしとしないが，現時点においては，鋸歯状鏃以外の石鋸出土例の知見はない。かかる鋸歯状剝片石器群の地形による「使い分け」の意味するものは，単に機能の差のみを意味するものか興あるところである。④の点については西北九州沿岸の縄文遺跡において顕著な石器であるが，中期においては浜泊遺跡[7]（第15図4）以外に出土例に接していない。近年においては，長崎県のみの遺跡においてであるが弥生時代後期にまで出土例のある遺跡が増加しつつあり，三軒屋貝塚[8]（弥生後期）里田原遺跡[9]（弥生中期）・今福遺跡[10]（弥生後期）で確認されている。かかる現象は，特殊な立地による地域現象と見るか否かは別として，きわめて海洋性の強い石器である点をより強調するものであり，逆にいって，多良山塊縄文遺跡の対象的性格を強調する傍証となる石器であろう。

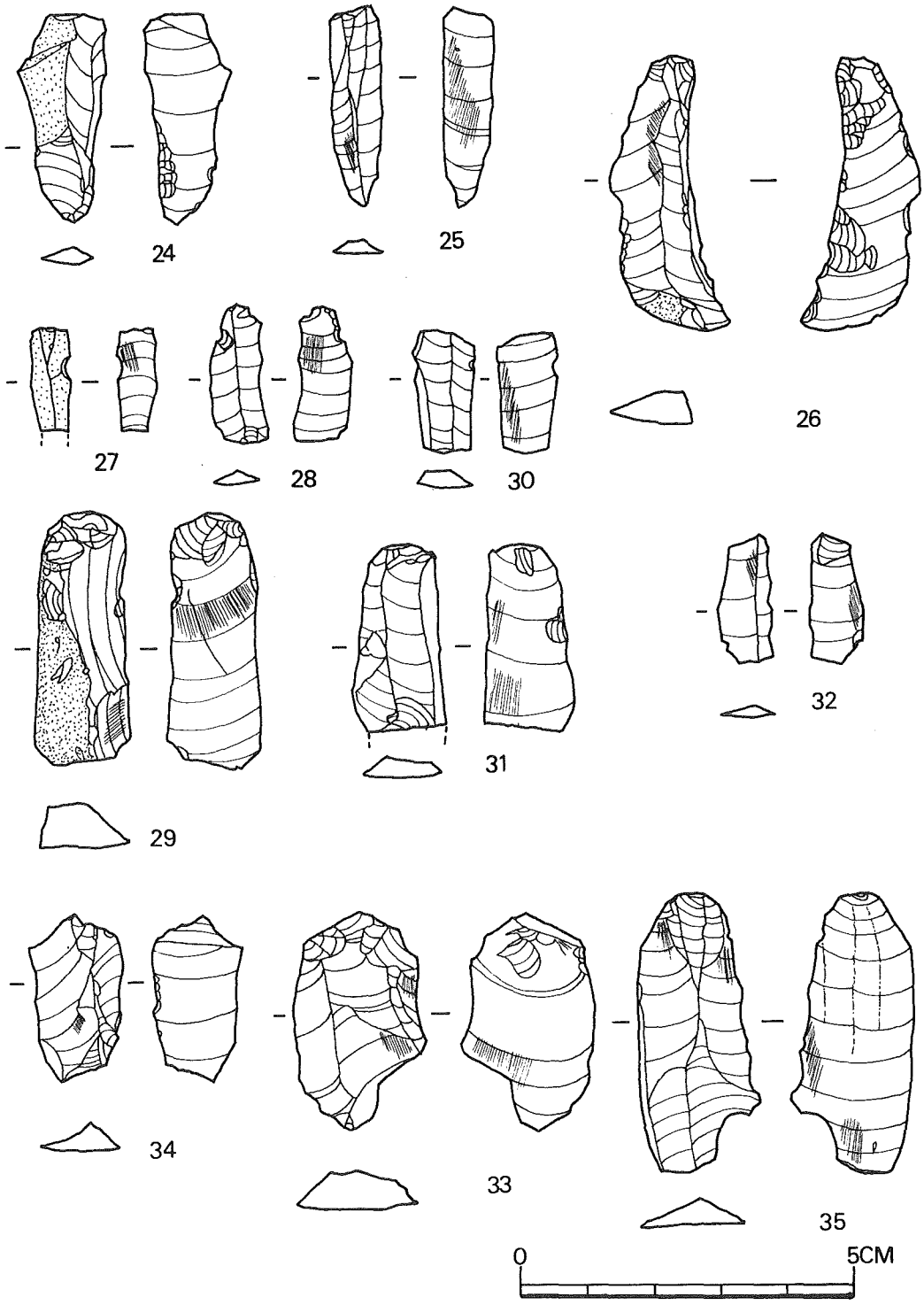


Fig. 10　出土石器③

〔参考〕

1．正林護「小長井町の先史古代」小長井町郷土誌　1976　小長井町
2．小田富士雄「五島列島の弥生文化　総説編」人類学考古学研究報告第2号　1973　長崎大学医学部解剖学第2教室
3．寺師国見「肥後水俣南福寺貝塚―南福寺式土器―」1939　考古学10－7
4．県教委の分布調査による。
5．県立宇久高等学校に同遺跡出土の好資料が多く所蔵されている。
6．正林護「つぐめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会報2　1974　長崎県考古学会
7．安楽勉・藤田和裕「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報第45集　1979 長崎県教育委員会
8．松藤和人・諫見富士郎・古田正隆「口之津貝塚（旧称三軒屋貝塚）及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第5集　1975　百人委員会
9．正林・高野・藤田・安楽・井上「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告第25集　1976　長崎県教育委員会
10．県教育委員会により，昭和53年以降調査が続行されている。

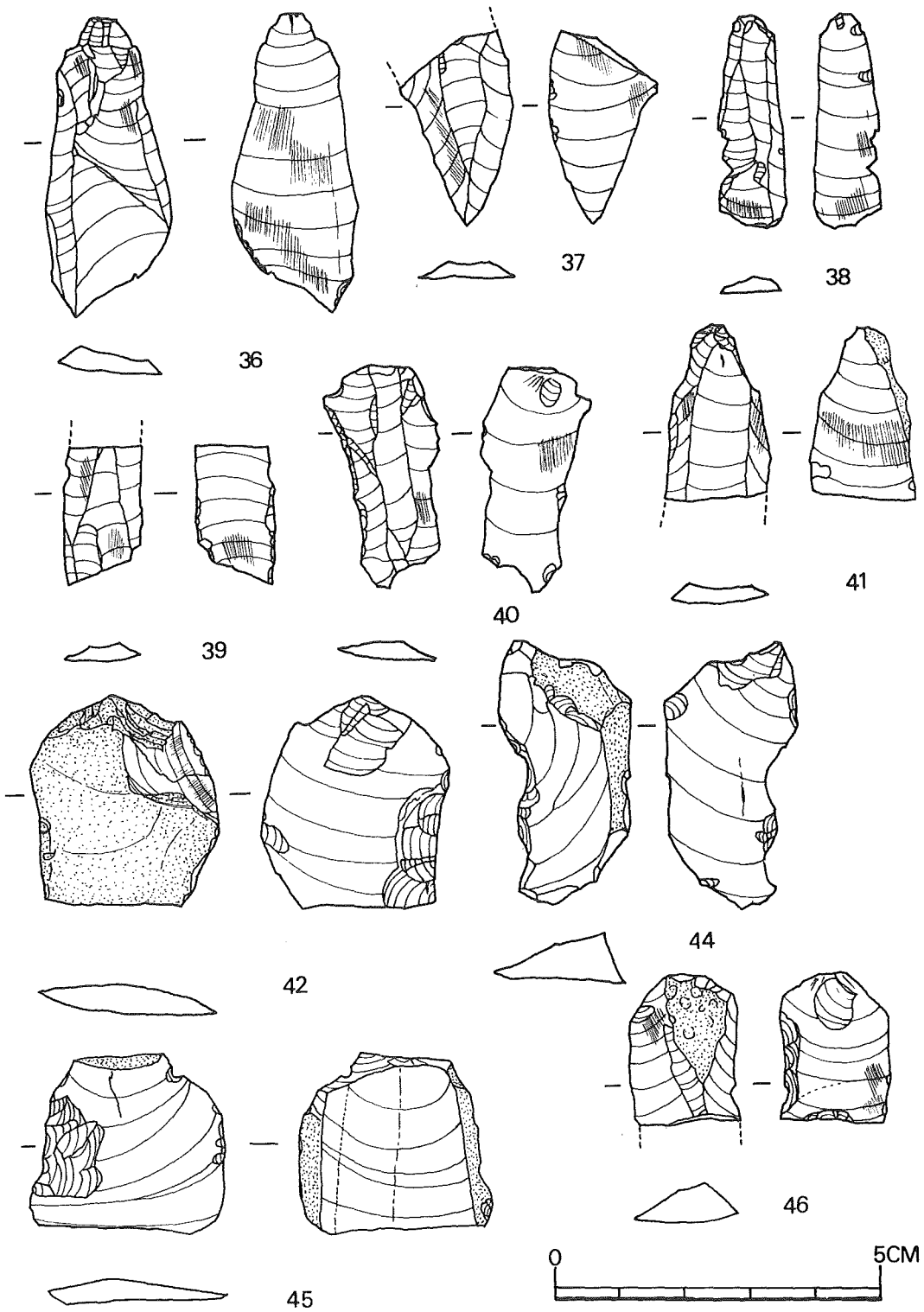


Fig. 11　出土石器④

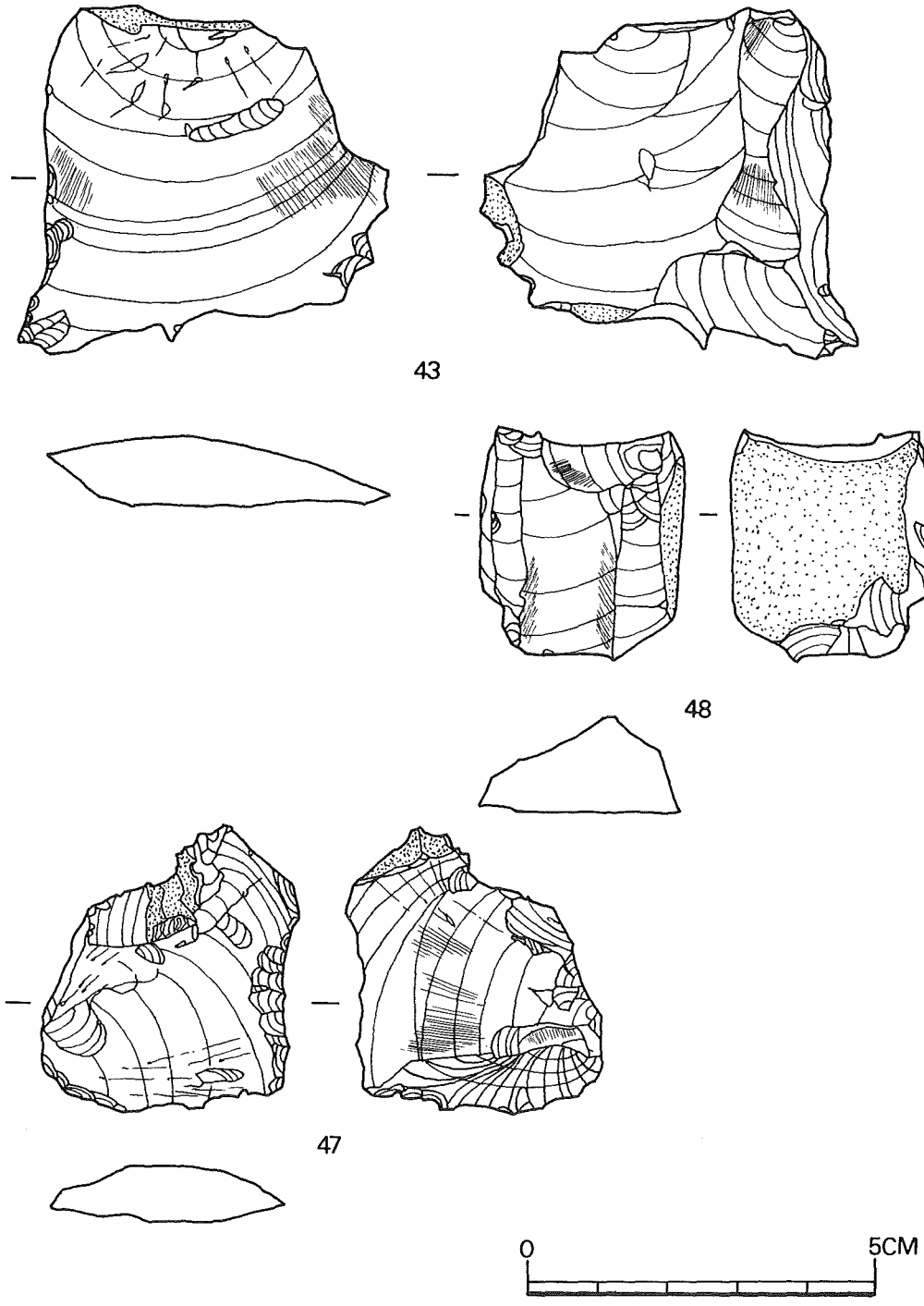


Fig. 12　出土石器⑤

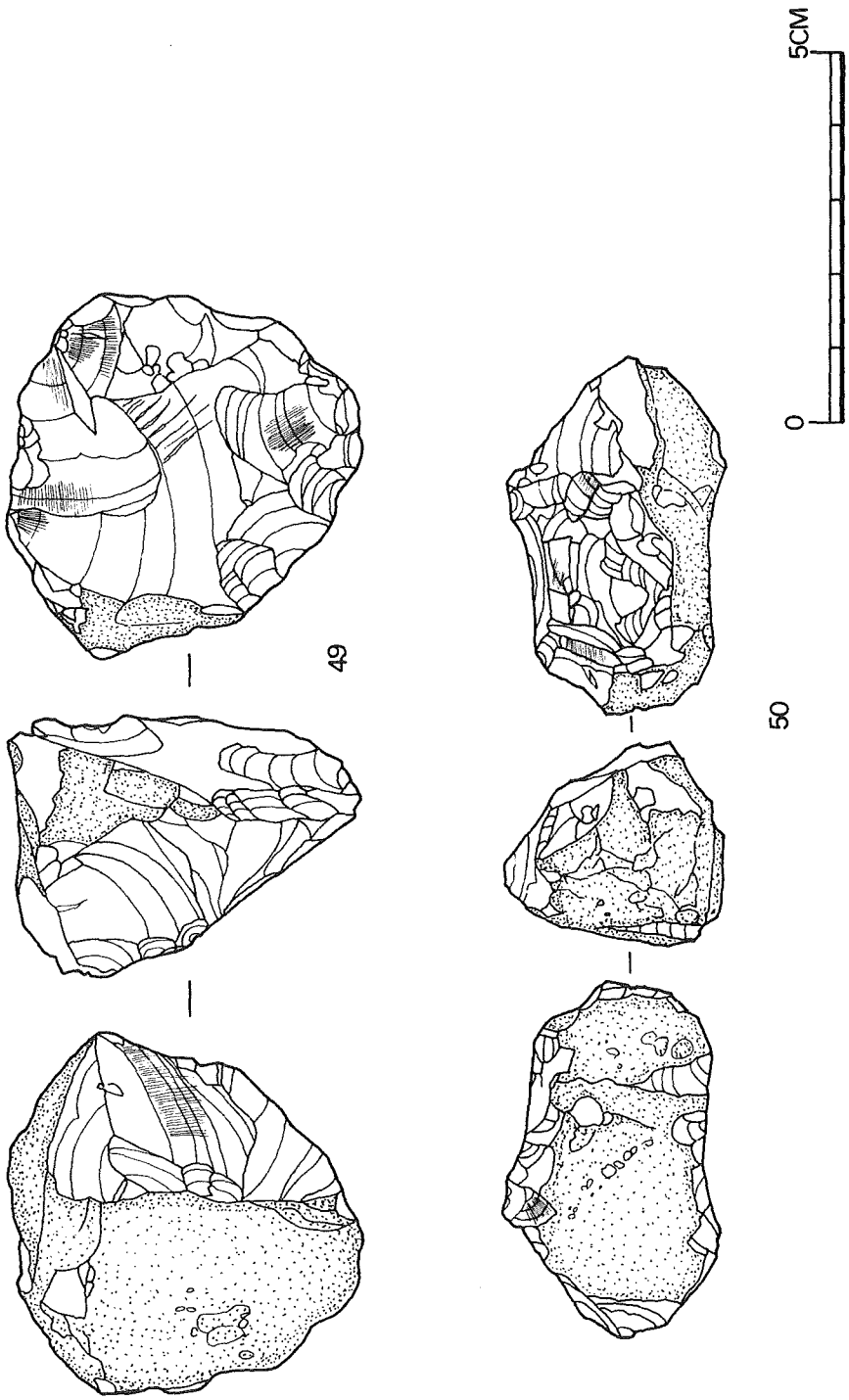


Fig. 13　出土石器⑥

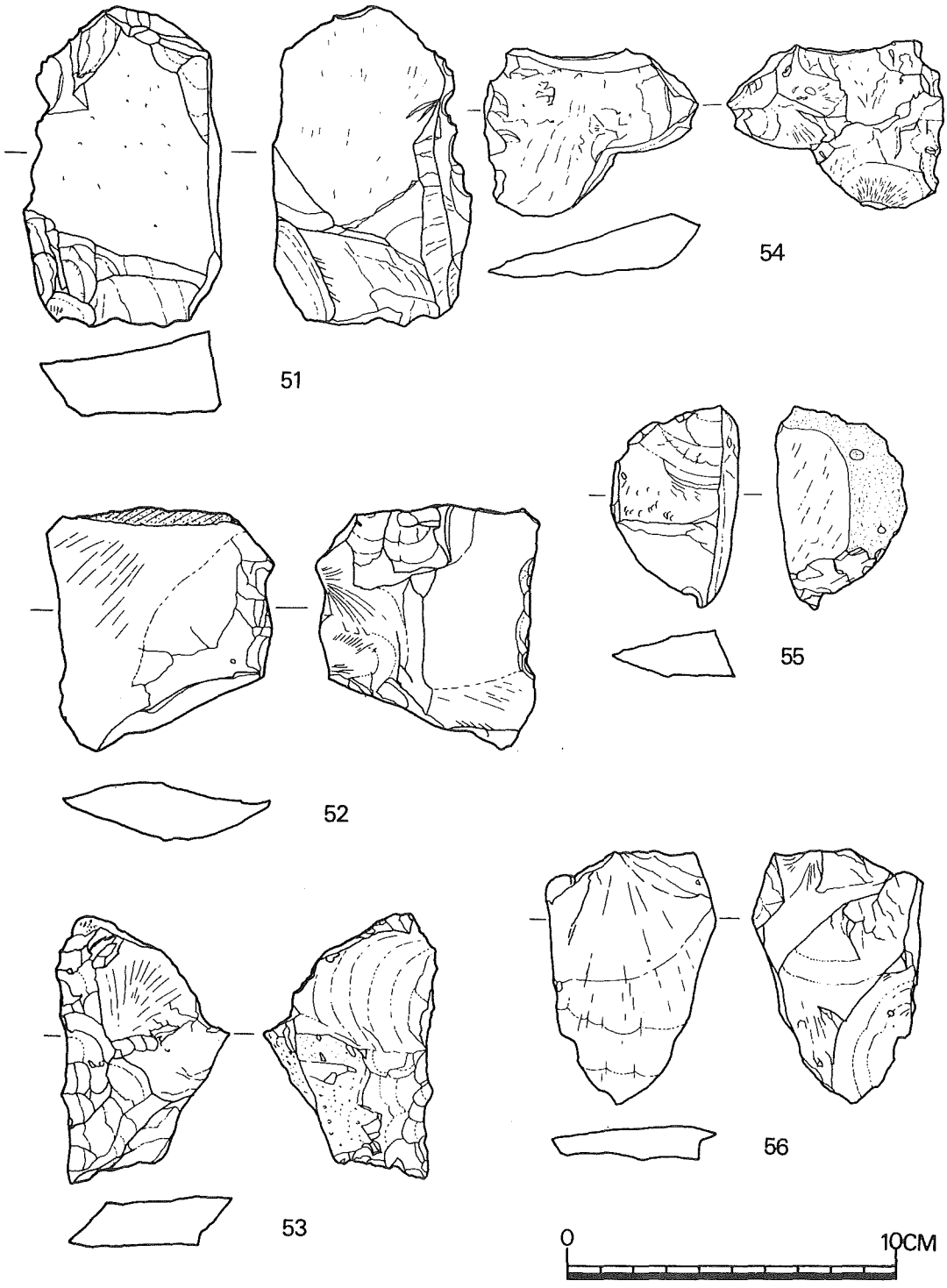


Fig. 14　出土石器⑦

4．多良山塊の縄文中期遺跡
（まとめにかえて）

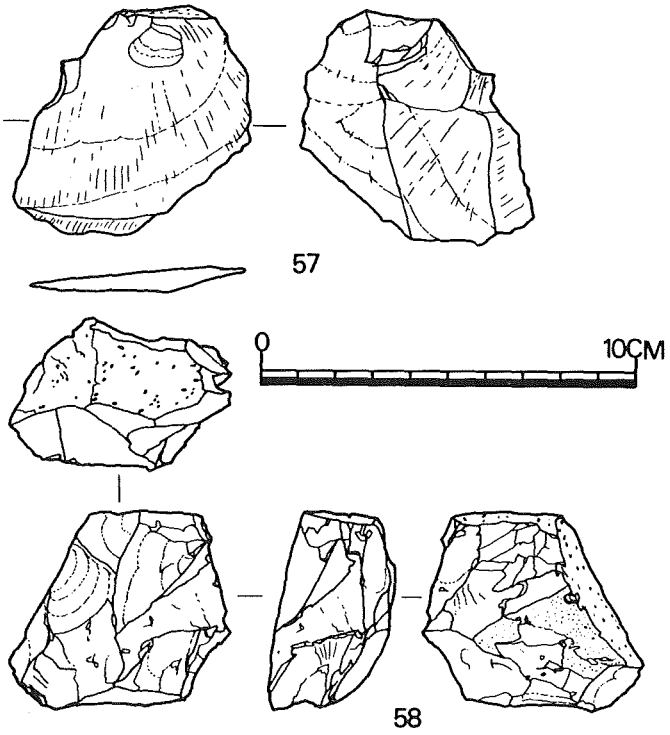


Fig. 15　出土石器⑧

長崎県において発掘調査された縄文中期遺跡は数少なく，古くは有喜貝塚（第15図16）があり，西加藤遺跡（同1）・長崎鼻遺跡（同2）つぐめのはな遺跡（同21）・三会海中干潟遺跡（同17）・浜泊遺跡（同4）等の海岸部遺跡が調査されている。いずれも，太形凹文土器を出土しており，つとに指摘されてきた鯨の背柱骨の圧痕を底部に残したものも知られている。遺跡数としては20箇所をこしているが，海岸部遺跡の場合，縄文後期層の下部に遺物があるものの，包含層をもつものが少ないという状態での「出土」状態が指摘されている。この中で前掲の遺跡群は良好な遺跡状態にあり，長崎鼻遺跡では各種の鋸歯状剝片石器に大小２類の石錘が発見され，つぐめのはな遺跡では安山岩製の巨大な銛先状の鋸歯鏃と横形石匙が鯨骨群とともに検出されている。浜泊遺跡では，従前，縄文中期土器に確実に伴った例の稀少な尖頭部をもつ礫器が伴っていた。いずれも海洋依存の生活形態を強く残すもので，長崎県の離島や外洋沿岸部の実像に迫る遺跡内容であった。

一方，内陸部ないし山間部における縄文中期遺跡の調査は少なく，下本山岩陰遺跡（同23），岩下洞穴遺跡Ⅵ層以上の包含層（同7）・川頭遺跡（同15）等の例が挙げられる程度である。下本山洞穴では，400点以上の土器資料が得られているが凹文の施文部は口縁下際に施されるものと無文で放置される土器口縁部と底部が目立ち，胴部の少ない点が指摘されているが報文による限り比較的後出の土器のようである。岩下洞穴ではⅥ層以上の各層に阿高系の土器が各微量出土しているが，Ⅱ・Ⅲ層に比較的点数を見るようであり，石器よりしてもⅡまたはⅢ層の時期に中期遺跡が成立したものであろう。川頭遺跡（同15）ではビーカー状の深いピットの底に大ぶりの中期土器片と礫群を有し副葬品と考えられる遺構と，小児人頭大の礫による集石遺

構が認められているが，生活遺構は検出されていない。山茶花遺跡（同13）発掘調査を経ていないが小例の先土器遺物と押型文土器を除けば豊富な中期遺物が発見されており，有力な遺跡が包蔵されている可能性が強い。石器では，石鏃群と安山岩製の大形掻器と横形石匙が特徴的である。

このように見てくると長崎県における縄文時代中期は，海岸部において遺跡数が比較的多く共伴石器も幾分明らかなようであるが，内陸部や山地の場合，洞穴遺跡を含めてその実態は明瞭でなく，殊に多良山塊中腹域の高燥地域には遺物出土地は認められるものの調査を経ていない現在では殆んど不明の状態にあるといえよう。但し，中期土器片が見られるのは250～350mの主峰群直下の湧水地に多いこと，横形の石匙（殊に安山岩製の）と，大ぶりの剝片を利用した掻器群が伴うらしいこと，川頭遺跡の例によれば，中期の土壙（墓？）は深いビーカー状になるらしいこと，集石遺構も伴う可能性があるらしいこと，等を今後の調査や研究の参考となり得るであろう。

本報の山角遺跡の場合，資料を提示するにとどまる報文内容とはなったが，対岸の水田地帯等での遺物を今後とも期待することにし，多良山塊の大多武池遺跡（同図14），川頭遺跡その他の遺跡の精査の機を得たい。なお，本稿中の遺跡名等に関する参考文献等は第1表に記したことを了解されたい。

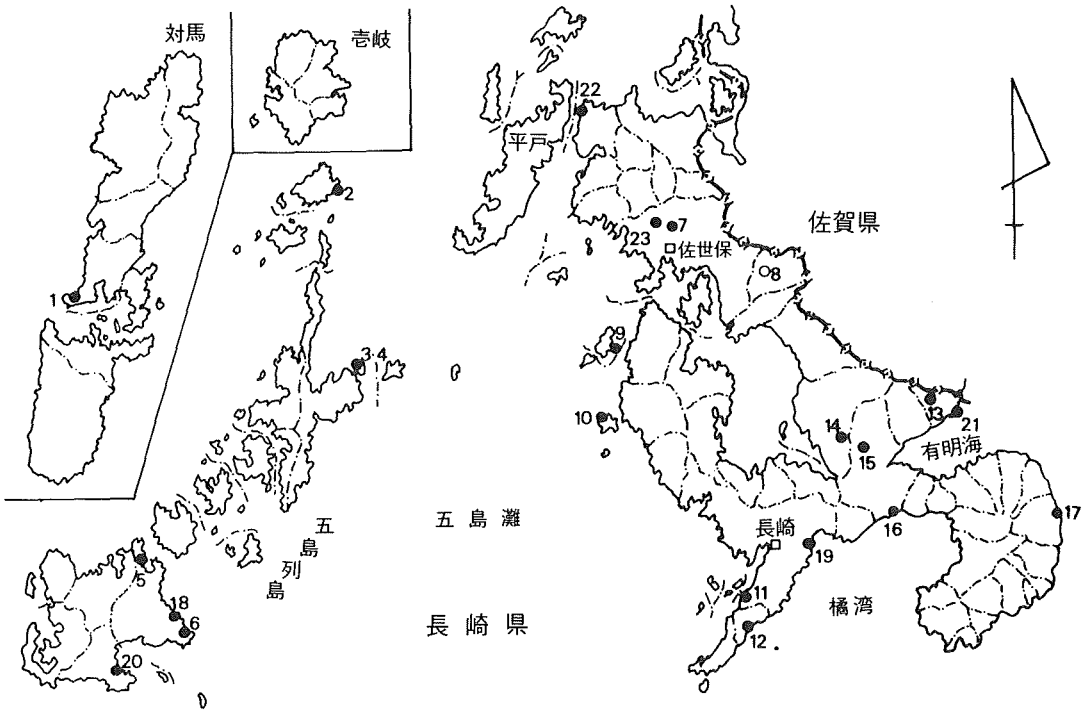


Fig. 16　県内縄文中期土器出土地分布図

第1表　長崎県内縄文中期土器出土地一覧表

No.	遺　跡　名	所在市町村	文　献・参考事項	全国遺跡地図長崎
1	西加藤遺跡	豊玉町	坂田邦洋「西加藤遺跡」長崎県文化財調査報告書第17集　1974長崎県教育委員会	1—52
2	長崎鼻遺跡	宇久町	小田富士雄「五島列島の弥生文化総説編」人類学考古学研究報告第2号　1973長崎大学医学部解剖学第2教室	8—31
3	頭ケ島白浜遺跡	有川町	内藤芳篤他の調査による	9—8
4	浜泊遺跡	有川町	安楽勉・藤田和裕「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ　1979長崎県教育委員会	
5	鰐川貝塚	岐宿町	県・町教育委員会の調査（1971）報文未刊	14—8
6	白浜貝塚	福江市	正林護・安楽勉「白浜貝塚」福江市文化財調査報告第2集　1980福江市教育委員会	16—16
7	岩下貝塚	佐世保市	麻生優「岩下洞穴の発掘記録」1968佐世保市教育委員会	22—98
8	**山角遺跡**	波佐見町	本報	25—47
9	寺島遺跡	大島町	久原巻二「大島町の古代」　1979　大崎高校	
10	串島遺跡	大瀬戸町	高野晋司他「串島遺跡」1980電源開発株式会社・長崎県教育委員会	
11	深堀遺跡	長崎市	内藤芳篤他「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号　1967長崎大学医学部解剖学第2教室	29—62
12	為石遺跡	三和町	篠崎天民氏の表面採集による	32—304
13	山茶花遺跡	小長井町	正林護「小長井町の先史・古代」1976小長井町誌	28—5
14	大多武池遺跡	大村市	県教委の踏査による	28—2
15	川頭遺跡	諫早市	諫早市教育委員会の調査による。報文未刊	28—22
16	有喜貝塚	諫早市	浜田耕作他「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌41—1・2　1926	30—30
17	三会海中干潟遺跡	島原市	古田正隆「島原市の海中干潟遺跡」　1974　百人委員会	31—56
18	水の窪遺跡	福江市	正林護・高野晋司「水の窪遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告書第1集　福江市教育委員会	
19	茂木片町遺跡	長崎市	正林等の現地踏査による	29—65
20	宮下貝塚	富江町	内藤芳篤他「宮下遺跡調査報告」図録篇長崎県文化財調査報告書第7集（1968），解説篇同第9集（1971）長崎県教育委員会	16—19
21	目島遺跡	小長井町	入江光秀氏の表面採集による	
22	つぐめのはな遺跡	田平町	正林護「つぐめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会報2　1974長崎県考古学会	19—94
23	下本山岩陰遺跡	佐世保市	麻生優「下本山岩陰」1972佐世保市教育委員会	22—109

Tab. 1　県内縄文中期土器出土地一覧表

5．滑石と縄文式土器

九州西部の縄文前期曽畑式土器や同中期阿高式土器の胎土に滑石粒ないし滑石末が混入されているものが多いことはつとに知られており，独特の光沢と滑らかな手触りをしばしば経験している。滑石は爪でもって容易に傷つけられるほど軟かく，かつ劈解性が低いので，弥生時代には，微細な加工のある石錘として加工され，古墳時代の子持勾玉や形代，歴史時代の経筒や仏像の素材としてしばしば登場する。粉末として利用されるのは，縄文式土器の胎土に混入するほか，民俗例として粉末を布にくるみ加熱して湯タンポ同様の用途に用いることが知られているが滑石の高い熱滞留効率が利用されるものである。曽畑式土器と関連ありとされる韓国の土器に石綿が混入され，沖縄県渡具知東原遺跡出土土器[1]に石灰岩末が混入されているのは同じ意図によるものであろうか。曽畑式土器から，アート紙光沢材・シッカロール等の薬剤に至るまで広く長く用いられる理由は，加工の容易さと滞熱性の利用に目的があったと解される面がある。「温石（おんじゃく）」の名が和考異に見えるのは滑石のことで現今もこの名で呼ばれている。

この２つの特性を最大限に活用し，量産されたのは「石鍋」であるが，しばしば中世遺跡で出土しており，畿内からグスク時代の沖縄[2]にまで分布出土している。ホゲット石鍋製作所遺跡[3]は１山塊に11箇所の粗型石鍋製作所を擁し，他にも西彼杵半島には10箇所以上の製作所を数えるが，石鍋以外の器物も散見されている。製作所遺跡の年代はＣ－14測定によれば11世紀前半[4]の値が出ているが，それ以前の滑石「採掘」については確証はいまのところない。

滑石鉱床は長崎県西彼杵半島に広く見られ，蛇文岩の上盤に厚く付着する変成岩であり，数10cmから１m 以上の厚みがある[5]。福岡・山口県でも滑石の露頭があり，紀州温石の名も知られているが，知る限りにおいては西彼杵半島の滑石鉱床は最も規模大であり，かつ利用の歴史と規模が大きいようである。

〔註〕

1．筆者の実見によれば，渡具知東原遺跡の曽畑式土器に滑石の混入はない。

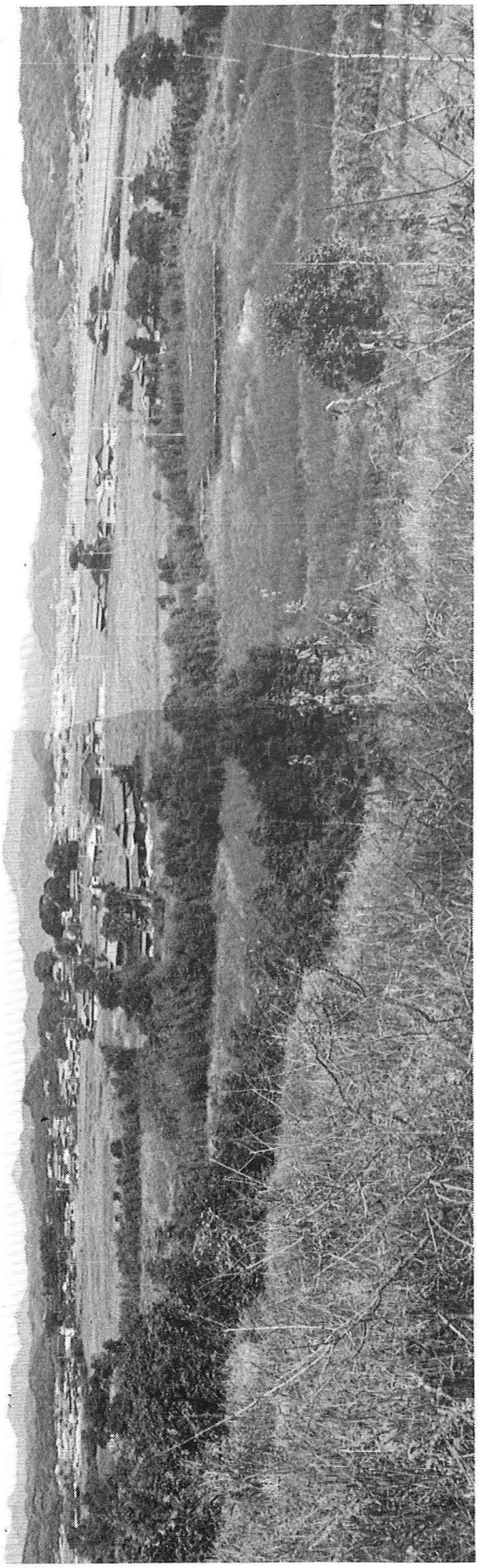
2．知念勇氏等の教示による。

3．正林護・下川達彌「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」大瀬戸町文化財調査報告書第１集　1980　長崎県大瀬戸町教育委員会

4．本報

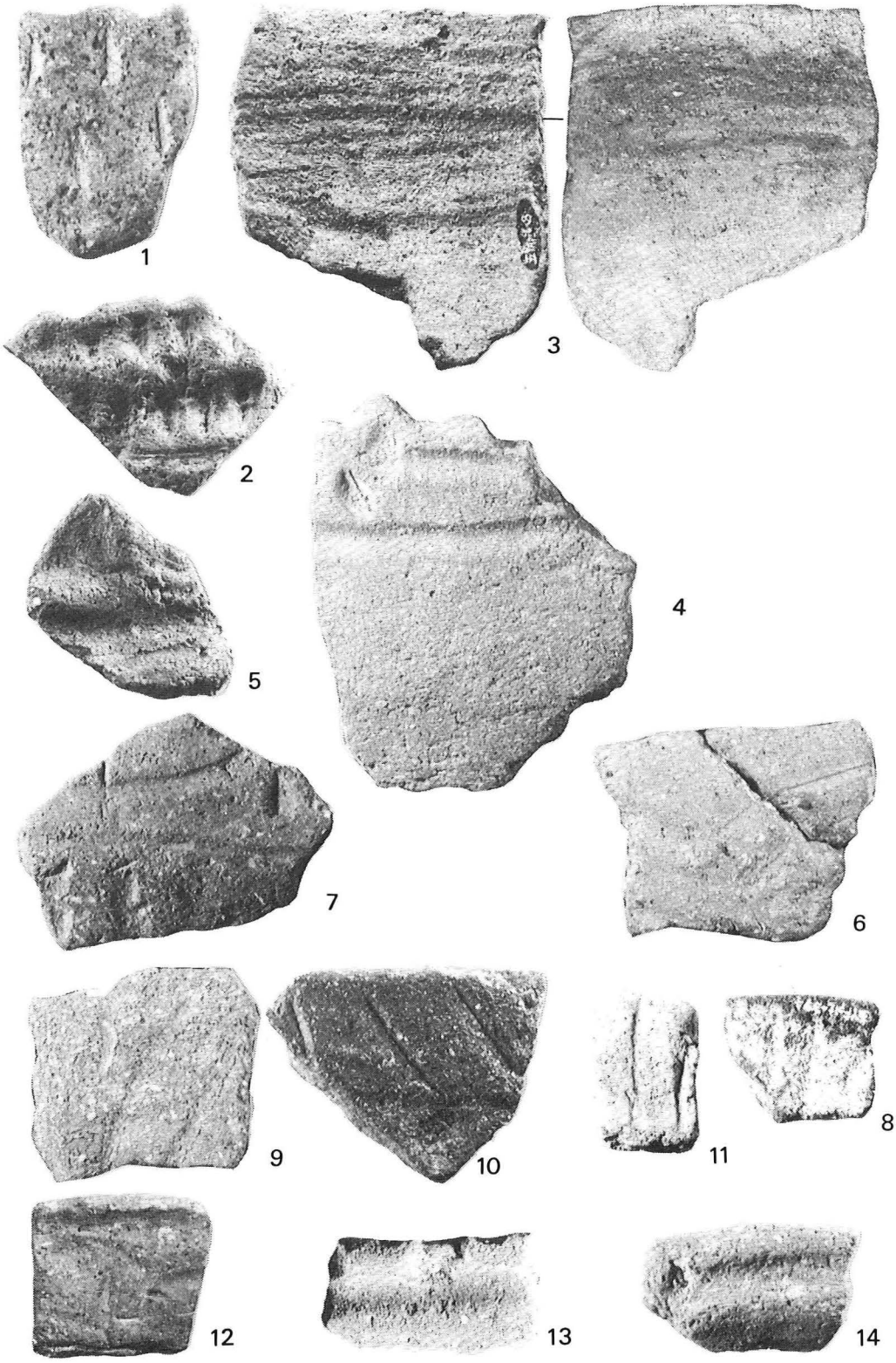
5．鎌田泰彦「西彼杵半島の滑石」 3に同じ。

PLATES

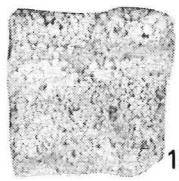


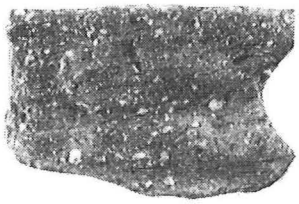
遺跡

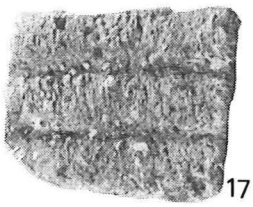
調査風景・土層

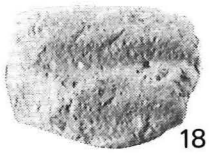


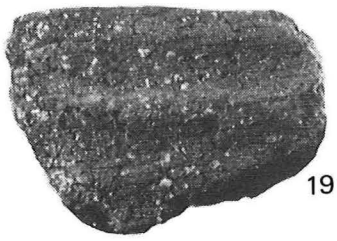
出土土器①

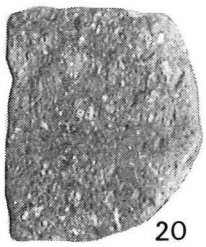

15


16

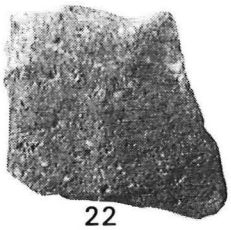

17

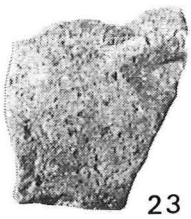

18


19

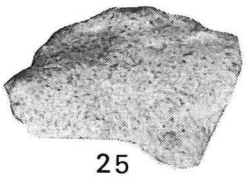

20

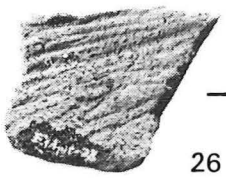
21

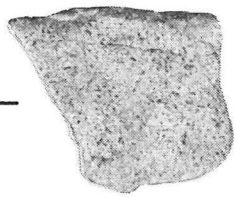

22


23

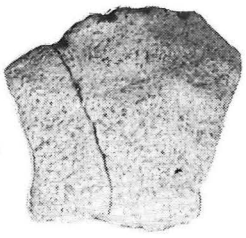
24

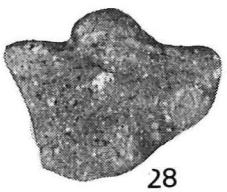

25


26

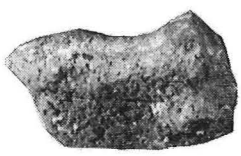


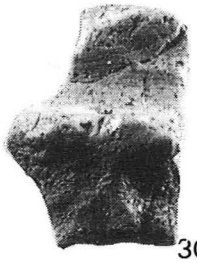
27



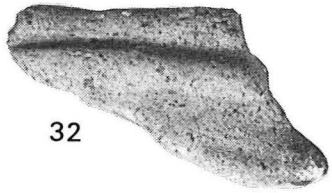

28

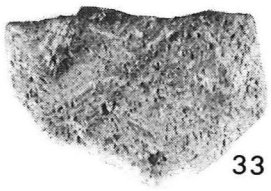
29

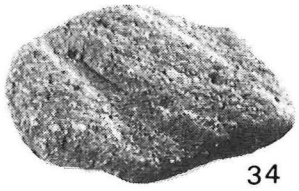

31

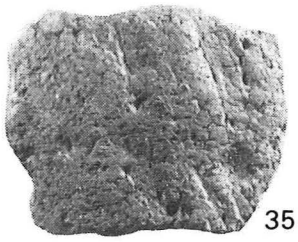

30

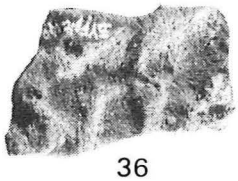
出土土器②

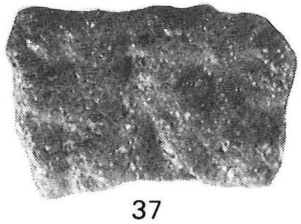

32

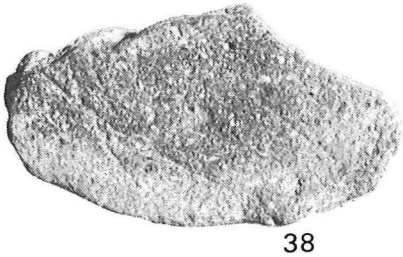

33


34

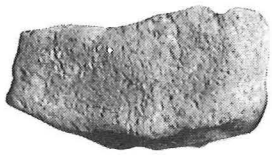

35

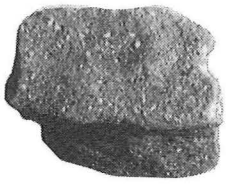

36

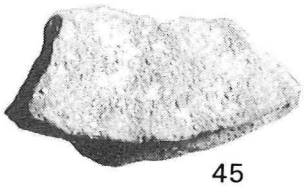

37

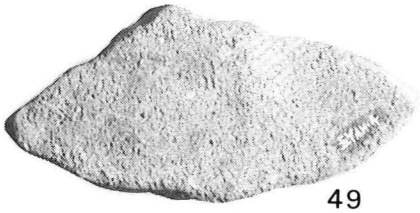

38

40

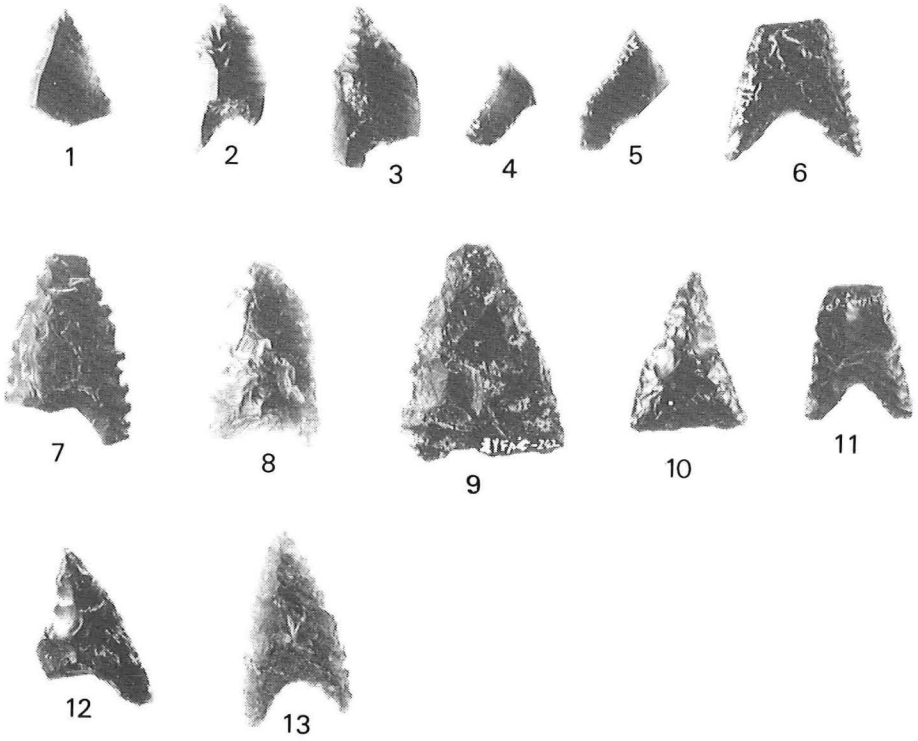

41


44

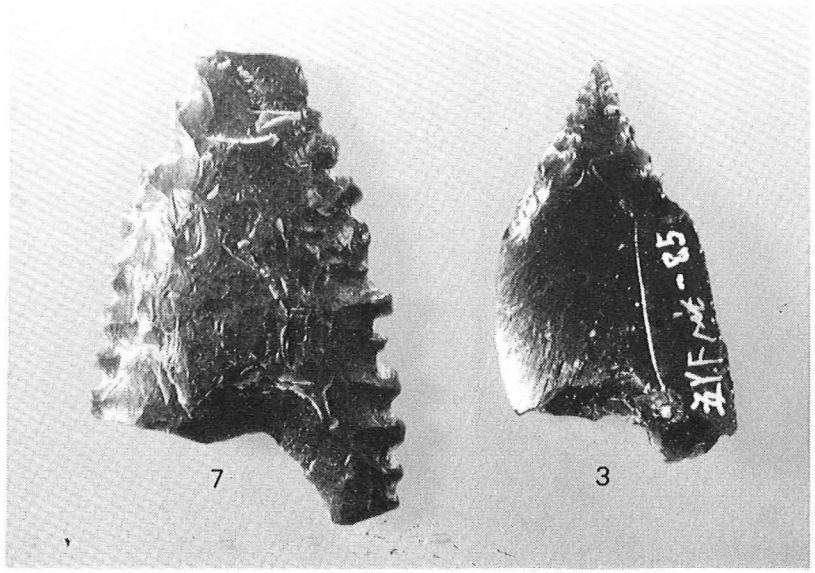

45


49

出土土器③

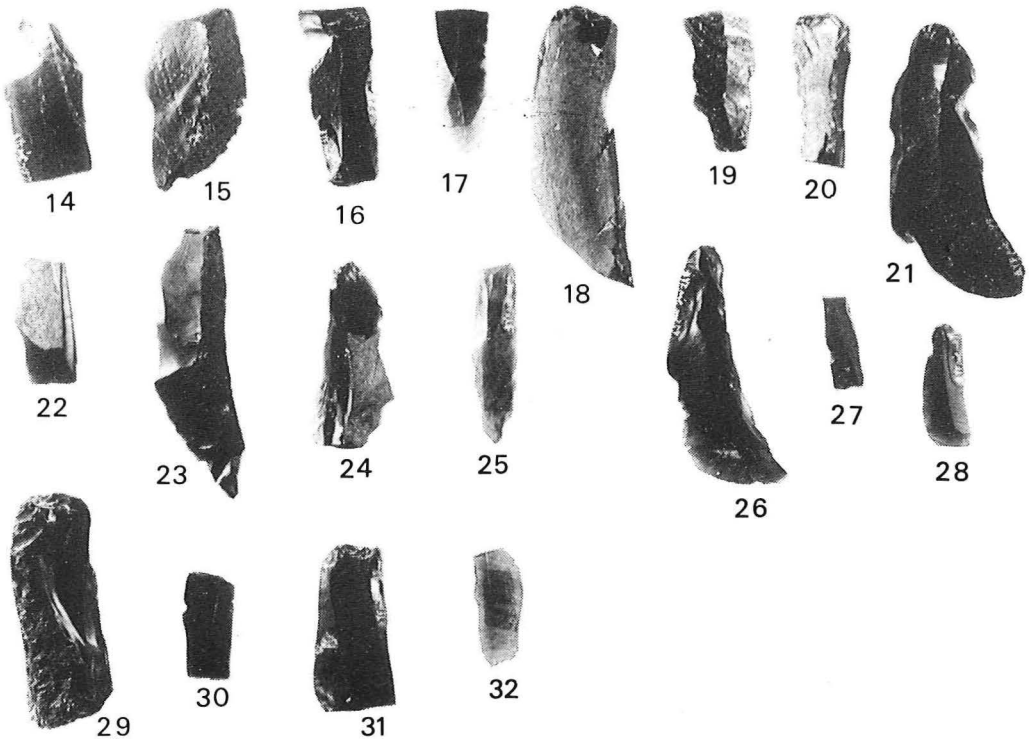


石鏃 ($\frac{1}{1}$)

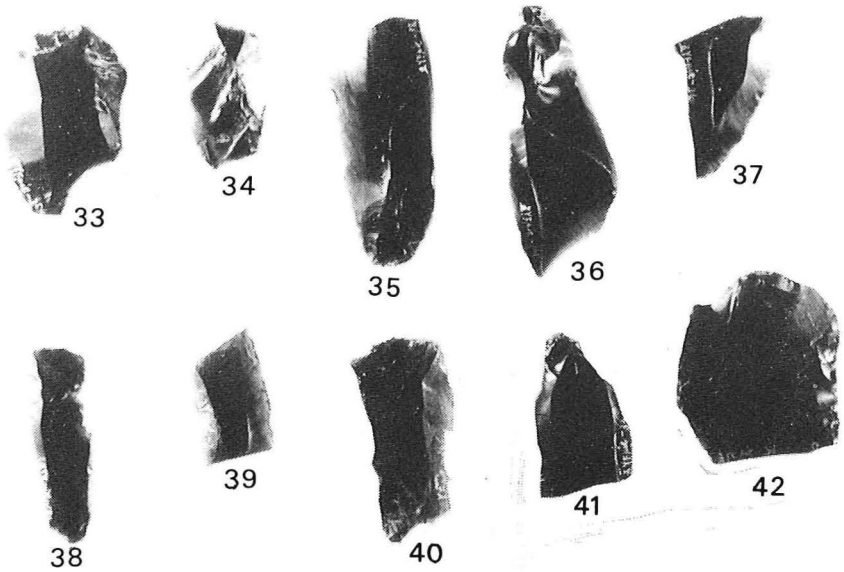


鋸歯状鏃・剝片鏃 (×2.5)

剝片石器①

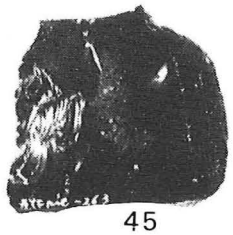


縦長剝片 ($\frac{4}{5}$)

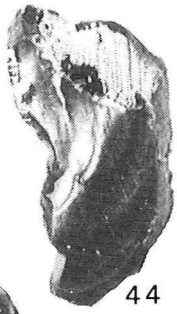


使用痕のある剝片 ($\frac{4}{5}$)

剝片石器②



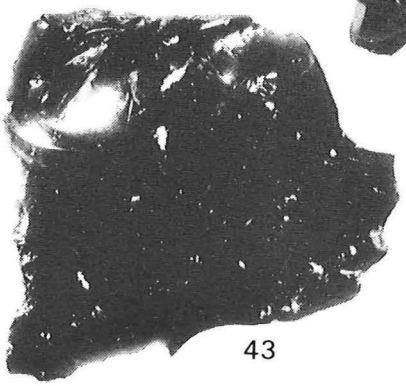
45



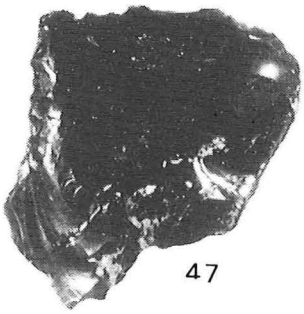
44

46

掻器



43

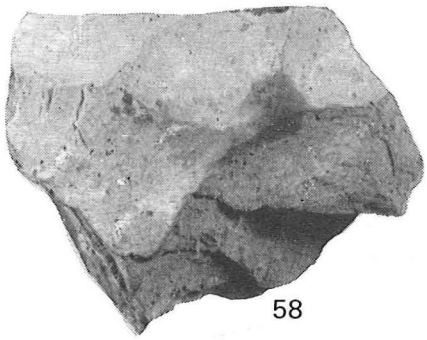


47

49

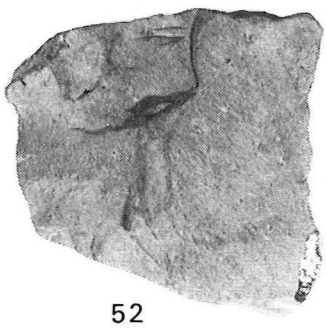
48

石核



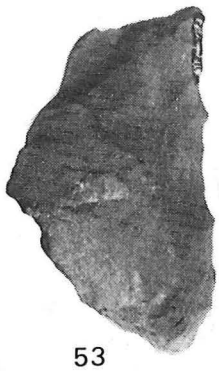
58

51



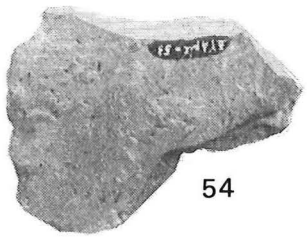
52

掻器



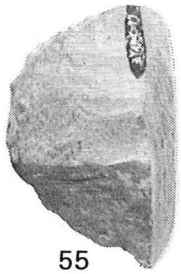
53

剥片石器③



54

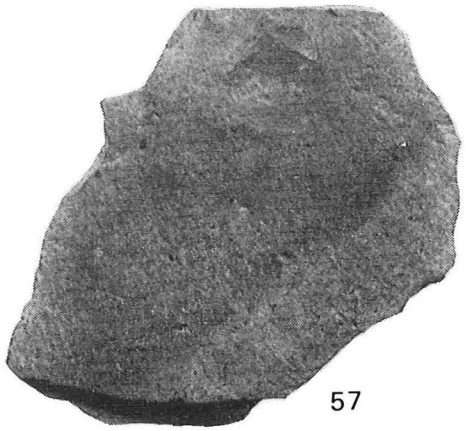
掻器



55

剝片

56



57

剝片石器(4)

（付）滑石製石鍋の炭素測定値

滑石製石鍋の炭素測定値

正林　護・下川達彌

最近の考古学調査は古代・中世史の研究にも大きな成果をあげてきている。従来まで文献に依存する度合が大きいこの分野も都城あるいは寺院跡などの調査は行われていたが，次第に庶民生活の実態をも解明する方向まで進んできた。そのような状況の中で西日本一帯に顕著に眺められる資料の一つとして滑石製石鍋がある。東は畿内地方から南は奄美大島から沖縄に及ぶまでの広い分布範囲を示すこの資料に対する研究は，特に製作目的と使用年代の上で大きな疑問となっていた。

長崎県西彼杵(にしそのぎ)半島の山中にこの石鍋を製作した跡が各所にあり，おびただしい量の未製品や欠損品とともに岩壁面に取り残された粗型品が付着しているということは，古く明治時代から知られていたことである。ところがこれらの製作跡が奥深い山中に存在するところからあまり眼にふれるところが少なく，これまで一部の研究者達が足を踏み入れて資料の採集と確認と観察を行い，石鍋製作の工程を確認・模式図化するにとどまっていた。

昭和54年に大瀬戸町教育委員会の事業として町内での石鍋製作跡の詳細分布調査と，その中のホゲット製作跡群の重点調査が実施されたのである。これから述べる年代測定の資料として検出されたたき火跡の炭化物は，このホゲット製作跡群の第６製作跡試掘坑で発見されたものである。

試掘坑は石鍋製作の痕跡を顕著にとどめる壁面（北西壁）に添って5m×幅1mを設け，現地表面下3mまで掘り進んだが大石群のために基盤面までは到達し得なかった。発掘での層序はⅠ～Ⅴ層までが確認され，土層内に

ホゲット石鍋製作所遺跡第６製作跡における「たき火」跡

おける腐植土や石鍋資料の混入具合からはⅠ・Ⅱ層，Ⅲ・Ⅳ層及びⅤ層に大別される。この内で石鍋資料を最も多量に含むのがⅢ・Ⅳ層であり，問題のたき火跡はⅡ層とⅢ層の接点で発見されたのであるが，一応発掘での層序ではⅡ層最下面として把握した。

たき火跡は岩壁に接して直径約1.2mのほぼ半円形を呈し，炭化物を中心に周辺の土層は熱によって赤褐色を示していた。炭化物は詳細な観察によると４つの層からできているが，ほぼ同時期に形成されたもので時間差はほとんどないことがはっきりしていた。なおこの層中に製作跡では見られない内外に研磨を実施した石鍋欠損品の出土があった。

今回このたき火跡より採集した炭化物による年代測定についての報告は下記のとおりである。

昭和 55年 3月 28日

協技 第 9084 号

大瀬戸町教育委員会 殿

社団法人 日本アイソトープ協会
東京都文京区本駒込二丁目28番45号
電 話 東京 03(946) 7 1 1 1

測 定 結 果 報 告 書

昭和55 年 3月 日に受取りましたC－14試料 2 個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N-3805	Hog-6	915 ± 70yB.P.(885 ± 70yB.P.)
N-3806		970 ±100yB.P.(940 ± 95yB.P.)

年代は ^{14}C の半減期 5730 年（カッコ内は Libby の値 5568 年）にもとづいて計算され、西暦 1950 年よりさかのぼる年数（ years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C 年代がこの範囲に含まれる確率は約 70％です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約 95% となります。なお ^{14}C 年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

側定結果で見るC—14年代は，誤差の範囲を加えてもほぼ西暦1,000年代となり，弘長の譲り状—(仁和寺文書）や，土師器での糸切底の出現，あるいは遺跡で共伴する大陸系の青白磁，貨幣などから考察した「滑石製石鍋考」(下川1974)ほかの平安時代～鎌倉時代初期の年代とほぼ一致するところである。 （文責下川）

長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ

昭和56年3月31日

発行　長崎県教育委員会©

長崎市江戸町2—13

印刷　㈲ＳＫ印刷

佐世保市山祇町19—13
長崎市宝栄町18—15